柴田錬三郎

赤い影法師

新潮文庫

カバー　芹沢銈介

赤い影法師

柴田錬三郎

新潮文庫
〔草〕一五〇
=17=
0
360

寛永の御前試合の勝者に片端から勝負を挑み、風のように来て風のように去る不敵、非情の忍者〝影〟。拝領の太刀に秘められた謎をめぐり、柳生宗矩、真田幸村、伊賀の頭領服部半蔵がまんじ巴となった一大闘争の中で、皮肉な出生の秘密を背負う〝影〟は忍者として悩むのだった。時代小説に一転機をもたらし、〝眠狂四郎シリーズ〟とともに著者の代表作とされる評判の長編小説。

ISBN4-10-115017-6 C0193 ¥360E 定価360円

〜新潮文庫〜

柴田錬三郎の作品

剣は知っていた(上)
〃　(下)
江戸群盗伝
続江戸群盗伝
美男城
眠狂四郎無頼控(一)
〜
〃　(六)
眠狂四郎独歩行(上)
〃　(下)
眠狂四郎殺法帖(上)
〃　(下)
孤剣は折れず
赤い影法師
運命峠(前)
〃　(後)
剣鬼
眠狂四郎孤剣五十三次
眠狂四郎虚無日誌
眠狂四郎無情控
眠狂四郎異端状

カバー印刷　錦明印刷

新潮文庫

赤い影法師

柴田錬三郎著

新潮社

赤い影法師

柴田錬三郎著

新潮文庫

赤い影法師

柴田錬三郎著

新潮社版

1556

目次

誕生篇……七
虎伏の剣……四七
因果坂……六二
前夜行……七六
無刀皆伝……九一
紅葉狩り……一〇六
剣相……一二〇
無明縄……一三六
火焔問答……一五〇
秘術……一六四
不吉鳥……一七八
匂う女体……一九三

赤い影法師

贋村正……二〇七
赤猿検分……二二三
十字架……二三六
伊賀の水月……二五一
円明二刀流……二六五
常山の蛇……二七九
牢鼠……二九三
巨人征服……三〇七
呪い鏡……三二一
十文字鎌……三三五
剣仙談……三四九
幻影行列……三六三
双頭記……三七七
解説　瀬沼茂樹

誕生篇

一

――お？

檜の密林の中を、一上一下する杣道を辿って来て、急に明るい陽ざしの中へ出た服部半蔵は、不審の眼眸を、あたりに配った。

道は、そこで、ぽつんと断ち切れていたのである。

半蔵の前には、薄と蓬と、小花をつけた虎杖が、いちめんに生茂って、爽やかな秋風にそよいでいる。

半蔵が辿って来た道は、杣道とはいえ、御嶽の麓から、黒沢へ下り、木曾福島の手前を、左折して、上田へ抜け、鳥井峠に至る確実な道筋を、古い地図にしめしていたのである。のみならず、半蔵を迷わせる岐点は、どこにもなかった。

「ふむ！」

半蔵は、にやりとして、一歩退ると、かるがると跳躍して、背後から頭上十尺あまりの高処へさしのばされた檜の太枝へ、とびついた。

その太枝が、ところどころ傷んでいるのを、みとめて、半蔵は、おのれの推測が正しかったのを知った。

道は、空中に移されていたのである。

すなわち、半蔵の次の敏捷な動作が、それを示した。

太枝上を、苦もなく歩いて、充分にたわめておき、その反動を利用して、五体を、遠くへ飛ばせた。

降り立った地点から、杣道は、再びつづいていた。

そこから、山肌の剝き出された断崖の縁をうねって行く。瀬音が、密林の下から、ひびいて来た。

およそ、数町——まず普通の旅人の足では徒渉不可能な険路であった上に、半蔵は、岩蔭から躍って来た蝮を、十疋余も、斬りすてなければならなかった。

……それだけの、ふかい要心をもって、孤立した世界を守っている小さな峡間の聚落が、その平和なたたずまいを、やがて、半蔵の眼下に、あらわした。

渓流をはさんで、黄ばんだ陸田が、小さな蓆をならべたように、ゆるやかな斜面に、ひろがっている。厚い茅葺きの切妻合掌造りの屋根が、いずれも、赤い実をたわわにつけた柿の木を添わせて、美しい傾斜と切角をみせている。

陽ざしは、いま、半蔵の立つ山腹から、その孤村へ移って、すべてのものが、人の手によって丹精をこめられてあたたかく息づいているさまを、くまなく照しているのであった。

「ここか！」

半蔵のいくすじかの刀創の走っている貌に、感慨の色が刷かれた。

陸田には、ちらほらと、刈入れの人影が見える。いずれも、下郎笠の下の顔を、黒い布でかくして、黙々として、おのれの作業に余念がない。

だが、この連中は、ひとたび、この里を出れば剽悍無比の忍者と化すのだ。

服部半蔵は、これら隠れ忍者六十余名を支配する頭領に、会いに来たのである。

二

半蔵が「影」と称ばれる稀代の忍者を見たのは、十五年前——慶長五年十月——すなわち、徳川家康と関ケ原で雌雄を決した石田三成が、一敗地にまみれて、伊吹山中に潜んでいるところを捕えられて、三条河原で処刑されたその翌月のことであった。「影」は、石田三成に傭われていた忍者であった。

関ケ原の合戦の時には、「影」は、本拠佐和山城にいた。ここは、一族はじめ二千八百余名の兵が守っていたが、小早川秀秋の率いる一万五千の軍勢の猛攻をあびて、あえなく陥落した。

「太田牛一慶長記」にいう。

佐和山には、石田隠岐守（三成の父）宇田下野守（三成の外舅）石田木工頭（三成の兄）子息右近太夫ら、楯こもり難く見および、上臈、子供らを呼びならべ、これにて腹を切る可きなり、思いさだめて恨みとも思うべからずとて、心強くもそれぞれの妻子を刺し殺し、算を乱すありさま、目も当てられぬ様体なり。

これよりさき、石田木工頭正澄は、家康の勧誘を容れて、自ら一人責任を負って、城兵全員を

たすけるべく、開城を約束したのであった。ところが、これを不服として、叛徒が本丸に放火したので、やむなく、まず正澄が天守閣に上って、妻子を殺して、自刃した。つづいて、重臣土田桃雲が、三成の妻を刺し、天守閣を炎上せしめて、殉死した。

焔煙、空を焼き掩い、城中の婦女は遁げまどって、南端の懸崖から身を投ずる者が夥しかった。のちに、この絶壁は、女郎墜ち、と名づけられた。

ところで、「影」は、落城の日、三成が最も寵愛していた十歳になる妾腹の子秀也を、ひそかに、かくまっておいて、夜陰に乗じて、城外へ遁れ去ったのである。

そして、仲間の忍者たちの諜報をあつめて、たちまち、三成が伊吹山中――伊香郡古橋村法華寺三殊院裏の岩窟にかくれていることを知って、秀也を、そこへともなった。

三成は、近臣を一人のこらず、諭して立去らせて、ただ一人、そこにいた。「影」は、入って行った時、別人ではないか、と愕いた。三成は泄（下痢症）を患って、変貌し果てていたのである。

秀也は、父と判り乍らも、あまりに凄愴な形相に、怯えて、泣いた。

三成は、そのさまを眺めて、

「育てるにおよばず」

冷然と宣告して、自ら脇差を抜いて、わが子の胸を刺した。

それから三日後、三成は、田中吉政の臣田中長吉の手に捕えられた。三成は、「影」が、ほかへ身を移すようにすすめたのを、しりぞけて、幼少よりの親友田中吉政に、ここにいることを報せるように、命じたのであった。

吉政は、三成を駕籠にのせて、大津の家康の本陣へ至った。

家康は、三成を、本陣の門外の地べたへ坐らせた。下人の囚徒扱いであった。一夜が、明けた時、三成は、いつの間にか、畳の上に坐り、狩衣をまとうていた。篝火が燃え、警衛の士は二十余名もいた。にも拘らず、これが、なされたのである。「影」の仕業であった。

家康は、世人へのみせしめに、あくまで、三成を下人同然に扱って、成敗の場所を三条河原と指定した。

その朝――辰の上刻、裸馬に乗せられた三成が、堀川主水の邸より一条の辻に出て、ぐるりと洛中を引廻されて、三条河原の刑場に入れられたのは、午すぎであった。どんよりとした曇り空で、冬が愈々来たことをしめす底冷えのする日であった、という。

引廻しの途中、三成が、湯を乞い、警固の者が、湯は求め難いが、恰度ここに甘乾（干柿）を持参している、とさし出した。すると、三成は、それは痰の毒だから要らぬ、とことわった。警固の者が怪訝そうに、半刻のちに首を刎ねられる人の毒絶ちは如何なものか、というと、三成は、平然として、その方たちがそう思うのは尤もだが、大義を思う者は、首を刎ねられる一瞬前まで命を惜しむ、とこたえた。

「茗話記」に出ているこの逸話は、有名である。

三成は、従容として、首を刎ねられた。

血飛沫が、高くあがった瞬間、一人の男が、鹿垣を躍り越えて、そこへ奔り寄りざま、首級をひろいとるや、介錯の士の一颯をひらりと躱し、検使の面々の狼狽をしりめに、何処かへ消え去った。文字通り、飛鳥のごとく、磧上に影さえも映さぬ迅さであった、という。

三

「影」が、家康直属の伊賀党によって捕えられたのは、それから二十日あまり後であった。

立石街道の恩智川の堤で展開された争闘は、凄絶をきわめ、伊賀党は、十二名を喪い、「影」もまた、左眼をつぶされ、右脚を両断された。

本多上野介正純は、自ら取調べに当ってみて、噂にきいた以上の不敵の面魂に感服して帰順させようと努めたが、無駄であった。

「影」は、主人三成と同じく、三条河原で断首されることを希望し、正純はこれを容れた。

服部半蔵が、高小手に縛りあげられて裸馬上に乗せられた「影」を見たのは、一条の辻においてであった。

すでに「影」の噂は、洛中に拡っていて、これを見物しようとして、引廻しの途上へ蝟集した頭数は、夥しいものであった。

ひしめき合う群衆の中に交って、馬上のその面貌を仰いだ時、半蔵は、しかし、かなりの失望をおぼえた。群衆の殆どが、興ざめたに相違ない、と思われた。

――これが、「影」か。

どの顔にも、なんだという表情が泛べられ、げんに、半蔵のかたわらでは、大声で、

「阿呆らしい。こやつ、肥溜で洗うた面ではないか。田吾作め、なにが、天下の忍者ぞ！」

口ぎたなく罵る者もいたのである。

まことに、見ばえのせぬ、土くさい、凡庸をきわめた風采であった。小柄で、小肥りで、猫背を出して、垂れ目蓋をしょぼしょぼとまたたかせている様子は、小心者の虚脱状態とも受けとれた。

成程、左眼からは、なお、一縷の血糸が、頬をつたい落ちていたし、右脚は膝から断たれて、襤褸を瘤のように巻きつけていたが、それは、凄絶の争闘を物語るよりも、愈々その凡庸な姿を、悲惨な、あわれなものにしているにすぎなかった。

半蔵は、決して、みにくい風采を軽蔑はしなかった。しかし、「影」という存在を、宛然英傑のごとく偉大なものに感じていた一般庶民に対して、そのめのめと、その矮小貧寒な実体を曝した恥知らずに対して、半蔵は、腹が立った。

忍者なら、忍者らしく、なぜ、敗れたとさとったなら、自らの貌を、自らの手で斬りきざんで、果てなかったのか。

曾て、伏見城に忍び入って、家康を刺そうとした黒田某なる忍者は、柳生但馬守に背中を斬られて、なお、屈せず、城外へ遁れたが、二里余はなれた山中の柚小屋で発見された時、炉火の中へ顔を埋め、眉目を焼き崩して、こと切れていた、という。これだけの気概があってこそ、一流の忍者と、自ら誇って、秘術を高く売ることもできようというものである。

主人三成に尽した働きの目ざましさにひきかえて、この末路の、なんという醜態であろうか。

服部半蔵自身、えらばれた忍者の一人であった。

「野良犬めが！」

思わず、そう吐いた。

ひくい声音であったが、「影」の耳にとどけと、腹からおし出す、鋭気を罩めていた。

この時、偶然、半蔵のすぐ近くから、想像を裏切られた腹立ちまぎれに、

「これでも、くらえ！」

と、投じた石が、「影」の頭上を掠めた。

「影」は、俯向いていた顔を擡げて、残った一眼で、ちらと、こちらを睨みかえした。ほんの瞬間ではあったが、窪んだ眼窠の底で閃いた光が、異常に鋭いものであったのを、半蔵は、見遁さなかった。はっとなった。

——こやつ、まだ充分の気力をかくしている！

その直後であった。

半蔵が、どよめきのなかから、微かな鷲の声をききわけたのは——。

谷を渡り乍ら、樹枝や渓流や岩肌へ、その麗しい余韻をしみ込ませて行く——あの啼き声であった。

——はてな？

風の音は、すでに木枯しである。季節はずれに、この街中へ、鷲が迷い込んで来る筈がない。

視線をまわしかけた半蔵は、次の瞬間、おのれの不明を慙じた。

つづいて、つたわって来た鷲の声は、疑いもなく、忍者が用う忍び笛だったのである。

忍者は、上下四本の親知らずを抜きとって、義歯をはめている。それらは、いずれも、笛であって、はずして吹けば、虫の音や風の音や鳥の啼き声や、思うがままの音色を出すのであった。

のみならず、常人には、鷲の声ときかせておいて、仲間には、その意を伝える言葉となっている。

「頼まれてくれるか？」

鷲の声は、その人語にまぎれもなかった。

半蔵は、さりげなく、人々を押しわけて、前へ出ると、囚馬の行くのに添うて、ゆっくりと歩き出した。

「頼まれてくれるか？」

ふたたび、鷲は、そう啼いた。

半蔵は、左手を擡げて、額を撫でた。忍者にのみ判る合図であった。

……行列が、三条河原に降り立つまでに、約一刻半を要した。

半蔵は、警固の士たちに気づかれないように、跟いて行き、「影」の依頼を、ききとったのであった。

固有の地名場所を教える依頼をききとるには、一刻半も短いと感じなければならぬ異常な神経の緊張を必要としたことであった。

「如意山の麓——南禅寺道から鹿ケ谷へ入る途中、崩れかかった三重塔がある。その屋根へ登れ。北にむかって首を擡げた獅子瓦の中に、白い球が隠してある。刑場に来って、火口に点火して、余の足下へ投げよ」

依頼は、それであった。

半蔵は、それに応えて、犬脅しの口笛をのこしておき、身を翻して、如意山の麓へ奔った。秒刻を惜しまねばならぬ行動であった。

その日、三条河原には、三成が処刑された時と同様、二十間四方に堀がほられ、鹿垣がめぐら

され、具足に身をかためた河原者たちがものものしくまもっていた。

「影」は、処刑の座に就くと、辞世の一首をものする暫時を与えられたいと申出て、ゆるされた。瞑目して、微動もしなくなって、いくばくが過ぎたであろう。

検視役が、しびれをきらして、かたわらに控えていた介錯人へ、目くばせした時であった。

「影」は、くゎっと隻眼を剝くや、辞世の一首を口にするかわりに、

「もの申す。われに隠身遁形の術あり。かまえて、油断めさるな」

と、呼ばわった。

「おのれ！」

検視役は、憤怒して、床几から立った。

「討てい！」

下知とともに、介錯人が、業物へ浄水をくれて、つかつかと、「影」の背後へまわった。

刹那——「影」は、大きく上半身をゆさぶるや、すっくと、隻脚で立った。同時に、その五体を高小手に縛っていた縄が、蛇が刎ねるように、幾条かに、ぶつんぶつんと切れ飛んだ。

「影」は、大きく両手を拡げて、胸を張った。

河原者たちが、槍をかまえて、八方から、そこへ殺到した。

鹿垣外へ到着した半蔵の手から、手鞠に似た白糸かがりの球が、高く投じられたのは、その槍襖が、一間の距離に迫った瞬間であった。

球は、「影」の足元に落ちて、ぱっと白煙を噴いた。のみならず、雨曇り(あまぐも)の鈍色(にびいろ)の中に、凄じい光を発しつつ、八方へ流星のように飛散した。

硫黄、焔硝などの火薬を爆発させたこの白煙は、尾を曳いて飛ぶだけにとどまらず、落ちた地点から、さらに物狂おしくのたうち乍ら、磧上を走りまわった。

この八条の煙の流れの、いずれへ、「影」が身をひそめて、遁れ去ったか、ついに、誰人の目も、とらえるいとまがなかった。

「影」が、半蔵の自宅を、深夜おとずれたのは、その夜のうちであった。

鄭重に礼をのべてから、

「お主は、徳川の麾下にござれば、喪家の狗と相成ったそれがしを、ひとたびは、役立ててみようとのお考えでござろう。さらば、お主が、幾歳かの後、それがしの一臂を必要とされる秋(とき)が至れば、木曾谷へ尋ねてござれ。いかなる御依頼であろうとも、否やは申さぬ」

と、言いのこしたのであった。

それから、十五年の歳月が、流れている——。

四

半蔵が、急傾斜の山峡を降りて、渓流のまうえに立った時、すでに日輪は覆輪をとりはらって、真紅の輪郭をみせ、嶺々(みねみね)の稜線を染めていた。

夕鴉(ゆうがらす)が、煨(や)けただれた笠雲の下で、凄味のある啼き声をたてていた。

半蔵は、流れを、すばやく目測した。

大蝦蟇(がま)に似た巨大な岩から、次に、虎嘯のかたちをした二重岩へ跳び、二間をへだてて、白い泡を噛んで、飛沫に濡れている畳岩へ移り、さらに、そこから、そのまま僧正の墓碑になりそう

な桃形の岩へ渡れば、あとは、小さな飛石伝いに、対岸へ行き着ける。

視野の中に、人影はなかったが、物蔭から、じっと、自分の動作を見戍っている眸子が、いくつかあることを、半蔵の鋭い感覚は、察知していた。

聊かでも、この渡渉に、逡巡があってはならぬのである。

――よし！

半蔵は、断崖際へふみ出した姿勢を、殆ど崩さずに、かるがると、大蝦蟇の背中へ降りた。とみた刹那には、ぱっと身を躍らせて、虎の頭へ、片足をかけたかけぬ迅業で、三番目の畳岩へ――二間を翔けていた。

皮肉な霜は、最も安定しているかに見えたその畳岩に、仕掛けてあった。

半蔵が、すっくと立った――一瞬、岩は、がくんと動揺した。

水苔を置いた岩肌から、片足を、つるりと滑らせた半蔵の五体は、急湍へ向って、大きく傾斜した。

咄嗟に、半蔵は、気合を発して、岩に残った片足を蹴って、鮮やかな空中旋回をこころみるや、元の虎の頭へ、一転してはね戻った。それは、華麗な曲芸とも眺められた。

ひと息ついた半蔵の、上気した兵法面には、微かな不快な色が滲んでいた。敵の仕掛けに腹を立てたのではなく、敵におのれの油断を見せてしまった忸怩たる意識を湧かせたからである。

半蔵は、この虎の頭から、畳岩へ跳ぶべきではなく、その横に、流れにほんの纔かのぞけている岩の尖端を踏んで、僧正岩へ移る順序に、ようやく気がついたのであった。

対岸の絶壁を越えると、桑畑であった。暗渠のように掘られた狭い畔径は、面倒に、曲りくね

っていた。

のみならず、曲った地点で、しばしば、ふっと、消えていた。そのたびに、半蔵は、苦笑して、引返さなければならなかった。

呂字の迷路、という。これは、築城上の用語で、すなわち、矢弾の直通を避けるための曲り方をいう。

桑畑を抜け出ると、そこから、黄ばんだ陸田がひろがっていたが、目を配れば、稲穂の蔭に、人の潜む気配がある。

半蔵は、声をあげた。

「服部半蔵、十五年前の約定によって、頭領に依頼の儀があって罷り越した。取次がれたい！」

応えて、稲穂をそよがせて、一人が、姿をあらわした。なんの取得もなさそうな、平々凡々たる中年の百姓であった。

黙って、一礼して、先に立った。

館は、奥深く、檜の林の中にあった。

苔むした石垣の前には、深い濠がめぐらされ、澄みきった水流が、その迅さを枯葉を舞わせるさまにしめしていた。

石垣の上は、塗籠の築地塀であった。濠に架けられた刎ね橋のむこうの棟門は、鉄の延板を打った扉が、どっしりと閉められ、左右の壁には、武者窓と銃眼がひらいている。

昏れかかる中に、わだかまった古色をおびたその構えは、半蔵に、威圧をもって迫った。

刎ね橋を渡り乍ら、半蔵は、ふと、剽悍の諜者にあるまじき、一種の不吉な予感をおぼえた。

この館に入ることは、おのれの人生に、何か重大な、決定的ともいえる新しい運命がもたらされる。言葉にすれば、そんな予感であった。

五

畳を敷けば、五十畳はあろう茶間に、沈黙の時間が流れていた。

手斧でけずった大黒柱、赤樫の木理細密な格天井、欄間の雷文に竜を組んだ透し彫、渦懸魚の自在の鈎手、檜の一枚板の衝立の猛虎の彫刻——どれひとつとして、目を牽きつけずにはおかぬ古雅の趣きがあった。

炉で燃えている薪は、なんという木であろうか、紫の煙をたち昇らせて、臭気は微塵も含んでいないのであった。

炉をへだてて対坐した服部半蔵と「影」のわきには、同じ食膳が据えられていた。

木理、色目も美しい一位の椀や皿には、豆腐、湯葉、蜂の子、薯蕷汁、乾狗背、そして、味噌づけの貘と蝮蛇の肉など……。

ちがっているのは「影」の膳には、地酒の瓶子と盃が添えられてあることだった。半蔵が、辞退したのではなく、忍者は一滴もたしなまぬものだったからである。

「影」が、盃を口にはこぶのは、すでに、忍者たることを放棄している証拠であった。

半蔵は、失望していた。

十五年前の約束によって、半蔵は「影」に、非常の働きを需めて、やって来たのである。「影」は、用件を聴くや、応えるかわりに、下僕に、夕餉を命じ、黙って、酒を飲みはじめたのであ

る。当然、半蔵は、「影」に受諾の意志がない、と受けとらねばならなかった。

しかし、「影」は、いまだ、口頭では、拒絶していないのである。半蔵は、待っている。

……すでに、「影」は、十五年前の「影」ではなかった。

立居振舞いに、隻眼隻脚の不自由をこそ見せなかったが、頭髪が一毛のこらず純白と化し、顔面を縦横に無数の皺が走った容は、老醜をしめすというよりも、酷烈無惨な六無（無色・無形・無跡・無声・無息・無臭）の修業と実践のために、老坂にかかってたちまち化け果てた、と見えた。未だ五十になるかならぬかの筈であった。

やがて——。

「影」は、咽喉奥で、痰を切る音を洩らしてから、口をひらいた。

「今から恰度二十年前のことでござるよ。それがしは、治部様（石田三成）の密命を受けて、関白様（秀次）が比叡山巻狩を催されるにあたり、勢子に化けて、一行にまぎれ込んだものじゃった……」

殺生禁断、女人結界、葷酒不許入山門の内でも、日本一の霊山ときこえた比叡山に、関白秀次が、敢えて、狩猟したのは、これを葬ろうとする石田三成の謀計にひっかかったからであった。

三成は、比叡山の一僧を破戒せしめて、味方につけ、関白が開いた聯句拝詩会の席上において、関白をそそのかしたのである。すなわち、いかなる高位高官と雖も、比叡山の一下僧におよばないのは、女犯の罪があるからである、とうそぶかせたのである。たとえ、関白の勢威をもってしても、こればかりは、叶うまいと挑戦するかのごとくよそおわせて、関白をして、

「よし！　それならば、余が、叡山の衆徒どもの肉欲をおどらせてみせるぞ」

と、云いはなたせるべくしむけたのである。

比叡山巻狩の布告が発せられると、洛中洛外が、わきたったのは、当然のことである。桓武天皇以来とつたえられる天台宗総本山を、畜生の血をもって汚そうというのであるから、当の山門衆はもとより、聚楽第の侍女房、下民にいたるまで、なんたるあさましさ、と眉をひそめた。

関白は、敢えて、この非難をしりぞけて、秋もなかば、紅葉の色の燃える頃、狩を行った。狩であるから、弓矢鉄砲、鎗薙刀の武器をたずさえ、加えて、二十余人の局衆と百人の女房をしたがえた。

第一日の催しは、山の中腹で、多勢の勢子に鯨波をあげさせ、空銃をうちまくらせて、潜んだ獣も、狩り出した。もとより殺生禁断の聖地のことであるから、年日頃巣くった狐、狸、鹿、猪の数は、夥しかった。

中堂に本陣を敷いた関白のところへ、座主の名代が、役僧どもをつれて、厳重抗議にやって来たのは、いうまでもない。

これに対して、関白方は、

「いかなる名山霊蹟であろうとも、関白が知行の内だ。山門の掟は掟、関白の意志は意志——仏罰を受けるのは、当方であるから、放念されたい。信長公の所行に倣って、堂塔を焼き、門衆を討とうというのではない。たかが禽獣を殺し、女人に当山を見物させようというだけの話」

と、はねつけてしまった。

そして、その宵、中堂の大書院に、局と女房を居並ばせて、大蠟燭を真昼のあかるさに立てつらね、その日の獲物を肴に、大饗宴をはじめたのである。

寝なかばにして、関白は、

「当山の能化どもを呼び出して、酒と女にうち克てるかどうか、その正体を見とどけてつかわす」

と、使者を立て、法師十余名を座につらねさせたのであった。

いかにおもてむきは、殺生禁断、葷酒を断つ、とみせかけて居ろうとも、山法師どもが、法燈のかげにかくれて、人も無げな振舞いをしていることを、関白は、充分承知していたのである。

一刻も経たぬうちに——。

酒と肉と脂粉の香が、堂に蒸れ満ちて、席は、ようやく乱れた。

六

「影」は、往時を回想して、隻眼を細め、その無数の皺翳を、ふとなごませた。

「関白様は、頃合よしと見て、扇面を高くかかげられた。すると、三百本の蠟燭が、十本をのこして、吹き消された。……たべ酔うて、妄語戒を忘れはてた坊主どもが、もうろうと酔眼を据えている中へ、笛と鼓の音に合せて、舞い出たのは、蟬の羽のような薄絹を頭から被った人魚が十余体じゃった……」

半蔵は、頷いた。

しばらく前、半蔵は、ほるつがるの伴天連が、その夜の光景を、面白おかしく記しとめた日誌を読んだ記憶があったのである。

その日誌には——。

舞い出でた十余の人魚の、白いかんばせと烏羽玉の髪の流れが、薄絹を透かしてみえ、夕陽の光をとおしてのぞく水底の人魚の肌もかくやとばかり、ほぞの下から脚にかけて、うろこ模様の綾絹を、触れれば落ちんばかりに纏うて、尾のように、裳を長く曳いて居り申した。

足のさばきが狂えば、まとうたうろこをふみ脱いで、ただの女人の裸身とかわろうものを、げに、見る者の胸をおどらせる色おどりでなござった。

鼓と笛が、ものに断ちきられるように、ハタと歇むと、人魚の群は、水に沈むように、ひたひたと蹲り申した。そのせつなは、深沼の底のようでござった。音もなく、動きもなく、夜陰の寂寞が、一時にせまって、十本の蠟燭の焔に、妖気が、ゆらゆらとたち昇るかとみえ申した。

満座は、ひそと固唾をのんで、しわぶきひとつ立ち申さぬ。

と——中の一人が、ひらりと舞い立つや、右手に黒髪の流れを捌き、左手に水色の薄絹をあしろうて、妙なる声で、じょうじょうとうたいはじめたのでござった。

風早の須磨の浦曲に寄る波の、音さやける夕べかなし。

これは、わだつみ、竜王の宮に、年経て仕うる人魚に候。さても人界のさま見て参れとの宣旨を蒙り、ここな伴と打ちつれて、八重の汐路をかいくぐり、須磨の浦曲に着き候。

ぱらりとはねた薄絹の下から、淡青く化粧して、いま傾けた酒の加減か、眼のふちばかり、ぽっと朱を染めて、黒く潤んだつぶらなまなこと映えあわせた、えうろっぱの南国に見る女さながらのかんばせが浮き出たのでござる。ふくよかな乳房の、その乳くびが、鳩の脚のように赤く、膝をまっすぐに、すっくと延べた太股は、希臘の彫像の女神もそのままと見申した。

黒髪が、ふさふさとなびき、ゆらぎ、白い脚、白い腕が、曲直あやな線を描いて、舞い狂うほどに、竜王殿秘曲と相成ったのでござる。

さるほどに、舞い舞うて、時は経ったり。今は竜王の咎めもあらむ。つれの人魚と連れ立ちて——

ひるがえる水色の綾羅が、仄かに風を起して、蠟燭の燈影を、ゆらめき乱し、柔軟の肢体は、白黒の綾を織りなして、空に躍った。狂おしき旋律の動きに、まこと夢のうち——右の脚が、腰のつがいから、白い長い鮮やかな線を伸ばして、さっと半円を描くや、ふわっと落ちこぼれた鱗模様の二枚の綾絹が、爪先に吸いとられて、脛をつとうて、腹にまつわって、乳の下まで、たぐりあげられたのでござる。

滑石でつくられたかとおぼしい太股、下腹、ふたつの隆起が、惜しげもなく、凝視する幾多の煩悩の火に燃える男どもの眼光を吸いとって、くねくねとうごめきつつ、仄明りのなかに、妖しく舞うは、口にも筆にも、つくし申せぬ。

とたん——。

のこりの十余体の人魚も、一斉に、ひらっと舞い立って、同じく、綾絹を、胸までたくしあげ、裸形の色体を、限なく曝すや、春の入江の寛やかな浪のうねりに乗って、漂い寄せるように、四方へ散らばり申した。

腰の鰭衣、白浪に、翻しなびかせ須磨の浦、沖の八汐路、かいわけて、濡羽の髪や玉肌や、浪にまぎれて失せにけり。

と、うたいおさめた——その刹那、のこり十本の蠟燭の燈も、ふっと消されたのでござる。

あとには、異様な、みだらな、呻きが、きれぎれに、堂内に流れて——ものの二十もかぞえ申

したか。

関白殿の声なき御下知をはずさずに、三百本の蠟燭に、一時に、ぽっと火が点けられたとお思いあれ。

煌として明けた大書院には、なんと、円頂白衣の坊主どもが、山門の堂塔伽藍が悉皆炎上しようとも、ものかわと、それぞれ、白い裸形をいっぴきずつかい抱いて、刹那の快楽に、われを忘れた様体をさらしていたのでござる。

とみるや——関白殿が、ゆらりとお立ちになって、小姓の捧げた佩刀をひん摑み、

「能化ども！　みろ！　破戒無慚は、太閤や関白ばかりではあるまいぞ！」

と、叫びつつ、よろよろと、坊主の一人へ進み寄られまいた。

げっ、とのけぞる坊主と、はねのく人魚と、白刃をかざした関白殿のお姿が、三つ巴になって、衆のまなこに映った——次の瞬間、びゅっ、真紅の飛沫が、刎ね散り、

「ぎゃっ！」

と、絶叫もの凄く、坊主の五体は、畳へ一転つかまつったし、

「ひっ！」

と悲鳴かなしく、人魚は、虚空をつかんで泳ぎ申した。

袖もろともに、右腕を、肩先から、ぞっくり削ぎ落された坊主のざまを、冷然と見下された関白殿の、凄じいばかり蒼い顔色は、正視に堪えぬ孤独地獄のものでござった。

苦悶のうちに、半身起した坊主は、喘ぎ喘ぎ、狂おしく叫んだことでござる。

「お、おのれ……出家を殺して、なんとするぞ！　み、み仏の御座を、出家の血で塗って……仏罰のほど、思い知れ！」

「仏罰？」

関白殿は、せせら嗤われて、

「禁戒の酒に酔い、畜生の肉を喰い、不浄の女にたわむれ——ははは、その仏罰が、これだぞ！　破戒坊主め、日頃は何食わぬ面をし居って、こちらが馳走をふるまってやれば、たちまち餓鬼となって、くらいつく。なにが、日本一の霊山ぞ！　なにが殺生禁断ぞ！　なにが女人結界！」

「さては……、うぬが、当山に、仇をしようとの結構であったかっ！」

「たわけ！　おのれの不断の心柄を、顧みて、ほざけ！　傾国の美女を抱いたむくいは地獄の苦患も覚悟の上であろうが——殺生関白が引導渡してやるのじゃ。地獄行きにふさわしかろう」

きらっと白光一閃するや、坊主の首は、血煙とともに、三尺高く跳んでいたのでござった。

七

「坊主とともに斬られた女房を、それがしが、その夜のうちに、さらって、叡山を奔せ下ったのは、後日の証人とする存念であった。鹿ケ谷の隠れ家にかくまって、手当をくわえておき、太閤様の糺明があって、関白様の誓文聴取がなされた時、治部様へさし出す手筈ときめて居ったのじゃが……」

そこで、いったん語り声をおさめた「影」は、低く自嘲の笑いを洩らした。

「……この剽軽面が、生涯ただ一度、恋に狂うて、色情に歪んだ、と思われい。……女が、傷の

癒えた日、それがしは忍びの掟を破って、その白いからだを抱いてしもうた」

半蔵は、何故に、この稀代の忍者が、このような告白をするのか、不明なままに、まばたきもせず、その醜い皺貌を、瞶めつづけた。

「犯して、半刻後には、それがしは、女をすてて、去って居った。治部様には、女が死亡したと詐っておき、その白いからだを忘れるために、それがしの働きは、いちだんとせわしいものと相成った」

「……」

半蔵は、この時はじめて、おのが背中に、ぴったりと、より添うている者の気配をさとった。戦慄した。

例えば、それは、炉火で生れたおのれの影法師が、板敷きから起き上って、背中に貼りついた——そうとでも形容したい異常な戦慄だった。

殺気はなかった。

「……」

半蔵は、堪えることにした。

「影」は、回想にひたった様子をそのままにつづけて、

「一年が過ぎて……それがしが、鹿ケ谷の隠れ家へ戻り、左様、三日ばかり後のことじゃった。夜半、夢もない睡りの中へ、赤子の泣き声が入って来て、牀から起き出ることに相成った。戸を開けてみると、縫箔のある、小袖にくるまり、円座の上へ寝かせられて、赤子めは、折から空に冴えた十六夜の月かげに照らされて泣きしきって居る。……それがしは、一瞥しざま、背筋に、氷でもあてられたような悪寒をおぼえた——」

その言葉の終らぬうちに、

「ごめん——」

半蔵は、遽に気分が悪くなったように、ゆっくりと、上半身を倒した。

ながながと横臥しになった——とみた刹那、腰骨を軸にして、おそろしい迅さで、五体を廻転させた。

その片足で、手のとどかぬところへ置きすててあったおのが大刀を摑んで、引き寄せ、延べ抜きに抜き討つ——その動作が、一廻転の間に、電光の迅さでなされた。

背中に貼りついた影法師を払うには、その手段以外には、なかったのである。

草薙ぎ、というこの居合の業は敵の脛を横に薙ぎ、引き外された間髪の間に、身を起して、片膝立てて、上段にふりかぶって、猛鳥が叢中から羽撃くに似て、躍り上って行く——。

半蔵は、しかし、炉に背を向けて坐った時、すでに、刀を鞘に納めていた。斬るのが目的ではなく、追い払えばよかったからである。

敵は、遠く、二間のむこうに、跳び退っていた。全身を、指さきまでも、包んでいた。ただ、わずかに、覆面の蔭から、切長な双眸が、冷たく澄んで、光っていた。

半蔵の凄じい睥睨をまばたきもせず受けとめて、その立姿は、まさしく影そのものであった。

半蔵は、

——若い！

と、見た。

「影」の方は、両者の闘いを、宛然児戯に無関心な父親のように、目さえもくれず、炉の中へ、あらたな薪をくべ乍ら、かわらぬ語気で、述懐をつづける。——

「それがしは、赤子を抱きあげた時、こやつめを、ひとつ、自分が思うがままの忍びに仕立てあげてみよう、と決意した。人間にして、人間にあらず——文字通りの影として育てる。その夜のうちから、顔を、布でつつんでしまい、布をとり払うてやるのは、闇の中のみと定めた。……そうして二十年、この決意は、実行された。それがしが、育って行く貌を一度も見とどけなかったのは勿論じゃが、当人自身も、ついに、おのれの姿を眺めて居らぬ。食を摂るのも水浴びも、すべて日常の行事は、暗闇がえらばれ、それがし以外の者との交りは禁じられ、いや、それがしと口をきくことさえも許されずに、ひたすらに、忍びの術の修業にはげみ、いまや、それがしすらも、到底およばぬ非情の影となり終せた」

「それが、この若者と申されるのか？」

半蔵は、なお、凝視をつづけ乍ら、たしかめた。

「左様。……服部殿、お主がそこに坐った時から、そやつは、お主により添うたのでござる。お主の不覚と申すよりも、そうであるのが当然。お主に、ただちに、看破されるようであれば、お主の一撃をわずらわすまでもない、この父親が、この場を去らせずに、討ちはたしたでござろう」

「……」

「それがしは、すでに老いて、昔日の体力も気力もござらぬ。代って、こやつめが、お主の御依頼を受けて、お供を仕ろうず。わが丹精の成果の程、とくと、お見とどけあるがよかろう」

八

時に——大坂城にあっては、中枢の地位に在った片桐且元が退去した後、秀頼の名をもって、書を諸国に馳せて、太閤旧恩の大名をはじめ、関ケ原役の残党、徳川家に殪された諸侯の旧家臣などを招いていた。

大坂城の旗揚は、すでに時間の問題となっていた。

徳川幕府を対手として、万に一の勝算があるべくもないことは、第三者の冷静に判断し得るところで、大坂城中で専権をふるう淀君自身は、往時の豪華が忘れられず、いま一度、豊臣家に天下の大権を掌握してみたい夢を抱きつづけていたし、大野治長、同治房、渡辺糺、薄田兼相、木村重成らが、これを支持していた。

秀吉恩顧の諸大名——加賀の前田、薩州の島津、奥州の伊達などの援助を期待もしていた。闘志をあおるためには、徳川幕府の圧迫に堪え得ず、寧ろ坐して滅亡を俟たんよりも、成敗を一挙に決せん、と激烈の空気をみなぎらせる必要もあった。

籠城に応じて、真田左衛門佐幸村、長曾我部盛親、仙石豊前、織田左門、京極備前、石川玄蕃、後藤又兵衛、山川帯刀、北川次郎兵衛、塙団右衛門ら、名ある武辺者がぞくぞくと参集して来るにつれて、戦わんかなの意気は、大いにあがっていた。

家康は、この籠城を、決して軽視はしなかった。家康の長技は、むしろ野戦にあって、攻城ではなかった。

天下の名城たる大坂城に対して、いかに天下の大兵を傾けても、これが容易に陥落するとは考

えられなかった。

家康は、この戦いが永びくことをおそれた。したがって、戦闘よりも、調略に心を尽さねばならなかった。そのためには、家康自ら、駿府を出馬して、首脳たるの行動を起す必要があった。

家康の右腕である本多上野介正純が、家康出馬にあたっておそれたのは、二条城に入るまでの途中、真田幸村が放って来るであろう「風盗」なる忍びの集団の襲撃であった。

「風盗」は、真田幸村のやしなっている徒党ではなかったが、その頭領は、幸村の父安房守昌幸から非常な恩顧を蒙っていたのである。

伊賀の忍び者は、すでに、徳川の麾下に入ってしまっていたが、「風盗」族と、この「影」の率いる木曾谷の隠れ忍者だけは、いずれへも属してはいなかった。

「風盗」族は、若狭より琵琶湖へ抜ける渓谷の一隅に、その館を据えていて、この木曾谷の峡間の聚落がそうであるように、他郷の者を一歩も寄せつけぬ天嶮を利して、ひそかな孤立の世界を営んでいるのであった。

「風盗を勦滅できぬか？」

本多正純が、服部半蔵を召して、奇策を思案せしめたのは、いわば、毒をもって毒を制す肚であった。

すなわち、半蔵をして、秀れた忍者を使わせ、同類を討たしめる戦法であった。

半蔵は、十五年前の「影」の誓言を思い出して、この命令を受諾したのであった。

服部半蔵は、「若い影」をつれて、木曾谷を出た。それから、二日おくれて、隠れ忍者六十余名が発足し、その里は、老いたる「影」唯一人がのこされた。

九

かりに「子影」と呼んでおく。

服部半蔵は、木曾谷を出て、琵琶湖を迂回して、若狭街道に入るまでの二日間、ついに、「子影」の声と音をきかなかった。

会話は、正確な手真似によってなされたし、道中は、常に十歩の間隔を置いてつづけられた。

「子影」は、先に立ち、登音をたてなかった。野宿するにあたっては、半蔵の前から煙のように消えた。そして、寅上刻——暁の五更には、湧くが如く、半蔵の前に、姿を現していた。

躰のうち、唯ひとつ、外気に曝している双眸は、常に、澄んで、光って、動かなかった。

半蔵は、「子影」が、人間であることを考えまいとした。そして、それからはかなり気楽に、「子影」の存在を無視することができた。いわば、おのれの影法師が、おのれの歩いているさきを進んでいる、と思い做したのである。

半蔵と「子影」は、あとから木曾谷を出発して来た隠れ忍者六十余名を、遠敷の宿にある若狭比売神社の境内で、待った。

忍者たちは、貧しい農奴の風貌といでたちをしていたので、数人が一群になって、続々と到着しても、すこしも目立たなかった。

樟、椎、銀杏などの巨樹にかこまれて、昼なお昏い境内は、六十余名を容れても、猶ひそとして、すこしも神域をみだされはしなかった。もとより、忍者たちである。落葉一葉の音すらも立

てなかった。

「子影」は、ここで、はじめて、懐中から、一枚の絵図面をとり出して、地面へひろげた。「影」はすでに、去る年、同類「風盗」の本拠地を調べあげて、この絵図面にしていたのである。

六十余名の視線を、聚めておいて、「子影」は、無言で彼らがこれから行動を起すべき順序を、一本の枯枝の尖端で、指令した。

半刻後、「子影」は、再び半蔵と二人だけになって、そこから十町余奥にある若狭比古神社に入った。一夜を、ここで明してから、彼らの目ざしたのは、鵜の瀬であった。

渓流に沿うて東に入ると、峡間は急にせばまり、杣道は山腹を巻いて、忠野を過ぎ、川の屈曲にせり出した一叢の森に行き着く。鵜の瀬であった。

見たところ、遠敷川の谷筋にある小さな淵にすぎない。しかし、こここそ、奈良二月堂にある若狭井の源泉で、水は、奈良に通じていると謂われる霊地であった。

孝謙天皇の天平勝宝三年、東大寺の実忠和尚が、六時の行法を修し、恰度その二月の修中、初夜の終りになって、神名帳を誦して諸神を勧請した。その時、一人、遠敷明神のみが、漁のために遅れたので、その遅刻の代償として、堂前に閼伽井を掘って、毎年若狭の水を送ることを約した。幾日かの後、黒白二羽の鴻が、磐石を穿って地中から飛び出し、傍の樹にとまった。その二つの孔から、たちまち、甘泉が湧き出て、香水は立ちどころに満ちた、という。

若狭井の起源を記した「東大寺要録」によれば、鵜の瀬は、底知れぬ深淵なのであった。

半蔵と「子影」が向い立った淵は、一度大雨に見舞われたならば、その所在すらも分らなくなるような見すぼらしい淵にすぎなかった。

淵を作っている巨大な岩壁には、雨乞いの注連縄が張ってあった。その右にある小さな磧は、垢離場となるのであろう。

「風盗」の本拠地の入口にしては、あまりにも、おだやかな、何処の山間にも見出される風景であった。

半蔵は、しかし、「子影」の眼眸が、じっと、淵に当てられたまま、その冷たい光を増すのを認めて、緊張した。

その澄んだ流れには、岩壁の上に建てられた一基の鳥居の影が、明るく落ちていた。「子影」は、それを瞶めていたのである。

と——。

「子影」は、かるがると跳んで、鳥居の影の中に立つと、それが正対した方角へ向って目を挙げ、ゆっくりと、指さした。

半蔵は、合点した。時刻は恰度、卯の上刻になっていた。すなわち、鵜の瀬へ、卯の刻に、朝陽を受けて延びた鳥居の影が、「風盗」の棲む城砦へ通ずる間道を教えているのであった。

十

正午——。

半蔵と「子影」は、いくつかの峠を越えて、いちめんに白い芒にうずまった台地に出た。この台地の行き着いたところから、別の山嶺がそびえ立ち、その頂上まで伝って行くに恰好の尾根が、毛面尾を永く引いて、茶褐色の土坡を、視界の中央に重ねていた。

半蔵は、「子影」が、秋風にそよぐ穂波の中へ、つと、蹲って、地面を匐っている鳴子縄を、切りすてるのを眺めて、ようやく、敵中に入ったのを知らされた。

月が昇るまで、二人は、その芒原の中に臥していた。

夜明け——二人を伜ませたのは、幾丈の下まで山脚を一直線に削ぎ落された、とある断崖縁であった。

「子影」は、それまでずっと背負っていた包み荷を、背からおろすと、そこへひろげた。あらわれたのは、赤栗毛の馬の一枚皮であった。

それを小脇にかかえた「子影」は、風のように奔って、右方の疎林へ消えた。

疎林から、不可思議な房状の岩巣を竝べた巨巌が、絶壁上へ突出していた。その一端の石筍のような岩の上に、忽然として、一頭の駿馬が、姿を出現させるのを、半蔵は見た。

ゆっくりとした歩みかたで、「子影」は、半蔵の傍へ戻って来ると、腰から乾飯の袋をはずして、さし出した。自身は、疎林の中で摂り了ったものと思われた。

陽が昇って、程なくの頃あい、不意に、「子影」が、半蔵の注意を促した。

半蔵は、疎林の縁をまわろうとする二個の影を発見した。弓を携えた山男たちであった。

「子影」と半蔵は、音もなく、山男たちの後を追っていった。

疎林を抜けた山男たちが、構えを揃えて、製馬にむかって、弦をひきしぼった——刹那、「子影」と半蔵は、樹蔭から、躍り出て、その背後を襲っていた。

刀は、用いられなかった。

当て落された男たちは楮綱で高小手に縛りあげられた時、意識をとりもどして、狂ったように

喚いた。

「子影」は、それぞれの綱の端を、一本の松の幹に、結びつけておいて、男たちの布子へ、黄色な粉をふりかけた。男たちは、それが何を意味するのか判らぬために、ちょっとおとなしくなっていたが、「子影」が、燧石を切るのを眺めて、驚愕して、蟻にたかられた青虫のように、のたうちはじめた。

附木の火が、布子の裾へ移されるや、硫黄はおそろしい迅さで、五体へ燃えひろがった。

半蔵は、焼ける男たちを見ないで、焼ける男たちを冷然と見下している「子影」を、瞶めていた。

——人間ではない！

あらためて、そう呟かずにはいられなかった。

「子影」は、半蔵を振りかえって、絶壁の下を覗いてみよ、と手真似した。

半蔵は、何気なく断崖縁へ寄って、慄然となった。

百匹を越える山犬の群が、眼下の草地をうずめて、石筍岩上の製馬へ、餓えた眼光を挙げて、不気味な沈黙を保っていた。

しかし、その静けさは、ほんの一瞬であった。

首領らしい一匹の、鋭い咆哮とともに、百匹は、一斉に、絶壁に沿うて、走り出した。その動きは、黒い水流が草地を浸して行くように、半蔵の眸子に映った。

餓えた山犬の耳に、灼けただれる山男たちの断末魔の悲鳴がきこえ、その鼻孔が、生肉の焼ける匂いをかいだのである。

——いまだ！

「子影」と半蔵は、山犬の群が疾駆して行く方角とは逆の方角へ向って、その速脚をとばした。

断崖の下に拡がった草原に、山犬の群を放って、餓えさせているのは、「風盗」が侵寇を防ぐ巧妙な仕業であった。

「影」がこれを知っていて、「子影」に、さずけた突破手段は、まさに見事であった。

しかし——。

楮綱をつたって、絶壁を滑り降り、草原を、けものが掠めるように、横切って行き乍ら、半蔵と「子影」は、断崖縁からの目測よりも、そこが、はるかに宏大な地域であることに気づいた。

そして、それは、名状し難い戦慄となった。

山犬の群が、二人の山男の躰を喰い尽して、草原へ馳せ戻るまでに、能く遁れ得るには、草原上に、身を匿すべき叢林はなかったのである。

半刻の後、半蔵と「子影」は、数町四方の地域の中で、ただ一樹のみ矗々として天を冲している樅の巨木の高みに、のぼっていた。のぼり得たのが、奇蹟にひとしかった。

二個の生身を喰い尽した百匹の野獣は、新しい生血をもとめて、その根かたに殺到し、先刻、製馬を仰いでいた時のように、不気味な沈黙を守った。

——このまま、三日も、この樹上で過せば、気が狂うかも知れぬ。

半蔵は、そう思いつつ、向いの太枝に跨った「子影」を、見やった。「子影」の眼眸は、草原の彼方へ置かれて、動かなかった。

陽が高く昇り、そして、傾いた。

草原から、光が一線を引きつつ退って行き、代って淡々とした靄が夕風に乗って流れて来た頃あい、半蔵は、「子影」の口から、はじめて人間の声が、発せられるのをきいた。

「来た！」

短い一語に、半蔵は、はっとわれにかえって、「子影」の視線を追った。

靄の中に、点々と黒いものが沸きあがって、急速に、一団となって、こちらへ向って来る——。

それが、別の山犬の群と見分けられた時、樹下の百匹は、いつの間にか、円陣を解いて、整然と一列横隊になっていた。

あらたな山犬の群は、約半数ぐらいであったが、すこしもおそれぬ疾駆ぶりで、大きく迂回すると、反対側へ到着して、これもまた、一列横隊にひらいた。

半蔵と「子影」は、いくばくかの後、二匹の首領が、昏れなずむ萩の花や鶏頭花を踏み散らして、目まぐるしく闘う、凄絶な光景を目撃させられた。

闘いに多くの時刻は費されなかった。

百匹の首領が、五十匹の首領の下で、悲鳴の一声を発した瞬間、それまで、ひそとして微動もしなかった百匹が、算を乱した。

五十匹の首領は、逃げ散って行く百匹へ向って高々と遠吠えた。

半蔵と「子影」が、枝を蹴って、地上へ飛んだのは、この刹那であった。

野獣にも、勝利に心驕った不覚の一瞬があった。

半蔵が、真正面から突進して、跳躍して来る首領をして、頭上を越えさせるや、「子影」は、その後方に待ちかまえていて、首領が、足を地に着けるか着けぬうちに、一颯の刃風とともに、

その首を刎ねた。

首は、樋の幹につきあたって、はねかえると、血の尾を曳きつつ、芒の中へ沈んだ。

五十匹の山犬もまた、首領を喪って、算を乱した。

十一

「風盗」族の城砦は、独立峰の頂上並びに山腹に、数段の削平地を設け、自然の天険を経始（繩張）とした、きわめてありふれた中世紀の山塞であった。土塁の高さも一間余しかなく、敷幅もこれに准じて狭く、塁線にも屈曲がなかった。乾壕も浅かったし、虎口（城の出入口）も桝形ではなく、柵を躍り越えれば、まっしぐらに、高櫓下まで突入することが可能であった。

ただ、変っているといえば、所謂「人呼びの丘」という小山は、城内に築かれるのが普通であったが、この城砦では、乾壕の前面に盛りあがっていることと、それを囲んで、一文字土居がめぐらされてあることであった。

この——一瞥、なんの変り栄えもしない城砦は、しかし、これを守る百余名の忍者の一人々々の卓抜した秘術によって、いかなる名城よりも、堅忍不抜であった。

木曾谷の忍者六十余名が倏忽として、一文字土居前方に、黒影を浮きあがらせた時、「風盗」側では、すでに、それを幾刻か前に知って居り乍ら、城砦を、冴えた月かげの下に、ひっそりと沈めて、なんの反応もしめさなかった。

引きつけておいて、一挙に殲滅する自信が、その静寂をつづけさせた、といえる。

攻撃方にも、一人の生還も期していない覚悟があった。

六十余の速影が一文字土居を掠めて、「人呼びの丘」を目ざした瞬間から、不思議な闘いが、展開した。

土塁から、飛ばされる矢の唸りのほかは、なんの物音も立たなかった。矢を射込まれてのけぞる者さえも、声はおろか、倒れる音さえもひびかせなかった。

その半数を殪され乍ら、木曾谷の忍者隊が、「人呼びの丘」を奪いとった——刹那、そこから、轟然と火柱が、噴き上り、数名を木の葉のように、刎ねとばした。

一斉に、伏せて、生残った者の頭上へは、あらたな矢が、雨のようにあびせられた。

にも拘らず、炎の光に照されつつ、虎口へ突入した者は、猶十余名をかぞえた。

この時、半蔵と「子影」は、城砦の裏側の、目眩むほど深い峡谷をへだてた丘陵の頂上にいた。

半蔵は立ち、「子影」は坐っていた。

しかし、疲労し果てているのは半蔵であり、「子影」の双眸は、依然として、澄んで、冷たい光を湛えていた。

前夜のうちに、二人は、渓谷を渡渉し、城砦内に忍び入り、十余個の爆薬を仕掛けて置いて、半刻ばかり前に、ここへ引返していたのである。

半蔵は、「子影」に、おのれの疲労を知られて、蔑まれるのをおそれて、腰を下さずにいるのである。

任務を終えたいま、半蔵の胸中にのこっているのは、この「子影」という忍者に対する好奇心だけであった。一切の行動を、沈黙裡に、正確に遂行し乍ら——そして、そのひとつひとつは、生れてはじめての冒険であるにも拘らず、この若い忍者は、一瞬前の過去に対しては、風か雨の

ように、冷淡のようであった。すくなくとも、半蔵の目には、そうとしか映らなかった。

「子影」が、人間的な感動をしめしたのは、草原の果てに、新しい山犬の群が出現した時だけであった。

それとても、「子影」は、すでに、そのことを予期し、待ちかまえていたにすぎない。思いがけぬ僥倖に歓喜した次第ではなかった。

こうして蹲って、自分たちの仕掛けた爆薬が、その時刻に、炸裂するのを待ち乍ら、脳裡は、おそらく、なんの感慨も催していないに相違なかった。おそらく、飼いならされた猟犬の休息状態と同じであろう。

半蔵は、その無心さに、苛立ちをおぼえさせられていた。極度の疲労が生んだものと、自分でも判りつつ、抑え難かった。

倒れたならば、昏々と睡ってしまいそうな躰を、依怙地に、地上に立てていることは、苛立ちをこれ以上激しいものにしないためでもあったのである。

突如、轟音とともに、城砦の前方に、火柱が立ち上るのを見て、半蔵は、われにかえった。

味方が斬り込んだのである。

火柱が、「人呼びの丘」から噴いたのは、明確であった。

すなわち、味方の攻撃に対する、敵の応戦であった。

「いかん！」

思わず口走って、半蔵は、「子影」を見た。

「手筈をあやまったぞ！」

半蔵は、味方が、攻撃の時刻をまちがえた、と思った。

「子影」は、かぶりをふった。

「まちがっていない?!　それは、どういうのだ?」

味方が、一文字土居を掠めて、「人呼び丘」へ殺到するのと、城内に仕掛けた爆薬が炸烈するのは、同時でなければならぬ。

「人呼び丘」に火柱が立ったのは、味方の半数以上が斃れたのを意味している。生残った者は、すでに虎口に到達していようが、爆薬が炸裂しない限り、そこで全滅するのは、目に見えている。

「どういうのだ、おいっ！」

半蔵は、激昂して、「子影」の肩をつかんだ。

「子影」は、動かなかった。

「みな殺しにされてもよい、というのかっ！」

そう叫んだ瞬間、半蔵は、愕然となった。

——残らず死ぬことは、予め決っていたのだ！

忍者と忍者の凄絶の戦闘であった。

「風盗」側が、正面を衝いて堂々と、たたかいを挑んで来た同類を、そのまま、小面憎しと受けとって、主力を傾注して応ずる筈はあるまい。これには、何かの計略があるに相違ない、と疑うのは当然である。

攻撃者たちが、全滅してこそ、城内に、油断が生ずる。

爆薬が炸裂するのは、その時である。

半蔵は、おのれの激昂を慙じた。「子影」に、何か弁解の言葉を吐こうとしかけて、半蔵は、片手を、まだ、その肩に置いているのに、気づいた。

はっ、となったのは、その瞬間であった。

微かな匂いが、おのが掌のぬくもりの下から、漂い出ている。

それは、半蔵を愕然とさせるに足りる匂いであった。

おそらく、「子影」は、自分のからだに、他人の手をふれられたのは、生れてはじめてであったに相違ない。そのために、不用意にも、おのれ自身意識せずして、肌膚が微妙な反応をおこして、匂いを沸かせたものであったろう。

半蔵は、一歩退った。

次の瞬間、目にもとまらぬ迅業で、腰から一刀を鞘走らせた。

同時に、「子影」は羽毛のように軽やかに、一間を飛んでいた。

しかし、そのおもてを包んでいた黒布は、半蔵のかざした白刃の上で、蝙蝠のように、ひらひらと宙を舞っていた。

折から昇った月光をあびて、その貌は、蒼く、彫ふかい翳を刷いて、半蔵の眼眸に、くまなく見とどけられた。

「女子だったのか、そなたは――」

半蔵は、呻くように云った。

十二

黙然として――老いたる「影」は、炉火を瞶めていた。

その化け果てた老醜の貌は、この数日間で、さらに幾本かの皺を刻み込んだようであった。

ふと……炉火から目を擡げて、右へまわした。

いつの間にか、そこへ、「子影」が、坐っていた。

「戻ったか――」

隻眼を据えた「影」は、「お前、一人だけだな」とたしかめた。

「子影」は、頷いた。

「影」は、視線を炉火へ戻すと、出でて再び還らなかった部下の、一人々々の俤を偲ぶように、惘然と、なかば虚脱の様子に陥っていたが、急に、眉宇をひそめた。

匂いを――「子影」のからだから漂い出る微かな匂いを、かいだのである。

「影」は、猶しばらく、そうして、じっとしていたが、やがて、やおら隻脚で立つと、

「参れ――」

と、「子影」を促した。

奥の座敷に入ると、「子影」に、坐る位置を示しておいて、床の間から、石田三成拝領の剣を把った。

「お前は、服部半蔵に、犯されたであろう」

この言葉は、ひくい穏かな語気で、口から押し出された。

「子影」は、眸子を、膝へ落した。

刹那――「影」は、抜き討ちに、白刃を、「子影」の頸根へ、送った。

むなしく宙を截った切尖を、畳の上一寸あまりで、ぴたっと停めた「影」は、心気が、陽足のように、躰の内から引いて行くのをおぼえた。

畳に膝を折って、徐々に、前へのめり込み乍ら、消え行く意識の中で、「影」が呟いたのは、

――子供が生れるとしたら、どんな奴であろう？

そのことであった。

この物語は、それから、さらに二十年を経て、あらたな構成をととのえる――。

虎伏の剣

一

まず、剣道史の挙げる巷説の随一といえば、

「寛永十一年九月二十二日、将軍家光、各流の剣士を徴し、江戸城吹上に試合を覧る。世に寛永の御前試合と称し、人之を伝う」

これである。

これは、あくまで、巷説であって、徳川の記録は、この日、家光に日光参廟の事があった、とのこして居り、史家に否定の根拠を与えている。

記録の方が、巷説よりも正しい、と思い做すのは、常識であろう。

しかし、巷説の方が、記録よりも、事実を正しく伝えている場合があるのを、われわれは、太平洋戦争中に、痛い程知らされた。

寛永御前試合は、公儀に於て、これを隠蔽せざるを得ない、やむなき事情が起り、巷間では、その事実を知りつつ、口伝え以外は遠慮した。明治に至って、講釈師が、これを公にする時、試合内容に就いての多くの誤伝に誇張を加えたのは、いたしかたがなかった。

寛永御前試合は、まさしく、催されたのである。

しかも、試合は、十一年九月二十二日のみに行われたのではなかった。その日から十四日間にわたって、十試合が覧られた。（十四日間に十試合というのは、あいだに、将軍家の出座のない日が四日間あったことを示す）

諸侯ならびに旗本の列座はなかった。

覧たのは、家光唯一人であった。

審判が、柳生宗矩と小野忠常の両名であったことは、巷説にあやまりはない。その時、但馬守宗矩は六十四歳、次郎右衛門忠常は二十八歳であった。宗矩は、白扇を持って、上座に向って右、忠常は、銅鑼を持って、左に位置を占めた。

時刻は、正午。

方二十間に、紅白の幔幕を張り、剣士は、幕を割って、一歩ふみ入った瞬間から、闘いを開始する。将軍家に対する拝礼は、家光自身の口から、省かれた。

武器は、真剣、木太刀その他、いかなるものでも、各自勝手であり、幕を入るまで秘すことを許された。

すなわち——。

戦場を知らぬ家光は、江戸城吹上の禁苑に於て、凄絶の血闘を覧ることを、のぞんだのである。

第一日。快晴。

試合は、神道流、妻片久太郎時直（後に謙寿斎と号す）と一伝流浅山内蔵助重行とによって行

われた。

神道流は、剣道中興の祖と謂われる下総国香取の郷士、飯篠山城守家直の樹てた、いわば剣道流派の濫觴である。これを天真正伝神道流と命名したのは、山城守の師である鹿伏兎刑部が河中に棲む天真正という河童より授けられた刀法の秘蘊であるがため、と伝えられている。河童は、すなわち香取大明神の応身、という意味であろう。

妻片久太郎は、香取にあって、神道流の正統を継いでいる剣客で、その技の精妙をうたわれているとともに、面貌の怪異さにおいても有名であった。年齢はまだ二十六歳の若さであった。

一伝流は、丸目主水正を祖として、戦国の抜刀術から発している剣法であった。当流は、別に居合、小太刀、鎖鎌、薙刀、忍術、捕物、毒害の法まで備えているという、端倪すべからざる秘剣を組んで、世上に於て、難剣随一と称されている。したがって、当日、一伝斎と号する浅山内蔵助が、いかなる武器を把って現れるかは、対手の妻片久太郎にも想像がつかないことであった。

内蔵助重行は、当年四十二歳、兵法者というよりも、儒者風の、きわめて穏健な風貌の持主であった。躰は小肥りの小柄で、幼年時骨折して、左脚が短く、かなり歩行が醜かった。

本丸の時鐘がひびいて来るや、まず東方の幔幕を割って、妻片久太郎が、長剣を携げて現れると、するすると中央に進み出て、作法正しく、片膝ついて、対手の出を待った。

噂にたがわず、白鉢巻から、角をのぞかせるにふさわしい奇面を備えていた。凄じい疱瘡の痕が、異常なまでに離れた双眼や巨大な鼻梁や、爛れたように赤い厚い唇を包んで居り、気弱な女子や小児ならば気遠くなるに相違ない。

……妻片久太郎が、その位置に就いてから、今日の時刻にして、およそ十数分の緊張した静寂が、流れた。西方の幔幕は、そよともせず、一伝流の秘法がその蔭に、気配もなく、ひそめられつづけた。

この決闘場における唯一人の観客である家光にとって、十数分は長かった。姿なき兵法者が、幔幕を透して、放射して来る殺気を察知することは不可能だったからである。

家光は、三度、躰を動かした。それから、白砂上を掠める鳥影に、ふと、顔を擡げた——途端、西方の幔幕が割られた。

一歩、するりと滑り出た浅山内蔵助は、すでに、手にした木太刀を、まっすぐに、妻片久太郎の双眸に向けて、さしのべていた。

袴姿で、襷もかけて居らず、股立ちを取ってもいなかった。

妻片久太郎は、片膝をついたままで、長剣を鞘ごと、左手いっぱいに、さしのべて、鯉口を切った。間合がきまるまで、立上らぬとみえた。

内蔵助は、久太郎に向って、ゆるやかな歩度で迫りはじめた。

距離は、約八間あった。

久太郎は、内蔵助が、五歩をふむまで、無表情であったが、六歩目をふむや、ほんの微かではあったが、眉宇をひそめて、眸子を細めた。

久太郎には、内蔵助のさしのべた木太刀の尖端しか見えず、その長さが測れなかったのである。

家光および審判両名の目には、内蔵助の木太刀が、およそ四尺三四寸はあろうか、と映ってい

た。久太郎の目には、それが、一点としか映っていないのであった。

内蔵助は、かねて、久太郎が三尺二寸余の長剣を使うときいていたので、それよりさらに一尺あまりも長い木太刀を作り、抜刀術から出た居合の迅業によって、一撃による勝利をおさめんとしているのであった。

そのために、異常なまでに左右へ開いた久太郎の双眼を晦して、そのおそるべき長さを一点にしか見せない企みは、まさしく、久太郎を当惑させた、といえる。

さらに、内蔵助としては、木太刀と長剣との一尺の差の利を、一撃まで保続するためには、歩度に巧妙な計算を入れていた。

しずかに、ゆるやかに、五歩進んで、久太郎の面上に当惑の色が刷かれるやいなや、六歩目からは、突如として速度を加えた。

風の迅さ、ともいえた。

しかも——上半身を傾斜させた跛行にも拘らず、さしのべた木太刀は、尖端で久太郎の双眼をとらえたなり、微塵の浮沈もしめさなかった。久太郎は、完全に間合を詰められるまで、その長さを目測し得なかった。

内蔵助は、肉薄しざま、声もなく、四尺三寸の木太刀を頭上高く振りかぶった。

その刹那まで、久太郎が、片膝つきの姿勢を変えようとしなかったことは、家光はもとより、審判者たちにも、いかにも不審なものに思われた。

のみならず——。

内蔵助が、木太刀を大上段に振りかぶると同時に、久太郎は、ぱっと両手を、勝閧のかたちに、

高く大きく拡げたのである。そのいずれの手にも、長剣は無かった。

奇怪であったのは、木太刀をかざした内蔵助が、それなり、樹木と化したように、動かなくなったことである。

「勝負あり！」

宗矩が白扇をあげるのと、忠常が、銅鑼を打つのが、同時であった。

二

「勝は、孰れじゃ？」

家光には、判らなかった。

「妻片時直にございます」

宗矩が、こたえた。

家光は、あらためて、両手を挙げている久太郎を見、そして、大上段に振りかぶっている内蔵助を見た。

この時、内蔵助の咽喉もとで、何かが、煌と光った。

眸子を凝らした家光は、それが白刃の切尖であるのを認めて、あっとなった。

忠常が、黙って、床几から立つと、そこへ歩み寄り、内蔵助の袴の下から、すうっと、白刃を抜きとって、久太郎へ返した。

神技ともいうべき久太郎の迅業であった。内蔵助が、大上段に振りかぶる間髪の間に、久太郎は、居合抜きに、長剣を投げて、内蔵助の袴の下から、腹部、胸部に添うて、まっすぐに、咽喉も

とへ突き上げたのである。切尖は、顋にふれて居り、もし内蔵助が、木太刀を振り下せば、ぐさと口腔をつらぬいていたであろう。内蔵助が、立往生せざるを得なかった所以である。

久太郎は、長剣を腰に納めると、忠常に促されて、縁さきに進み、上覧を仰いだのは虎伏の剣と申しまする、と言上し、褒美として、将軍家秘蔵の無名太刀一振を拝領して、退出した。

家康が、大坂城を陥落せしめた時、秀頼所蔵の無名太刀十振が、戦利品の中にあった。家康が、何よりも、これをよろこんだのは、曾て太閤秀吉が、武勲の諸侯に与えるために、数百本の無名太刀を集めて、摩りあげさせ、正宗の銘を打たせた際、十振だけを無名のままに手元にのこして置いたのを、知っていたからである。（ちなみに、それまで殆ど名の知られていなかった正宗は、これによって、一躍、名工としての位置を占めたのである）

家光は、この十振を、勝者たちへ分つために、十試合ときめたのである。

久太郎は、青山にある寄宿先の、同じ神道流、奥山万兵衛の道場へ戻ると、勝利を告げて、次のようにその理由を説明した。

「一伝斎が現れた時、それがしは、木太刀であるのを見て、これは、間合の勝を狙うもの——先年、宮本武蔵が、佐々木巌流と闘った時の法をえらんだな、と察知した。武蔵は、巌流の物干竿にまさる長剣を持たぬために、櫂を削って、四尺余の木太刀を造り、わざと時刻を遅らせて、舟島へ到着し、舟から海中に降りるや、木太刀を水中に浸けて、長さを敵に知らしめなかった、ときいて居る。すなわち、一伝斎は、この武蔵の兵法にならった。それがしは、一伝斎が、迫り寄るまで、正面からまっすぐに突き出した木太刀の長さを、目測することを許されなかった。ただ、四尺以上ということだけが、想像できた。それがしは、咄嗟に、おのが剣と一尺の差を持っ

た木太刀に対して、立ち上って間合をとる愚を考えた。さいわい、それがしには、虎伏の剣があった。お手前もご存じのように、虎伏の剣は、坐臥から、立つと見せて、逆に身を伏せて、敵の腹中につけ入る術である。一伝斎は、それがしが、立たぬと見て、やむなく、自らの木太刀の長さに腕の長さを加えた五尺の間合をもってした。これは、それがしが、居合抜きに、身を延しざま、三尺二寸の太刀を投ずるに足りる距離であった。それがしは、すでに、一伝斎が、袴姿になっているのは、下に、鎖帷子を着用しているに相違ない、と見てとっていた。……太刀が、鎖帷子と着物の間を縫って、庭前に血を流すこともなく済んだのは、さいわいであった」

妻片久太郎が、「虎伏の剣」をさとったのは、十七歳の時であった。

下総香取の由緒ある郷士の家に、長男として生れた久太郎は、物心ついた時すでに、両親を知らなかった。それは、醜怪な容貌のせいであった。父母ともに尋常な顔立ちであったにも拘らず、久太郎は、誕生の時から、取上げた老婆をして悸っとさせる、世に謂う鬼っ子であった。父は、一瞥して、不吉な予感に襲われて、七夜の宵、海辺へ棄て、家来筋にあたる漁師にこれを拾わせるという手続きをとり、乳母をつき添わせて、菩提寺に預けた。

鬼面は、そのまま育っても、他人の正視に堪えぬところであったろう。不運にも、五歳の時、流行の疱瘡にかかって、鬼面は更に、名状し難い醜悪さを加えたのであった。

斯くて、久太郎は、少年期を、唯一人の遊び友達もなく、育たなければならなかった。その孤独の疏通口を、少年は、山野を駆けめぐって、木太刀で、野生の小動物を撃つことにもとめた。剣の天稟は、その頃から発揮され、ひとたび狙った獲物は、終日追跡してでも、仆さずにはおかなかった。

十四歳の時、この地方に、野鼠がおそろしい勢いで繁殖して、作物の被害甚大となったので、領主の名によって、各戸で猫を飼うことになった。

やがて、野鼠が滅んだあと、夥しい猫の中から、赤子の咽喉を噛み切る怪猫が現れて、恐怖の噂を撒いた。

一日、久太郎は、一尺八寸の脇差を抜いて、その猫を、追った。久太郎の気魄は、猫をして、とある辻の庚申塚の裾で、身動きできなくせしめた。

久太郎が、じりじりと迫るにつれて、猫は、その背を徐々に丸く、上げた。

よし、と汐合をはかって、久太郎は、脇差を打ち下した。刹那、猫は、久太郎の手元に飛び込み、胸をかけのぼって、その醜怪な顔面に爪跡を残しておいて、頭上を躍り越え、何処かへ消え去ったのであった。

久太郎は、狂おしい屈辱に駆られ、幾夜も睡れなかった。おのれの慙じる鬼面を傷つけられたことは、畜生からもあなどられ、あざけられたように、心まで傷を負うことになったのである。

猫は、久太郎の復讐におそれをなしたものか、再び里に姿を現さず、討ち取る念願はついに叶えられなかった。その後、剣技はいよいよ妙致の域に入って行ったものの、猫におくれを取った口惜しさは、一日も忘れられず、胸奥のしこりとなった。

十七歳の早春、摩利支天の廟にこもったところ、一夜、夢裡に、本尊が利剣を振りかざして、迫って来た。その剣気の凄じさに、久太郎は、総身の毛を逆立て、自身一匹の虎と化して、背を高々と丸めて、これに対した。

刃風を唸らせて、利剣が、真っ向から打ち下された瞬間、久太郎は、無我夢中で、その白刃の下をかいくぐって、摩利支天のふところへ、跳びついていた。

……目覚めて、久太郎は、豁然として、悟るところがあった。

おのれを負かした猫の位置に、自身を転換することによって、絶体絶命の窮地を脱し得たのである。

孫子の兵法にも、「囲師は必ず、闕く。窮寇は迫る勿れ」とある。敵を包囲するに当っては、必ず一方に生路を開いておいてやるべきであり、逃路を失った敵を窮迫してはならぬ。必死の力をふりしぼって、意外の反撃をこころみるに相違ないからである、という意味である。

久太郎は、後日、その悟るところを、日誌に記した。

「二者、剣を執って対峙す。勝敗なしということなし。されば、いかにして、その勝を得んか。敵を撃つということに非ず。敵に撃たれざるを心得べし。撃たれざる位置は、おのずから定まる。勝に不思議の勝あるは、これ也。負に、不思議の負は無し」

撃たれざる位置を、咄嗟の間に判別する力を、久太郎は、平常心、と呼んだ。そして、聴く者に、鞘の内にある剣を指して、これが平常心だ、と教えた。剣が鞘をはなれる時は、すでに、勝つべき位置が定まっていなければならないのである。

久太郎は、悟って以来、おのれの鬼面を、慙じなくなり、闘志を内にかくして、いかなる場合でも、水のように冷静であるように努めて、礼節を尚ぶ人物に生長して行ったのである。

三

勝利の夜は、妻片久太郎にとって、祝言の夜でもあった。

このたびの試合に召されて出府した久太郎は、先輩に当る奥山万兵衛の道場に身を寄せたが、次の日には、万兵衛から、妹の千代（十九歳）を貰って欲しい、と申込まれたのである。

久太郎は、給仕に出た千代の、ういういしい面立ちに、心をとめていた。

「それがしのような、化生面が、妻帯など思いもよらぬこと。まして、千代殿が、到底承知される筈はあるまい」

と断ると、すでに、千代は承諾しているとのことであった。

兄から、相談されると、千代は、ためらわずに、

「お人柄を慕いまする」

と、こたえた、という。

久太郎は、感激し、もし勝利を得て戻って来たならば、その夜のうちに祝言いたしたい、と申出た。

久太郎は、生きて戻らぬ覚悟であった。千代のような可憐な乙女を妻とする奇蹟が、自分に起るとは到底考えられなかったからである。

奇蹟を信じなかった謙虚が、勝利をわが手にもたらしてくれた、と思ってもよいのではなかろうか。

離れの一室にしつらえられた新牀で、はじらいつつ、そっと入って来た千代を、双腕に抱きとり乍ら、久太郎は、自身に、そう呟いた。

ひそと目蓋を閉した千代の白い細いおもてへ、おのが鬼面を合せようとしかけて、久太郎の磨

ぎすまされた感覚は、戸外に忍び寄る何者かの気配をさとった。

久太郎は、千代をそっと置くと、差料を把って、音もなく立ち上り、跫音を消して、縁側へ出た。

数秒を置いて、さっと、雨戸を繰った。

広い平庭の、塀沿いにしげった木立ちの中に、狐火にも似た、赤い燈が、ぼうっと滲んでいるのを、久太郎は、見出した。

その微かなゆらぎかたは、あきらかに、人の手によるもの、と認められた。

久太郎は、小柄を抜いて、それへ投じた。

燈は、数個に砕けて、花火のように、夜空へ散った。

久太郎が、背すじに、氷のように冷たい戦慄をおぼえたのは、その瞬間であった。

異変が、寝室で、起っている！

砕け散った燈が、あざわらうように、久太郎に、そう教えたのである。

あざむかれて、久太郎は、縁側へ、おびき出されたのである。

ゆっくりと、踵をまわした久太郎は、開かれた障子の間から、褥の上に起っている光景を見た。

起き上った千代が、胸も裾もひきはだけたばかりか、真白い太股を、左右に大きく拡げて、見せまじきものまで、くろぐろと、露わにしているのであった。

のみならず、その股間には、一本の小太刀が、寝衣と褥を刺して、直立していた。

「……」

久太郎は、一瞬、息をのみ、

——狂気か！

と、疑った。

目蓋を閉じたまま、顔を仰向けている千代の姿勢は、いかにも、眺めて欲しいといわんばかりの様子に見てとれた。

次の瞬間、久太郎は、千代の背後に蹲っている黒い影を、見わけた。

千代にも、兵法者の家に生れた心得がある筈であった。にも拘らず、死ぬよりもはずかしい姿を曝され乍ら、身動きひとつできないでいるのは、その背にひたと吸い着いた黒い影に、絶妙の術がある証左であった。

黒い影は、千代を羽交締めにしているのでもなければ、頸にも四肢にも、指一本掛けてはいないのであった。

久太郎が、すうっと、三尺あまり畳を滑って、迫ると、はじめて、千代の首のうしろから、その面貌を、浮かびあがらせた。

眉も目も鼻梁も唇も、線を引いたように細く、輪郭にふしぎな柔らかな模糊とした陰翳があって、これは後日に、印象をとどめぬように努力して造られたとさえ受けとれる忍者独特の風貌であった。

凝視すればする程、かえって印象は淡くなるようであった。

まだ、若い。二十歳を越えては居るまい。

「何者だ？」

久太郎は、語気を抑えて、問うた。
「名は、与えられて居り申さぬ。影――とおぼえておいて頂きたい」
抑揚のない、澄んだ声音で、こたえた。
「影?!……何用あっての推参か?」
「本日の試合に勝って、将軍家より拝領された太刀を頂戴つかまつりたい」
「理由は?」
「申上げられぬ」
「太刀を欲するならば、それがしの妻となろうとしているその娘を、このように、はずかしめるまでもあるまい。床の間に飾ってあるではないか」
「手前は、盗賊ではない。御貴殿におことわりして、頂戴つかまつる」
「……」
久太郎は、差料をすてると、ゆっくりと、床の間へ、歩み寄った。それにつれて、千代の裸身は、人形のように、まわされた。
久太郎は、拝領の太刀を、手にするや、すらりと抜きはなった。抜きはなったからには、久太郎が、すでに、勝つべき位置に就いたことを意味した。
久太郎は、若い「影」との間合をはかっていた。そのあいだに在る白い女体は、すでに、彼の眼中にはなかった。
久太郎は、切尖を畳にふれんばかりに下げて、必勝の一撃を、対手に予告した。
「おみごと!」

若い「影」の口から、その一語がはかれるとともに、千代の股間から、小太刀が消えた。
「退散つかまつる。後日、あらためて参上――」
そう云いのこして、千代自身の影法師でもあるかのように、まうしろへ、すっと退って、壁に添った。
その時、千代が呪文を解かれたように、褥のそばへすてられていた久太郎の差料をひろいとって、抜くがおそしと、わが胸へ突き立てようとした。
「はやまるな!」
叫びざま、久太郎は、拝領の太刀で、千代の逆に持った刀を打った。
にも拘らず――。
久太郎は、千代の胸から、血汐が迸しるのを見なければならなかった。千代は、あやまたず、おのが胸を刺したのである。
久太郎は、茫然自失した。
久太郎が、携げている拝領の太刀の、切尖三寸が、失われているのに、気づいたのは、それから、幾秒か後であった。久太郎が、千代の刀を打つよりも迅く、若い「影」の小太刀が、それを鮮やかに切断していたのである。

因果坂

一

樋口十郎兵衛は、天地をつつんで舞い狂う雪片が、突如として、逆巻く波濤の飛沫と化し、さらにそれが、けんらんたる花吹雪に変る夢魔にうなされて、目を覚した。

闇に大きく目を瞠いて、しばし、動かずに、夢裡とはいえ不覚にも乱れたおのれの鼓動をきいていた十郎兵衛は、一瞬、がばとはね起きて、寝衣をすてると、雨戸を繰って、庭へ出た。

暁の、淡々とした清澄の世界は、薄霧を流れさせて、深沈たる風趣をみせていた。

十郎兵衛は、跣で、大地をふんで、井戸端に寄ると、棕櫚縄をたぐった。かたわらの百日紅の枝にとまっている黒い鳥が、じっと自分を見戍っているのを意識し乍ら——。

釣瓶水が、十郎兵衛の頭から落ちて、八方へ飛沫をはね散らすや、鳥は、羽音高く、中空へ飛び立って行った。

七度び、脂汗の滲んだ裸身へ、冷水をかけた十郎兵衛は、ゆっくりと、閨へ戻り乍ら、

——不覚！

おのれをあざけっていた。

本日の試合こそ、生涯の一大事とおのれに云いきかせ、丑三刻まで坐禅を組み、心気を鎮め

て熟睡の牀に就いたのであったが……。

暁を迎えて、ふと、五体の熱するのをおぼえた時、豊満な白い女身が掩いかぶさって来て、絖のような柔かな肌を吸いつかせ、狂おしく蠢いたのである。

——南無！

と、祈り、

——三宝！

と、叫んだが、四肢は、おのが意志にさからって、烈しく、女身を抱きしめていた。

欲情が、津波のようにうねりあげて来て、全身をおしつつみ、痺れさせて、急速に引き去るや、女身は、ぱっと砕けて、無数の雪片となって舞い散ってしまった。

目覚めてみれば、十郎兵衛は、満身の精気を放出して、下腹部を濡らしていたのである。

思えば——。

今夏、江戸城吹上の禁苑に於ける御前試合の指名を受けて、兵法者無上の栄誉と感激し、直ちに、出府して、この小石川の伝通院に身を寄せ、精進に精進を重ねて、ようやく精気の盈ちるをおぼえつつ、最後の夜を迎えた十郎兵衛であった。

戒心の度を過したとは毛頭思わぬのに、一瞬の痴夢に破れさったとは、まさに取返しのつかない痛恨といわなければならなかった。

試合の対手は、甲斐国に中条流小太刀の秘術を伝える森田五兵衛実氏であった。手裏に刀刃を見せない、と称されるほど、石火を発する迅業を使う達人であった。

この小太刀に対して、十郎兵衛定勝の馬庭念流の剛剣を配したのは、まさしく、絶好の組合せ

といえた。

馬庭念流に、受太刀はない。ただ一念罩めた壮絶の撃ち込みがあるばかりである。たとえ、対手に、これを受ける如何なる工夫があろうとも、その受けを微塵に粉砕して、真向から斬り下げる凄じさを、「念」の一字は現している。

このためには、試合当日までに、おのが心身を、「念」そのものと化すべく、必死の精進を為さねばならなかった。

十郎兵衛は、それを為したのである。

思わざる悪魔は、暁の臥牀にひそんで、その月余の精進を、水泡に帰せしめたのであった。

半刻後、十郎兵衛は、朝餉の席に就き、湯気の昇る白粥の椀と、柳の箸を把りあげ乍ら、俯向いて、

「明けがたに、痴夢を見て、不覚をとり申した」

と、率直に、向いの座の和尚へ、告白した。

すでに古稀を迎えて、枯木寒鴉の下に仆ませるにふさわしい風格をそなえた和尚は、微笑して、

「竹は雪にさからわず、水母は波にさからわず、桜花は風に散ってこそ風情があるという次第じゃな」

「お坊――悟りとは？」

「お手前の流儀の極意は、なんじゃな？」

「撃ち一太刀に、念の一字でござる」

「ならば、その念の一字を放下しなされ」

「念をすてては、虚しい空太刀となりましょう」

「さあ。考え様によっては、何も無くなったら、斬られる心配もあるまいに――」

和尚は、こともなげに云って、音をたてて、粥をすすった。

「……」

十郎兵衛は、黙って、和尚の人間ばなれした枯淡の面貌を瞶めた。

和尚は、言葉をつづけた。

「わしは、これまで、修羅道をあさましいものと、思いちがいをして来た。しかし、いまの其許を見ると、つくづく羨ましいと存ずる。二十年来、嘗て苦心す、幾度か君が為に、蒼竜窟に下る。君の為とは、禅では、悟りのことを申すのじゃが、何によらず、蒼竜の窟に突入する覚悟がなくてはなるまい。勝敗は自ら別じゃ。ただ、ぎりぎりのせっぱつまった心境になるのは、これは望んだからとて容易に機会が到来するものではない。むしろ、これを、僥倖、と考え直すのも、方便であろうかな。左伝にもござるな。少を用うるは、斉しく死を致すに如くは莫し。斉しく死を致すは、備を去るに如くは莫し、と」

十郎兵衛は、しばらく、俯向いたままでいたが、やがて、顔を擡げて、云った。

「引導をお受けいたした」

二

当時、小石川の台地から、市ケ谷見附へ向う途中に、因果坂という急坂があった。

伝通院の覚山上人が、京よりの帰途、この坂で、眉目秀麗の若僧と会った。名を沢蔵司といい、修法の目的を以て、伝通院学寮に入る希望を抱いている若者であった。上人は、その言辞挙措の温良を観て、入寮を許した。沢蔵司は、ただの一度も法問に後れを取ったことのないくらい才学非凡であったので、上人も稀有の存在と思い做した。ところが、某夜、沢蔵司は、睡魔に負けて、不覚にも狐の性を現し、同寮の先輩に、その正体を目撃された。いたく慙じた沢蔵司は、上人の前に伺候して、自白し、獣身乍ら仏果を得たことを謝して、何処へともなく逐電してしまった。上人は、その心事を憐んで、山内に祠を建ててやるとともに、はじめて出会うた坂に、柳を植えて、風に舞う柳枝のすがたに、下化衆生の相を写してやった。

柳は、年経て、いまは、巨樹となって、高くそびえていた。

樋口十郎兵衛は、まだ朝霧の霽れやらぬ因果坂を下って、この柳の下へさしかかった時、なぜともなく、顔を擡げた。

枝垂葉の間に、そこだけ、霧が濃く聚められて、散りやらずにたゆとうているとみえた。

刹那——十郎兵衛は、ぱっと、一間余り横へ跳び躱した。

十郎兵衛は、枝垂葉が罩めた白烟の中に、煌と閃くものを見たのである。

跳び躱しつつ、左手で脇差を鞘走らせた十郎兵衛は、頭上へ横一文字に構えて、左足を軸として、じりじりと千鳥に踏んだ。右手は、太刀の鯉口を切っていた。

何か重いもので、後頭を圧しつけられている不快感があった。

そのままいくばくかの静寂が過ぎた。

と——。

坂上から、急に起った一陣の風で、枝垂葉が、一斉に、東へなびいた。

十郎兵衛の眸子には、その無数の針魚のような細葉の一枚一枚が、目に見えぬ敵の閃かす太刀の切尖となって、迫って来るように映った。進退谷った当惑が来た。

次の瞬間、風に吹きはらわれて、白烟は薄れ、やわらかな陽ざしが、斜めに、そこへ落ちた。

白烟が散ってみれば、なんの異状もなかった。柳が、風のまにまに、なよなよと、枝垂葉を、そよがせているだけのことである。

それでも、猶しばらく、十郎兵衛は、横一文字の構えをすてずに、全神経をあたりに配っていた。

ようやく、脇差を腰に納めてから、十郎兵衛は、片手を、おのが頭に挙げた。後頭を圧えつけているのが、髻を刺している何かであることは、枝垂葉を脱み上げているうちに、判った。

抜きとってみて、十郎兵衛は、啞然とした。それは、三寸あまりの長さに断たれている太刀の切尖だったのである。

十郎兵衛は、烈しい屈辱をおぼえた。

自分が、危機を察知して跳び躱した時、すでに、この切尖は、白烟の中から放たれて、髻に突き刺さっていたのである。のみならず、目に見えぬ敵は、殺意を抱かず、ただ、こちらをおどかせるために、髻を刺そうと狙って、あやまたずに、刺したのである。

わずかに、十郎兵衛が、自分をなぐさめることができたのは、咄嗟に、右手で太刀を抜かずに、左手で脇差を抜いたことであった。

敵は、必ず、第二、第三の攻撃手段を用意していたに相違ない。それを阻んだのは、左手で脇

差を頭上に横一文字に構えつつ、右手でいつでも太刀を居合抜く予告をしてみせたからである。

それにしても——。

——何故の試しか？

十郎兵衛には、判らなかった。

三

第二日。正午を迎えて、江戸城吹上の禁苑の空は、曇った。

時鐘とともに、樋口十郎兵衛は、西方の幔幕を、森田五兵衛は、東方の幔幕を割って出た。

十郎兵衛は、三十二歳、六尺を越える大兵で、眉目尋常であった。それにひきかえて、五兵衛は、すでに五十路にさしかかって居り、傴僂かと疑われる程矮小で、いたずらに面体が平たく大きく見えた。鋼造りの網鉢巻を締めているのは、念流の初太刀が、必ず真っ向から襲って来るものと心得ての要心であったろう。

両者は、ゆっくりと、光のない白砂を踏んで、歩み寄り、八間余の距離をとって、いったん立ち停まった。

十郎兵衛は、大小を帯びていたが、五兵衛の腰には、小太刀一振りが差されているのみであった。

十郎兵衛は、念流独特の半眼に細めている。

念流の始祖は、奥州相馬の産で、相馬四郎義元と名乗り、深く禅門に帰依し、遂に入道して慈恩と号し、信州伊奈郡波合郷に一宇を建立し、摩利支天尊を安置して、自ら念大和尚となった、

と伝えられている。あるいはまた一説に、臨済宗の僧なにがしが、還俗して上坂半左衛門安久と名乗り、剣法に一流をひらいて、念流と称した、ともいう。いずれにしても、禅から出発した流儀であるために、常に双眸は半眼に細められて、構えをなす。汐合きわまり、満身の鋭気を、頂点に騰らせた刹那、かっと眦を裂いて瞠き、火のような光をほとばしらせて、一撃に出ることになるのであった。

半眼のもとめるところは、敵の姿勢の総てを、眼底に容れておき、その構えのどの部分かがしめす毛ほどの破綻であった。敵の刀身も、半眼には、部分としか映らないのである。

十郎兵衛は、五兵衛の自然に垂らした両手が、左右とも、手の甲を正面に向けているのを、半眼に映して、そろりと、一歩出た。五兵衛もまた、一歩を詰めた。

そうして、交互に、一歩ずつ、距離を詰めて行き五間に縮まった瞬間、

「とおっ！」

十郎兵衛は、五体に漲った猛気を、一声に炸裂させて、二間を奔った。

同時に、だらりと垂れていた五兵衛の両手が、ともに、はねあげられた。

その手中から噴いて出たのは、黒い光芒ともいえる十本の手裏剣であった。五本ずつ、二本の線を曳いて、宙をつらなって縫い、しかも、十郎兵衛の胸前三尺の空間で、意志のある生きもののごとく、上下左右へ散ったのであった。

だが、胸を、顔面を、腹を狙って躍った兇器は、十郎兵衛が、いつ抜きはなって構えたか、胸前に横一文字に横たえた脇差に当って、悉く、飛魚のように刎ねあがって、十郎兵衛の頭上を越えて、その背後へ落下した。

あえなく地上へころがった手裏剣は、頭尾に三角の切尖をもち、仏具の独鈷に似ていた。独鈷は、仏法具で、金剛杵の原形であるが、あきらかに鋭利な刃をそなえていて、投剣の一種である。支那の鏢より出ているものに相違ない。中条流は、その遠祖が、唐人の国術師に師事してその三不過の術を学んだ、と伝えられているのも、この手裏剣を見れば、納得できる。

ところで――。

十郎兵衛は、十本の手裏剣を、悉く、刎ねあげるやいなや、猛然と地を蹴って、驀進しつつ、左手を揮って、脇差を、投げ飛ばして、敵の飛道具にむくいた。

中条流の居合は、その脇差を、造作なく、宙へ高く撥きとばしていた。

途端に、小野忠常のかかげた銅鑼が、音高く、鳴りひびいた。

「勝負あり！」

柳生宗矩は、十郎兵衛に向って白扇をさしのべた。

――はて？

上座の将軍家光は、訝った。

樋口十郎兵衛は、剛剣を高々と大上段にふりかぶっているし、森田五兵衛は、小太刀を小霞にとっている。

念流と中条流の凄絶の試合は、これから始まるとしか、思えないではないか。

家光は、

「宗矩！」

と、呼んだ。

「戦場に於て、味方の武器が、あやまって、頭領の許へ飛来いたしても、咎めにはなるまい。試合をつづけさせい」

家光は、五兵衛がはらいのけた、十郎兵衛の脇差が、宙を飛んで、上座へ来たのを見ていた。

忠常が、咄嗟に、床几から立って、一間を跳んで、銅鑼で、これを受けとめたのである。宗矩もまた、忠常の後方へ、風のように身を移して、万一に備えたのであった。

すなわち、宗矩が、勝負ありの声を放つ前に、銅鑼が鳴ったのは、このためであった。

家光は、宗矩が、五兵衛のなした不敬の振舞いを、敗北と決めた、と思ったのである。

宗矩は、無表情で、

「もとより、戦場裡に、無礼の罪を問うものではございませぬが、森田五兵衛の負けは、明らかにございます」

「おそれ乍ら――」

小太刀を小霞にとったままで、五兵衛が、声をあげた。

「前業は互角なれば、試合はこれからと存じまする」

「黙れ！」

忠常が、叱咤した。

「勝負あったればこそ、銅鑼を鳴らしたではないか」

「銅鑼は、それがしが打ち払った脇差によって、鳴り申した！」

「脇差を打ち落すだけならば、この右手の銅鑼打ちの棒で、こと足りる。銅鑼で受けたのは、勝

負あったと見たからにほかならぬ」

そう云いはなった忠常は、つかつかと五兵衛に近寄ると、その右手に携げた棒で、ほんの軽く、小霞に横たえられた小太刀の刃を、ぽんと叩いた。

小太刀は、五兵衛の両手をはなれて、地面へ落ちた。

「脇差を払った時、その鋭さに、お手前の双手は痺れた。小霞に構えてみせたが、せい一杯のところであろう」

念流の太刀筋は、その投じた脇差にさえ、受けを許さぬ「念」が罩められて、冴えていたのである。

父忠明ゆずりの、率直で、諂諛を嫌い、花法虚容をしりぞける忠常の性格は、敗者の不服に対して、容赦ない言葉を吐かせた。このために、後日、一刀流は、中条流の恨みを買うことになった。

栄誉の十郎兵衛は、召されて、「いまの太刀筋は」という下問に接した。かしこまって応えようとしたが、十郎兵衛としても、これは咄嗟の業で、家伝の法形にはなかったために、ちょっと、口ごもった。

脳裡に、今朝がた、因果坂で襲われた光景が甦り、

「柳枝の乱れ、と申しまする」

と、言上した。

宗矩が、頷いて、即座に、その解説をつけた。

「柳の葉の一枚一枚に目をとめますれば、めいめいが、勝手な向きに枝に生えて居りまするが、

ひとたび、風が吹けば、枝にしたがって流れるのはひとしく同じ方角にございます。柳枝は乱れているとみえて、実は、風次第。十本の手裏剣が、襲い来って、胸前で岐れ散り、いずれの部分を狙おうとも、つまるところは、投者の心次第ゆえ、これを受けとめて、悉く、同じ方角に流すことが叶うその心得かと、存じまする」

十郎兵衛は、この解説をきき乍ら、卒然として、知った。

――あの柳の高みにひそんでいた曲者は、森田五兵衛が、本日使う手裏剣の秘術を、予め看破して、このわしに、その受けを教えてくれたのだ！

敵ではなかった。わが危機をすくって栄誉をもたらしてくれた好意の者であったのである。

十郎兵衛は、無銘の業物を拝領して、江戸城を退出した。

馬庭念流が、この「柳枝の乱れ」から、矢留めの業にまで発達したのは、後年のことである。

四

各所へお礼まいりをすませた後、十郎兵衛が帰途についたのは、すでに雀色時であった。かねて、勝利のあかつきには、と誓願していた市ケ谷の八幡宮へ、家伝の備前三郎国宗を奉納し、腰には、拝領太刀を帯びていた。

逢魔が刻の、風もなく、明りも薄れて、木立や建物の蔭から、もの静かに昏れて来る世界を、ゆっくりと辿って来て、因果坂に来た十郎兵衛は、柳の下で、足を停めた。

秋の澄んだ空中に、枝垂葉の中だけは妖しく白く烟って、十郎兵衛の眸子を牽きつけた。

わが帰りを待ち受けての仕業と疑わず、十郎兵衛は、懐中から料紙に包んだ三寸の切尖をとり

出そうとした。正体が現れたら、朝の教えの返礼に、投げかえしてやろうという心算であった。

と――。

風も起らぬのに、柳枝が一斉に、ゆれなびいて、白烟が、虚空へ流れた。

まず――十郎兵衛の双眸を打ったのは、宵の薄闇に、鮮かに滲んだ真紅の色であった。

凝然として、十郎兵衛は、息をのんだ。

真紅は、捲られた腰布であった。その中に大きく拡げられた白い豊かな下肢が在った。冷たい蠟色に沈んだ太股の肉の緩かな曲線が、燃える彩りに映えて、丸やかな臀部で合うた――そこに、琥珀色の綾目が、か黒く萌えた茂みの下に、ふっくらと盛りあがっていた。

胴から上は黒一色に包まれ、まっすぐにさしのべて枝を摑んだ双手も、指さきまで掩うていた。膝から下もまた、脛巾を穿いている。

覆面の蔭から、じっと十郎兵衛を見下す切長な双眸は、冷たく冴えて、光っていた。

「……むっ！」

十郎兵衛は、一瞬の茫失から立ちなおると、勃然として嗔怒に駆られた。

暁の闇で見た痴夢は、おのが一人の消魂の恥りではなかった。まさしく、この柳の太枝に跨がっている奇怪な女性が、気配もなく忍び入って来て、熟睡中のわが躰を弄んだものであった、と知った。

不覚は、精気を放出したことではなく、白痴のごとく弄ばれたことであった。

「うぬっ！　邪視を需めて、なんの存念かっ！」

十郎兵衛は、利生の輝きで、その目を晦ますべく、一歩退って、拝領太刀を抜きはなった。

刹那――。

「樋口十郎兵衛！　後れたりっ！」

冴え冴えとした一喝が、背後からあびせられた。

間髪を入れず、十郎兵衛は、左手で脇差を抜いて、柳上の股間へ投じざま、体を右にひねって、大地を千鳥に踏みつつ、拝領太刀を頭上へ横一文字にかざして、きえーっ、と刃風凄じく、後面を薙いだ。

手ごたえあって、

「いかにっ！」

と、叫びつつ、十郎兵衛が、残心をとった時、後面の曲者は、すでに、二間の彼方の築地上に立っていた。これもまた、全身を、黒衣で包んでいた。そして柳の高みから、飛び降りた女人が、そこへ駆け寄るや、二影はひとつに溶けて、風のように、闇の中へ消えうせた。

十郎兵衛は、肩で大きく吐息すると、拝領太刀を、鞘に納めようとして、愕然となった。

その切尖は、三寸あまり、見事に両断されていた。

――朝に、三寸の刃を投げ渡しておいて、夕に、三寸の刃を奪い去るとは？

疑念に堪えぬままに、十郎兵衛は、築地に近づいて、そこに、ひとすじの血汐が、糸をひいたように流れているのを、みとめた。

「念」の一太刀は、刃先を断たれ乍ら対手を手負わせたのである。しかし、それが、柳上の女人であったか、後面の曲者であったかは、十郎兵衛自身にも、判らなかった。

前夜行

一

そのむかし、忍岡に、関小次郎長耀という者あり。その子を感応丸、と曰う。年十有五。向岡に、隅田治部大輔治方という者あり。その女を、柳の前と曰う。これ亦た十五歳なり。この若きふたりの想思、不忍の水よりも深く、夜な夜な池に架せる橋を渡りて、相会う。

柳の前の継母、これをさとりて、一夜、密かに、その橋板を撤う。感応丸、之を知らず、橋を渡らんとして、水に陥入りて歿す。柳の前、大いに歎き悲しみ、亦た水に入りて死す。

寛永寺天海僧正、この事を聞きて、その心を憐み、不忍池中に、弁財天の祠堂成るに及び、ふたりの墓を、祠畔に築きて、これを弔う。聖天の宮、是なり。

それは、若いふたりの霊をまつるにふさわしい、きわめて小さな祠であった。

夜二更——乙夜の時刻に、祠の内に、微かな灯がともるようになったのに、最初に気がついたのは、寛永寺の寺侍たちであった。

山を下って、酒亭に寄り、したたかくらった後、自宅へ戻るべく、池畔を蹣跚と辿りはじめて、ふと、その明りを、酔眼に映した。

「ほう……感応丸と柳の前が睦び合うて居るわ。ひとつ、いとけなき交驩ぶりを、拝見つかまつろうか」

一人が、橋を渡りかけるのを、他の者たちが、あわてて止めた。

悲恋に果てたふたりの迷魂をからかった後の祟りを怖れたのである。

噂は、たちまちに、市中にひろまったが、誰一人、近づこうとする者はなかった。

今宵——もし、池畔に彳む者がいたならば、ふたつの黒影がひとつに縺れ合うて、音もなく、祠の中へ消えるのをみとめたであろう。灯かげは、すぐに、その蔀の蔭から、闇へ滲み出た。

さらにもし、目撃者が、勇気を起して忍び寄れば、堂内に、奇怪な光景を眺めることになったであろう。但し、生きて、再び橋を戻ることは許されないであろうが……。

若い逞しい裸身が、板の間に仰臥し、かたわらに蹲った黒衣の者が、赤い鋺に湛えたねっとりした油を掌にすくって、その膚へ塗っていた。

指さきまで黒い布で掩うたその手の動きは、油を塗る、というよりも、膚を愛撫する、というにふさわしかった。滑石のように白く、堅い裸軀を、くまなく丹念に、優しく、双の掌で摩擦しているのであったが、これは疑いもなく、永い月日のあいだ、毎夜くりかえされている所業とみえた。

その愛撫に身をまかせて、目蓋をとじている若い貌は、妻片久太郎が、勝利の夜を祝言の夜として、奥山万兵衛の妹千代と同衾した離れへ忍び入って、拝領太刀の切尖を両断した忍者のものにまぎれもなかった。その太股には、白い布が巻かれて、血を滲ませていた。今宵、因果坂に、樋口十郎兵衛を襲って、拝領太刀の切尖を斬った刹那、その切尖が突き刺さったのである。

そして、また――、

油を塗ってやっている黒衣の者の、覆面の蔭から、光っている、冷たく澄んで動かぬ双眸は、これは、因果坂の柳の太枝に跨がり、真紅の腰布を捲って、股間を宙に曝し、十郎兵衛の心気を擾した女性のものに、まぎれもなかったのである。

さらに、ここで明らかにしておくならば、この双眸の冷たい光は、二十年前、服部半蔵をして、

――人間ではない！

と、心中で呟かせたそれであった。

餓えた山犬の群をおびき寄せるために、二人の猟師を焼きつつ、冷然として見下していた眸子であり、部下の隠れ忍者六十余名が風盗の城砦に突撃して、一人のこらず殪れるのを待ち乍ら、じっと宙へ据えていた眸子であり、また、老いたる「影」の、突如の一撃を躱しざまに、これを斬って、その最期を見とどけた眸子であった。

二十年の歳月を経て、その眸子は、依然として、冷たく冴えて動かなかった。

双の掌で、倦むことを知らずに、愛撫している若い裸躰は、服部半蔵にただ一度犯されて、生んだわが子であった。

「子影」は、「母影」となっていた。

彼女は、父が自分に為したのにならって、わが子もまた、思うがままの忍びに仕立てあげたようであった。しかし、父親が、無情にも、女である自分を、女であることを無視して「影」に仕立てあげたばかりに、たまたま、服部半蔵に正体を看破られ、自分自身も本能の欲求を抑えきれずに、身をまかせた苦い経験は、彼女をして、わが子に、本能の欲求を満足させてやる手段を思

いつかせているようであった。

瞼まで、くまなく油を塗り終えたのち、彼女の為した振舞いがそれであった。

聊かの刃傷を蒙ったとはいえ、若い逞しい躰は、一刻あまりの優しい愛撫を受けて、健康な本能の変化を、その股間に、示していた。「母影」は、それへ、顔を寄せて、吸ってやったのである。

「若影」は、一瞬、かっと双眼を瞠き、さしのばした四肢を痙攣させた。

「母影」が、やおら、顔を擡げた時、「若影」は、瘧が落ちたように、なかば茫然として、天井を仰いでいたが、

「母者。御前試合の勝者が拝領する太刀を、何故に奪うのじゃ？」

と、訊ねた。

第一日の試合の勝利者妻片久太郎から、「若影」は、命じられた通りに、拝領太刀の切尖三寸を奪って来た。

「母影」は、その切尖を、一瞥しただけで、

「ちがう！」

と、云いすてたのであった。

もとめる品とちがっていたからこそ、その切尖は、樋口十郎兵衛へ、投じられたのであった。

十郎兵衛から奪った切尖もまた、一瞥のもとに、すてられていた。

「若影」は、返辞がないので、重ねて、訊ねた。

すると、

「そなたは、命じられた通りに、奪って参ればよい」
冷やかに、拒絶された。
「若影」は、黙って、起き上ると、手ばやく、黒衣を身につけた。
「母者、明日の試合に、孰れが勝つ予測じゃ？」
「わからぬ」
「わからぬ？」
「若影」が、母親の口から、「わからぬ」という言葉をきいたのは、いまがはじめてであった。
「どうして、わからぬのじゃ？」
「闘うのは、ともに柳生流。一方にある秘術は、また対手にもある。つまり、秘術は無きにひとしい。勝敗は、両者の心にかかって居ろう。今夜のうちに、それぞれ胸裡を視ておかねばなるまい」

二

子の刻の時鐘が、遠くにひびいたとき、柳生道場の、裏門の潜戸から、一個の影が、忍び出た。
雲間をもれる月の光を受けた魁偉の貌は、右眼がつぶれて、柳生十兵衛三厳であることを示した。
十二歳の折、父宗矩が、わが子の腕を試そうとして、不意につぶてを投げた。十兵衛は受け損じて右眼をつぶされたが、咄嗟に、つぶされた右眼を掩わずに、左眼の方をかくして、第二のつ

ぶてにそなえた逸話は、すでに、あまりにも世上で有名である。
父宗矩以上の腕前と称せられ乍ら、なお嫡男であるにも拘らず、若隠居して、大和の柾木坂に道場を開いていた。常に三千余の門弟を擁していたが、一年のうち、十兵衛が、道場にいるのは、わずか一月あまりであった。十兵衛は、家光の直命によって、表面は武者修業と見せかけて、実は、諸侯の動静探索のために、諸国遍歴をしていたのである。将軍家師範役と領邑を弟宗冬にゆずったのは、そのためであった。
十年の歳月をついやして、熊本・鹿児島の精細な地図を製し、人情風俗を究めて、このたび、出府して来るや、十兵衛を待っていたのは、吹上に於ける御前試合であった。十兵衛は、大和の浪人正木市之丞という仮名で、明日の試合に臨む。
試合の対手は、尾張の柳生兵庫介利厳の一子新太郎厳方であった。
江戸の柳生流と尾張の柳生流の立合いを所望したのは、将軍家光であった。
柳生但馬守宗矩は、将軍家師範として「御流儀」を唱えられているが、実は、父宗厳より、印可を受けていなかった。印可は、宗厳の嫡子新二郎厳勝の子兵庫介利厳に授けられていた。
兵庫介利厳は、二十五歳のとき、加藤清正に懇望されて、その家臣になったが、その節、祖父宗厳は、清正に対して、「兵介（利厳幼名）儀、殊の外なる短気者なれば、たとい如何ようの儀があろうとも、三度びまで死罪をお許しありたい」
と、願った、という。
宗厳は、わが子たちよりも、孫の兵庫介を愛していたのである。兵庫介は、肥後に赴くにあたって、祖父より兵法奥旨二巻を授けられ、三年後さらに、上泉信綱から相伝する秘書悉くを与え

られ、新陰流正統第三世を継いだのであった。兵庫介は、後年加藤家を去り、回国九年を経て、尾張の藩祖徳川義直に仕えた。

新陰流の正統が、江戸の柳生家になく、尾張の柳生家にあることは、両家の間をいつとなく疎遠にしていた。

家光自身、このことは、面白くなかった。本家の指南番に、正統が継がれて居らず、分家の師範役に、それが与えられているのであったから——。

両家を代表する剣客を立合わせることは、いわば、意気地でもあった。

十兵衛三厳は、「御流儀」の面目にかけて、尾張の柳生流に敗けられなかった。もとより、対手の新太郎厳方の方も、同じ覚悟があるべきであった。

十兵衛は、明日の試合をわがものとすべく、今夜、ひとつの目的をもって、道場を出た——。

人影の絶えたもの淋しい大名小路をゆっくりと辿って行く、十兵衛の姿には、心得ある者には、すぐに察知できる剣気があった。平常、剣客は、剣気をかくすのを作法とされているし、永年隠密の勤めをして来た十兵衛のことであるから、決して、蓄えた力を他人にさとられるような軽率は示さない筈であるのに、今夜は、おのが腕前に驕ったように、六尺の長身に、それを漲らせていた。

とある辻に来た時、十兵衛は、ふと立ち停って、しずかに頭をまわした。こちらの剣気に誘い寄せられるように、何者かが背後に迫って来るのをおぼえたのである。辿って来た往還は、月かげの下に、しらじらと広く、なんの怪しい気配もなかった。十兵衛自身の影法師が、ながくうしろに延びているばかりである。

十兵衛は、しかしおのれの五感が錯覚を起したとは思いかえさなかった。

——何者かが、気配を消して、そこに潜んでいる。

再び十兵衛は、足をはこび出して、ものの十歩も行かぬうちに、果して、また背後に、その気配を感じた。

姿勢も足幅も歩速も、すこしも変えずに、全神経を、突如の襲撃に備えつつ、さらに、二十歩ばかり進んで、

——はて？

と疑った。その気配は執拗に迫って来乍ら、殺気を送っては来ないのである。

十兵衛は、不意に、おのが剣気へ、鋭い気合を加えた。とたんに、背後の気配は消えた。

次の辻に来た。

十兵衛は、またしても、背後に気配を感じた。依然として、その気配には、殺気は含まれていない。

こんどは、こちらが、剣気を内に鎮めた。気配は、去った。

そこで、はじめて、十兵衛は、おのれを嗤った。

——自分の影法師に怯える臆病者とかわりはない。

胸の裡で、呟きすてた時、前方に跫音がひびいた。

一瞬——十兵衛は、もとのごとく、全身に剣気を漲らせると、歩き出した。

月あかりに浮き出た影は、武士であった。大兵であったし、歩きぶりにかなりの兵法修業ができていると見てとれた。

……すれちがう。

十兵衛は、こちらの剣気に対して、対手が反応を起すのを期待していた。起きなかった。気づかずに行き過ぎた。兵法修業も、たかが知れたものだ、と知る。

十兵衛は、失望して、五間ばかり離れた。

刹那――十兵衛は、総身が、じーんとなる程の、凄じい殺気を、背後からあびせられた。困惑ともいえた。反射的に身を翻すことを許さないくらい、それは、十兵衛ともあろう稀世の使い手をおびやかした。

十兵衛は、頭をまわした。武士は、遠ざかって行く。その後姿は、事もなげな、もの静かなものだった。

すれちがう折には、こちらの剣気を察知しつつも、反応を示さず、離れてから、あの凄じい殺気をあびせておいて、こちらが睨みかえすや、もう平然としてそ知らぬふりをする。

――此奴こそ！

十兵衛は、闘志を一声にこめて、

「待て！」

と、呼びとめた。

振りかえった武士は、そのまま、こちらを透し見ている。

十兵衛は、地を蹴って、五間を三歩に跳んだ。

対手が、何か叫んで、抜刀したが、十兵衛は、構えるいとまも与えずに、袈裟がけに、斬って落した。

脆くも、地面へ俯っ伏した姿を、冷然と見下した十兵衛は、懐紙で、刀身をぬぐい乍ら、

「よし！」

と、自身に頷いた。

十兵衛は、充満しすぎる気力を散じるために、辻斬りに出て来たのである。

ここまでの途中、背後に、何者かの気配が現れたり消えたりしたのも、おのれの気力の過剰故であったと、解釈できたし、斬ってみれば、あまりに弱い対手であった武士が、あの凄じい殺気をあびせて来たのも、自身が勝手に錯覚したのだ、と納得できた。

十兵衛は、愛刀に血を吸わせることで、心気の平らに澄むのをおぼえた。

事実、帰途には、なんの異常もなかった。

十兵衛は、気づかなかった。

とある巨きな松の梢の蔭から、冴えた双眸が、じっと、自分を見送っているのを――。

十兵衛を慄然とさせた殺気は、斬られた武士が発したものではなく、そこにひそむ「若影」の仕業であった。

だが――「若影」自身も、十兵衛の達人ぶりに、「流石は――」と、大きく合点していた。

ほんの微かな気配を送っても、立ち停って頭をまわしたし、殺気を放てば、音が響くように、それを受けて、旋風のごとく飛来して、一颯の下に仆していた。その冴えた技は、まさに、柳生流の面目であった。

――猿飛び、という秘剣が、あれか。

「若影」は、月かげに溶け込もうとする後姿から、なお目を離さずに、そう呟いた。

三

同じ夜、吉原の廓に入って、戸毎におとずれて、一枚の絵姿を示し、
「この貌に似た女は居らぬか？」
と、問うて歩く若い武士があった。
まだ二十歳を越えて程なくの年配であった。とりたてて特徴はない、平凡な面立ちであったが、陰鬱な翳が濃く、衣服も粗末で、遊里では敬遠される客であったので、どの家でも、すげなく扱われた。
絵姿は、気品のある、美しいが、どことなく淋しげな影薄い女性であった。
若い武士は、柳生兵庫介の一子新太郎厳方であった。
この日の朝、尾張から出府して来て、尾州家江戸屋敷に立寄り、夕刻に出て、まっすぐ吉原にやって来たのである。
大門口で、
「この廓に、女は幾人ぐらい居ろうか？」
と、訊ね、太夫が七十余人、格子女郎百三十余人、端女郎は八百人以上、ときかされて、それならば似た女は一人ぐらいは居ろう、と呟いたことだった。
それから、およそ、二刻が過ぎていた。新太郎は、まだ、絵姿に似た女に会っていなかった。
絵姿の女性は、新太郎の亡き生母であった。
新太郎が幼年時、旅の絵師が画きのこしていったその絵姿が、いまでは、若い兵法者の唯一の

貴重な宝となっていた。母は、柳生家の奥女中を勤めていて、兵庫介の情を受けて、新太郎を生むと、すぐ、実家へ戻されて、数年後に逝っていた。
年に二度、新太郎は、その実家をおとずれていたが、物心つくにつれて、母こそ、この世でいちばん美しい、と思い込むようになっていた。
危篤の報で、かけつけた時、すでに母は息をひきとっていたが、睡っているような死顔の美しさは、新太郎の心にふかくきざみ込まれたのであった。
柳生家に於て、正妻の子茂左衛門（後の如流斎）と兵助（後の連也斎）とは、劃然たる区別をつけられ、質子のような日蔭育ちの身であるだけに、余計に、新太郎は、母を恋うたのであった。
新太郎は、生れて、いまだ一度も、父兵庫介から、優しい言葉をかけられた記憶がなかった。
父は、自分を悪んでいるのではないか、と屢々疑ったものであった。
道場に於ける父は、茂左衛門や兵助に対するよりも、いちだんと厳格な師範であった。打ち据えられて悶絶する毎日が、十年間もつづいた。
どういう考えからであったか、父は、新太郎に、異母兄たちはもとより、他の門弟たちとも立合うことを許さなかった。したがって、新太郎は、二十二歳になった今日でも、いまだ、自分の技倆がどの程度であるか、わからずにいる。
最近では、父とも滅多に、立合わないが、たまに立合うと、父は、しばし、新太郎の構えを凝視しただけで、「よし――」と、木太刀を引いてしまうのであった。
今年に入って、新太郎は、思いきって、武者修業に出たい、と申出た。すると、父は、その時に、返辞をせず、数日後、突然、生母の実家へ帰って、孤独の時間を持て、と命じたので

あった。

不審に堪えずに見かえす新太郎に向って、兵庫介は、

「学ぶべきことは唯ひとつ。間合の見切だ」

そう云いすてて、書屋へ去ってしまったのであった。

三日前、不意に呼び出されるまで、新太郎は、生母の実家の離れで、半年間、誰とも一語も交さぬ孤独なくらしをして来た。

使いが来て、道場へ戻ると、出府して、御前試合に出よ、という命令が待ちうけていた。

そして、一振の太刀が、手渡された。

「これは、石舟斎様（宗厳）が、柳生荘に於て、自ら打ちあげられた剣だ。いわば、新陰流の魂がこめられてある。これを持って、たたかうがよい。但し、試合場に臨むまで抜いてはならぬ。魂を、その時まで、鞘のうちにひそめておけい」

新太郎は、かしこまって、旅立ったが、その際、父の口から、試合の対手が何者であるか、告げられなかった不審は、尾州家江戸屋敷に入ってみて、解けた。

試合の対手は、大和の浪人正木市之丞と届けられているが、実は、柳生十兵衛三厳であった。

尾州家の重臣は、それを打明けてから、さりげない口調で、つけ加えた。

「江戸の柳生と、当家の柳生との仲に就いて、兎角の世評がある。このたびの試合が、その噂をさらに曲げるような結果を招いてはなるまい喃。柳生流の奥儀は、相討ちときいて居る故、心して、立合ってもらいたい」

それをきいて、新太郎は、父の心が読めた、と思った。

勝ってはならぬ、しかし、負けてもならぬ、という、暗示であった。

武者修業を許さず、生母の実家へ蟄居させたのも、この秋の来るのを予測した父の遠慮であった。新太郎は、柳生を名のらず、生母の姓である石川を名のっていた。

十兵衛を仆して、おのれも死ね！

新太郎の脳裡に泛んだ兵庫介の冷たい貌が、そう命じていた。

新太郎は、おのれに与えられた運命にしたがう覚悟をきめた。

そして、せめて、ひとつだけ、おのれののぞみを、この世で為しておこう、と思い立って、吉原へやって来たのであった。新太郎は、童貞であった。

……本町・京町・江戸町・伏見町・堺町・大阪町・角町・新町と、歩きつくして新太郎は、最後の傾城家を出た。

徒労であった。

——母上のような美しい女が、廓などにいる筈がなかった、もとめた自分の方が、あやまっていた。

思いかえして、新太郎は、大門を出た。

廓をとりまく堀に架けられた橋を、しずかに渡りかけて、新太郎は、ふと、足を停めた。

橋のまん中に、黒い布で顔をつつんだ女が、すらりと彳んでいた。

その優姿から漂い出る妖冶な匂いが、新太郎を、白烟のようにつつんで来た。

「貴方様は、お母上に似たひとをお捜しなされていると、ききおよびまする」

「うむ——」

「おもかげと申すものは、歳月を重ねるにつれて、しだいに美しくなりまさり、ついには、神秘なまでにたかまるもの。現世に、それと同じ姿をもとめるのは、おろかではありませぬか」

「では——どうせい、と申される？」

「……たとえば、わたくしのように、おもてを包んだ女を、抱いて、お母上のおもかげを偲ばれるのも、ひとつのてだてかと存じまするが……」

「そうか！」

新太郎は、にこやかとして頷いた。

ふたつの影が並んで、傾いた月に照らされ乍ら、影法師を長く地に匐わせて、何処かへ歩いて行くのと、柳生十兵衛が行き交うた武士を、一颯で殪したのと、恰度、同じ時刻であった。

翌二十四日正午、十兵衛三厳と新太郎厳方は、いまにも、ポツリと落ちて来そうな、雨雲のひくくたれ込めた空の下で、対峙した。

無刀皆伝

一

この日、闘いの場に漲った緊張は、おのずから、前二試合とは、明らかに異っていた。

大和の浪人正木市之丞と尾張の郷士石川新太郎とともに無名の剣士の立合い、と記帳されたのは、孰れかが仆れるのは必須と予測したからであった。

一方が、剣を取られるか、または手負うという結果は、全く考えられなかった。

尋常の試合とは、おもむきを異にして、同流同士が、この勝敗によって、一派のみを残さんとする必死の面目をかけていた。十兵衛が敗れれば、当然、父宗矩は、将軍家指南番を辞さなければならず、新太郎が敗れれば、父兵庫介は、柳生流の看板をはずさなければならないのであった。

勝か、然らずんば、死であった。

したがって、これを覧る三者の心懐は、三様であった。将軍家光は十兵衛の勝を、宗矩は相討ちを、そして小野忠常は新太郎の勝を、それぞれのぞんでいた。

……五間の距離を置いて、両者は、対手の姿を凝視していたが、一瞬、孰れを早し、孰れを遅し、ともせず、腰の太刀を抜きはなって、ぴたっと、相青眼に構えた。

「お――」

家光が、ひくく、驚きの声を洩らした。宗矩も、忠常も、微かに眉宇をひそめた。

新太郎が構えた太刀は、恰度中程からポキリと断たれた破刀だったからである。

一派の存亡をかけたこの御前試合に、小太刀というならばともかく、破刀を抜いて立ちむかうとは、あるまじき奇怪であった。

その奇怪を、誰よりも先ず、訝ったのは、破刀を構えた新太郎自身であった。新太郎は、破刀であることを知らなかったのである。

父兵庫介は、この一振を手渡す時、柳生家の始祖石舟斎宗厳が、柳生荘に於て、自ら打ちあげたものであるから、新陰流の魂がこめられてある、と告げて、

「試合場に臨むまで抜いてはならぬ。魂を、その時まで、鞘のうちにひそめておけい」

と、命じたのであった。

新太郎は、それをまもったまでである。父の手によって、刀身が中程から両断されていようとは、夢にも知る由もなかった。重さによって、折れた刃先は、鞘の中に残っているのは明らかであったが、これを利用すべき余地は、もはやのこされていなかった。

闘いは、すでに開始されていた。

十兵衛の豪剣が、こちらの微塵の隙をもゆるさぬ鋭気をほとばしらせて、空間にさしのべられている。

新太郎は、敵の隻眼から発する凄じい光を、額に受けて、視線を、帯のあたりに据えた。

新太郎は、抜刀する一瞬まで〝肋一寸〟を胸中に置いていた。〝肋一寸〟とは、敵に肋一寸を

斬らせておいて、おのれは、敵の頭蓋を両断する――相討ちの極意であった。

この願いは、もはやむなしかった。相討ちに死のうにも、おのが太刀は、敵の頭蓋に届かないのであった。

絶体絶命の窮地から、脱れる隙を見つける可能は、十兵衛が、破刀の無礼に対して、怒気を発してくれることよりほかには考えられなかった。が、そのはかない期待も、一瞬にして、すて去らなければならなかった。覧る者たちを驚かせた破刀も、十兵衛をして、眉毛一本動かせることは、叶わなかった。十兵衛は、十余年間の隠密行を成した人物である。いかなる事態に出会っても、水のごとく冷静で、酷薄であった。

破刀が、新太郎自身の知らぬところであったのを、その微妙な表情の動きによって看破した十兵衛は、冷然として一撃を加えるべく、するすると、間合を一間に縮めて来るや、切尖を、双眼のあいだへ、ぴたりと、狙いをつけた。

獲物を前にして、気息を整える猛虎にも似て、その身構えは、ひとまわり巨きくふくれあがったかと見えた。

新太郎は、対手の帯を瞶め乍ら、この一間の距離が、生死の岐れだ、と思った。十兵衛の整えた気息を吸いとるように、おのれの呼吸を引いた。新太郎は、間合の見切に、おのが生命をゆだねるよりほかはなかったのである。

この刹那、白扇を膝に立てた宗矩は、その白扇で、強く膝を押した。

――兵庫め、計ったな！

宗矩は、兵庫介がわざと破刀を新太郎に持たせたことに、はじめてはっと気がついたのであ

った。

忠常の方は、新太郎の構えを眺めて、薄い微笑を、口辺に刷いた。

――これは、〝帯の矩〟だな。

そう見てとったのである。

忠常は、曾て、父忠明から、この秘法をきかされていた。

父忠明は、神子上典膳であった若き日、恩師伊藤一刀斎の命令によって、兄弟子小野善鬼と闘って、これを斬った。典膳は、それまで、善鬼と立合って、一度も、勝っていなかった。

その前夜、一刀斎は、ひそかに、典膳を呼んで、次のように教えた。

「善鬼の邪心は、その双眼より、火焔のように迸る。これを正視してはならぬ。お前は、これまで、これを受けとめていたために、敗れた。明日の真剣試合には、ただ、対手の帯を瞶めて、間合をとれ。帯は、人間のまとうたもののうちで、最も動かぬところである。他の動くところを見て、おのれの動きをつくることなく、敵の最も動かざるところに、基準を置いて、無念裡に、撃つ。これを、帯の矩、という」

太刀には、おのずから、順逆がある。道に遵って、術を守る時には、その心が勇まずと雖も、勝を得る。勝った瞬間にも、勝ったことに気がつかぬくらい、これは不思議の勝である。

まさしく、典膳は、善鬼を幹竹割に斬り仆した刹那は、茫然として、自失の中に立っていたのであった。

小野次郎右衛門忠明となってから、この秘法を、「夢想剣」と名づけた。

もとより、柳生流の新太郎が、夢想剣を教えられているわけもない。絶体絶命の窮地に立たされた者が、咄嗟に、さとった応変の心得であった。

自ら、それを一刀流の〝帯の矩〟と知らずに、えらんだ工夫をもって、新太郎が、為そうとするのは、間合の見切であった。

二

攻撃される心配のない絶対的有利の立場を得た十兵衛は、殆ど無造作とも見える一撃を、新太郎の右肩に送った。

新太郎は、これを、一寸の見切に遁れた。

二の太刀は、下段から斜めに、きえーッと刎ねあがって来た。小手を搏って来たのである。これも、間髪の差で、躱した新太郎に、はじめて、ゆとりが生じた。

対手の起す疾風に乗り、発する電光をあびつつ、ただ、無心に五体を躍らせているそれであった。防戦ではなかった。対手の動きが、即ちおのれの動きであった。十兵衛が一歩進めば、新太郎は一歩退いた。十兵衛が一歩退けば、新太郎は一歩進んだ。一進一退は、対手の影をおのれに写すごとく渋滞することがなければ、双者の帯と帯の間に、六尺の棒をさし入れているのと同然であった。

十兵衛の剣は、あと一寸の間合を詰めることは不可能であった。

新太郎は、おのれをむなしくして、対手にしたがい、いつか、一瞬の隙が見えるのを待つだけであった。隙が見えない限り、この闘いは日が昏れるまでつづくであろう。新太郎には、その持続力があった。

昨夜、十兵衛は、気力の過剰を納めるために、辻斬りを行ったものの、猶それは体内に漲っている。それにひきかえて、新太郎は、父が無言の命令にしたがって、生命をすてる覚悟をさだめ、黒布で顔を掩うた見知らぬ女を抱いて亡母の俤を偲び、この世に何ひとつ思い残すことのない身となっていた。

十兵衛にとって、気力の過剰は、撃って撃って撃ちまくるために必要であり、新太郎にとってはまた、撃たれるにまかせておのれをむなしくしているために、その無心の心境こそ必要だったのである。

皮肉な神の摂理ともいえた。

……約半刻が過ぎて、依然として、双者は、白砂上に、一間の距離を置いたまま、ともに、夥しく体力を消耗しているにも拘らず、外面には、みじんもそれを滲ませてはいなかった。

上座の家光は、ようやく、緊張の中に、焦躁を覚えた。ゆるされるならば、大声で、十兵衛を叱咤したかった。

いや、げんに、口腔内まで、叫びがつきあげて来た。

と、一瞬、十兵衛が、家光の叫びを直感したごとく、さっと二歩退るや、猛然と二間を滑走して、片手薙ぎに、新太郎の横面へ——。

まさしく、家光の目には、一閃を飛ばしたと見せた。

十兵衛は、飛ばさんとして、逆に、太刀を小脇に引くや、半身にひらきざま、中空を躍って元の地点へ跳び退っていた。

片手薙ぎに出た刹那、新太郎が、突如、四尺の間を詰めていたからであった。これは、破刀を

もって、充分に胴へ入れ得る距離であった。

石火の間に、この危機を脱した十兵衛は、

——いまぞ！

自ら間合の見切を放棄した新太郎に向って、猿飛びの術を用うべく、姿勢をひくめた。

「それまで！」

宗矩の一声が、曇り空をつらぬいた。忠常が、銅鑼を打ったのは、それから数秒を置いてからであった。

忠常は、不服であった。十兵衛の猿飛びに対して、新太郎がいかなる秘術をもって応ずるか、見とどけたかったのである。

猛気の爆発を、無心の太刀が、どの様にさばくか——。

——たぶん、破刀は、ぞんぶんに同族の血を吸ったであろうに……。

忠常は、後日までも、その判断に自信をもったことであった。

宗矩は、

「無勝負！」

そう宣告してから、家光に向って、

「御高覧に入れましたるは、柳生流の極意——無刀の業にござりまする」

と言上した。

「無刀とは？」

「無刀とは、無手にして人の刀を取らずして叶わぬ、という儀にあらず、人に斬られざるより、

いかなる道具をも用いて、敵の刀に勝つを申しまする。わが手もまた道具として、用うべく、敵の太刀は長く、わが手は短くとも、仕合う分別が、そこに生じなければなりませぬ、物事に体用ということがございます。体があれば、用があるものでございまする。たとえば、弓は体、射るは弓の用。燈は体、光は燈の用。梅は体、匂いは用。刀は体、斬るは用にございます。しかれば、機は体にて、機から外へ現れて、さまざまの働きあるを用と申しまする。梅の体ある故に、体より花咲き、色があらわれ、匂いをこぼすごとく、機が内にあって、外にはたらき、表裏懸待、さまざまの変化を示す。……座敷に坐すとも、上下左右を見ておき、上より自然落ちる物があらばと気をくばり、貴人高位の御座近く伺候の時は、突如として不慮の事が出来せんか、と心がけ、門戸出入にあたっても、前後を忘れず、常時、不慮の事柄に心をすてぬようにするのが機なれば、機熟すれば、いかなる急変にも処し得る用は、自然に現れる道理にございます。……無刀は、当流にて、専一の秘事――身構え、太刀構え、場の位、遠近、うごき、働き、つけ、かけ、表裏悉皆、無刀のつもりより出る故に、これは肝要の眼と申せまする。……ただいま立合いたる者ども、同じ柳生流なれば、所詮御高覧に入れまするは、無刀の業よりほかはなく、何卒御賢察たまわり度く存じまする」

弁口さわやかに、無勝負にしたおのれのはからいを、柳生流極意の型を示すものであったと、とりつくろったのは、宗矩の老獪な咄嗟の機転であった。

十兵衛は紋服を、新太郎は無銘太刀を拝領して、退出した。

三

新太郎は、江戸城から、迎えの駕籠で、まっすぐに、尾州屋敷へ戻った。

当主義直は、吉左右を待ちかねていて、直ちに新太郎を伺候させた。

新太郎は、無勝負であったとこたえてから、試合の模様を、言葉すくなに、つたえた。

濶達の気性の義直は、無勝負を納得しなかった。

「そちが、無刀の業を用いて、太刀を拝領したのであれば、事実上はそちの勝であろう」

「そうではありませぬ。但馬守殿の声がなかったならば、正木市之丞の猿飛びによって、それがしは、敗れていたに相違ございませぬ」

「謙遜せずともよい。十兵衛に猿飛びがあれば、そちにも、それに備えての術はあったであろう。そちの勝じゃ。……ところで、無刀の業を、あらためて、このわしにも見せぬか」

所望されて、新太郎は、しばらく、俯向いていたが、やがて、顔を擡げて、近習のうちの最も肝太い人物を一名、借りたいと願った。

選ばれたのは、岡崎なにがしという、三十八歳になる、六尺ゆたかの壮漢であった。岡崎は奇行をもって、家中に際立った存在であった。生きている青大将を、頭から齧って、むしゃむしゃ喰べ尽したり、朋輩の母親である六十三歳の老婆を妻に娶って、盛大な祝言をあげたり、生涯湯に入らぬ誓をたてて、寒中でも、水風呂につかったり、行動悉く話題の種をふりまいていた。

睨み合いをして、半刻以上も、瞬目しないでいられる特技をもっていた。剣は、一刀流を習って、相当の腕前であった。

新太郎は、岡崎を、無手のまま、庭の中央に直立させると、拝領太刀を抜き放って、その鼻先一寸のところへ、切尖をつけておいて、しずかに刀身を引くと、青眼に構えた。

「お手前は、それがしの帯のあたりへ、目をつけられるよう――。この間合は、打込んでも、鼻先一寸のところを通り申す故、必ず身じろぎめさるな。瞬目をせぬのは、お手前の得意となさる由、そのままに……」

岡崎は、心得て、それなり、無念不動の石仏と化した。

新太郎も、青眼に構えたまま、いつまで経っても、打込む気配を示さなかった。

時刻が移ってようやく、岡崎の顔面が蒼褪めた。切尖から放射する剣気が、岡崎の全身を犯したのである。

「ええいっ！」

突如、満身からの気合を、宙に炸裂させて、新太郎は、太刀を、目にもとまらぬ迅さで振り下した。

岡崎は、必死の勇気を罩めて、能くふみこたえた。戦慄は四肢をつらぬいて、心臓へ集中し、視界は、一瞬、暗闇と化した。

――おれは、まばたかなかったぞ！

かっと、双眼をひき剝いて、声なく叫んだ。

次の瞬間、こんどは、気合もなく、新太郎が、大きく一歩ふみ込みざま、まっ向から、斬りおろして来た。

岡崎は、はじかれたように、ぱっと跳び退っていた。

新太郎は、しずかに、太刀を鞘に納めて、元の席へひきかえした。岡崎は、大きく肩を上下させて、猶しばし虚脱のていであった。

新太郎は、義直に、云った。

「岡崎殿は、一寸の見切に、能くふみとどまりましたればこそ、二の太刀に対して、自然と、間合よき後退がなし得たのでございます。これを、もし、初太刀を避けて、たとえ、半歩でも退いて居りましたならば、姿勢は崩れて、二の太刀を躱すいとまなく、額を受けることに相成ります。これが、無刀の極意にて、間合の見切を見さだめてからは、ゆるがぬ心ひとつの法にございます。何卒、岡崎殿を、御賞美の程を――」

義直は、新太郎の若年に似合わぬ床しい心配りに感服して、わが名を一字与えて、直厳、と名のるように命じた。

後刻、新太郎は、重役から、五百石を与えられる旨を伝達されたが、固辞して、父から渡されていた彼刀を、さし出し、

「それがし、多年の念願により、諸国遍歴の修業旅に出たく存じますれば、この太刀、父の許へおとどけ頂きたく存じます」

と、依頼した。

鞘の中には、父が両断した刀身を、さらに根もとから折って、納めてあった。

家を出て、再び帰らず、新太郎はこの世に亡き者とお心得あるべし、との意をこめたしわざであった。

孤独に育った新太郎は、運命にしたがって孤独に生き、そして、孤独に死んで行こうとするのであった。

四

見わたす限りの草の海を、薄い朝霧が、微風に追われて、散って行く。そのあとに、目ざめた鳥の羽音が立つ。

空は、光のない純白な、透明な、穏かな、淡々とした色をひろげている。

夜明けたばかりの武蔵野の一隅を、新太郎は、歩いていた。

草、樹、花、野路、小川の流れ——すべての色が、澄んだ朝空の下で、清らかに冴えている。

地平の彼方に、薄雲がたなびいているかとまごう連山がある。

あてもなく辿り乍ら、新太郎は、その連山のあたりへ、心を置いていた。

無心を破られたのは、とある雑木林の脇へ来た時であった。

樹蔭から、のそりと現れて、行手をさえぎった大兵の武士を見て、編笠が払われるまでもなく、柳生十兵衛三厳と知った。

新太郎は、微笑して、

「ここで、お待ち下さっていたのか」

と、云った。

十兵衛は、隻眼を据えて、

「兵法者として、勝敗の決着を欲するのは当然であろう」

「御意のままに——」

新太郎は、背負うていた拝領太刀をおろすと、すらりと抜き放って、鞘を、草へすてた。

「厳方、おぬし、舟島における佐々木巌流を、何故に見ならうぞ？」

十兵衛は、云った。

佐々木小次郎は、宮本武蔵を迎えて、物干竿の鞘を、渚へ棄てて、武蔵から、

「巌流、すでに敗れたり！」

と、叫ばれている。

新太郎は、微笑したまま、何ともこたえなかった。

同流の剣士は、再び、相青眼に構えて、二間の距離で、対峙した。

折から、朝陽が、そそいで、二個の影法師を、長く、草上へ延した。

それから、約半刻、動いたのは、その二個の影法師ばかりであった。

やがて、両者の耳に、遠くから疾駆して来る馬の蹄の音が、きこえた。

それは連銭葦毛の駿足であったが、奇妙なことに、人を乗せていなかった。にも拘らず、目的をもって疾駆して来た証拠には、この雑木林に到着するや、なんの逡巡うこともなく、速脚をそのままに、馬首をまわして、矢の如く、まっしぐらに、十兵衛と新太郎が対峙する其処へ突入して来たとみるや、相青眼の中間を、疾風に似て掠め過ぎた。

瞬間——。

新太郎の躰は、地上からはねて、馬上に在った。

「献上！」

一声とともに、拝領太刀を、十兵衛に投じた。

「……むっ！」

十兵衛もまた、おのが太刀を、馬上めがけて、打ち飛ばした。
二剣は、生きものの如く、光のある宙を、煌と閃きつつ、交叉した。
次の刹那、対手の飛剣を手摑んだ十兵衛は、おのが投じた太刀が新太郎にとどかずに、虚空に浮いている奇怪な現象を見た。
「呀っ！」
わが目を疑った時には、もう駿足は、三間のかなたに在った。
宙に浮いた太刀だけが、眼前に残って、嘲罵するように、切尖をこちらに向けて、ゆれていた。
「……！」
十兵衛は、一呼吸をしてから、拝領太刀を、青眼にとった。
一瞬の錯覚が去れば、闘志は、総身に盈ちていた。
馬腹に身をひそめて、突入して来た何者かは、十兵衛の投じた太刀を奪って、地上に降り立つや、たちまちに、身を、樹蔭にかくしたのである。
わずか直径三寸にも足らぬ楢の幹が、その姿を完全に匿しているのであった。
木洩れ陽が、数十条の箭になって、そこへ射し聚められて、妖しい明暗の綾どりをつくり、十兵衛の隻眼を眩惑する……。
一剣は、あたかも、楢の幹から、枝となって生えたごとく、さしのばされて、微風にそよぐように浮き沈みしているのであった。
十兵衛が、じりっ、と位置を移せば、その剣も、まわった。その構えに、微塵の隙もなかった。

十兵衛は、珍しく、憤怒が胸もとでたぎるのをおぼえた。
「とおーっ！」
天地をつんざく猛喝とともに、十兵衛は、大きくふみ込みざま、楢の幹もろとも、枝と化した剣を斬った。
立木は、隣りの立木にぶっつかり、烈しくさわがせて、凄じい音響とともに、地上へ崩れ落ちて来た。
手ごたえはあった。剣は、そこへころがっていた。
しかし、曲者の姿は、煙のように消えうせていた。
……ふっと、気づいた時、十兵衛は、おのれが携げている拝領太刀の切尖が、三寸あまり切断されているのをみとめた。

紅葉狩り

一

夕陽が、あかあかとななめに落ちた国府路町（麹町）の大通りを、一人の老人が、行く。

左足が不自由で、一歩毎に、大きく、上半身が傾斜して、目をあてるのも気の毒に思える歩行ぶりであった。

しかし、心得ある者が、よく注意して、見戍るならば、それはただの歩行ではなかった。

短い左足は、ほんの一瞬、地にふれるかふれないくらいの迅さで、前へはこばれていたし、その歩幅をささえる右足は、宛然氷上を滑るようになめらかであった。

夕陽に乗って進んでいるのかと思える程、その老軀は、軽かった。

やがて、大通りを抜けて、国府方口に出た老人は、前方にわだかまった御門へ、感慨深げに視線を送った。右に千鳥ケ淵、左に弁慶堀の深碧をひかえて、黒い御門は、雀色時のつかの間の明るさの中に、美しく、鴟尾を刎ねていた。

半蔵門――と、いまは、人々に呼びならされている。

伊賀組の頭領として、服部半蔵が、その門内に、五年前まで、屋敷を構えていたからである。

左様――五年ぶりに、老人は、御門の奥にある、住みなれたわが家のたたずまいを、これから

見ようとするのであった。

「影」を木曾谷におとずれてから、二十年の星霜を経て、どうやら、半蔵自身、「影」に似かよった容貌になっていた。頭髪は雪の白さになり、顔面には、刃痕のような深い皺が、無数に刻まれていた。

忍者は、その宿命に殉じて、まず、四十歳を生き越える者は、稀である。さいわいに生き越えれば、六無の修業と実践のために、一瞥して、還暦かと思える程に化け果ててしまっている。

服部半蔵は、すでに五十路も半ばに達していた。古稀の老爺の外貌となっているのも、当然であった。

半蔵が、御門外の屋敷をすてたのは、輩下の伊賀組が、意見の相違から、二つに割れて、一夜、闇中に闘って、二十余名が殞れる不祥事を起したためであった。

組全体は離散を免かれて、四谷に移ったが、頭領たる半蔵は知行を返上して、江古田の森の中に、草庵をむすんで、隠栖したのである。

昨夜、柳生宗矩よりの至急の使者が来て、半蔵は、五年ぶりに、江戸城をおとずれることになった。

御門は、乳鋲を打った扉が閉められてあった。半蔵は、門番を呼ばず、地を蹴って、宙を躍るや、門内へ姿を消した。

それから、四半刻ののち、半蔵は、紅葉山の築山蔭にある四阿で、柳生宗矩と、対席していた。

宗矩は、去る二十二日から、吹上の禁苑において、御前試合が催されていることを、語ってか

ら、

「剣士たちをえらぶにあたっては、お主の曾ての輩下たちを動員して、万全を期した」

万が一にも、将軍家に対して害心ある兵法者が登場することになっては、一大事であったからである。

宗矩は、剣士たちの身元ならびにこの数年間の行状について、くわしく調べあげるとともに、試合出場の下命を伝えてからも、その行動の監視を怠らなかった。

さいわいに、第三試合までは、剣士のうちに怪しむべき挙措をみせる者はいなかった。試合は、孰れも、純乎たる剣心の発揮をもって、行われ、勝敗を決したのである。

「されば、明日の第四試合に、問題があって、この老い身の骨を折らせようと申されるのか？」

半蔵が、云うと、宗矩は、かぶりをふった。

「いや、それがしの不覚は、試合を了えた者たちに就いて、調べを怠っていたことだ。……太刀を拝領した勝者に、その夜のうちに、あやかしがつきまとうて、太刀先三寸を切って、奪い去って居る」

「……」

半蔵は、但馬守程の人物が、あやかしという言葉を用いたので、皺蔭の双眸を、冷たく光らせた。

「あやかしと申すと？」

「襲撃の迅業が、人間の使うものと思われぬ。魔神にひとしい」

「……？」

「あやかしと見るにふさわしく、その名も与えられて居らぬようだ。第一試合の勝者妻片時直より、太刀先三寸を奪い去る時、影、とおぼえておけ、と云いのこした由――」

「影！」

瞬間、半蔵の面貌が、別の灯かげを映したように、一変した。

宗矩は、それを、見遁さずに、じっと眸子を据えて、

「お主以外に、あやかしを退治できる者は居らぬ」

と、云った。

二

翌朝、宗矩は、西之丸の桜の間で、小野忠常に会うと、挨拶をすませるや、すぐに云った。

「本日の試合にあたり、お手前へ、白扇をお渡し申したいが……」

六十四歳の宗矩から見れば、二十八歳の忠常は、倅にもひとしかったが、長老に一歩もゆずらぬ気概を、暗々裡にしめして、あつかいにくい対手であった。

いわば、柳生流に対する一刀流の対抗意識を、このたびの試合にあたって、宗矩に、はっきりとさとらせたのである。もとより、忠常は、外面では、気ぶりにも現してはいなかった。

宗矩は、審判の位置に着席するやいなや、忠常の烈しい気概を、痛い程に感じたのであった。殊に、前々日の、十兵衛三厳と新太郎厳方の試合において、忠常が何を考え、どう判定したか、宗矩には、手にとるように察知できたのである。忠常は、わざと、銅鑼を鳴らすのを、一拍子遅らせたではないか。

忠常は、十兵衛の猿飛びに応ずる新太郎の変化の業を見たかったに相違ないのである。

今日の第四試合にあたっては、忠常は、もしかすれば、異議を申立てるかも知れぬおそれがあった。

何故ならば、宗矩が白扇を挙げるべき勝者は、すでに、きまっていたからである。宗矩は、そうせざるを得ない立場に置かれていた。

宗矩は、忠常が異議を申立てるのを、抑えておかなければならなかった。

さりげなく、主審の席をゆずろう、と申出れば、忠常としては、礼儀として、辞退するのは、目に見えていた。そこが、宗矩の老獪な智慧の働かせどころであった。

はたして、忠常は、

「それがしごとき若輩が、柳生殿をさし置いて、何条もちまして、白扇など！」

と、謙遜した。忠常は、宗矩が、第三試合に下した判定に忸怩たるものをおぼえているので、わざと、主副を替えて、自分の機嫌をとろうとしているのだ、と解釈したので、謙遜は儀礼上のことで、すぐに白扇を把る肚になっていた。

ところが、宗矩は、意外にも、かさねて、すすめるかわりに、

「左様か。では、正審の覧るところを、おまかせあるよう――」

と、云って、袴を鳴らして、立って行った。

忠常は、憤怒を抑える異常な努力をはらわなければならなかった。

――詭道に、ひっかかったか！

宗矩に、正審の覧るところをまかせよ、と云われてしまった以上、副審の意見は封じられたのである。

第四試合は、鞍馬古流、鴨甚三郎利元に対するに、宝山巴流の薙刀を使う遠藤由利なる妙齢の娘であった。

由利を推挙したのは、春日局であった。

一月ばかり前、春日局は、宗矩を招いて、

「大奥に、薙刀の稽古をつける女人をさがして居りましたところ、元真田の家臣にて宝山流の遠藤常右衛門が、娘由利を、いかがであろうか、と申出て参りました。見目も美しく、気質も爽やかとおぼえましたれば、手の内の程、お見とどけ頂けますまするか。……手の内が格別に冴えて居りますならば、このたびの吹上の御前試合に、紅一点を添えられるも、おもむきがあろうかと存じまする」

と、依頼した。

宗矩は、承知して、道場に、由利を呼んで、その構えと攻撃の型を覧た。

宝山流の剣法は、薙刀の術をも伝え、これを宝山巴流と称していたが、宗矩は、覧るのは、はじめてであった。

由利は、構えも攻撃も型も、ひとつとして、常識とされているものは示さなかった。

たとえば、冠り入身の下段の構えをとり乍ら、脚を開かず、まっすぐに立っているだけであったし、天の構えでは、右手を空けてダラリと携げ、柄を軽く肩に置いたし、攻撃に於ては、冠り入身の下段から、ゆるやかに、刃光を宙に旋回させる山週りから、一瞬、目にもとまらぬ迅さで

袈裟がけにきめる一手を見せただけであった。

翌日、宗矩は、春日局に会って、

「天稟を完成させた腕前かと存ずる」

と、告げた。

春日局は、満足げに頷いて、試合対手を、鞍馬古流の鴨利元にして欲しい、と指定した。

宗矩は、意外の思いをした。

その人に会ったことはないが、現在鞍馬の山中に棲んで、俗界との交渉を全く断っている鴨利元の剣法は、尋常一様のものではない筈であった。戦国の世を誰に仕えることもなく、栄誉の場所を避けてすごしていたが、ただ一度、聚楽第へ、飄乎として現れて、太閤秀吉の面前で、秘術を披露して、「大天狗よ」と賞讃されたことがある。

立去った後、秀吉からじきじきに受けた大金盃を、小姓が下げようとすると、真二つに割れていた。千余の人の目の前で、いつの間にか、両断していたのである。

また、秀吉が、居室に入って、着換えようとすると、懐中から、一紙が落ちた。それには、

「おんいのち、たしかに頂き申候」

と記してあった、という。

鴨利元が、秀吉にほろぼされた何処かの大名の遺臣であることは、これで明白となった。

色めき立って、後を追おうとする近習たちを、秀吉は、笑って、

「すて置け」

と、とどめたが、褒美の品の衣服を、坊城はずれの小屋に住む乞食が、もらって着ているという報告に、急に猿面をきびしいものにして、討ち取るように命じた。

しかし、その行方は、杳として、ついにわからなかった。

鴨利元が、姿を現したのは、大坂城が烏有に帰した日であった。英傑一代の栄華の夢が、黒煙となって夜空に消えて行く有様を、町人の群に交って、冷やかに眺めている姿を、知り人に見つけられたのであった。

爾来、鞍馬山中に、尋ねて行く兵法者は、数多かったが、一人として、立合いをゆるされた者はなかった。

いまは、すでに、古稀を迎えて、寒山の枯木と化していよう。もとめに応えて、江戸へ下って来るとは、到底考えられなかった。よしんば、承知したとしても、試合の結果は、火を見るよりも明らかであった。いかに天稟を完成させているとはいえ、二十歳ばかりの娘の薙刀がとどく兵法ではない。

宗矩が、その旨を口にすると、春日局は、微笑して、かぶりをふって、

「鴨利元は、必ず参って、由利と試合をいたしまする。この儀、但馬殿をわずらわしませぬ」

きっぱりと、こたえた。

将軍家光の乳母として、大奥に君臨し、当代比肩すべき者のない権勢を誇るこの小肥りの色白な老女と、世を拗ねた老剣客とが、どういう関係なのか——その不審を、宗矩は、べつに解く必要もなかった。春日局が、江戸城へ呼ぶからには、将軍家に対して害心を抱く者でないことは、確実であった。宗矩にとって、そのほかのことは、さしたる問題ではなかった。

「鴨利元呼び出しの儀は、お局におまかせいたすとして、これが、はたして、試合と相成るかど

うか、甚だ疑問に存ずるが……」

宗矩が、云うと、春日局は、ふっと、皮肉な目つきになった。

「勝った者へ白扇を挙げるのは、但馬殿、お手前様ではありませぬか」

宗矩は、これをきいて、はっとなった。

春日局が、何故に、由利を試合に出そうとするのか、その意中をさとったのであった。

鴨利元を、江戸城へ呼び寄せ、二十歳の娘と立合わせ、しかも、勝者を予め定めてしまっている。

どこまで底知れぬ才腕を持っているのか。宗矩は、舌をまかざるを得なかった。

三

雲の多い日であったが、薄絹のように淡く、陽を透していたし、風に乗って流れるのが早く、地上にその影をとどめなかった。

遠藤由利は、時鐘の前に、幔幕から現れて、上座へ向って正座し、薙刀を、背後に置いていた。

白装束をつけ、黒髪を肩に散らして、紅の鉢巻・襷をしたその姿は、美少年と見まごう。

細く長く刎ねた眉の下で、大きく切れた眸子が、黒くきらきらと輝いていた。わざと紅を塗らずに、白くかわかした脣が、ふしぎな魅力をもって、面長な輪郭に調和していた。かたちのいい耳朶のみが、陽ざしを透して、ほのかに色づいて、美しかった。

将軍家光は、由利が、現れたとたんから、率直に好奇心のあふれる表情になって、食い入るよ

うに、眺めていた。

時鐘とともに、由利は、身ごなしかるく、薙刀を把って、対手の現れるであろう東方の幔幕に向い立った。

数秒を置いて、幔幕が、ゆれた。

鴨甚三郎の出現は、幔幕を割る、というよりも、幔幕から幻影のように浮かび出る、というにふさわしかった。

六尺を越えていよう。濃紺の刺子の稽古着に、黒い袴を裾高くかかげて、臑を長くあらわしていた。

その両腕両脚は、まさに立ち枯れた古木にひとしく、骨に皮をかぶせただけの細さであった。雀色によごれた蓬髪と長髯の中に、無数の皺を刻んだ貌があったが、双眼は、その皺にかくれたように細く、由利のところまで、その光はとどかなかった。

左手に、自然木に仕込んだ太刀を、携げていた。

幔幕の前で、しばし、立ちどまって、由利を、じっと見戍っていた鴨甚三郎は、一歩毎に骨が鳴るような、むしろおぼつかなげに見える歩みかたで、進みはじめた。

由利は、甚三郎が二間の距離に立つや、しずかに、右青眼に構えた。

甚三郎は、動かぬ。太刀は、鞘に置いたまま、杖にした。

それなり……いくばくかの固着状態があったのち、由利は、右足を大きく引き、左半身となりつつ、薙刀をまわして、背負い、石突きを左肩先から出して、切尖を、地摺らせた。

そして、左手をさしのべつつ、じりじりと、左方へ廻りはじめた。

この笹隠れ体剣の構えをえらんで、位置を移すのは、無礼とも受けとれる敵の姿勢に、不意の攻撃力が用意されていると見てとって、間髪の間に応ずるためであった。

奇妙であったのは、由利の動きに対して、甚三郎が、細目だけをまわして、微動もしなかったことである。

由利は、甚三郎の視線が、もうこれ以上はまわせない地点で、ぴたりと、立ち停まった。

突如、

「えいっ！」

裂帛の懸声もろとも、由利の白い姿が躍って、刃唸り鋭く、明るい空間に、びゅーん、とひとつ巴の円弧を描いた。

巴流の極意が、それであった。笹隠れ体剣の構えから、身をひねりざま、対手の胴を狙って、横へ薙いだ勢いをそのままに、下から上へ、すくいあげに、刎ねあげる。

刹那——甚三郎の老体は、羽毛が風にあふられたように、宙のものとなっていた。

観る者の目には、その老体から、両脚が消え失せたかと映った。

次の瞬間、甚三郎は、斜めうしろ二間の地点に飛び降りていた。

だが、その足が地に着いたか着かぬうちに、由利は、氷上を滑るごとく奔って、ふたつ巴の閃光を送りつけていた。

それは、六尺の痩身の右脇と左脇へ、同時とも思える迅さで、薙ぎ上げられた。

にも拘らず、血飛沫のあがるかわりに、老体は、忽然として、そこから消え去せていた。地底に沈んだかとも、思えた。

甚三郎は、さらに、二間を遁れていた。

なお、それにむかって、容赦なく、地を蹴って肉薄した由利の白い姿もまた、化生かと見えた。

「ええいっ！」

三度び、陽ざしの盈ちた宙を、刃線が截った。

三つ巴は、三つ乍らに、股間を襲った。

その凄じい刃風になぶられるように、甚三郎の痩軀は、胡蝶と化して、ひらっ、ひらっと、空中を舞いつつ、遠のいた。

そして——。

甚三郎が、すっと降り立った地点は、幔幕のまぎわであった。

由利は、ツツツ……と突進するや、薙刀を天の構えにふりかぶり、無言の気合を発して、右足を大きく一歩踏み込みざま、左膝をつき、袈裟がけに、斬り下した。

同時に、甚三郎の姿は、煙のように、幔幕の中へ、消え失せていた。

あとには——。

白砂上に、両断された自然木が、落ちていた。太刀を仕込んだとみせて、実は、やはりただの杖でしかなかったのである。

「勝負あり！」

白扇をかかげる宗矩のおもてには、微笑があった。

流石は、生きて仙境に入った老剣客の、鮮やかな出処進退ぶりであった。

春日局から、故意に由利に勝をゆずるように、たのまれていたに相違ない。勝敗の世界から程遠く、風懐に一片の俗念もにごらせていない境地に達している老剣客は、笑って、これを引受けたことであろう。

宗矩は、老剣客に、感謝した。

一方、小野忠常の方は、銅鑼を鳴らすのも忘れて、凝然として、甚三郎の消えた幔幕を瞶めていた。

――あれが、鞍馬古流の浮身の術か？

まさに、神技であった。

忠常は、見とどけたのである。甚三郎が、由利の刎ねあげる薙刀の刃先に、片足の親指をかけて、空中へ舞いあがるのを――。

甚三郎は、おのが老軀の力を、全く使わなかった。由利が渾身こめた薙ぎ上げの一閃に、かるやかに乗ってみせたにすぎない。

この神技を使うかぎり、対手が疲労困憊するまで、いくたびでも、おのが身を、空中に遊ばせることが可能であった。

忠常にとって、もはや、勝敗に関する宗矩との、目に見えぬ確執など、どうでもよかった。

ただ、甚三郎の神技に酔った気分がさめやらず、宗矩が、家光に言上している言葉など、うわの空にききすてていた。

宗矩は、家光にむかって、由利の勝利を告げ、由利に代って、

「ただいまの巴流の一手は、紅葉狩りにございます」

と、説明していた。

「むかし、源氏の大将が、紅葉狩りに行きて、鬼女に遭うて、劫を経たる魔身の、どの部分に斬りつけても、致命の傷を負わせるにいたらず、夢中にて、股間を、斬り上げて、ようやく瘡し得た、と申します。甲冑の闘いの場合、下より突き上げる術は、必ず修得しておかねばならぬところ。また、花でも紅葉でも、その枝を剪る時には、上よりせず下より断てば、花も葉も散らさぬものにございます。紅葉狩り、と名づける所以かと存じられまする」

家光は、宗矩の説明に頷き乍ら、由利から視線をはなさなかった。

その眸子は、異常なまでに昂った欲情を、露骨にみなぎらせて、光っていた。

家光の欠点のひとつは、極度な男色趣味であった。幾人かの美しい上臈が用意され乍ら、いまだ一人も、褥に入れていなかった。

春日局は、ひそかに、それを憂えて、苦肉の策として、武芸に天稟を有つ美貌の由利をえらんで、これに男装をさせ、試合場で、家光の心を奪おうと計ったのであった。

奇策は、見事に功を奏した模様であった。

宗矩が、宵前に、屋敷に戻ると、書院には、老いたる忍者が、ひっそりと待ちうけていた。

「今夜、遠藤由利は、大目附、内藤駿河守邸に泊る。お主の働きを期待いたそう」

そう告げられて、無言で頷き、音もなく立去って行った。

剣相

一

遠藤由利は、闇へ、大きく目をひらいて、じっと仰臥していた。

褥に就いてから、ほぼ一刻が過ぎている。暗黒を瞋める目は、愈々冴えるばかりであった。

抑え難いものが、白い躰の中で、疼いていた。そして、それは、時刻が移るにつれて、狂おしい焦躁にかりたてるけはいをしめしていた。

このまま、あと半刻も過ごせば、由利は、じぶんが、どんな狂暴な振舞いをするか——それが、わかっているだけに、懼れなければならなかった。

白い躰の中にひそんでいた魔性が、目を覚したのは、吹上の試合場で、鴨甚三郎が、忽然として幔幕の中へ消え去った瞬間であった。

あきらかに、敵は、じぶんに勝利を譲るために、跳び退り跳び退り、小面憎くも、おのが身代りに一本の杖を両断させておいて、鮮やかに退場して行ったのである。

嘲罵されるよりも、もっと烈しい屈辱感で、由利は、全身を凍らせ、家光から太刀を拝領しつつも、まだ、意識は晦んでいた。

由利は、ただの女ではなかった。この七年間、異性に対する憎悪を、瞬時も忘れずに、育って

来た女であった。

十三歳の秋の夜、悪夢にうなされて、目を覚した由利は、実の兄の忠也に抱き締められているじぶんを発見して、あやうく昏絶しようとした。悲鳴をあげることも、もがくことも、できなかった。おそろしい疼痛が、躰の一部分に起った時、微かな呻きを発したばかりであった。

忠也は、起き上ると、凄い形相で、

「口外すな！」

と、云いのこした。

それから、十日あまり過ぎて、忠也は、再び、忍んで来た。

由利は、荒々しい愛撫に、身をまかせ乍ら、ただ、哀しく、亡母を呼ぶばかりであった。

忠也は、重ねて、他言無用を命じておいて、音しのばせて、部屋を出て行った。

おのれの居室に戻った忠也は、そこに、父の常右衛門が、太刀をひきつけて、坐っているのを見出して、愕然となった。

忠也は、身を飜して、廊下へ遁れた。しかし、由利の部屋の前まで、三間を奔って、背中を袈裟に斬られて、深夜の静寂へ、絶鳴をつらぬかせた。

由利は、障子とともに倒れ込んだ兄の血まみれの姿を眺めた刹那、冷たい快感が胸に沸くのをおぼえたことだった。

翌朝、父は、由利を呼んで、武芸の修業を命じた。それから、四年間、由利は、女ではなかった。

由利が、はじめて、白い躰の中にひそんでいる魔性をはっきりとさとったのは、十八歳の春で

あった。

某日、父の高弟の一人である藤田某が、おとずれて、唐突に、求婚して来た。父は、所用あって、出府して一月ばかり留守であった。

藤田は、高弟中随一の腕前であった。それよりも猶、稀に見る美貌で、評判であった。

「貴女を、妻にもらい受けたい」

対座して、いくばくも経たぬうちに、そうきり出された由利は、藤田の態度が、断られることなど毛頭懸念していないのを感じた。

由利は俯向いたままで、ひくく抑えた声音で訊ねた。

「わたくしを、なぜ妻になさろうとなさいます」

「貴女の美しさと腕前は、妻として天下に誇るに足りる」

藤田は、こたえた。

ややしばらく沈黙を置いてから、由利は云った。

「まことに、わたくしが、妻として誇るに足りる女かどうか、いちど、お試しなされませ」

藤田は、咄嗟に、それがどういう意味か、受けとりかねて、小首をかしげた。

由利は、無表情で云った。

「わたくしのからだと業を、心おきなくごらんなさいませ」

「……」

「からだを先になさいますか、それとも、業を――？」

そう訊ねて、じっと瞶めた。

藤田の戸惑った表情は、醜かった。

「か、からだを――」

かすれ声で、云った。

由利は、頷き、今夜四更に、忍び入って来るように、約束した。

藤田が、寝にふみ込んでみると、由利は、燃えるような緋の下裳いちまいを巻きつけただけで、褥に仰臥していた。

藤田は、その裸身を抱くのに、ぶざまな所作をしめした。藤田は、まだ童貞だったのである。

藤田は、由利が、濡れたそこを懐紙で拭って起き上り、しずかに、衣服をまとう間、なかば放心気味の惨めな状態に陥っていた。

由利は、長押から、薙刀を把って、鞘をはらうと、

「庭へお出なされませ」

と、促した。

藤田は、冷たく光る刃を見て、

「真剣で――？」

と、眉宇をひそめた。

由利は、黙って、庭へ出た。

やむなく、藤田も、差料を携げて、そのあとにしたがった。

勝負は、あっけなかった。

ひと薙ぎに、咽喉を断たれた藤田は、血飛沫を、月あかりに黒く撒いて、のけぞった。

由利は、なおそれだけで容赦せず、刎れた薙刀で、すくいあげて、藤田の股間の物を刎ねた。

二

いま——。

由利は、じぶんの裸身を凝視した藤田の面相と、柳生宗矩の説明をきき乍らじぶんへ目を据えていた将軍家光の相貌が、非常によく似ていたのを、思い泛べていた。

——将軍家の寵愛を蒙るのが、女子としての最高の栄誉なのか。

試合の後、直ちに招かれた大奥で、春日局から、その旨を告げられて、由利は、鴨甚三郎が勝を譲って去った理由が、判ったのである。

じぶんの出場は、宝山巴流を上覧に入れるためではなかったのである。目的は、ほかにあった。

じぶんという女を供するために、将軍家のお気に召すか召さぬか——いわば、狡猾な趣向であった。

えらぶにことかいて、じぶんをえらんだ春日局に対して、由利は、冷笑をおぼえた。しかし、対手は、将軍家であった。拒絶するわけには、いかなかった。

由利は、つつましく、大奥へ上るについての春日局の教示をきいて、退出して来た。

宿舎に指定されたこの大目附の屋敷では、盛大な祝宴が催された。由利は、終始、俯向いて、人形のように、その時間を過した。

寝室に入って、孤独になってから、由利の本来の心は、活きかえったのである。

——あの男によって、わたくしの生涯は、しばられてしまうのか！

異常に目をぎらぎらと光らせていた家光の面貌に対して、由利は、烈しい嫌悪をおぼえた。

——女と生れたのは、是非もない。……せめては、じぶんを取拉ぐ男子に、一度出会うて、それを思い出にできるものなら——。

思いがけずにおそって来た運命に、抗すべくもないのなら、由利が、なし得る唯一の謀反は、それであった。

由利は、はね起きて、何処か、遙か地平の果へ、風のように趨り去りたい衝動にかられた。

「わたくしを取拉ぐ男が、どこかにいる！　屹度、いるにちがいない！」

由利は、思わず、声に出して、呟いた。

すると、不意に、闇の中から、

「その言葉は、まことか？」

と、応じる声があった。

由利は、息を詰めた。

ひとつ、ふたつ、三つ、四つ……おのが脈搏に合せて、十まで数えて、由利は、掛具をはねて、とび立とうとした。

気配もなく、闇にひそんでいた者は、決して、その刹那をはずさなかった。

由利は、一動作の抵抗さえも許されずに、俯伏せに押えつけられた。

「そなたのぞみ通り、取拉いだぞ」

闇の男は、云った。

由利は、全く四肢の自由を奪われ乍ら、ふしぎに、憤りもくやしさもおぼえなかった。じぶんの弱さを思い知らされたことに、一種の自虐の快ささえ感じた。

裾が捲られ、冷たい手が、内腿を滑って、奥をさぐって来るや、由利は、力を抜いた。

「抗いませぬ。作法通りに、わがものにされるがよい」

「……」

男の圧力が去るや、由利は、仰向けに寝がえった。目蓋はとじていた。剝き出された下肢が、ひえびえとしていた。

由利は、胸に手を置いて、待った。

どうしたのか、男は、動かなかった。

由利は、目蓋をひらいて、見あげた。闇の中に、さらに濃く滲み出させた黒装束の姿には、若若しいけはいがあった。

「……慈悲心を起したのなら、さげすみますぞ」

由利の方から、そう云った。

「いや――」

男は、かぶりをふった。

「その手には、乗らぬ」

「その手？」

「囮になって、わしをからめ取ろうとして居るな？」

「おぼえぬことを……」

「知らぬ、と云うのか？」

「知りませぬ」

由利は、あたりに神経を配った。なんの気配も感じなかった。

しばしの沈黙があってから、男は、口をひらいた。

「拝領の太刀を頂きに参上した者」

「貴方は、何者です？」

「名は与えられて居らぬ。影、とおぼえておいて頂こう」

「影?!」

由利は、やおら、身を起して、床の間に寄って、刀架けから、その太刀を把った。

刹那――由利は、床縁を蹴って、一間余を躍った。

抜き打ちに、闇を走らせた一撃は、間合も呼吸も五体の力点の配分も、決してあやまっていなかった筈である。刀身は、狙ったところを、正確に、斬り下げた。

しかし、そこには、刃風の音が、立ったばかりで、対手は、夜気も擾さずに、消え失せていた。

――おのれっ！

由利は、太刀を八双に構えて、闇を透かし見た。どこにも、その黒影は、見わけられなかった。

一瞬、由利は、腰をひねって、

――えいっ！

と、背後を薙いだ。

その一閃もむなしかった。

そればかりか、薙いだ姿勢をたてなおすいとまも与えられず、由利は、まっすぐに延ばした双手から、拵ぎ取られる感覚もなくて、太刀が無くなったのに、愕然となった。

……茫然と自失して、いくばくが過ぎたろう。

由利が、はっとわれにかえったのは、雨戸一枚倒されたそこから、吹き込んで来た夜風のおかげであった。

のみならず、夜風は、庭に展開している無音の凄絶な争闘の殺気を、乗せて来た。

由利は、酔ったような足どりで、廊下へ出た。

由利は、見た。星明りの庭上に、目にもとまらぬ程の迅さで、飛び交っている二個の影を。

三

秋風が、陽がさしそめたばかりの武蔵野を渡っていた。

樹木と雑草と稲穂が、濃淡に染めわけられた、広漠たる平蕪の中をうねる街道を、長く影法師を匐わせて、一人の老人が、歩いて行く。

一歩毎に、大きく上半身を傾ける姿は、服部半蔵のものであった。

江戸開府の砌、はじめて徳川家康が駒を進めた渋谷の丘陵を越える街道であった。

半蔵は、半蔵門を出てから、ここまで、ずうっと、地面へ目を落して、歩いて来た。忍者にもあるまじく、胸中には、湿った感慨が澱んでいたのである。

――わからぬ！

おのれに、いくたびとなく呟いているのは、その言葉であった。

昨夜、半蔵は、大目附、内藤駿河守邸の庭の木立にひそんで、曲者が、遠藤由利の寝所から、拝領太刀を奪って、出て来るのを待った。

半蔵は、一度、寝所の前まで、忍び寄って、予測通りに、曲者が由利を襲っているのを知った。

ふみ込まなかったのは、その問答をきいたからである。

こちらが忍び寄ったのを、曲者は、早くも察知して、由利に向って、それを口にしていた。

由利が身を犠牲にして、犯されているところを、伏せてある者にふみ込ませて、捕えようとしているに相違ない、と。

半蔵は、その声が、若い男のものであるのをきいて、

――あの「女影」ではない。

と判って、再び、木立の中へしりぞいたのであった。

庭へ出て来たその曲者に対して、半蔵は、ひさしぶりに、秘術の限りを尽した。これに応じて、飛鳥のごとく跳躍した曲者は、半蔵の記憶のかぎりでは、「影」父娘に比肩する秀れた忍者であった。

気力体力ともに、半蔵は、曲者に到底およびもなかった。しかし、老いの身には無数の危機をくぐり抜けて来た豊富な経験が備えられていたし、曲者の漲った若さは、破綻を招く無謀を露呈した。

半蔵は、まず、鳥黐縄を投じて、その手から、拝領太刀を奪い取るのに成功した。次いで、樹

上へ遁れたのへ、鳥黐縄を再投して、その覆面を剝いだ。

瞬間——半蔵は、思わず、

「おっ！」

と、驚愕の叫びを発したものだった。

星明りに浮かびあがった白い貌は、二十年前、「風盗」の城砦の裏側にある丘陵上で、見とどけた「子影」の貌に、生写しだったのである。

——わからぬ！

野猿のように屋上へ飛び移って、そのまま消え去る速影を見送り乍ら、半蔵は、当惑のかぶりをふったことだった。

当惑——まさに、それが、いまもなお、半蔵の胸中を占めている。

——もしや？

ひとつの予感に悩まされて、昨夜まんじりともできなかった半蔵である。

——わからぬ！

そう呟くことが、唯一のすくいになっているようであった。

街道が、のぼりになって、半蔵は、目をあげた。

楢や竹の林が、冬を待つ色に移りつつある。萩や旗薄の、繊細な、しかも茫々たるひろがりが、いかにも、蕭条たる晩秋の彩りであった。

木槿の花が、白い。

生命短い、この花を見やり乍ら、

——わしも、老いた。

半蔵は、自分を嗤った。

やがて、半蔵が、彳んだのは、丘陵と丘陵に挟まれた低い窪地に、楓樹にかこまれて、ひっそりと構えられた屋敷の門前であった。

竹格子戸は、開かれていた。

椎、樫、ゆずり葉、榊、柏、槇、らかん樹など、ことごとくの種類をそろえたかとおぼしい植込みの奥に、柿葺きの入母屋の屋根が、のぞいていた。

それへ、当てた半蔵の眸子は、微塵の油断もない厳しい忍者のものであった。

玄関に立って、案内を乞うと、箒を持った小男が、右手の木戸口からあらわれた。眇目の、醜い容貌をしていたし、痩せこけて肩がとがり、いかにも貧寒な人体であったが、半蔵は、

——こやつが、多分、赤猿であろうか。

と、看破した。

曾て、しばしば、家康の首級を狙って、江戸に、駿府に、伏見に、出没して、徳川方の忍者十余名を殪して行った大坂方の忍者がいた。それが、真田幸村配下の「赤猿」佐助という男ただ一人の仕業と判明したのは、豊臣がほろびた後のことであった。

「服部半蔵が罷り越した、と御主人に取次がれたい」

そうたのむと、男は、怪訝そうに、

「あるじと、お知りあいですかな？」

と、問いかえした。

「はじめて、御意を得たく、罷り越した」
「さ——それでは、お会いなさるかどうか……」
小首をかしげ乍ら、のこのこと、庭へまわって行く後姿は、なんの見ばえもせぬ、泥くさい下僕でしかなかった。
待たせるほどの時間をかけずに、「赤猿」は、玄関に現れて、
「お通り召され」
と、招じた。
書院ともいえぬ粗末な座敷で、半蔵が対坐したのは、六十年配の、白いあご髯をたくわえた、際立った人品骨柄の人物であった。木賊色の木綿の筒袖に、褝衫をはいていた。
「早速乍ら、卒爾なお願いをつかまつる」
半蔵は、挨拶がすむと、すでに対手が何者であるか、承知している態度をしめして、持参した品の包みを解いた。
とり出したのは、昨夜、曲者から奪いとった拝領太刀であった。
主人の前へ置いて、
「これが何人の作か、また、現れている剣相について、ご教示たまわりたい」
「……」
主人は、じっと半蔵を見かえした。
「いや——」
半蔵は、笑って、老人らしく、一人合点に竪にかぶりをふってみせた。

「お手前様が、鑑定術と剣相術にかけて、稀に見る目利きという噂は、二十年前から、うかがって居り申した。何卒——」
「おのぞみとあれば……」
主人は、太刀を、手に把った。
刀剣の鑑定について、非常に喧しい時世となっていたが、それにつれて、剣相もうるさくなっていた。
剣相術は、鑑定術よりも、古かった、日や方角の吉凶をみることが、行事上大切であったのであれば、刀剣についても吉凶が云々されたのは、当然のことであろう。
室町初期応永三十年に書写された「観智院本銘尽」に、天国、安綱、月山などは主人を嫌い、菊作は不浄を消す、と記述されている。
室町末期に著された「新刊秘伝抄」にも、刀の祟りを鎮めるには、銘の周りにボロンという梵字を、持主の年齢の数だけ書くが良い、と説かれてある。
主人は、料紙を口にして、刀身を、まっすぐに立てて、長いあいだ、見入っていた。
ぴたりと、鞘に納めてから、
「千子村正と存ずる」
ためらわずに、断定した。
「ふむ！」
半蔵は、頷いた。
半蔵も、そうではなかろうか、と考えていたのである。

「運宮のやき出しは、やき落しにて、大凶相。佩ぶべき剣にあらず、と存ずる。乱雙と称する月があるのは、上作の刀に稀に見かけて、これは吉事禎祥を主るが、そのとなりに、黒星が三つ並んでいて、この富貴の相を殺し、横死を意味いたして居る。命宮の焜は乱れて、これも大凶。星像があって、上へ、気の立ち昇るのは、陽気にして吉相と申せるが、ここにもまた、気の立ち昇ったところに矢じるしの疵があって、これは、怨敵のある象。切っ先の飛びやきは、君臣不和の相、災は、内にも外にもおよぶときく。……大凶と大吉が、入れまじったこの太刀の剣相は、複雑にして奇怪、佩びるのは遠慮されたがよい」

主人は、云いおわって、半蔵の前へ返した。

「忝けのうござった」

半蔵は、礼をのべてから、あらためて主人を正視した。

「ところで、この無銘太刀は、もとは、大坂城内の宝物でござった」

「……」

「そのむかし、太閤殿が、諸将へ贈るために聚められた際、十振だけを、お手元にのこされた、ときおよび申す。大坂城が炎上した時、何者かが、持出して、家康様へおとどけ申した。……その一振が、これでござるが、太閤殿が、なにゆえに、十振のみ、無銘のままで、残されたか、その理由を、お手前様は、ご存じでありましょうか？」

「存ぜぬ。それがしが、存じて居る筈がない」

「かくされるな、左衛門佐殿！」

不意に、半蔵は、はっきりと、対手の名を口にした。

左衛門佐——これは、真田幸村の称にまぎれもなかった。

真田幸村は、二十年前——元和元年五月七日、赤旗備えの兵を率いて、茶臼山の家康の本陣へ突入し、その馬印を臥さしめるまでに奮闘して、壮烈な最期をとげ、兵また之にしたがって一人残らず討死した筈であった。

しかし、半蔵は、確信にみちた口調で、その名を呼んだのであった。

それから、半刻後、半蔵は、辞し去った。

主人は、玄関に見送ってから、半蔵の姿が、門外へ消えると、

「赤猿」

と、呼んだ。

物蔭から、のこのこ現れて、前へ蹲った佐助へ、主人は、微笑し乍ら訊ねた。

「お前の腕で、あの老人が討取れるか？」

「なかなか——」

下僕は、かぶりをふった。

「佐助、お前も、老いたか」

主人は、しずかに踵をまわして、奥へ入った。

無明縄

一

今宵も——。

不忍池畔の聖天宮の小祠の中では、忍者母子の奇怪な営みが、つづけられていた。

「母影」は、仰臥した若い逞しいわが子の裸身へ、赤銹の油をすくいとって、しずかにやさしく、塗りつけてゆく。

燈明の仄ぐらい明りに浮いた「若影」の寝顔には、微かな苦渋の翳が、刷かれていた。

三度び、「若影」は、傷ついていた。

最初は、樋口十郎兵衛に、太股を刺され、二度めは、武蔵野の雑木林の中で、柳生十兵衛の豪剣で、立木もろとも、胸を薄手に斬られ、三度めは、今宵、遠藤由利から拝領太刀を奪って、庭へ出たところを、われと同じ忍者に襲われて、法輪をかたどった十字手裏剣を十数本も撃ち込まれて、その一本を眉間に受けたのである。

創は浅かったが、噴いた血汐が、双眼に入って、闘いつづけることができなくなり、むなしく遁れ去らねばならなかった。

しかし、「若影」の面上の苦渋の翳は、傷の痛みによるものではなかった。拝領太刀を、そのために奪われた無念のためであった。

対手は、あきらかに、老人であった。のみならず、跛で、高処への跳躍は不可能であった。にも拘らず、「若影」は、不覚をとったのである。

「……あのおいぼれに、このわしが——くそ！」

思わず、呻くように、そう吐き出した。

「母影」は、膝を立てさせて、臀部から内股へ、ゆっくりと、油に濡れた掌で、撫であげ撫であげし乍ら、

「余儀ない不覚であったのじゃ」

となぐさめた。

「不覚は不覚だ！　死におくれた片端者に、このわしが、太刀をさらわれたばかりか、浅手まで負わされた。——母者らしゅうもない。なぜ、わしを、さげすまぬ？」

「そなたより、敵が、まさっていただけのことであろう」

「まさっていたとは思われぬ。わしの不覚だ！」

「そなた——」

油指で、そろりと、睾丸の裏がわを、かるく掻き揚げ乍ら、

「遠藤由利の寝姿を、心にのこしていやったのではないか」

と、云った。

「若影」は、股間から、全身にひろがる快い戦慄に、微かに身顫いしつつも、母親の皮肉な振舞いに対して、嫌悪をおぼえた。

「わしは、あの娘を犯しはせなんだ」
「だからこそ、心にのこしていた、とも云える」
「いいや！　わしの気力も体力も、いつもと同じに充ちて居った」
「ならば、対手が、つよすぎたまでじゃ」
「おいぼれ片端が、わしより、つよかったのか！」
「跛のおいぼれとあなどったものであろ」
「あなどりはせなんだ。あなどりはせなんだが……」
「それみるがよい。敵は、そなたの知らぬ意外の業を備えていたまでのことじゃ」
「……」
「母影」は、蹠まで油を塗り終えた。今夜は、「若影」の股間には、健康な本能の変化は、示されていなかった。
「若影」が起き上った時、「母影」は、何気ない口調で、云った。
「そなたが闘った対手は、服部半蔵ぞ」
「服部半蔵？……先頃まで、伊賀組の頭領であった男だな？」
「服部半蔵ときけば、そなたも、不覚を慙じずともよいであろ」
「いいや、服部半蔵であろうと、誰であろうと、おいぼれ片端に敗れた無念には、堪えられぬ。……そうか、服部半蔵であったか。よし！　必ず、彼奴を、仕止めてくれる！」
「……」
「母影」は、わが子の険しい横顔へ、冷たい眼眸を当てたが、何も云わずに、すっと立って、片隅にたたんである柿渋の紙子を把って、虎皮の筵の上へひろげた。これが、忍者の牀であった。
「若は、明夜、大奥へ忍び入って、将軍家の夜伽をすませた遠藤由利を襲うがよい。服部半蔵から返してもらった拝領太刀を、かたえに置いて居ろう」
しずかに、紙子の下へ身を横たえた「母影」は、
「こんどこそ、ぬかるまい。伊賀三十六人衆が詰めて居る大奥のことゆえ、声をたてられて、騒ぎになったならば、無事に脱出することは、おぼつかぬ。容赦なく、由利をわがものにして、口を封じねばならぬ。女身のあつかいを、この母を対手として、習うておくがよい」
そう云って、「母影」は、片手を挙げて、燈明の火を消した。

二

その翌日、冬を呼ぶような冷たい秋雨の、しとしとと降る吹上の禁苑における第五試合は、大捨流、菅沼新八郎と羽黒山自念坊との間に行われた。
結果は、菅沼新八郎が、太刀を拝領することになった。
後刻、柳生宗矩は、西之丸の桜の間に、新八郎を招いた。
「精妙の技、われら眼福を得たと申上げられる」
と、ほめてから、
「貴殿は、あの技を、如意輪剣と申された。大捨流の極意か、それとも貴殿の御発明か？」
まだ、二十五歳になったばかりの、見るからに好もしい風貌を持った青年剣士は、畳に両手をつかえて、

「御賢察のごとく、あの技は、あの場に於て咄嗟に思いつきたるもので、再び使うことは叶わず、とおぼえまする」

とこたえた。

大捨流とも書く。伝書は、多く、片仮名を用いている。流祖は、肥後球磨郡人吉の産、丸目蔵人である。相良壱岐守に仕え、十七歳にして初陣功名して、のち京に在って、しばらく北面守衛の士となっていた。その頃、上泉伊勢守が上京したときいて、たずねて行って、立合いを乞い、勝負三本と決めて、ことごとく、搏ち倒された。蔵人は、慙じて、そのまま、行方をくらまし、五年後、再び京にあらわれたが、すでに、その時、伊勢守は亡かった。失望した蔵人は、清水寺に、大捨流の高札を立てて、試合に応ずる者を、のこらず破った。その数二十九名であった、という。

大捨流は、戦場の操剣を旨としたもので、頗る豪快で、身躰を飛びちがえ、薙立て、手許へくり込んで、一挙に勝を制するのを面目とした。

丸目蔵人は、なおこの時世まで生きて、九十歳の高齢であった。菅沼新八郎は、十年前、蔵人が、唯一人えらんで門に入れた、秘蔵弟子であった。

「では、咄嗟の応用にいたる――利を視るの念は、いかにして起されたか？」

宗矩は、問うた。

新八郎は、伏目勝ちに、自慢ときこえるのをはばかる低い口調で、こたえた。

「それがし、時の鐘を合図に、幕内に入って、対手を見ましたるところ、折頭襟、鈴掛、結袈裟に、錫杖を突いた応身（剃髪体）が、奇妙にも、大太刀を背負って居ります。それがしは、山伏ならば、当然、金剛杖を持って、立向って参るものと考えて居りましたので、何故に、大太刀を背負うて居るのか、直ちに合点が参らず、しばし、当惑仕りました。対手が間合を詰めて来て、菩薩錫杖の六輪を鳴らして、その尖端を、地に摺らせるや、はっと、これは、振り棒にあらずやと、思い浮んだのでございます。すなわち、六波羅密を表わしたとみせたその尖端から、鎖つきの分銅を噴き出させて、ひと振りに唸らせて、足を払い、足くびにからませて、曳き倒しざまに、背負うた太刀を、抜き討つ――これに相違ない。あるいは、分銅を、足ではなく、剣にからませて来るやも知れぬ。いずれにしても、振り棒を受けては、たちまち、身の自由を奪われるは、火を視るよりも明らかであり、と申して、先手に攻めようにも、振り杖がとった距離は遠く、撃ち込みは、とどきませぬ。不測の応用は、ついに、錫杖が、笠研しの上段の構えから、唸りをたてて、弧線を描いて来るまで、それがしの念頭に泛ばず……、その尖端から噴いて出た分銅に足を払われて、一躍に、宙へ跳んだ刹那、脳裡にひらめいたのが、おのれを、蹴鞠と化すことでございました。……それがしは、御高覧のごとく、空中にもんどり打ち、一回転しざま、対手の胸へ体当りをいたし、倶倒れに倒れ、立ち上った時には、抜刀いたして居りました。その時、すでに、それがしの剣は、対手が背負うた大太刀の柄を断ち切って居りました」

「まさしく――お見事であった。念動ぜずして、気は霊明にしたがって活達流行、心を載せて滞らず、その形を御すること無礙自在――貴殿の不測の妙用こそ、剣の術の悟入と申そうか」

「過褒にございます。あの技は、日頃の修業によって発しましたるものでは、ございませぬ」

「と、申すと？」

「実は、それがし、今暁、奇妙な事に出会い、その折の不覚が、測らずも、転じて、あの技を使

う幸運をもたらしてくれたのでございます」

新八郎は、夜明け前に起き出て、心気を鎮めるために、宿所の近くの神社の境内を逍遥していた。

すると、突然、木立の奥から、女の悲鳴がきこえて来た。すててておけず、馳せ入ってみると、暁闇の中に、もつれ合っている男女の姿が見わけられた。

「痴れ者ッ」

一喝して、そこへ——二間を奔った瞬間、いかなる仕掛けであったか、その走路をさえぎって、一条の縄が、矢が飛ぶように、ぴいんと張られ、新八郎は、足をさらわれて、宙にもんどり打ったのであった。

転びざまに、一刀を鞘走らせて、はね起きてみると、奇怪にも、つい眼前で争っていた男女の姿は、忽然として、かき消すように失せていたし、振りかえると、足を払った縄も、見当らなかった。

これは、現に覧た夢というよりほかはない出来事であった。

どう考えても、合点のいかぬ不思議であった。

「いまにして思いますれば、祭った神が何神たるかもおぼえずに、拝殿の階にぬかずいて、祈ったそれがしを、実は、武運の神がみそなわしたのでございますまいか。このたびの栄誉は、神助としか、思われませぬ」

そう告げる新八郎を、宗矩は、微笑をもって眺めた。

「神助——あるいは、そうかとも受けとられてよろしかろう。……ところで、貴殿のような達人に、云わでもの御忠告乍ら、老婆心を以って申上げておきたい。大切の試合が終った夜などは、とかく、心に隙が生じやすきもの。拝領の太刀は、かまえて、お守り願いとう存ずる。と申すのも、今度びの試合の選びよりはずされた兵法者の中には妬心に駆られて、前後もわきまえぬ企てを起す者もあろうか、と案じられるのでござる」

新八郎は、つつしんで、忠告を承って、退出して行った。

宗矩が、常のごとく、宵前に屋敷に戻ってみると、前日と同じく書院には、老いたる忍者がひっそりと待ち受けていた。

「お嗤い下され。服部半蔵も、老い申した」

無表情で、云った。

「一度で生捕れるような曲者ならば、お主を呼んで、たのみはせぬ」

宗矩は、かぶりをふってみせてから、

「いかがであった？　お主が、二十年前、木曾谷に訪うた影と、何かの縁を持つ忍者と見てとれたかな？」

「そこまでは、未だ見とどけ申さなんだが、伊賀や甲賀の者でないことは、明らかでござる」

半蔵は、わざと、返答をにごした。

宗矩の眼光が、眩しかったので、

「影の名を称するだけの業前では、ござった」

と、つけくわえた。

「齢の頃は？」

「左様、二十歳を越えてまだ間もないと、見申した」
「すると……もし、木曾谷の影に縁がありとするならば、さしずめ、孫に当ろうか」
この宗矩の何気ない言葉は、半蔵の胸を、鋭く刺した。
「ともあれ、お主のおかげで、拝領の太刀は、はじめて勝者の手許に残った。遠藤由利は、それを携えて、大奥へ上った。影は、よもや、大奥までは、忍ぶまい」
「……」
半蔵は、しかし、忍者の執念のおそろしさを知っていたので、宗矩の安堵に同意できなかった。
「御苦労乍ら、今宵は、菅沼新八郎の身辺を見張っていてもらおう」
「もとより」
半蔵は、承知した。
なぜか、半蔵は、拝領太刀を、生きのびて渋谷郊外に隠栖する真田左衛門佐幸村に観せに行ったことは、告げずに、腰を上げていた。

三

遠藤由利は、城中よりの迎えの駕籠に乗って、大目附、内藤駿河守邸から、まっすぐに、大奥へ入った。
先年、関白鷹司家より、御台所の入輿があって、大奥は、ようやく、公家風儀がとり入れられていたものの、後世のものものしい柳営模様からは想像もつかぬくらい、かたくるしい秩序は敷

かれて居らず、御台所が直接御表の玄関へ出て来るほど、のびやかであった。
男子禁制の大奥と、中奥（将軍官邸）との間にお鈴廊下が設けられ、御錠口の杉戸が厳然たる遮断をなしたのは、六代将軍家宣が、関白近衛家の女を迎えてからである。
とはいえ、女中たちの容儀衣裳は、ようやく整って来ていた。
由利は、畳廊下を奥へ奥へと、みちびかれた、とある部屋に入れられると、すぐさま、衣服を脱がされ、一糸まとわぬ素裸にされて、湯殿へともなわれた。一人の老女が指図して、四人の女中が、由利の全身を、くまなく洗った。由利は、生贄のからだに、いまわしい傷痕でもついていては、と綿密に点検されているような気がして、不快だった。由利の肌は白く、艶やかで、一点の汚染もなかった。
用意された衣裳をつけるのも、由利の手は不要であった。人形のように立って、伽羅の香のこぼれる白羽二重の腰巻をまきつけられ乍ら、由利は、不意に、狂おしく嗤い出したい衝動にかられたことだった。
入念な化粧が、ほどこされた。
乱菊の地模様の大紋綸子に、幸菱の裲襠をはおった時、女中たちは、その美しさを、口々にほめそやした。
「これは、なにごとじゃ！」
突然、廊下から、鋭い声があびせられ、女中たちは、怯えあがった。
すっと入って来た春日局は、指図の老女を見据えて、
「このような装をさせよ、とは命じて居りませぬぞ。……ともなって参ったならば、なぜすぐ

に、わたくしに伝えて来ぬのじゃ」

と、きびしく咎めた。

老女としては、由利を別人のように美しくしたてあげて、春日局の前につれようと、気をきかせたつもりであった。

春日局は、由利を素顔にかえし、裸にもどすように命じた。

さらに一刻を費して、つくりあげられた由利の姿は、丸袖に、緞子の社衿をつけ、脇差をおびた、前髪立ちの小姓であった。

由利としては、まだこのいでたちの方が、我慢できた。

将軍家光は、すでに、大奥へ入って来て、待ちうけていた。

由利が、春日局にともなわれて、伺候すると、満足げに顔をかがやかせて、

「うむ！」

と、大きく頷いた。

「参れ――」

寝所へ促して、立つ態度は、率直であった。

六人の女中が、寝所で待っていて、家光と由利を寝衣に召替えさせた。由利は、腰巻の代りに、褌を締めさせられていた。

緋緞子の褥に入ると、家光は、いきなり、由利を俯伏させて、うしろから、かかえた。

もとより、痴愚の行為に関しては無知であった由利は、生贄の覚悟をしてはいても、家光の思いもかけぬ挙措に愕いて、思わず、身に備えた術で、一時のがれに、五体をよじった。しかし、

それは、かえって、思わぬ技巧となって、家光の欲情の火へ、油をそそいだ。

家光は、狂い乍ら、由利を背後から締めつけ締めつけた。

……半刻後、将軍の去った褥で、由利は、死んだように仰臥していた。

ひとすじ、泪の糸が、眦からこめかみをつたい落ちていた。

と――、由利の孤独な悲しみに応えるように、網行燈のあかりが、すうっとうすれて、ひとまたたきして、ふっと消えた。

墨を流したような闇の中から、ひとつの声が、起った。

「会いに参った」

「……」

ふしぎなことに、由利は、すこしも驚かなかった。いや、かえって、この闇の男の出現を期待していたような気さえした。

「そなたは、わしと約束した。……作法通りに、そなたをわがものにいたすために、会いに参った」

由利は、その声音を、なつかしいものに、きいた。

「それとも、いま一度、拝領の太刀を把って、立合うか？」

「いえ――」

由利は、闇の中で、かぶりをふった。

「おそすぎました。わたくしは、もう、権勢で取拉がれた女です。わがものにするねうちはありますまい。拝領の太刀は、床の間にあります。持ち去られるがよい」

「……」
「生きたしかばねを抱いたとて、なんの快さもありますまい」
「……」
由利は、闇の中で気配がうごいて、床の間に寄り、拝領太刀を把りあげるのを、察知した。
気配は、褥のわきを通り過ぎようとした。
その瞬間、由利の身うちに、何かに押しあげられるような衝動が起った。
掛具をはねて、立ち上った由利は、無言で双手をのばすと、闇の男の袖をとらえた。
「……」
「……」
どちらの口からも、声は出なかった。
……男の逞しい腕にかかえられて、褥の上へ倒された時、由利は、
——これで、死んでもよい。
と、思った。

四

同じ時刻。
菅沼新八郎は、奥祐筆を勤める伯父の旗本屋敷の一室で、異常な悪夢にうなされて、盗汗に、ぐっしょりと濡れて、目覚めた。
どんな内容のものであったか、目覚めたとたんに、記憶から遠のいてしまった。

しばらく、茫乎として動かずにいた。
自分が、燈の中に寝ていることに、はっとなったのは、それから、しばしの時刻を移してからであった。
たしか、行燈のあかりは、消した筈であった。
ぱっ、とはね起きた新八郎は、床の間を振りかえった。
愕然となった。
柱から柱へ——一条の縄が、二尺あまりの高さに、ぴんと張ってある。拝領の太刀は、そのむこうに在った。
桜の間で、きかされた宗矩の忠告が、矢のごとく、脳裡を掠めた。
——なんとしたのだ、おれは！
悪夢にうなされて、全く気づかなかったおのれをあざけりつつ、新八郎は、縄の上を跳び越えて、拝領太刀を摑んだ。
一閃。
縄を両断した。
「呀っ！」
新八郎は、かっと目を剝いた。
信じられぬことが起った。縄を断つとともに、その切尖三寸あまりが、ポロリと折れ落ちたのである。

火焔問答

一

一日、小やみなく降っていた秋雨が、ようやく、あがって、夜空には、無数の星が生れていた。見わたすかぎり、波うっている屋根が、黒く沈んで、江戸の街のねむりは深い。灯影は、もうどこにも見当らぬ。

この暗い寂寞をみださぬ不思議な闘いが、とある屋敷の屋根で、展開されていた。

母屋の屋根の隅の稚児棟に蹲った黒影と、二間余離れた土蔵の屋根の上棟に伏した黒影と——。

この二個の黒影は、もう四半刻も、身じろぎもせずに、互いに、対手の動きに応ずる迅業をとるべく、全神経を張って、息をひそめているのであった。

星明りの中に放射しあう無言不動の鋭気は、夜気を蹴散らして白刃を嚙み合せるのよりも、もっと凄じい生命力の燃焼を、それぞれの体内に強要していた。

母屋の屋根にいるのは、つい先刻、第五試合の勝者・菅沼新八郎を、その寝所に襲って、拝領太刀の切尖三寸を両断して来た「母影」であった。

土蔵の屋根にいるのは、老いたる忍者服部半蔵であった。

半蔵は、「母影」が、新八郎の寝所から抜けて出て来たところを、突如として、攻撃して、目にもとまらぬ無音の争いを、地上から屋上へ移して、この対峙に持ち込んだのである。

半蔵は、地上の闘いに於て、早くも、これが、遠藤由利を襲った曲者とは、別人であることを、看破していた。

遠藤由利を襲った曲者は、若さの迸るままに、無謀ともいえる慓悍な野性ぶりをしめした。それにひきかえて、今宵、出会った敵は、一瞬の動きにも、妖しい化生の魔気にも似た、完璧な忍びの術を閃かせたのである。

まさしく、半蔵は、二十年ぶりに、あの老いたる「影」の女に、出会うた。

おのれを悩ませていた予感が、適中したのを、半蔵は、知らされたのである。

——やはり、そうであったか！

母屋の屋根へ追い上げて、おのれもまた土蔵の屋根へ躍り上り、ひそとして、闇に利く目を据えた半蔵は、名状しがたい烈しい昂奮で、枯れ身の内に遽に血汐が沸きたぎるのをおぼえていた。

半蔵は、二十年間、一日たりとも、あの老いたる「影」と、不思議な生い立ちの女影を、脳裡からすてたことはなかった。

半蔵をして、伊賀流忍びの業を大成させたのは、「影」父娘であった、といえる。父娘の氷のように冷やかな眼眸が、常にどこからか、自分にそそがれていて、それが、半蔵に、異常の刻苦をなさしめたのである。

「影」が、おのが部下六十余名を悉く討死させることによって、「風盗」一族を勦滅した非情

極まる作戦は、半蔵の忍者たる自覚を決定せしめた。

もともと、半蔵は伊賀郷の忍びの家に生れ、青年に達した時には、家を継いで、伊賀三十六人衆を率いている秀れた忍者であった。

近江国にある伊賀郷は、山谷中に、土着の武士が、掌大の田畑を各々領分とし、険隘をたのみ、いささかの身分乍ら、相峙してゆずらず、絶えず小ぜり合いをくりかえしていた地域であった。

甲賀国もまた、同じ状態にあった。

両地とも、文華の中心たる京の都に近いおかげで、人間もまた、疾くにひらけて、油断のない神経の持主揃いであった。

小党分立の闘いは、むしろ強窃盗の仕合いと称すべき謀略を必要とし、山谷林藪の峻嶮を越えて、撃ち合う地侍たちが、おのずと、偵察の術に長じたのは、当然であった。

天正十年六月二日、織田信長が、本能寺に殪れた時、徳川家康は、穴山梅雪を伴って、泉州堺の町に在った。

家康は、信長父子異変の急報があるや、即座に、本多忠勝、酒井忠次、榊原康政、井伊万千代ら、三十余名をひきつれ、本国岡崎へ帰る方途を測った。

街道はすでに、明智光秀の軍勢によって占められ、間道は、異変をきいた土匪が蜂起して、これを塞いでいた。

枚方より河内の内尊延寺を通り、草地の渡をわたり、宇治田原口へ出て、ここから、近江国信楽へ抜ける順路をえらんだものの、一揆の主力が、甲賀の地侍の組んだ徒党ときいて、ハタと立

往生した。名にし負う甲賀の忍びの集団に襲撃されては、突破はおろか、生命もおぼつかなかった。

この時、本多平八郎が、ふと甲賀郡信楽多羅尾の領主多羅尾四郎右衛門光俊の四男で山口藤左衛門光広という旧知が、田原にいることを思い出した。山口光広は、宇治田原城主山口勘助長政の養子となっていたが、養父との折合いわるく、別の家に住んでいた。平八郎は、馬を駆って、光広をたずね、田原山中の嚮導をたのんだ。

すると、光広は、その任務をはたすには、自分よりも、もっとふさわしい伊賀侍がいる故、それを先導させようと応えた。

おかげで、家康たちは、勢多より信楽、伊賀の境の土岐峠を越えて行ったが、路次になんの危険もおぼえなかった。山口光広がつけてくれた護衛の伊賀侍が、甲賀衆一揆を追い払ってくれた証拠は、路傍に仆れている数多くの屍骸がしめした。

家康たちが無事に、伊勢の白子浜に出た時、護衛者は、はじめて、その姿をあらわした。服部美濃平蔵と名乗った。したがえている忍者は、わずか十二名であった。

服部半蔵の父であった。

美濃平蔵は、山口光広から、家康の護衛を依頼されるや、甲賀の忍者たちと雌雄を決すべき秋が至ったと決意して、その部下八十七名を率いて、その先導をなし、見事にその任務をはたしたのであるが、おのれもまた部下の大半を喪ったのであった。

家康は、この働きを嘆賞して、後日必ず報いることを約した。

美濃平蔵は、それから半年後に、甲賀衆の一人に襲われて、逝ったため、その子の半蔵が、徳

川家に仕えることになったのである。

忍目附として、服部半蔵が、破格の地位を与えられ、三十余年間の長いあいだ伊賀三十六人衆をもって、将軍家の身辺警備に就いていたのも、父美濃平蔵の働きのおかげであった、といえる。

したがって、半蔵が、木曾谷に、「影」を訪うた時も、おのれがただの忍者ではないという誇りを持っていたのである。

ところが——。

「影」父娘の、惨烈無比の面目ぶりを見せられて、半蔵は、遠くおよぶべくもないおのれを慙じたのであった。爾来、半蔵は、公儀忍目附の頭領としての日常坐臥の振舞いはなさず、常に、蔭に生きる忍者としての心掛けを忘れず、異常の刻苦をつづけて来たのであった。

二

いま、ゆくりなくもめぐり会うた女影を、三間の彼方に凝視して、半蔵は、いわばおのが生涯の最大の好敵手に向って、二十年間鍛えた秘術をかたむけつくす闘志を、枯木に似た痩身に漲らわたらせたのである。

老いの身には、女影を捕え得る術があった。平蜘蛛の術であった。

五体を地に伏せて構える隠身遁形は、裏五遁のうちの蝦蟇の術に似ているが、蝦蟇の術は、自らを一塊の土と化して隠忍する守勢であるのに対して、平蜘蛛の術は、逆に攻勢の形であった。敵にむかって、音もなくするすると迫るのは、蛇行の術という。そして、石の根に添い、樹の

元に寄り、あるいは土の凹みに伏し、全くそれらの物と同化して、脈搏さえも絶ったごとくに、凝然とおし鎮まって、たとえ、棒で打たれ、刃物を振り下されても、更にピクとも動かずに、我慢しつづけるのを、蝦蟇の術という。

しかし、平蜘蛛の術は、蛇行する際すでに、敵を襲う猛気をひそめて居り、静止するや、すでに、敵の弱点を看破していて、これを捕える手段が成っているのである。

敵に、おのれの存在をみとめさせて、すこしもはばからなかった。ただ、こちらが動かぬのは、次にとるべきいかなる手段もないため、と敵をして安心させる時かせぎにすぎなかった。突如として、四肢を発条として跳躍させる刹那、数条の鳥黐縄を、投網のごとく、投げ拡げることになる。

この平蜘蛛の術を使うために、半蔵は、背鎧を身につけていた。これは背面を守る革と鉄鎖で作った具足であった。(野戦を目的とした忍びは、俯伏せに睡るのであった)

半蔵が、平蜘蛛の術を使うべく、甍そのものと化して、土蔵の屋根の上棟に伏しているのに対して、母屋の稚児棟に在る「母影」は、浮身の姿勢をとっている。

浮身の姿勢とは、恰度、水面へ首だけ覗けて、四肢を自由な形に遊ばせているのに似ている。これは、石火の攻撃を受けて、間髪を入れずに、飛鳥のごとく、自在に身を躱すための姿勢であった。

——女影め、わしを甘く見てとっている。

半蔵は、思った。

菅沼新八郎を泊めたこの旗本屋敷内には、柳生道場から選ばれた手練者が、四十余名も、詰め

ていた。半蔵が、宗矩にすすめて、そうさせたのである。

半蔵は、この多勢の使い手たちを、必ずや、「影」が、睡らせようと企てるに相違ない、と思ったのである。

はたして、新八郎を囲む祝宴の席に、はこばれた酒には、睡り薬が混じられていた。

腕前たしかな柳生道場の高弟たちは、みるみるうちに、泥酔して、いぎたない恰好で、枕をならべてしまった。

――女影め、その光景を、天井裏から、見下して、北叟笑んだ。その時、お前は、わしに敗れたのだ。

老いたる「影」が、おのが部下六十余名を玉砕せしめたからこそ、「風盗」族は、油断したのではなかったか。

睡り酒と知りつつ、柳生の面々が飲むにまかせて、すてておいたのは、こちらをあなどらせる巧妙な心理作戦にほかならなかったのである。

――お前の浮身の姿勢には、わしを軽蔑しているけはいがある。のめのめと、睡り酒を、柳生門下に飲まされたわしを、耄碌した、とあなどっている。

――女影よ、はたして、わしが、耄碌しているかどうか、見るがよい！

一瞬――。

半蔵は、身を起しざま、ぱっと、七本の鳥黐縄を、手もとから放った。

目的は、女影に、行動を起こさせるためであった。縄に手ごたえがあるのを期待してはいなかった。

次の刹那――半蔵は、見た。

女影が、飛び躱すかわりに、右手を大きく旋回させるのを――。

「しまった！」

思わず、その声が、出た。

女影の右手から、唸って発した一本の鎖綱が、大きく開いた七条の鳥黐縄を、一瞬にして、巻き取ったのである。

たばねられた鳥黐縄は、強い力で曳きしぼられて、半蔵は、不覚にも、よろめいた。

「母影」は、決して、半蔵をあなどってはいなかった。あなどったとみせて、半蔵の平蜘蛛の術に応ずる業をかくしたのである。

半蔵は、夜空を翔けるに似て、稚児棟を蹴って宙のものとなった速影を見送りつつ、鋭く、歯摺りの口笛を鳴らした。

その口笛の鳴りおわらぬうちに、屋敷の内外に、およそ十数箇所から、一斉に、篝火が燃えあがった。半蔵の合図を待ちかまえていた伊賀三十六人衆のしわざであった。

だが、地上へ降り立った筈の「母影」の姿は、どの篝火の明りの中にも、浮かびあがらなかった。

「母影」の代りに、あかあかと照し出された庭上へ、一人つッ立ったのは、拝領太刀を両断された菅沼新八郎であった。

曲者が忍び入ることは、予知されていて、このような警備がなされていたのを、はじめて知ら

された新八郎は、拝領太刀を両断された無念の上へ、さらに云おう様もない屈辱をあびなければならなかった。

血走った眸子を八方へめぐらして、もし、曲者の片影が、ちらとでも見えたならば、まっしぐらに突撃すべく、猛気で総身を顫わせんばかりであった。

と――。

新八郎は、左手に携げた差料の鐺に、ほんの微かな力が加えられるのを感じた。

「……！」

冷水をあびせられるような戦慄が、背すじをつらぬいた。

いつの間にか、曲者は、気配もなく背後に忍び寄って、鐺を摑んだのである。

新八郎は、おのれに絶望した。不覚というもおろかであった。捕虜となったも同然の状態に置かれたのだ。

「母影」にすれば、これほど巧妙な隠身はなかった。伊賀三十六人衆の目がはずれている唯一の場所が、新八郎の立つ地点だったのである。なぜなら、新八郎の周囲は、新八郎の剣にゆだねられていたからである。

新八郎は、鐺に力が加わったと感じた刹那、反射的に右手を柄にかけていたが、それなり、抜くことも叶わず、金縛りに遭ったように、大地をふまえたまま、微動もせぬ状態を、しばし、つづけて、ついに汚辱にまみれた血汐の滾りが、極限に来たのを知った。

「……むっ！」

口腔いっぱいに渾身の気合を含んで、新八郎は、猛禽が羽撃くように、躍りあがった。

刀の鞘を曲者に与え乍ら、地上五尺の宙で、もんどり打ったのは、御前試合で示した咄嗟の極意、如意輪剣であった。

一回転しざま、背後の黒影へ、きえーっと、振り下した一撃は、足が地面へ着くよりも迅かったかと、思われた。

かっと手ごたえあって、奇怪にも、黒影が、ひと握りの小さな黒い球と化すのを、新八郎は、みた。

球は、次の瞬間、微塵に砕け散った。

そして、それは、ぱっと白煙を噴くや、篝火の赤い照明のただ中で、白銀の光芒を、流星のように、八方に飛ばしたのであった。

のみならず――。

あまりの烈しい光に目晦んだ新八郎が、

「おのれ！」

と、双眸を剝き直してみれば、光芒の流れ落ちた地点には、それぞれ、形も同じ黒影が湧き立って、跳梁しはじめていた。

新八郎は、忍びの術のうちの火焔遁形の幻惑と知りつつも、その孰れのひとつが実体であるか、見分けることができなかった。

三

凄じい火焔が、風を呼び、その風がさらに火焔をあふって、夜空は、炎々と焦げていた。

ここ——湯島台の一隅の、神域の守り木にふさわしい樟の巨樹の根かたに蹲って、その鮮烈たる夜景へ、冷たく澄んだ眸子を送っている「母影」の孤影は、いっぴきの女狼が、甲羅を経た老狐と闘って、その眷族の包囲から能く脱して、しずかに憩うに似ていた。

老狐が、二十年前、じぶんを犯し、「若影」を生ませた人物であったことに、どのような感慨をおぼえているのか——冷たく澄んだ眸子に、それは、みじんも泛べられてはいない。放心——それであったろう。疲労を、すみやかに癒すために、人間ならば当然起すであろう感慨も、この非情の女忍者の心は拒んでいるようであった。

やがて、火焔が沈み、余燼から舞いあがる黒煙も、しだいに薄れはじめた。

「母影」は、立ち去るべく、身を起そうとした。

その時であった。

巨樹のうしろから、ひとつの声が、かけられたのは——。

「二十二年前を想い出す……」

穏かな、ひくく抑えた語気であった。

「母影」は、闇の中に、大きく、かっと双眸を瞠いた。

「そなたとわしは、風盗の砦を、谷をへだてた丘の上から、眺めていた。そなたは、坐っていた。わしは、立っていた。……砦の前方では、火柱が立った」

「……」

「いまの状況と、似ているではないか」

半蔵は、まだ巨樹の蔭から出ようとせず、「母影」もまた、微動もしなかった。

「油尽きて燈火滅す、と申すが、因果はめぐるものと、知った。……あの時、わしは、そなたが、女子であることを看破した。そなたは、憤って、わしを討って取る業をそなえていたにも拘らず、反撃して来なかったばかりか、なんの抗いも示さず、わしの意のままにしたがった。何故に、わしに、肌身をゆるしたのか、今日まで、解けぬ謎となって居る。あらためて、訊くが、何故に、わしに、肌身をゆるしたぞ！」

「……」

半蔵は、待った。しかし、ついに、「母影」は、こたえなかった。

「よい。こたえたくなくば、きくまい。しかし、ただ一度の契り乍ら、そなたが、影の家の後を継ぐ者を生んだのは、かくすすべはない。……そなたは、わが子を、影と名乗るにふさわしい忍者に、よう育てあげた」

「……」

「わが子と知らずに、襲うてみて、わしは、舌をまいた。あと十年も経てば、母よりも、祖父よりも、秀れた忍者となろう。……そなたは、おそらく、この服部半蔵が父親であることを、わが子に教えては居るまい。そなたは、忍者の世界に、親子の情はないと、申したいのであろう。わしも、昨日までは、そう思うていた」

「……」

「嗤うであろうが、わが子と闘ったと知った時に、存念が変った。……そなたに、わが子をいとおしむ情がないとは云わせぬ。されば、このわしの胸にも、その情が目ざめたとしても、ふしぎはない。……御世おさまったこの泰平の時に、忍者であるが故に、骨肉が相食まねばならぬ宿運

と、きめるのはおろかではあるまいか」

「……」

「そなたが、若を使って、拝領の太刀を次々と奪っている目的も、ほぼ想像はついて居る。しかし、わずか二人の力で、この強大な公儀の権勢に挑むのは、あまりにも、無謀であろう。冷静に、はたから眺める者には、その結末は、火を見るよりも明らかなのだ」

「……」

「わしが、そなたに、望むのは、三代を継いだ者の、秀れた忍びの業を、絶やすな、ということだ。徳川家に随身せよ、とは申さぬ。無謀の挑戦を止めて、木曾谷へ帰ってもらいたい」

半蔵が、そうさとして、巨樹の蔭から、歩み出るのと、「母影」が、すっと立って、向きなおるのと、同時であった。

しばし、両者は、闇を透して、じっと、瞶め合った。

「母影」が、口をひらいた。

「服部半蔵ともあろう忍者が、そのくりごとを云うために、ここまで尾けて来やったのか？」

「くりごとであろうか。そなたが、ここへ現れると察したわしが、ただ、くりごとだけを申すために、一人で、のこのこ参る筈があろうか。伊賀三十六人衆が、すでに、六組に分れて、東西南北、天地の備えをかためて居る。伊賀流捕物の秘術を配るのに、ぬかりはない。のがれられぬところと知るがよい」

「なんの……」

「母影」は、冷やかに一蹴した。

「半蔵殿。お前が、若の父親であることは、まぎれもない。わたしは、影の家の忍びの術をつたえる者が欲しかったので、お前の意のままに、したがったまでじゃ。その直後に、わたしは、不用となったお前を殺してしまえばよかったのじゃ。ふと、慈悲をおぼえて、お前を去なせてしまったことを、あとで、どんなに悔いたことか。おかげで、二十年後に、お前のくりごとをきくわずらわしさに堪えねばならなんだ。……若は、わたし一人の子じゃ！　お前などに、今更、父親面をされてたまろうか！　忘れまいぞ！　影の家に、情というものはない。お前こそ、それを一番よく知って居るものを、老いの侘しさにかこつけて、存念を変えたなどと、その小ずるい詐しかたに、のめのめと乗る影と思うてか。……わたし母子とお前のあいだには、必死の術の競いがあるまでじゃ！　みごと、わたしを生捕ってみよ！」

昂然と云いのこすや、「母影」の黒影は、はや、翼を得たもののごとく、地を蹴って飛び立ち、あっという間に、巨樹の高みへ、消えていた。

秘術

一

猿に似て、しかも猿よりも迅く、天に冲する樟の巨樹の、梢の中へ消える女影を、服部半蔵は、見送ってから、ひとつ、老人らしい溜息をもらした。

——やんぬる哉！

その眸子は、しかし、闇を透して、梢の一点へ、鋭く当てられて、次に女影がとるであろう行動を待ちもうけた。

数秒を置いて、そよともせぬ梢の内から、翅音もたてずに飛び立つ鳥影宛然に、隣りの杉の樹へ向って、二間余りの宙を翅ける黒影を、半蔵は、見遁さなかった。

次の瞬間——。

その黒影は、石のように、地上へ落下して来た。

跳躍をあやまったのではなかった。

「母影」が、つかんだ杉の枝は、疑似枝であった。

半蔵は、「母影」が、樟の巨樹をかけのぼって、隣りの杉へ、飛ぶことを、予め期して、幾本かの枝を落して、かわりに疑似枝をくくりつけておいたのである。

「母影」が、この湯島台地に、しばしば憩うことを、半蔵は、しらべあげていた。

忍者というものは、四方に敵に待伏せられる危険がある時は、必ず、巨樹の根かたを憩いの場所にえらぶ。頭上へ、身をのがれさせるためである。

木立から木立へ、空中を飛び移って、姿をくらます法は、忍者の最も得意とするところである。

一見して、樟と杉との空間の距離は、飛翔不可能と目測される。だからこそ、「母影」は、わざと、樟の根かたに憩うたのである。

ところが、半蔵の方では、さらに、その裏をかいて、杉の高みに、疑似枝を用意したのである。

「母影」の敗北とみえた。

風をきって、落下した「母影」は、地上一間あまりの宙で、くるっととんぼ返りを打つと、すっくと、地面に立った。

とみた刹那には、もう、後方にある社殿へ向って、矢のように奔っていた。

半蔵が投じた鳥鋼網は、落下の地点で、正確に拡がったにも拘らず、どうくぐり抜けたものか、掠め去る黒影は、むしろ悠々たるものにさえ眺められた。

「母影」が、社殿の葛石から回廊の擬宝珠勾欄へ、そして、そこから宝鐸の下った軒へ、二段跳びに躍りあがって、たちまち、鴟尾の上へ立ったのは、ひと呼吸の間といっても、誇張ではなかった。

だが——。

「母影」の、この逃路もまた、半蔵の予め期していたところであった。

たちまちに、春日造りの大屋根の背面から、三個の黒影が、棟上へ、ぬっと出現したかと思うや、一斉に、「母影」めがけて、飛礫を撃った。

その一個は、鴟尾にあたって、夜目にも、白く、煙のようにぱっと砕け散った。これは、蠟石を微塵にした粉末で、薄紙に包んだものであった。黒衣に当れば、白い斑点がついて、忽ち目印となる。石粉の中には、芥子を混じてあり、目つぶしの狙いでもあった。

「母影」は、ほんのしばし、鴟尾の蔭へ、身を伏せていたが、突如、半蔵が彳む方角へ向って五体を投じた。

だが——その五体には、一本の綱がむすびつけられてあり、半蔵の頭上まで飛んだ黒い軀は、一個の振子となって、反対側へむかって、びゅーんと、半円の弧線を描いた。

のみならず、綱が、水平に張った刹那、錘と化した黒い軀は、綱を切りはなして、さらに、三間の遠くへ、飛んでいた。

「母影」は、安全な地点に、遁れ得たかと、思われた。

ところが、不運は、其処にあった。

たちまちに、地を蹴って奔ろうとした「母影」を、思わず、その場へ凝結したように立竦ませる者が、一間のむこうに、地から湧いたように、立っていたのである。

立ち枯れの古木にもひとしい六尺余の痩身、ぼうぼうと乱れた蓬髪、胸に垂れた長髯——鞍馬古流・鴨甚三郎利元にまぎれもなく、自然木の杖をついて、じっと、こちらを見据える静止相は、呼吸からも解放されてしまったような、どこにも生き身のけはいがないだけに、かえって、「母影」を、戦慄させた。

「母影」は、はじめて、腰から一刀を鞘走らせた。

数秒の対峙の間に、「母影」の心に絶望感が来た。

なんの構えもしめさずに、ただ、ひっそりと立つ老体が、背後の社殿よりも巨大な、おそろしいものに、眸子に映っていた。

半蔵と伊賀三十六人衆が、ここへ殺到して来ずに、何処かへ身をひそめてしまったのは、完全に退路を断ったことを、意味していた。

「……」

「母影」は、敵わぬ乍らも、死中に活をもとめる一撃を送るべく、じりりっと、半歩出た。

「待て！」

甚三郎が、制した。

「かかって参れば、この杖が、そなたの脳天を砕く。女性と判ってみれば、それはなるまい」

そう云ってから、甚三郎は、ゆっくりと、おのれの前の地面へ、杖で、一本の線を引いた。ふしぎにも、その線は、白い光を発した。

「これを越えてはならぬ。越えれば、余儀なく、脳天を砕かねばならぬ。引きかえして、伊賀衆と再び争うて、捕えられるにせよ、果てるにせよ、それは、この年寄の関り知らぬところだ」

甚三郎としては、服部半蔵の依頼を受けて、この場所をまもっていたのである。自分に襲って来なければ、敢えて、こちらから、攻撃する意志はなかった。その約束であったし、女性と看破してみれば猶更のことであった。

ただ、この逃路をふさいだだけで、おのが役目はすむのであった。

甚三郎は、しずかに、「母影」へ背中を向けて、歩み去って行った。

「母影」は、微動だにしなかった。

甚三郎の後姿が、木立の闇に溶けた時、「母影」は、ふと、水のにおいを、かいだ。

左方の杉木立の中に、大きな池があったことに、ようやく、気がついた。

――遁れられる！

「母影」は、大きく、斜横に跳躍するや、木立の中へ奔り込んだ。

一瞬、そこに伏せていた伊賀三十六人衆の手から、粉飛礫が、「母影」に集中した。

「母影」は、その二三個を胸に、背に受けつつ、杉の幹をかけのぼって、枝葉もゆすらずに、次々と飛び移って行った。

だが、粉飛礫には、黄燐が混じてあったとみえて、梢のあわいを掠める黒衣の姿は、妖しく光を撒いた。

地上の忍者たちは、余裕をもって、「母影」の速影を追った。

この湯島台にある瓢箪池は、かなり大きなもので、池中に、方三間あまりの島を浮かせていた。

島といっても、一本の松が、由来ありげに、樹冠をひろげているばかりであった。

「母影」が、岸辺にそびえる杉の高みから、綱も用いずに、四間余りの距離を、かるがると翔けて、その松の梢へ移ったのは、流石であった。

のみならず、「母影」は、半蔵が周到にも、そこにも用意しておいた幾本かの疑似枝に騙されることなく、するすると幹をつたって、頂上に達した。そこにねむっていたであろう、小鳥が一

羽、あわただしく、中空へ羽音をたてて行った。

「母影」は、さらに、その頂上から、反対側の杉の木立の中へ、飛ぶことを考えていたに相違ない。

その杉木立の下方は、断崖となって、町屋通りにつづいている。そこまで遁れれば、身を匿す場所に不自由はしないのであった。

二十年前の彼女であったならば、その頂上で、ひと息つく疲労はみせなかったであろう。

そこから、向いの岸までは、さらに五間の距離があり、その空間の広さが、思わず、「母影」に、呼吸を整える数秒かを必要とさせた。

後方の岸辺の木下闇から、その光る黒衣めがけて、火筒が、轟然と鳴ったのは、その瞬間であった。

火筒から発射されたのは、砲弾ではなく、数十条の鳥黐網であった。

夜目にも鮮やかに、蜘蛛の巣のように拡がって、松の樹冠にかぶさった。

「捕った！」

木下闇の中で、半蔵は、叫んだ。

しかし、そのよろこびは、早すぎた。

蜘蛛の巣にひっかかった黒い蝶のように、烈しいもがきをしめした「母影」は、不意に、光る黒衣の中から、するりと、白い女躰を滑り抜けさせるや、池の中へ、高い飛沫をあげて、とび込んでいた。

「おっ！」

半蔵は、二十年前に抱いた女躰を見せられて、思わず、呻いた。

波紋が大きくひろがった水面は、それきり、なんの変化も起さず、油のように黒い闇夜の色を湛えて、一個の裸身を呑んだのも、そ知らぬげに、静寂にかえった。

――池底が、川へ通じて居らぬ限り、脱出する方法は、あり得ぬが……。

伊賀三十六人衆が、池畔の要処要処を占めて、水面を見戍っているのである。

半蔵は池底へ消えた「母影」を、ふと、あわれんだ。

東の空がしらんで、仄明りが、ようやく、この台地をおとずれた。

二

この日――九月二十八日の朝は、やや強風の兆しがあった。空に一片の雲影もなく、遠く峙つ富士の峰が鮮やかに浮き立ちすぎていた。

第六試合にえらばれた関口弥太郎と佐川蟠竜斎は、それぞれ、門を出た時、富士山を望み見て、

「風か――」

と、同じ一語を呟いた、という。

富士山を見て、今日明日の天候気象の変化を予知するのは、当時の人々のならわしであった。余談になるが――。

富士山を正面に望む吉原の松かげに住む老女で、明日の天候を予言するに、百発百中、神の如く正確な者がいた。或る西国の大名が、高禄を以て、しいてこれを招き、おのが城下へともなって、天気予報を試みさせたが、こんどは、ふしぎな程さっぱり当らなかった。不審に思って、調べたところ、この老女は、娘時代から、じぶんの家の後に峙つ富士山に注目する経験を積み、朝、昼、夕、夜と、刻々に変るその色合、遠近濃淡の状態、雲のかかり具合などによって、四季に於ける天候の変化を卜するようになり、中年にいたると、富士山と気象との関係をのこりなく経験しつくして、天気の予言に全く完璧となったのである。ところが、西国に移された老女は、富士山が眼前にないために、城下からあまり遠くないところに見える高い山をたよりに、富士山で得た経験を応用してみたものの、ことごとく失敗したのであった。

真剣試合において、天候は重大な作用をおよぼす。

――強風となれば？

関口弥太郎と佐川蟠竜斎は、おのおの、胸に、秘策をねりつつ、江戸城へ向って、足をはこんで行った。

両者が、三之丸の北門である平川門の前で、ばったりと行き会うたのは、通るべき通路と時刻を指定されていたのであってみれば、べつだん偶然ではなかった。

とはいえ、必死の試合の前に、両者が顔を合せるのは、好ましいことではなかった。

肩を竝べて歩くのも具合がわるく、また、対手がたに道を譲るというのも面白くなかった。

双方、面識はなかったが、一瞥して、今日の敵であることを認めた。

関口弥太郎氏暁は、身の丈六尺三寸の偉丈夫で、三十歳を越えたばかりの男盛りであった。風貌も、造作が大きく、剽悍の気概を満たしていた。

それにひきかえて、佐川蟠竜斎は、五尺そこそこの小兵で、ずんぐりと肥えて、およそ兵法者の概念から遠い外見であった。面相も、鼻がひくく、どんぐり眼で、眉毛が八の字に垂れて、い

かにも、下卑ていやしげだった。年齢も、五十路の坂にかかっていた。

両者の服装も、対蹠的であった。

弥太郎は、もみ上げの頬髯をたくわえ、黒紋附に社杯をつけた尋常のいでたちであったが、蟠竜斎の方は、総髪のもとどりを真紅の紐で、たかだかと結びあげ、猩々緋の蝙蝠羽織をまとった演劇操りの舞台衣裳のようなさまであった。

両者は、対手を視て、足を停めた。

この平川門内から二之丸に入る梅林門まで、梅林坂という路を二町余も辿らねばならない。そのむかし、太田道灌が、霊夢に感じ、川越の三吉野天神を勧請し、城内に斎き祀り、地名に因って平川天神と号し、梅樹数百株を植えたところである。

この二町余の坂路を、就れが、さきに歩むか、である。

この気持は、当然、見送りの人々の間に伝わり、むしろ、そこから風波の立つ気配が生じた。

弥太郎は、紀州藩の師範であったので、藩邸の士を四名ひきつれていたし、蟠竜斎は、芝高輪に町道場を開いていたので、門弟を六名したがえていた。

一方は、御三家の威風を誇っていたし、他方は、旗本奴に対抗すべく起った町奴たちであった。

一瞬にして、双方から放たれる殺気が、烈しくぶっつかりあって、ただならぬ対峙となった。

弥太郎は、風格が大きかっただけに、

――これは、いかん！

と、思いかえして、藩士たちを振りかえり、

「ここで、お別れ致す」

と、告げた。

武家の挨拶には形式があり、手間をとる。まして、生還が期し難い別れである。鄭重に辞を交していれば、その間に、蟠竜斎を、やり過して、梅林門まで行かせることができる。

弥太郎の配慮は、しかし、無駄になった。

蟠竜斎側でも、別れの挨拶をはじめたのである。しかも、門弟のうち、ひときわ目立って無法者らしい男が、きこえよがしに、今宵の祝宴の用意のことまでも、大声に云いちらした。

やむなく、弥太郎は、挨拶をきりあげて、先に平川門をくぐって行った。すると、蟠竜斎の方も、話をぴたりと止めて、踵をまわしていた。

弥太郎は右側を、蟠竜斎は左側を、三歩の差をもって梅林坂へさしかかった。

と――。

弥太郎の面貌を、さっとひきしめさせる鋭気が、背後から放射して来た。

猶、弥太郎は、歩速も歩調も変えず、五歩を進んだ。

一陣の旋風が吹き抜けるにも似て、弥太郎の左方の空中を、蟠竜斎の円い小軀が滑走したかとみるや、その前方一間の地点へ、とんと降り立って、すたすたと歩きはじめた。

弥太郎の目もとの口辺に、微かな苦笑が刻まれた。

弥太郎は、蟠竜斎が、先に立つためには、脇をすり抜けるかわりに、自分の頭上を跳躍して越えるであろう、と予測していたのである。その無礼は、許されなかった。

その場合の処置は、考えてあった。

識者がいて、弥太郎の歩みへ目を当てていたならば、蟠竜斎が跳躍した刹那、通路の砂上に、弥太郎の革草履の跡が、二歩だけ、かき消えたのを視てとったであろう。

もし、蟠竜斎が頭上を越えようとしたならば、弥太郎もまた、六尺三寸の長軀を撥ねて、その無礼の振舞いに対して、凄じい足業の猛撃を送るべく、咄嗟に歩行のかたちを変えたのである。

蟠竜斎の示威は、鮮やかであった。

弥太郎の頭上を避けて、その左側の空中を飛び、しかも、弥太郎の真正面の地点へ降り立ってみせたのである。

弥太郎は、苦笑せざるを得なかった。

頭上を躍り越える業ならば、一流兵法者の誰でもがなし得る。前者の左側を回り乍ら、真正面に降り立つためには、空中に曲線を描かねばならぬ。尋常の修業でなし得る業ではなかった。鷹の紋かくし、という秘術であった。鷹の白い腹には、褐色の紋がある。獲物を頭上から襲う時には、この紋を見せざるを得ないが、背後から横あいを翔けて、鉤爪をひっかける時は、身を傾けて、脚で、紋をかくすかたちをとる。

蟠竜斎の跳躍の姿は、まさしく、猛禽の飛翔するに似ていた。

梅林門が、むこうに近づいた。

と――。

こんどは、蟠竜斎の醜い顔面が、びくっと痙攣した。

微かな鋭い音が、右側を掠め過ぎた。

蟠竜斎は、二間あまり前方の宙で、一羽の雀が、ばたばたと、羽ばたいて、地面へ落ちるのを

見た。

近づいてみると、雀の両眼は、みごとに小柄で刺し抜かれていた。

弥太郎は、蟠竜斎の背中から直線を引いたような まうしろを歩いていた筈である。にも拘らず、小柄な蟠竜斎から二尺余の右側を円弧を描いて飛び、しかも、真正面の空間に於て、雀をとらえたのであった。

これが、蟠竜斎の示威に対する弥太郎の報復であった。

三

西之丸に設けられた二つの剣士控の間は、柳生宗矩の配慮によって、遠くへだてられていた。

弥太郎が与えられた控の間の二間床には、沢庵の筆になる雄渾の三文字、

「不動智」

の軸が、かけてあった。

弥太郎は、それをしばらく、じっと眺めていてから、ごろりと横臥して、目蓋をとじてしまった。

蟠竜斎が与えられた控の間の床壁には、豪快な一筆描きの昇天竜の図があった。

蟠竜斎は、それへ、一瞥をくれただけで、茶坊主がはこんで来たお茶にも手をつけず、西面の壁に向って、結跏趺坐の姿相をとって、微動もしなくなった。

弥太郎は、柔術。

蟠竜斎は、拳法。

その称えるところは異っている、が、起るところは同じであった。

弥太郎の父関口柔心は、はじめ刀槍の技をもって、諸方武者修業を経て、長崎に遊び、一人の西洋人に会って、拳法を授った、と「紀子雑談」は伝える。

拳法をもたらしたのは、支那人陳元贇であったという説は、蟠竜斎がその直弟子に公言しているところから信じられている。

いずれにしても、父柔心からその至妙の芸をうけ継いだ弥太郎と、巷間に広くその技をしめした蟠竜斎によって、無刀術は、その体系を完備していた。

拳法というのは、達磨大師が、嵩山少林寺で、面壁坐禅九年余、禅の奥義を極める余暇に編んだ印度風体操術から起った。これは、山奥に住むために、野獣の襲来に備える防衛術といえた。

柔心が、柔術を称えた頃は、まだ、武門の間では、一種の魔術のごとく受けとられていた。

上田侯真田信幸が柔心の長子八郎右衛門氏業を招いて、

「柔術の妙を極めた者は、壁の上を歩くときくが、やってみせてくれぬか？」

と、所望した。

氏業は、莫迦々々しく思ったが、真面目な面持で、

「旨いお菓子を頂戴できますならば、お目にかけましょう」

と、こたえた。

信幸には、その皮肉が通じなかったので、本当に、菓子を盛った三方をはこばせた。

氏業は、畳に横たわって、その一個をむしゃむしゃ頬張り乍ら、壁へ足をかけてみせた。

信幸が、憤怒するや、ぴたっと正座して、柔術のなんたるかを、とうとうと説ききかせた、と

いう。

柔心には、三子があり、長子氏業、次子氏英、そして、三男が弥太郎氏暁であった。

兄弟のうち、特に傑出した天稟をそなえていたのが、弥太郎である。

十六歳の時、紀州に召されて、師範の禄を賜った程である。その時、紀州侯の面前で、弥太郎は、庭の中の池の畔に、木枕を置いて、その上に立たされた。当時、剛力をもってきこえの高かった根来法師・山本丹生谷という者が数間を突進して、渾身の力をもって、弥太郎を、突きとばして、池中へ落そうとこころみた。しかし、弥太郎は、三度び突かれても、ビクともせず、四度びめに、丹生谷の両手が胸に当った間髪の間に、宙へ跳んで、逆に対手を池中へ躍り込ませていた。

丹生谷の剛力は、戸板を胸にあてて、早瀬の渓流をさかのぼって、逆浪を左右にわけた、といわれるくらいであったにも拘らず、弥太郎の胸を突きとばすことが不可能だったのである。

これに対する蟠竜斎は、すでに、弥太郎のうしろから、正面へ、二間の距離を、矩形に翔け抜ける鷹の紋かくしの秘術をみせた程の手練者であった。

やがて、正午の刻を告げる鐘の音が、城内に鳴った。

不吉鳥

一

この日、将軍家光が、遠藤由利の褥から起き出て行ったのは、そろそろ巳刻（午前十時）になろうとする時刻であった。

ふだんならば、卯刻（午前六時）には起きて、さっさと中奥へ戻るならわしであったが、家光は、起しに来た中臈頭に、

「風邪じゃ」

とこたえて、由利を背中から抱きかかえて、離そうとしなかったのである。

流石に、二刻もおそく起きたのが面映かったのであろう、家光は、女中たちの目を避けて、お小座敷を抜けて、そっと、中奥へ戻って行った。

そのために、女中たちは、まだ、上様は御寝中と思い込んでいた。

ひとりになって、なおしばらく、由利は、虚脱したように、うつろに眸子をひらいて、横臥していた。

やがて、由利が、考えたのは、

——湯を使おう。

そのことだった。

緋緞子の掛具をはねて、のろのろと起き上るまでには、さらに時間を置いた。

将軍家にけがされ、さらに、「影」と名のる闇の男に忍び入られるや、自ら挑んでからだを与え、そしてまた、夜に入って将軍家を迎えて放恣な痴愚の行為をくりかえさせられた由利は、一夜にして、生気が抜けはてて、老婆のように肌膚がおとろえてしまったような気がしていた。

由利は、白羽二重の寝召姿のままで、跫音をしのばせて、寝所を出た。

さいわいに、年寄も中年寄も中臈もお伽坊主も、遠くへ下っていて、気配はなかった。

御寝中と心得て、廊下を暗くしてあったのも好都合であった。由利は、影のように掠めて、湯殿に入った。

湯殿は、ごく近頃になって設けられた立派なものであった。（それまでは、将軍家も、御台所も、女中たちも、ただ、湯でからだを拭いていただけであった）

高麗縁の八畳敷きにつづいて、杉戸で仕切られて、五坪程の板敷き（流し場）があり、中央に、竹箍の白木の浴槽が据えてあった。浴槽は下から焚くのではなく、女中たちが、大きな玄蕃（桶）で、湯と水を運んで来て、加減を整えるのであった。

そして、いつ入ってもいいように、午前中は絶えず、湯は、槽中に満たされていたのである。

由利は、湯殿に入るや、すでに、誰かさきに湯を使っているのを知った。

襦袢、着物、掻取が、桐の装束箱に置かれてあり、洗手盥や鏡台や桂台や枠火鉢などが用意されてあった。

——だれであろ？

この湯殿に、午前中に入れる資格をもっているのは、前夜に将軍家の寵愛を蒙った筆上の中臈に限られている筈であった。

すなわち、今朝、入ることができるのは、由利だけなのであった。

由利は、憤りをおぼえて、そっと、仕切りの杉戸へ近寄った。

この時代のことである。明り取りの天窓が小さいために、昼間でも、灯が入れてあった。四方に据えられたそれらが、こもった湯気に赤く滲んで、微かにまたたいていた。

由利は、板敷きの上に、ながながと裸軀を横たえているのが、春日局であるのをみとめた。これが四十をすぎた老女とは、到底受けとれぬ、豊満な光沢をもった肌理のこまやかさであった。

糠を遣いおわって、ほんのりと色づいているそれへ、裾を高く執り、手襷をかけた若い女中が、手桶で浴槽から湯を汲んで、しずかに、かけていた。

……急に、由利は、胸の鼓動が高鳴るのをおぼえた。蝸牛が移動するように、隙間へあてた眸子を、そろそろとうごかすじぶんを、あさましいと思いつつ、止めるわけにいかなかった。

「もう、よい。つぎを――」

もの倦げに目蓋をとじたまま、春日局が、命ずると、女中は、心得て、繻巾を把って、まず、太股へあてると、ゆっくりと、十指でもみはじめた。

太股から臑へ――両脚の前がわをもみおわると、こわれものでも扱うように、小肥りの裸形を俯伏させて、臀部から下へ、もみ移り、やがて、ふたたび仰臥させた女中は、なんのためらいもなく、そおっと、口を寄せて、ふっくらと盛りあがった胸の桃頴を含んだ。

老女は、微かに、恍惚たる官能の呻きを洩らすと、なだらかな円みをえがいた腹から腰へかけての曲線を、なやましげにうねらせた。いつか、太股は、大きく左右に拡げられていた……。

そうして――どれ程かの時刻が移ったろうか。灯がゆらめくたびに、裸身を匐う微妙な陰翳が、肌を愛撫する女中の細い白い指に追われるように変化して、たゆとうばかりであった。

と――一瞬。

風もないのに、なにごとか、四箇の燭台の焔が、ぱっと大きくまたたいたかと見る間に、すうっと、仄暗く光を薄めた。ちろちろと左右に揺れて、ついに、ふっと消えはてた。

すると、暗くかげった隅々から、何やら薄気味わるい魍魎が、音もなく這い出て来るような、ぞっとする気配が、ひしひしと感じられた。

春日局も、一瞬にして湧いた陰々とした妖気に、陶酔からさめて、目蓋をひらいた。とたんに、何とも名状し難い恐怖の叫びを、口から迸らせて、小肥りの裸軀をはね起した。

はっとなって、由利が、天井を仰ぎ見ると、天井いっぱいに、巨きな影が、匐っている。

それは、まぎれもなく、戦いやぶれた落武者の、髪もざんばらに乱れ、具足もずたずたに破れ、穂先の折れた槍を杖にした悽愴極まる姿にほかならなかった。

春日局は、日頃の沈着はどこへやら、

「あ、あっ、あっ……あっ、あああ、あっ！」

と、絶叫しつつ、天井からむらむらと下りて来て、ひと摑みにしそうな異形の影を、必死にふせごうとする仕草をしめした。

しかし、この狂態は、ほんの膝をひと打ちする程の短い間であった。

春日局は、ばったり、俯伏せに倒れた。

由利は、この時、局が、微かに「ゆるして――たすけて……」と、呟いたように、耳にとめた。

ややあって、ふしぎにも、燭台の灯が、ふたたび、あかるく湯気の中に泛びあがって来た。

春日局は、すっと身を起した。その貌は、白蠟のように全くの無表情であった。

「かえで、懐剣を持て」

片隅にちぢこまって、顫えている女中に、抑えた声音で命じた。

女中は、意外な言葉に、春日局を訝しげに見かえしたが、かしこまって、立った。

由利は、すばやく、身をひるがえして、道具を置いてある衝立の蔭へかくれた。

女中が、装束箱から、懐剣を取って、洗し場へ戻り、うやうやしくさし出すや、春日局は、しずかに受取って……鞘を払いざま、一閃、女中の胸を、一突きに刺していた。

悲鳴をつらぬかせて、仆れ伏す女中を、じっと見下す春日局の双眸が、氷の如くひややかに光っているのに、由利は、異様な快感をおぼえた。

春日局には、おそらく、その過去に、霊鬼に祟られてもやむを得ない冷酷な所業があったに相違ない。

女中を刺したのは、度をうしなって、恐怖の叫びを発したおのが不覚ぶりを、他言されるのを懼れたからであった。

女中の屍は、乱心したという名目で、秘密裡に葬られるであろう。

由利は、ひそかに冷笑した。

この時、天井裏を、何者かが、音もなく去って行く気配を察知していたからである。

異形の影を天井に匐わせたのは、その者のしわざであり、由利には、その者が、なぜか、じぶんの寝所へ忍び入って来た「影」と名のる男と同一人であるような気がしてならなかった。

二

正午――。ふしぎにも、風は起らなかった。

関口弥太郎と佐川蟠竜斎は、同時に、東西の幔幕を割って出た。

孰れも期せずして、紺の刺子の稽古着、紺の袴、そして紺の鉢巻を締めた、全く同じいでたちであった。

六尺三寸の巨軀と、五尺足らずのまるまると肥えた小軀が、ゆっくりと歩み寄る光景は、しかし、同じいでたちであるために、かえって、その対照を鮮やかなものにした。

弥太郎の魁偉な面貌が、登城の折とすこしも変らぬ悠揚せまらぬ色を湛えているのにひきかえて、蟠竜斎の方は、なぜか、身の裡に疼痛でも生じているかのように、ひどく苦渋の形相と化していた。足のはこびかたにも、不自然さがあった。

二間の距離を置いて、対峙するや、まず、弥太郎が、右手を前に置き、左手を水平にさしのべる「居」の構えをとった。

おのれより丈のひくい対手に対する「屈」の姿勢ともいえた。下半身へ突入されないための構えであった。

目付は、北斗の目付――即ち、敵の眉間に置いた。

これに対して、蟠竜斎は、両足を揃えて、直立し、双手を、胸さきで合せた。

拳法の第一段「合掌」であった。剣で謂う青眼であろうか。虚実千変万化の秘術をひそめた基本の構えである。

それなり——両者は、画裡に入ったように、微動だにせず、睨み合った。

弥太郎が、狙うところは、ただ一手であった。

「関口流組討秘事口伝」中に、次の言葉がある。

「蹴込みの大事とあるは、敵に相対し、間合になると直ちに間を詰め、敵の臍の下、ユルギの糸を目当に、無念に蹴込むことなり」と。

弥太郎は、梅林坂上において蟠竜斎がしめした「鷹の紋かくし」の飛び業が、関口流蹴込みを封ずるための示威であった、と知っているだけに、意気地の上からも、蹴込みによって、対手を倒したかった。

だが、その豪快な技を揮う前に、どうしても、「鷹の紋かくし」を破らなければならなかった。

——よし！

念頭の造作に渉ることの愚をさとって、弥太郎は、居の形のまま、するすると進んだ。

「えいっ！」

一間の間合を、白砂に足跡もとどめずに滑って、弥太郎の手刀は、敵の胸部を搏った。

間髪の差で、蟠竜斎は、五尺の軀幹を三尺に縮めて、宙のものとした。

蟠竜斎の方が、蹴込みの術をえらんで、これを空中から、弥太郎の顔面へくれようとしたのである。

刹那、弥太郎は、身を沈めざま、左手で、敵の足くびを、発止と摑んで、逆ねじりに、その小

軀を振りとばそうと試みた。

神技といえたのは、これに応じて、蟠竜斎が、五体を旋回させつつ、一拳を弥太郎の頬へ襲わせたことだった。

両者は、ぱっと離れて、構えを変えた。

弥太郎が、次にとった構えは、左足を前に、左半身となって、腰を落し、双手の指先を下腹のあたりに置いた「合」であった。

蟠竜斎には、四肢のどこを逆にとられても、関節を自在にはずして回転させる術があると知った弥太郎の、これは、双手突きの構えであった。

これに対する蟠竜斎は、鷺のように右脚一本で、地に立って、左の膝を水平に挙げる奇妙な型を見せた。これは、拳法の「盾」にあたる防ぎの備えであった。

と——。

弥太郎の巨軀が、一瞬、大きく右方へ傾斜した。とみた刹那、右手を大地にささえて、その六尺三寸の長身を軸にしてびゅっと円弧を描いた。

左足で、敵の鷺脚を払うとともに、右足で蹴込む迅業であった。

蟠竜斎には、これにもまた応ずる飛鳥の敏捷な動きが備えられていた。

刎ねあがった次の瞬間、猛然と地上の弥太郎めがけて、落下した。

白砂を八方に散らす目まぐるしい組討ちが、そこに展開した。

組んでは、大兵の弥太郎に、歩があることは、慥かと思われた。

蟠竜斎が、敢えて組討ちをえらんだことが、二人の審判者には、解せなかった。

三

不意に――。

正審・柳生宗矩の右手から、白扇が飛んだ。同時に、副審・小野忠常の左手から、銅鑼が地べたへ落ちて、にぶい音をたてた。

宗矩と忠常は、左右から、上座の正面へ奔って、鯉口を切った。

両審判に、咄嗟の構えをとらせたのは、蟠竜斎が、弥太郎を組み伏せるやいなや、上座に向って、すっくと立ったからである。その片手には、白く光る得物が摑まれていた。

――すわっ！

宗矩も忠常も、蟠竜斎が、正体を現わしたな、と直感したのであった。

その小軀から発する鋭気は、なみなみならぬものがあったのである。

息づまる一瞬の対峙が過ぎると、蟠竜斎は、身を跼めて、宗矩が自分を撃った白扇を土の上からひろいあげて、ぱらりとひらき、手にした白い得物をのせた。

弥太郎は蟠竜斎の後方で、死んだように俯伏している。

蟠竜斎は、白扇を捧げて、宗矩の前へ、歩みよると、

「御見分の程を――」

と、さし出した。

一瞥して、両審判は、愕然となった。

白扇の上にのせられたのは、一本の肋骨だったのである。しかも、血痕すらもついてはいなかった。

蟠竜斎は、弥太郎の胸脇から、血も流さずに、それを抜きとっていた。（弥太郎は、一時失神しただけで、生命に別状もなく、苦痛も知らなかった）

これは、「猪骨の術」と謂い、拳法修練の一手であった。修業に、大豚を稽古台として用いるところから、この名称があった。技が神に入れば、筋肉の合せめから指先を突き入れて、肋骨を、するりと抜きとることができて、歩いている豚は、気がつかずに、そのまま行き過ぎて、一滴の血汐も、地面へしたたらせない、という。

無銘太刀は、蟠竜斎の手に与えられた。

宗矩が、西之丸の桜の間に入ると、そこに、ぽつねんと、老いたる忍者が、坐っていた。

宗矩は、服部半蔵の面貌が、一昼夜のあいだに、さらに十年も化けたように感じた。

「また、捕り損じたか？」

「いかにも――」

半蔵は、つつみかくさなかった。

「影」と称する忍者は、母子二人連れであり、昨夜、第五試合の勝者菅沼新八郎を襲って、拝領太刀の切尖三寸を両断したのは、「母影」の方であり、これを追い詰めたところ、湯島台にある瓢箪池に飛び込み、ふかく沈んだまま、ついにいまだ浮かんで来ない、と語った。

もとより伊賀三十六人衆が、池畔をかためて、水面へ視線をそそぎつづけているので、絶対にのがす筈はないのであった。

「ただ、懸念されるのは、伜の方が、昨夜、何処にひそんだか——そのことでござる」
そう言って、半蔵は、じっと、宗矩を見戍った。
「何処へ——？　何処へと申すと？」
宗矩は、眉字をひそめて、訊きかえした。
「遠藤由利殿は、それがしが取り返した太刀を携えて、大奥へ入った、と但馬殿は申されましたな？」
「申したが……」
「よもや、大奥まで、影は忍ぶまい、とも申されましたな？」
「お主！　影が、大奥に忍び入ったと疑うのか？」
「そうでなければ、さいわいでござる」
「……」
宗矩は、口を一文字にひきむすんだ。
昨夜、大奥には、なんの騒ぎもなかった。しかし、それは、「影」が忍び入らなかった証明にはならぬ、といまはじめて、宗矩は、気がついた。
数秒を置いて、宗矩は、急に、異常に緊張した面持になった。
宗矩は、関口弥太郎の控ノ間付きの茶坊主から伝えられた弥太郎の言葉を、はっと思い出したのである。
弥太郎は、試合場で息をふきかえすと立ち上り、一人で歩いて控ノ間へ入ったが、衣服をととのえると、すぐに下城して行った。

退出の際、茶坊主に、こう言いのこした、という。
「柳生殿に、つたえて頂きたい。本日の蟠竜斎の業は、拳法にても、柔術にても非ず、忍法と心得ました、と——」
宗矩は、茶坊主から告げられた時にはただ、
——蟠竜斎の前身は、忍者でもあったか。
と考えたにすぎなかったが……。
いまは、弥太郎の看破した事実が、非常に重大な意味があるような気がして来た。
宗矩は、すっと立つと、半蔵の視線に送られて、廊下へ出ると、足早やに、蟠竜斎の控ノ間に向った。
宗矩が、襖を開くと、すでに、さきに、忠常が、そこにいた。
忠常の前で、蟠竜斎が、両手をつかえていた。その顔面は、蒼白であった。
——ちがう！
宗矩は、肚裡で、呻いた。
試合場に現われた蟠竜斎と、この人物とは、酷似してはいるが、明らかに別人であった。
忠常は、宗矩をかえり見て、
「もはや、試合はおわったこと故、この儀、内聞にいたしてはいかがかと存ずる」
と、云った。
忠常の方は、肋骨が白扇にのせてさし出された時、はやくも、これは、蟠竜斎の贋者ではないかという疑惑を抱いたのであった。

そこで、この控ノ間にふみ込んでみると、はたして当の蟠竜斎は、部屋の隅に立てられた屏風の蔭で、悶絶していた。

活を入れられて、意識をとりもどした蟠竜斎が、慙じ入りつつ語ったところによると——。

西面の壁に向って、結跏趺坐の姿相をとっているうちに、ふと、背後に、わが影法師が動いたような錯覚をおぼえて、はっと頭をまわした——とたんに、当て身をくらって、それっきり、何もわからなくなってしまったのであった。

宗矩は、桜の間へ戻って来て、座に就くと、唐突に、半蔵に訊ねた。

「お主、血一滴こぼさずに、この但馬の肋骨を一本、奪い取れるか？」

「御所望によっては——」

半蔵は、ためらわずに、こたえた。

「そうか、やはり——」

宗矩は、頷いて、

「本日の試合で、関口弥太郎とたたかったのが、影であった」

「……？」

「佐川蟠竜斎に化けて、見ン事、太刀を拝領して、去り居った」

「……」

「おそらく、遠藤由利からも、太刀を奪ったであろう」

「……」

「この但馬守が生涯の不覚であったよ」

宗矩は、うつろな、かわいた声をたてて、自嗤した。

四

「若影」が、二振の拝領太刀を背負うて、不忍池畔の聖天宮の小祠へ戻って来たのは、夜も二更をまわった頃合であった。

——母者は、まだか？

「若影」は、それをさいわいに、自身の手で、おのがからだに、油を塗るべく、黒衣を脱ぎすてた。

どういうものか、「若影」は、母から、油を塗られることが、わずらわしくなっていた。

ましてや——。

昨夜、遠藤由利と契ったからだを、母から、くまなく愛撫されることは、やりきれなかった。

赤銅の中から、油をすくいとった——その時。

チチチチ……。

かれんな啼き声がして、蔀の隙間から小さな生きものが、飛び込んで来ると、ひょいと、「若影」の肩に、とまった。

瞬間——。

「おっ！」

「若影」は、てのひらへ、小鳥を移した。

「どうした、母者は？」

人の子へ問うように、訊ねた。

供をして行ったこの小さな生きものが、主人よりさきに、飛び戻っているのは、主人の身の上に不吉な出来事が起ったことを、意味していたのである。

匂う女体

一

湯島天満宮の北方に、梵刹がひとつ——天沢山麟祥院、という。

臨済宗、江戸四箇寺の一であった。もとは、報恩山天沢寺と称して、さびれた古寺であったが、寛永元年に、二代将軍の命によって、乳母人春日局の菩提所に指定されて、にわかに殿閣を築いて、勢威を得た。

数年前、家光が重い病気にかかった時、春日局は、この本堂にとじこもって、二十一日間の祈禱をした。

妾が身は不浄なりといえども、いやしくも乳味を奉りて、乳母の称を汚し、歳月かしずき奉れり、且将軍は万民の父母なり。もしいま大故あるときは、国家の安危にかかれり、よって願わくば、妾が身を以て、これに替り奉らん。もし恢復あらしめば、忽ちに、身に病苦を受けて、誓って医薬を用いずして死せん、と。

その衷誠に感応があって、家光は間もなく、常のからだにかえった、という。爾来、春日局は、鍼灸薬餌を用いていなかった。

本堂の左側に、禅堂があった。

その堂内の広い板敷きで、いま、二人の老人が、さし向っていた。

鴨甚三郎利元と服部半蔵――と。

そして、両者のあいだには、この堂内にふさわしからぬものが、横たわっていた。白蠟のように冷たく沈んだ肌を、燭台にまたたく焔に照らされている、一糸まとわぬ裸女であった。

奇異な光景は、四肢を折り曲げて、大きな岩石を、しっかと抱きかかえていることであった。

これは、水苔に掩われた石と交合している情景とも見てとれた。

濡髪のまつわった寝顔は、息を絶って、無表情であった。

半蔵が、江戸城へおもむいて、柳生宗矩に報告しておいて、急いで、ひきかえして来てみると、全裸の女影は、池底からひきあげられて、この禅堂にはこばれていたのであった。

ひきあげたのは、鴨甚三郎であった。

いま、咫尺の間に、まじまじと、その裸身を凝視し乍ら、半蔵の胸中は、重苦しかった。

ただのあわれな女としか、眺められないのであった。甚三郎の腕をもってしても、もぎはなせないくらい、しっかと石を抱いているのも、いじらしい、とさえ思える。

二十年前、木曾谷の館の炉端で、老いたる「影」が語った言葉が、耳によみがえって来る。

「影」は、すてられてあった赤子をひろいあげた時、こやつをひとつ、自分が思うがままの忍びに仕立てあげてみよう、と決意したのであった。

「人間にして、人間にあらず――文字通りの影として育てる。その夜のうちから、顔を、布でつつんでしまい、布をとり払うてやるのは、闇の中のみと定めた。……そうして二十年、この決意は、実行された。それがしが、育って行く貌を一度も見とどけなかったのは勿論じゃが、当人自身も、ついに、おのれの姿を眺めて居らぬ。食を摂るのも水浴びも、すべて日常の行事は、暗闇がえらばれ、それがし以外の者との交りは禁じられ、いや、それがしと口をきくことさえも許されずに、ひたすらに、忍びの術の修業にはげみ、いまや、それがしすらも、到底およばぬ非情の影となり終せた」

――その父も、当人さえも見たことのない貌を、はじめて見とどけたのが、このわしであった。

半蔵の感慨は、深い。

二十年後になって、ゆくりなくも、その貌のみか、全裸の姿を眺めるめぐりあわせとなったのである。

その貌には、年齢不明の若さが漂うていたが、女の美しさはなかった。皺こそ一本もなかったが、肉の薄い皮膚は、枯れた木葉のようにかわいた白色であった。額も鼻梁も唇も、みじんの優しさもなく、鋭い冷たい本能を現していた。

その裸軀もまた、女の豊かな円やかさや艶やかな線はなかった。といって、べつに発達した筋肉の逞しさをしめしているのでもなかった。むしろ肩や胸や腰はなめらかで、女性のものにまぎれもなかったが、しかし、それは、鉄か銅の上に塗られた漆のように冷たく、生き血のかよっている柔らかさや温かさから程遠いものだった。事実、その五体は、鉄か銅でつくられたように、異常な強い力を備えているのであった。

ただ――。

ふしぎな妖しい美しさが、一箇処にだけあった。それは、かたちのいい薄い耳朶から項へかけ

ての箇処であった。そこには、まぎれもなく、女の弱さや淋しさを象徴する繊細な微妙な翳が落ちていた。

いかにも、哀しい女の性が、不用意に、そこにのみ、湛えられていた。

半蔵は、座に就いた時から、そこへ、視線をあてていた。

ふと——。

向いの老兵法者の眼眸も、自分と同じところへ注がれているのに気づいて、半蔵は、頭を擡げた。

その時、甚三郎が、やおら、双手を、しっかと抱きかかえている石へ、さしのべた。

こんどは、どうしたのか、なんの苦もなく、石は、かるがると、甚三郎の双手へ、移った。

ごろりと、脇へころがしておいて、甚三郎は、半蔵を見やった。

「ひとつ、お手前が、魂入れ（人工呼吸）をほどこされては、いかがだな？」

「魂入れは造作はないが、蘇生させて、どう処置いたすかが、問題でござる」

半蔵が、腕を組むと、甚三郎は、ふっと、薄ら笑った。

「囮にされるが、よろしかろう」

「囮に——？」

「左様、もう一人の影をおびきよせる囮にな。お手前は、そのもう一人は、この女の伜だと申されたな？」

「いかにも、相違ござらぬ」

「わしは、この女が、杉木立から、瓢箪池の中の島の松へ飛び移るのを眺めて居ったが、その折、

小鳥が一羽、梢から飛び立って行き申した。あれは、たぶん、この女の救いをもとめる使いであったと思える」

「それは、気づかなんだ」

「倅が、小鳥に報されて、母親を救いに参ろう」

「ふむ——」

「生捕るに、この上の囮はござるまい」

二

同じ時刻——。

江戸城黒鍬（柳営の仕丁役）附きの陸尺の一人——百助という男が、旗本奴白柄組の頭領水野十郎左衛門の屋敷の広間で、勝負たけなわとなっている賭場を、壁ぎわから眺めていた。

賽子の目に、血走った目を据えているのは、各種雑多な連中であった。旗本も浪士も勤番侍も足軽も町人も中間小者も、いや、奉行所の同心らしい男まで、交っていた。

だいたい、旗本大身が、屋敷の広間を開放して、賭場をひらかせることからして、異様な所業であった。

戦国の余風を承けた時代であった。

暗夜、街巷に立つ行人を斬って、刀の利鈍を検するの料となすことに、斬られる方さえなんの疑いも抱かなかった世潮であった。刃傷・喧嘩・争闘沙汰は、日常のことであった。堂々たる大名国主が、眦皆の怨みに、殿中で刀を閃かして、おのれの領土を喪い家名を断たれても、毫も恐

れなかったのである。まして、武を用いる役を与えられている旗本たちが、一言の行違いや、街上に袂の触れただけのことで、果し合いをして、なんのふしぎはなかった。

町人も、上に倣って、暴力を揮うのを、勇気のある振舞いとしていた。

遊女買いと賭博が、殺伐の風が起す、最大の享楽となっているのは、当然であった。

旗本のうちで、六方者を代表するのが、水野十郎左衛門であった。

屋敷の広間を開放して、賭場をひらかせることぐらい、なんでもない所業であった。

十郎左衛門は、出雲守成貞の嫡子に生れた。成貞は、備後福山の城主（十万石）水野日向守勝成の三男に生れ、三千石を賜って、幕府麾下に加えられた。名門であった。

出雲守成貞は、生れ乍ら猛気に富んだ、すこぶる豁達な武士であった。頭は、つねに、いとびんやっこに、伊達を見せていた。羽織と衣類は、鼠地に染めて、野晒模様を、派手に抜いていた。その背中のあたりに来る髑髏を、定紋の代りに用いて、腰のあたりには、右に花切り鎌、左に輪ちがいを、大きく浮き出させた。

糸鬢奴の奴という字を「ぬ」に利かせて、右からこれを、「鎌輪ぬ」と読ませた趣向であった。羽織と衣類とは、ほとんど同じくらいの丈に仕立てて、脛はかまわず五六寸も、あらわにしていた。着附着込みは残らず鎖帷子、刀の柄は、棕櫚で巻き、朱鞘の大小の思いきって長いのを、腰にかんぬきに帯びていた。

その成貞の歩きかたが、また特殊であり、舞台で謂う「六方を踏む」に似ているところから、「六方者」と呼ばれた。六方を無法に合せたのである。

次の逸話がある。

ある時、成貞は、きおいの風姿を、遺憾なく発揮して、蜂須賀侯の屋敷の前を通りかかった。たまたま、他出しようとしていた当主の姉にあたる故阿波守至鎮の次女が、その六法姿を、垣間と見た。元来、蜂須賀家は、華美好みの家風であったので、うら若い深窓の姫君は、成貞を、絵に描いたような颯爽たる武辺者と思った。

側にはべっていた老女が、

「あれこそは、江戸中にかくれのない旗本奴の伊達者、水野出雲守成貞と申す武士にございます」

と、知らせた。

姫君は、その日から、成貞の姿を、ふかく想い煩うた。

さいわいに、この恋は遂げられて、二十五万七千石の国持大名の姫君は、わずか三千石の旗本水野家へ、自ら好んで、輿入ったのである。

その子が、十郎左衛門成之であった。

両親ともに一風変った性行の持主であったので、その子が長じて、奇抜な日常を送るようになったのは、想像に難くない。

父成貞は、なお戦国武士の面影をとどめて、豪気豁達であったが、ぬくぬくと育った十郎左衛門は、気魄を鍛えることを忘れて、ひたすら、坐臥常住ことごとく、奇を衒うことに腐心する天邪鬼となり終せた。

この日も——。

賭場の上座に大胡坐をかいた十郎左衛門は、手一束に切り放った総髪に、白縮緬の綿入れに白

い帯を三重に廻した宛然山賊のいでたちで、先日吉原から掠めて来た遊女を、かたえにひきつけて、勝負の様子を眺めていた。

さて――。

片隅の壁へ凭りかかった陸尺の百助は、やって来た時から取られっぱなしで、すってんてんになっていて、折をうかがって、勝ちつづけている者から、いくばくかのおめぐみを頂戴するこんたんでいた。誰かが、のそりと、かたわらへ来て坐ったので、ちょろっと横目を走らせた百助は、

――疫病神に、くっつかれちゃ、たまらねえ。

と、腰を上げようとした。

いかにも尾羽打ち枯らした髭だらけの浪人者であった。血の気のない顔をして、肩もとがっていた。

「おい――」

と、呼ばれて、百助は、じろっと見かえした。

「わしを、疫病神と思ったな？」

浪人者は、ずばりと云い当てた。

「い、いえ、べつに……」

「かくさんでもよい。福の神であったら、どうする？」

「福の神？」

百助は、あきれて、露骨に、蔑んだ目つきになった。

浪人者は、袂をさぐると、ぽんと一枚の慶長小判を拋り出した。

「これで、勝負するがいい」

「……？」

百助は、息をのんだ。信じられなかった。

「わしの云う通りに賭ければ、たちまちこの金子が、十倍になろう」

「ほ、ほんとですかい？」

「丁に四回、半に一回、丁に二回、半に三回――この順序で、賭けてみるがよい。まちがえてはならぬ」

浪人者は、くりかえして教えた。

百助は、血相を変えて、慶長小判を摑むと、賭人の間へ割込んだ。

三

浪人者は、壁に凭りかかって、勝負の成行きを、傍観していた。

口辺や頤に、無精髭をつけているが、大きくひらいて、冷たい光を湛えている双眸は、「若影」のものにまぎれもなかった。

百助の膝の前に、次第に、金子が積まれて行くのを眺め乍ら、全くの無感動であった。いつの間にか、すりかえておいた骰が、百助に勝たせつづけることは、わかりきっていたからである。

百助は、あまりの幸運に、憑かれたような無我夢中の形相になり、絶え間なく、流れる汗をぬぐったり、唸ったり、坐り直したり、舌なめずりしたり、膝をたたいたりしていた。

ついに――。

大きく賭けて、殆どの賭金をせしめて、両手で、手もとへかきよせた。

「おい、小者！」

不意に、上座から、十郎左衛門が、にくにくしげに、声をかけた。

「貴様、黒鍬の陸尺に化けて居るが、本職は賭師であろう？」

「冗談じゃありませんや、お殿様。あっしは、正真正銘の陸尺でございますぜ」

「いつわるなっ！　水野の屋敷に乗り込んで参って、素姓が露見いたしたならば、いかなる仕儀に相成るか――とくと承知の上で、賭場を荒したな！」

「お、お殿様！」

百助は、ちぎれる程手を振った。

「め、めっそうもない！　あっしは、ただ…運がついていただけのことなんで――」

「黙れっ！」

十郎左衛門は、朱鞘の大刀を摑んで、つッ立ち上るや、いきなり、ぎらっと抜きはなった。

「下郎っ！　合掌せい！　痛みを与えずに、首を刎ねてくれる！」

「ひ、ひえっ！」

百助は、匐って、遁れようとした。

その時、壁ぎわから、「若影」が、音もなく立ち上った。

――おや――？

目蓋をひらいた百助は、あっけにとられた。

視野いっぱいに、星空がひろがっていた。いつの間にか、路上へ仰臥させられているのであった。

あの賭場では、必死に匐って、一間ばかり逃げたところで、意識が、ふうっと遠のいて、それっきりわからなくなったのである。

むくむくと起き上った百助は、すぐそばの石に腰かけている浪人者を見出した。

「あ――旦那」

百助は、懐中に、ずしりと重い金子が入っているのに気がついた。

「旦那が、たすけて下すったので？」

「そうだ」

「有難てえ！　旦那は、やっぱり福の神だあ――。旦那は、いってえ、どういうお方なんで？」

「人間ではない」

「へ――？」

「ということにしておこう。……勝たせて、救ってやったのは、お前に、ひとつ、仕事をさせるためだ」

「へえ」

「やるか？」

「危険な仕事でございますかい？」

「まず、な。やるな？」

かさねて、「若影」は、念を押した。
「やります！」
百助は、頷いた。
「若影」は、懐中から、とり出した物を、地面へ抛った。
それは、きらきらと光る二個の珠であった。
百助は、妙なものを転がすものだと、不審そうに、目を追った。
二個の珠は、仲よくならんで、百助の前を過ぎて、とある箇処へいったん停ってから、急に、くるくるくると烈しい勢いで回りはじめた。
とみるうちに、突然、それは、かがやく生きた目玉になって、かっと、百助を睨みつけた。
百助は、「呀っ！」と、目晦んだ。
「若影」は、棒のようにつッ立って、焦点を失った視線を宙に送っている百助に、さして大きくない革袋を持たせた。
「百助、これから、城中まで、歩数を計え乍ら、走るのだ。よいな！」
鋭い語気で、命じた。百助は、こくりと首肯した。（催眠状態というのは、刺激に反応しやすい脳貧血症状をいう。何かの暗示を受けると、急に反応して、脳に血が昇るが、またもとの脳貧血状態にもどり、表面の意識は、その暗示を潜在させておいて、きわめて正常に働く。すなわち、暗示者の命令通りに行動しつつ、それが異常に誘致されたものとは、自身で気づかぬ）
「百歩毎に、この袋の中から、珠を摑み出して、地べたにすてろ！　それが轟音を発そうとも、猛煙を噴き上げようとも、決して、振りかえってはならぬ。……お前は、御門で御切手を示して、城中へ入れ。城中へ入っても、百歩毎に、珠をすてて行け。珠が無くなるまでつづけるのだ。たぶん、珠は、吹上の御苑で、無くなるだろう」

四

麟祥院の禅堂では、半蔵が「母影」の裸身へ、伊賀流の百足の油を、くまなく塗りおえていた。
呼吸もなく、体温もなく、死後の硬直とも思われる四肢であったが、さりとて、白蠟の肌膚には、屍斑もない、奇怪な女体であった。
これは、池中へ飛ぶ前に、ことさらに全身を硬直させ、呼吸を止めて、あらかじめ仮死状態をつくっておき、池底へ沈むや、無意識の所作で、石をさぐって、抱いた、としか解釈できなかった。天竺のヨギの秘法に、土中に埋葬された一僧が、百日を過して後、また蘇生してみせたとあるが、あるいは、女影は、親知らずの義歯の中にかくしていた秘薬を噛んで、ヨギの法を倣ったのかも知れなかった。
半蔵が、その推測を口にすると、甚三郎も合点して、
「むかし、それがしも、京の伴天連寺で、そのような話をきいたおぼえがある。それにしても、並々ならぬ忍者よのう！」
と、感服したことであった。
半蔵は、
「ご免――」
と、甚三郎に断って、衣服を脱ぎすてて、全裸になると、意識なき女身をかかえて、仰向けに

寝た。

普通の人工呼吸ならば、仮死者を仰臥させて、その上に跨がるのであったが、忍者の法は、逆に、仮死者を、おのれの上に乗せるのであった。

胸と胸を合せ、おのが腹と、背中へまわした双手の操作によって、空気を、肺に送り込む。この場合、仮死者の舌が、裏返って、息が止まるのを防ぐために、その舌をくわえ出して、強く吸っておかねばならぬ。

このかたちは、視る者が、枯老の兵法者であったからよかったようなものの、甚だみだらな光景と、云わなければならなかった。

魂入れの動作は、一刻以上も、つづけられた。

じっと、女影の顔を瞶めていた甚三郎が、ひくく、

「生きかえるようだな」

と、呟いた。

半蔵は、動作を止めて、女体を横へ、ころがした。

起き上るや、蓬髪の中から、一本の長い針を抜きとって、女体の股を、大きく八の字形に拡げておき、会陰に、それをぷすりと刺した。

「……む、むっ！」

女影の色褪せた唇を割って、微かな呻きが、洩れた。

その裸身から、むらむらと、女の匂いが漂い出たのは、それから、ほどなくのことであった。

贋村正

一

宏壮な構えの武家屋敷が、高塀をつらね、その塀越しに路上へ枝をさしのべた樹木も、武蔵野の原始林を屋敷内に囲った巨きなもので、往還は、星明りもさえぎられた、淋しい地域であった。

もとより、人影は絶えて、寂寞の夜気は、不気味なくらいであった。

やがて、二個の影が、彼方の辻にあらわれて、しずかに、進んで来た。

前の影は、高く、武将のみに見られる威儀整った歩きかたであった。後の影は、低く、跫音をたてない、滑るような歩きかたであった。

「佐助――」

前の影が、呼んだ。

「チト生きのびすぎたな。そうは思わぬか？」

長い道程を、黙々として歩いて来て、いかにも唐突な、この言葉であった。

「なかなか――。生命は、大切なものでござる」

とぼけたような口調の返辞であった。

「いや、やはり、生命にも、棄て秋があったようだ。お前が、お節介に、わしの影武者を五人も六人も、つくりすぎたおかげで、棄てそこねてしもうたぞ」

「そのお言葉は、もう百遍もうかがい申した。愚痴と申すものでござる」

「ふふ……」

真田左衛門佐幸村は、ひくく、自嘲した。

「生きのびたおかげで、江戸城を見物できるか」

「ほ――」

赤猿佐助は、おどろきの声を出した。

「あるじ様、行先は、江戸城でございますか？」

「うむ」

「大事に相成りはいたしませぬかな」

「柳生但馬守の招きだ。心配は要らぬ」

そうこたえた幸村は、ふと、足を停めた。佐助も、立ち停って、頭をまわした。

遠く、火薬の炸裂する音を、きいたのである。

佐助の小軀が、音もなく跳躍したかとみるや、高い樹枝へとびついて、空へ消えた。

炸裂音は、つづけさまに、夜気をふるわせた。そして、それは、こちらへ近づいて来るようであった。

ひらっ、と路面へ降り立った佐助が、

「烽火とも見える白煙が、柱のように、左様、百歩あまりの間隔をもって、立ち昇って居りま

す。一里の遠方のが流れ散るにつれて、三町の近くで、あらたなやつが立ち昇りますわい」

と、要領よく、告げた。

「故意の人為で、市民をおどろかそうというわけか」

主従は、次の辻へ来た。

その時、北へ走る道筋の、一町あまりへだたった地点を、一個の人影が掠め過ぎるのがみとめられた。

「投げたな」

幸村が、云った。

「御意――」

赤猿が、応えた。

そこの路上から、轟音とともに、白煙が噴き上って、天に冲した。

すでに、夢を破られた市中は、騒然となっていた。

「追うか、佐助」

「あの投げぶりは、ただの酔漢の悪戯とも見え申したが……」

「使われたにすぎまい。尾けて、その行先をたしかめておけい。途中で、とりおさえては徒労となるぞ」

佐助は、奔り出した。

幸村が、白煙の噴き立つ其処へ近寄った時、路上には、のちの証拠となるべき何物も残ってはいなかった。即ち、火はなかったのである。

——人騒がせを目的とするもののようだが、何を狙うて居る仕業か？

幸村は、小首をかしげた。

二

幸村が、江戸城西之丸の桜の間に入って程なく、市中を騒擾の渦と化さしめた下手人は、吹上の御苑にも、数個の白球を炸裂させて、城内を色めきたたせた。

陸尺・百助は、庭番たちに殺到されるや、のこりの白球を、袋ごと、抛りつけておいて、盲滅法に、木立の闇へ遁れようとした。しかし、捕えられる時には、きわめてあっけなく、なんの抵抗もしめさず、茫然と虚脱のていであった。

詰所に端坐した幸村は、

——佐助のやつ、後を追うて、ここまで忍び入って参ったろうが……。

と、思った。

家康の首級を狙って、いくたびか、この江戸城へ忍び入ったことのある赤猿であった。闇中、のぞむがままに、自由に城内を行動できる筈であった。

——あの曲者を、庭番たちの手から、横奪りするであろう。

ひとり、微笑したところへ、但馬守宗矩が、姿を現した。

両者は、すでに昵懇の間柄であった。家康が親藩・譜代・外様の大名たちを全土に配するに当り、その封土区分に就いて、幸村に、内密に意見を需めたことがあり、その時、宗矩が、使いをしたのである。幸村の頭脳は、徳川幕府の基礎をかためる上に、大いに役立った。武家諸法度も、

ひそかに、幸村の手によって、草案が作られた事実を、知っているのは、家康と本多正純を除けば、宗矩だけであった。また、柳生十兵衛はじめ、道場の高弟たちが、隠密となって、諸国へ潜入して行ったのも、幸村の考えより出たものであった。

ただ、大坂城陥落とともに、壮烈な討死をしたと信じられている幸村は、再び世に出ることをきらい、面貌も声音も変えてしまっているので、こうして、城中に在ろうとも、誰一人、それと気づく者はないのであった。

「夜陰に至急の御足労をお願いいたしたにも拘らず、お受け下されて、誠にお礼の申上げようもござらぬ」

宗矩は、鄭重に、頭を下げた。

「御用向きは、剣相の鑑定でもござろうか」

幸村は、何気ない口調で云った。

宗矩は、幸村の予感の鋭さに、舌をまいた。しかし、すぐに、

——知って居るな。

と、思った。

小姓たちが、五箇の刀函と、錦の布をかけた三方を四基、捧げて入って来た。

「これらは、孰れも、曾て、大坂城内の宝刀として、太閤倉にしまわれてあった無銘剣でござる。すでにおききおよびでござろうが、このたびの御前試合の勝者に賜る——」

そう告げて、宗矩は、三方の錦の布をとりはらった。三寸あまりに両断された切尖が、冴えた光を放って、竝ぶ。

宗矩は、説明した。

本日で第六試合が終った。第一、第二、第三、第五の試合の勝者たちが、「影」と称する忍者によって、両断された切尖が、これらである。第四試合の勝者遠藤由利のみが、両断されず、いったんは奪われたが、服部半蔵の働きで取りもどし、大奥へ持って入り、これは、さいわいに、奪われずに、こちらの刀函の方に納めてある。本日の第六試合に於て、佐川蟠竜斎を控の間に当て落しておいて、替玉となった「影」が、関口弥太郎に勝って、一振を持ち去ったほかは、揃っている。

「影なる忍者が、如何なる目的をもって、こうして、次々と切尖三寸を両断いたすのか——御前試合の勝者を、ただ、嘲弄いたすためとは、到底考えられ申さず、これらの太刀が、曾て、大坂城の宝刀であったことと、何か関連があるやも知れず、これらの切尖が、重大な秘事を有して居り、それを調べるためであるとすれば、第五試合までの太刀にはそれがみとめられない故に、あるいは、投げ返し、または、持ち去ろうとしなかったのでござろう。されば、第六試合に蟠竜斎の替玉となって勝ち、持ち去った一振と、第七、第八、第九、第十の試合の勝者に賜る四振のうちの孰れかが、秘事を有して居ると、考えられるのでござる。……お手前に、まず、これらの太刀が、何者の作なるかを、鑑定して頂ければ、謎もまた、おのずから、解け申そうかと存ずる次第でござる」

幸村は、しばらく沈黙していたが、やがて、

「遠藤由利なる女性の拝領した太刀を、服部半蔵が、その忍者から取りもどしたと申されたな？」

「左様——」

「忍者は、大奥に入った遠藤由利から、再度奪い取ることは、叶わずと、あきらめたのでござろうかな？」

「……」

宗矩は、すでに、半蔵から、「影」は大奥に忍び入ったに相違あるまい、と云われて、後刻、由利に会うて、たしかめたのである。

由利は、無表情で、横にかぶりをふり、拝領太刀を宗矩に預けたのであった。（由利が、否定した理由は、読者の方が、すでに承知の筈である）

「試合の勝者に、決死の挑みをなす程の忍者が、大奥に忍び入るのを、ためらうものでござろうかな？」

「……」

宗矩は、無言で、刀函の一個を引き寄せて、蓋をはずして、その一振を把ると、幸村にさし出した。

「これでござる」

幸村は、受けとって、無造作に、鞘をはらった。

鍔もとから、切尖へかけて、鋭い視線を、ずうっと移し了えた幸村は、ぴたっと鞘におさめると、宗矩に返した。

「これは、その女性の拝領された太刀ではござらぬ」

「どうして、お判りか？」

「すでに、その太刀は、服部半蔵が、茅屋に持参いたし、それがしの鑑定済みでござる」

「……」

宗矩は、口を強くひきむすんだ。半蔵が、自分にそのことを告げなかったのが、非常に不快であった。

幸村は、宗矩の表情へ冷やかな眸子を据えて、

「それがしは、半蔵の問いに応えて、太刀は、村正の作と断定いたした。たしかに、太刀は、村正特有の箱乱れ、と見まがう焼刃でござった。しかし、能く視れば、箱乱れではなく、村正の作にあらず――。それがしが、故意に、詐ったのは、半蔵の存念が奈辺にあるか、読みとれなかったためでござる」

「……」

「ところで、ただいまの太刀こそは、正真、疑う余地もない箱乱れの焼刃でござった。村正と断定して、はばかり申さぬ」

「すると、これは、昨夜、影が忍び入って、すり替えたのではなく、あらかじめ、半蔵が、すり替えておいた、と考えられ申すな」

「まず――」

幸村は、頷いてみせた。

遽に――宗矩の胸中で、疑惑の念がさわいだ。

いまにして、自分と対坐した時の半蔵の態度に、怪しむべきふしぶしがあった、と思いかえされる。

木曾谷の「影」と何か縁故のある忍者であったか、という問いに対して、半蔵は、甚だ曖昧な

返答をしたではないか。

よもや、「影」母子と馴合って、公儀を裏切るこんたんを起したとは考えられぬが、何か肝心のことをかくしているに相違ない。

――忍者というものを、信頼したのが、こちらのあやまちであった！

宗矩は、勃然として、半蔵を悪んだ。

「しかし乍ら――」

幸村は、云った。

「村正と断定されて、それを鵜のみにいたし、正真の村正とすり替えるようでは、まだ、切尖が秘めている謎を、半蔵は、解いては居りますまい」

「左衛門佐殿！　太閤が、何故に、十振のみを手許に残されたか、その仔細を、ご存じならば、是非ともおうかがいいたしたい。お願いつかまつる」

宗矩は、頭を下げた。

幸村は、同じ問いを、半蔵から、されていた。半蔵には、打明けてはいなかった。

幸村は、微笑して、

「その前に、太刀を拝見つかまつろう」

三

いつの間にやら――。

赤猿は、炎々と夜空を焦がす大篝火のそばにひきすえられていた百助を、数十士の監視の目を

掠めて、ひょいと拉致してしまっていた。

しかも、大胆にも、西之丸庭番詰所の一室へさらい込んでいた。

「やれやれ、ただの陸尺かや」

赤猿は、頤の無精鬚を、ぷつんぷつんと抜きとり乍ら、うつろな眼眸を宙に据えている百助を、つまらなさそうに眺めた。

「おい、陸尺――しっかりせぬかい。事情によっては、わしのあるじ様が、生命を救うて下さるかも知れんぞ」

そう云って、ぽんと肩をたたいてやった。

にも拘らず、百助は、聾のように、なんの反応もしめさなかった。

「はてな？」

急に、赤猿は、きらっと窪目を光らせて、百助の顔を、のぞき込んだが、

「ふむそうかや――」

と、合点した。

「性根を睡らされとるわい。正気に戻してやろうず」

赤猿は、左手の人差指を、眼前二尺あまりのところへ水平に据えつけると、眉間の中点を、矢のような迅さで突いた。

百助が、はっと目を瞠いたとたんを、思いきり、頬桁へ、拳骨をくれた。

あっけなく、ひっくりかえって、したたか、後頭を壁へぶちつけた百助は、しかめ面をし乍ら、きょろきょろと、あたりを見まわした。

「どうじゃ、正気に戻ったかや」

にやにやする赤猿を、怪訝そうに見かえして、

「こ、ここは、ど、どこなんで――？」

と、訊いた。

「江戸城内じゃ」

「えっ！」

背中へ棒を通されたように、びくっと上半身を立てると、

「ど、どうして……お、おれは――？」

と、困惑の形相になった。

「はははは、お前、どんな男に、性根を睡らされたのじゃ？」

「性根を――睡らされた？」

「そうじゃて。お前は、自分のしたことに、おぼえはあるまい」

「自分のしたことじゃと」

「性根を睡らされているあいだに、お前は、江戸中の人間に、目をさまさせて、家の外へとび出させたのじゃわい。おまけに、この江戸城内を、わきかえらせて、生捕られた、と思え」

百助は、痴呆のように、赤猿を瞶めていたが、急に、ふらふらと、立ち上った。

「お、おれは……」

夢遊病者のように、出て行こうとするのを、赤猿は、袖を摑んで、ひき戻した。

「さ、云え。どんな奴が、お前の性根を睡らせたぞ？」

「……」

「云わぬか！　云わぬと、こんどは、このわしが、性根を睡らせるぞ！」

きめつけられて、百助は、なんとも名状しがたい慴怖と困惑の色を、汗まみれの顔に滲ませた。

「……水野十郎左衛門殿の屋敷で……若い浪人者が……、おれに、博奕に勝たせてくれて……外へつれ出すと、いきなり、光り珠を、地べたへ抛って……そいつが、目玉に、化けて、おれを、睨みつけよった。……そ、それっきり、わ、わからなくなってしもうたんだ……」

そこまで語った百助は、廊下に、跫音をきいて、とび上った。

「来、来た！　ど、どうしよう！」

「どうしようもあるまい。遁れられぬところだ。観念するのだ」

赤猿は、けろりとしていた。

「あ、あんたは、おれを、たすけてくれるのではないのか？　たのむ！　た、たすけてくれ！」

「もう間に合わぬて――」

赤猿が云いすてるのと、杉戸が、ひき開けられるのが、同時であった。

「おっ！　ここにいたっ！」

庭番の一人が、叫んだ。

百助は、窮鼠猫を噛むたとえ通り、遁げ路がそこしかない戸口へ、突進して、庭番へとびかかった。

「たわけ！」

庭番の一撃で、百助のからだは、他愛なく、崩れ落ちた。

胡坐をかいて、それを眺めていた赤猿は、

「貴様が、こやつをさらったのは――？」

と、呶鳴りつけられると、

「ああ――」

と、頷いてみせた。

「おのれ！」

目を剝き、歯を剝いた庭番は、しかし、自分たちの目をかすめて奪い去った奇怪な業の持主に対して、軽率に向えない、と思いかえすと、鋭く、口笛を鳴らした。

赤猿は、悠々として、庭番たちが、どっと駆けつけて来るまで、そこを動かなかった。

ひさしぶりに――まことに、こういうあんばいに、敵地に身をさらすのは、幾年ぶりであろう。

赤猿は、からだの奥底にひそんでいた活力が、はつらつと、四肢のはしばしまであふれるのを、おぼえていた。これが、生甲斐というものである。

――あるじ様に、知れたら、ひどうお叱りを蒙ろうがな……。

そう思いつつも、どうにも、ここで、存分に身を躍らせてみなければ、この活力のおさまりがつかなかった。

「何者だ、貴様？」

庭番頭とおぼしい男が、油断なく身構え乍ら、じりじりと詰め寄って来た。

赤猿は、のこのこと立ち上ると、ずうっと、庭番の面々を見わたして、
「伊賀三十六人衆は居らぬが、どうしたかな？」
と訊ねた。
「黙れっ！　神妙にせい！」
「そうは参らぬ。あいにくだが、お主がたでは、このわしを討ち取るのは、チトむつかしい」
その言葉のおわらぬうちに、庭番頭が、居合抜きの一撃をあびせた。
瞬間——一颯の刃風に吹きはらわれて、赤猿のむさい姿は、その場から、消えうせた。
「おのれっ！」
庭番頭が、狼狽しつつ、本能的に防禦構えをとった姿は、いかにも間抜けたものに見えた。
「ここだっ！」
一人が、頭上を指さすのと、
「えいっ！」
一人が、畳を蹴って跳びざまに、天井へ蝙蝠のように吸いついた赤猿へ、白刃を送るのが、殆ど同時だった。
どういう異常の修練によるものであったろう、赤猿の小軀は、くるっと一廻転して、また、ぴたっと、天井に吸いついた。
次の一人が、切尖を直立させて、びゅっと突き上げたが、結果は、再び、その秘技を目撃させられるにとどまった。
この時、おくれて廊下から、手槍をかい込んで、走り入って来た大兵の男が、

「拙者にまかせろ！」
と、叫んで、きゅっと手鳴らして、ひとしごきをくれるや、
「やっ！」
と、くり出した。
次の刹那——したたか、天井板をつらぬいて、うっとふみこたえた男の頭へ、ひょいと、乗った赤猿は、
「ご免——」
一声のこして、その頭を蹴とばしておいて、宛然、流れの中の石を渡るように、さっさと、頭から頭へ、飛び移って、あっという間もない迅さで、廊下へ出てしまっていた。
庭番たちは、憤怒と屈辱で、血眼になって、奔りまわったが、二度と、その姿を見つけることは叶わなかった。
伊賀三十六人衆が、湯島台より急遽江戸城へひきかえして来たのは、それから、四半刻の後であった。

赤猿検分

一

黙然として、柳生宗矩は、膝に手を置いて、不動の孤座をまもりつづけていた。「影」によって両断された三寸余の切尖と、残りの試合に賜るべき太刀とが、なお、鞘をはらわれたまま、宗矩の前に並べられ、秋霜の光を競うていた。左端の一振のみが、すりかえられた千子村正であった。

真田左衛門佐幸村は、すでに、去っていた。

しかし、幸村が口にした言葉は、宗矩の耳に、一句もあまさず、残っていた。

幸村は、九振の無銘太刀は、のこらず、備中青江守次の長子恆次の作と、鑑定したのであった。

幸村は、服部半蔵が訪れて、その一振の鑑定と剣相を乞うた時、わざと千子村正と断定したが、実は、即座に、青江恆次と識ったのである。そして、おそらく、他の九振も、同人の作であろうか、と想像したのである。予断は適中した。

青江刀は、普通とは逆の方向へ焼刃が乱れる逆丁字の妖刀であるが、特に、これら拝領太刀は、呪文剣として鍛えられているとおぼしく、その呪文をあらわし、且かくすために箱乱れの相をなしているのであった。

焼刃に呪文をあらわす秘法は、すでに絶えているが、村正の生きた足利時代には、なお伝え残っていて、箱乱れを作ったものに相違ない。したがって、一瞥しただけでは、青江刀と村正は、容易に区別がつかぬのである。

太閤秀吉は、村正を愛好し、論功行賞として、これを、屢々諸将に与えていた。秀吉が、諸将にわかつべき封土がなくなったので、代りに聚めた名剣は、百六十六振であった、という。その中に、村正は、十数振あった。堀内安房守氏善（紀州新宮城主）、赤松上総介則房（但馬領主）、加加江孫八郎重望らが、拝領している。

秀吉が、特にえらんで、十振だけ手元にのこしたのは、これらが呪文剣であったからである。

秀吉は、同じ箱乱れ乍ら、これらが村正の作でなく、青江刀と知ったのである。

青江の呪文剣、とは——。

治承四年に、平氏が、福原へ遷都する際、再び京へ帰る日もあろうかと、運びきれぬ財宝を、地下へ埋めておき、その場所を示すために、青江恆次に命じて、謎語を焼刃にあらわす剣をうたせたのである。おそらく、一振ではなく、同じものを幾振かうちあげて、将来頭領たるべき公達たちの腰に佩びさせたものであろう。

平氏は、その財宝を、人足百名に背負わせて、京から運び出し、何処かに埋めたのである。そして、むかし神功皇后が新羅を伐って凱旋するや、奪って来た金銀宝珠を千人の人夫を使って摂津の某山に埋めて、その千人を鏖しにして秘密をまもったという故事にならい、運び人足たちを、淀の河原で、盗賊として斬殺してしまった。いまも、淀のほとりに、鬼塚という地名が残っている。

後年、京都へ乱入した木曾義仲は、この噂をききつけて、財宝を獲んとして、あらゆる手段をつくしたが、ついに判らなかった。一説に、その匿し場所は、京に居残った平氏の尼法師の背中に、烙き印されている、ときいた義仲は、京中の尼法師を悉くとらえて来て、全裸にひき剝いて、あらためた。これが、木曾源氏の悪名の原因の一になったのである。

また、源九郎義経も、京に入るや、その財宝をわがものにすべく、苦心した。

咒文剣をうった青江恆次は、身に迫る災難から遁れようと、伊勢の国へ趨ったが、途中で殺された。

後鳥羽帝が、刀剣を愛好し、自ら菊の御作を鍛えたのは有名だが、その御番鍛冶の一人に青江恆次の弟貞次をえらんだのも、その縁故から財宝の匿し場所を知り、いつか、帝威を回復しようと考えたからだ、という。

また——。

長門の海底を捜したのは、三種の神器の一である草薙の剣をひろいあげる目的のほかに、咒文剣を獲ようとする努力であった、とか。

ところで、咒文剣というものを、別の観点から調べると——。

たとえば、青江の刀法を伝える村正には、咒文打ちの名残りとおぼしい臼字村正というものがある。鎚子に近い箱形が、刃を中にして開いてみれば、臼という字に読める。村正自身は、理由など知らずに、鍛えたものであろうが、これはあきらかに、咒文である。のみならず、村正の中心（柄の中に入る部分）が、鰌腹をしているのも、何かわけがありそうにも、思える。

幸村は、以上のように語ってから、

「それがしは、服部半蔵の持参した拝領太刀を熟視いたして、平家の財宝伝説は、架空に非ず、とさとり申した。焼刃に認められたのは、一見、文字とは読めぬようにうちあげてはあり申すが、まさしく、咒文——いや、謎語と読みとった次第でござる」

と、云ったのである。

宗矩は、その謎語を訊ねた。

幸村は、眼前にそれを視る眼眸になり、

「刃を中にして、開いて読めば、車・中・侯の三字が、浮び出て居り申した」

「車中侯？」

「左様、相違ござらぬ。これは、あきらかに謎語。この謎を解くには、古い文献をあさらねばなり申さぬ」

ちなみに、ここに並べられた八振には、この謎語は、なかった。

すなわち——。

「影」が、平家財宝の伝説を信じ、その匿し場所を記した咒文剣をもとめているとすれば、それは、第六試合に勝って、持ち去った一振か、もしくは、遠藤由利の手から消えた一振でなければならなかった。たぶん、それは、後者の方に相違ない。「影」は、車中侯の三文字を読めば、直ちに、その意味を解く知識を有っているのであろうか。

宗矩にすれば——。

服部半蔵が、「影」に与したと疑惑を抱いたからには、幸村に、一刻も早く、その意味を解いてもらいたかった。

宗矩が、それを口にすると、幸村は、笑って、

「それがしは、あの太刀を村正と断定いたした。されば、半蔵が、影より、平家財宝伝説を打明けられたとしても、時代が合わぬ故、残りの拝領太刀を狙うことに相成る筈。すなわち、十試合がおわるまでの日時が、こちらではかせげると申すもの。それまでに、この幸村が、車中侯の意味を解き申そう」

そう云い残したのであった。

——車・中・侯！

この三文字の謎解きは、しかし、幸村のみに、宗矩は、まかせてはおけなかった。

幸村という人物自身に対しても、油断をしてはならないからであった。

宗矩は、すりかえられた千子村正をとりあげて、あらためて、調べた。

鍔もとから一寸あまりのところに、微かな刃こぼれがあった。

——そうか。これは、加加江孫八郎の佩びていた刀だな。

宗矩は、合点した。

太閤秀吉から村正を賜った一人加加江孫八郎は、これをふるって、斬り死しているのであった。

慶長五年、関ケ原の役を起す直前に、石田三成は、かねて親交のあった加加江孫八郎を、家康の許へ、刺客として送った。

孫八郎は、小山の陣営におもむいて、家康を刺そうと図ったが、ついに面会の機が得られず、

むなしく帰途についた。

その途中、参州池鯉鮒で、懇意の堀尾吉晴に出会った。

吉晴は、孫八郎が、三成に荷担したとは気がつかず、

「近くの刈屋城主水野忠重が、当地まで出て来て、馳走すると申して居る故、一緒に参ろう」

と、誘った。

水野忠重は、家康の叔父に当る人物であった。

孫八郎は、決意した。

——よし！　家康の首級の代りに、その叔父と股肱を、治部殿へ手土産にしてくれよう！

何食わぬ顔で、吉晴にしたがって、孫八郎は、饗応の席に加わった。

宴たけなわになると、酒に弱い吉晴は、柱に凭りかかって、居睡りはじめた。

隙をうかがった孫八郎は、矢庭に、抜き討ちの一撃を、吉晴にくれた。

だが、百戦練磨の吉晴には、本能的に身を躱す迅業があった。右手の指三本を斬り落されつつ、脇差を抜いて、渡りあい、焦って突進して来た孫八郎の咽喉をつらぬいて、仕止めた。

この血闘において、孫八郎のふるった村正は、刃こぼれしたのである。

吉晴は、遺骸とともに、村正を、三成の許へ、送りかえした筈であった。

この村正が、半蔵の手に渡っていたとすると？

遠藤由利に、半蔵がすりかえて、この刀をかえしたと疑う宗矩は、半蔵に対するほぞを決めなければならなかった。

二

星あかりに、まっすぐにのびた国府路町の大通りが、ほの白く浮きあがって、江戸城から退出して来た幸村の孤影を、迎えていた。

急ぐでもない足どりで、長身をはこんでいた幸村は、いつの間にか、背後を跟いて来る赤猿の存在に気づいた。

「佐助」

幸村は、前方へ視線を置いたまま、呼んだ。

「はい――」

「煙を撒いた下手人は、何者であったな？」

「ただの陸尺でございました。水野十郎左衛門邸の賭場で、若い浪人者に、目つけられ、性根を睡らされて、おのれ自身も何をしでかしているか知らずにやった仕業でございましたぞ」

「そうか。……お前が、その男を横奪った時には、まだ、伊賀衆は、城内へ戻って居らなんだな？」

「左様でござる。伊賀衆がいたなら、ひさしぶりに、ひと泡ふかせてくれようか、と愉しみにして居りましたがな。あいにくでございましたわい」

「いなくて、やれやれと思ったのではないか」

「なかなか――」

「たぶん――あの人騒がせは、伊賀衆を、城内へ呼び戻させる目的であろう」

「ほう……と申しますと？」

「伊賀衆全員は、湯島台におもむいて居った。服部半蔵の指揮によって、影という忍者を生捕るためにな――」

「影！　殿、木曾谷の影が、まだ生きて居るのでござるか？　生きて居るとすれば、古稀を越えて居りまするぞ」

「あの影は、もはやこの世には在るまい。血を継いだ者であろう」

「影に、子がございましたかい」

赤猿は、唸った。

「影と名乗る者は、一人ではないようだ。一人が、湯島台で生捕られたと知ったもう一人が、市中城内を煙にまいて、伊賀衆をそちらへ趨らせておいて、救おうと図って居る――まず、そういうところであろうかな」

「生捕ったのが、半蔵ならば、むざとは、奪いかえされますまい」

「そこのところを、お前に見とどけて来てもらおう。……よいか、佐助。もし半蔵が、いったん生捕ったものを、みすみす奪いかえされるようならば、半蔵と影たちはこんたんをひとつに組んでいると考えてよい。半蔵に叛心はなく、もう一人を生捕るために、囮にして、わざと、警備を手薄にして、待ち構えて居るのかも知れぬ。これは、お前の目によって、判断しなければならぬ。……わしは、おそらく、半蔵に、叛心はない、と思うて居る」

幸村は、宗矩に云ったのとは、反対の本心を明らかにした。

宗矩をして、半蔵に対して疑惑を抱かせる。――これは、あらかじめの肚であったのである。

三

湯島の台地は、ずっと大昔は、海辺であったらしい。その頃、南から漂着した幾本かの楠が、いつか、巨樹となって、神木と仰がれるにふさわしいすがたを、其処に此処に、天に冲して、そびえさせているのであった。

就中、瓢箪池の畔に立つ樟は、ひときわみごとな巨きさであった。

その頂き近くに、いつの間にやら、赤猿は、一枝に化けきったように、ひそんでいた。

繁華な街なかに置くと、まことに泥くさい人ていだが、こうして原始の巨樹の上にのぼらせると、いかにもいきいきとしてみえるのは、この男の生い立ちを物語るものである。

別人のように鋭く冴えた眼光を、池中の小島へ投じ乍ら、口辺には、生甲斐のある微笑を泛べて、赤猿は、微動だにしない。

その小島の一本松の根かたには、異常な光景があった。

幸村の推測は正しく、赤猿が、ここに到着した時、伊賀三十六人衆は、警備を解いて、一人のこらず、立去っていた。江戸城をおびやかすことで、この台地の警備を解かせた「影」の智慧は、あっぱれ、といえた。すでに、「影」は、この台地の何処かにひそんでいるに相違ない。げんに、この赤猿自身が、神木の頂きにのぼって、全景を俯瞰しているくらいだから……。

警備を解いた服部半蔵が、迫って来た敵に対して、いかなる処置をしめすか、これが傍観者の赤猿の興味であったが、神木上に身を置いて、夜明けを待って、島を見下した赤猿は、思わず、

——うむ！

と、声なく唸ったことだった。

松の根かたには——。

一個の首が、土の上へ置かれてあった。そして、それは、半眼にひらいて、生きていた。

実は、「女影」は、五体を土中に埋められていたのである。

奪い返さんと窺う者に対して、囮の身を据えつけておくのに、これ程万全の処置はないといってよい。

頸から下を、土中に埋めたばかりか、左右と後には、ひと抱えもある大石を置いてあった。

如何なる神技をもってしても、石と土をはねて、五体を地上へ躍り立たせることは、不可能であった。

一間あまりはなれた地点に、半蔵が、イんでいた。そして、もう一人——枯木に似た老兵法者が、岸辺からゆるやかな弧線を架けている太鼓橋の欄干に、腰を下しているのであった。

——あれは、鞍馬の鴨甚三郎ではあるまいかや？　いや、たしかに、相違ない！

赤猿は、息をのんだ。

——お主の明察、てのひらを指すがごとしじゃ。服部半蔵は、是が非でも、もう一人を生捕ろうとの心得とみたぞ。叛心はない。

赤猿は、血のわきたつ昂奮にかられた。

——この万全の防備に対して、どういう手を打つかや？

赤猿自身、どう思いめぐらしても、首だけのぞけさせて、地中に埋めた人質を、生きて奪いかえす方法は、全くなかった。

「影よ――」

ながい沈黙ののちに、半蔵が、呼んだ。

「思いかえさぬか？」

「……」

「そなたは、敗れたのだ。しかし、余人ではなく、この半蔵に敗れたのだ。慙じることはない。……二十年前の恩義が、わしにはある。また、わしは、そなたの父のごとくに、老い果てて居る。血涸れたこの生命が、べつに惜しゅうはない。そなたの心ひとつで、この争いは、おさまろう。どうだ、木曾谷へ帰る気持にならぬか？」

「……」

半眼にひらいた土上の蒼い貌は、なんの反応もしめさずに、全くの無表情であった。

それを見戍る半蔵の面の方が、暗く、寂しい色を滲ませていた。

「拝領の太刀を、何故に奪うのか――その執念の発するところを、打明けてくれい。たのもうぞ」

「……」

「もしも、それが、打明けたために、そなたら母子の生命にかかわる大事ならば、この半蔵一人の胸にたたんで置こう。……身の程知らずの暴挙ならば、あの若者の父親として、阻止せねばならぬ。そなたら母子を、無事に木曾谷に帰せるものなら、いつでも、この老い身をすてる心に、みじんのいつわりもない。……な、打明けてくれぬか」

「……」

「若が、そなたを救うことは、もはや不可能じゃ。だが、若は、そなたを救うことをあきらめまい。襲うて来るであろう。わしらには生捕る用意と自信がある。……そなたら母子を、城中へ曳いて行った上で、拝領太刀を奪う目的を知ったとて、もう間に合わぬ。わしには、どうしてやることもできぬ。その前に、知っておきたい。さすれば、わしが、そなたら母子に、誠意をつくしてやれる思案もうかぼうではないか」

「……」

「こたえぬか？　そなたが、二十年前のそなたと、同じ非情の持主であろうとは思えぬ。人の子の母ではないか。おのれ自身の生命に対してきびしくとも、わが子の生命に対して、非情ではあり得まい。どうだ？」

半蔵は、「女影」の目蓋がとじられるのを見た。

――打明けてくれる！

そう期待した。

「ふゝゝ……」

ふいに、「女影」の唇が、冷やかに歪んだ。

「老いのくりごとは、いい加減で置くがよい。若は、わたしを救いに来る。そして、屹度、救うてくれる。最後に敗れるのは、お前の方じゃ」

おわりの一句を、斬りつけるような鋭さで吐きすてた。

――やんぬるかな！

半蔵は、絶望した。それから、胸裡を革めた。

忍者には、たとえ肉親の間柄であろうとも、闘いのみあって、和睦はない、と。

「若影」は、その時、まだ、湯島台へ到着していなかった。

「若影」は、陸尺・百助を催眠状態に陥れておいて、おのれもまた、聖天宮の小祠へ戻って、結跏趺坐したのである。他人を催眠状態に陥らせたならば、自分自身もまた離魂状態に置かなければ、効目がないと信じられた時代だったのである。

その仮睡の中で、「若影」は、いつか、遠藤由利を抱いていた。その衣裳をことごとく脱ぎすてさせ、おのれもまた一糸まとわぬ裸軀となって、四肢と四肢を、縄のようにからめ、捩り合せて、褥の中で、物狂おしく、もだえた。

歓喜の烈しさは、おのれよりも、由利の方にあるように思われた。

「若影」は、しばしば、由利の情熱の奔騰に、圧倒されそうになった。

——もう、何も要らぬ。この娘だけが、おれには、あればよい！

「若影」が、心で叫ぶと、由利もまた、

「もう死んでもいい！」

と、声をあげて泣き叫んだ。

「おれのものだ！」

「貴方のものです！」

「死んでも離さぬぞ！」

「離して下さるな！」

骨も砕けよと、抱き締めて、唇を吸おうとした「若影」は、とたんに、愕然となった。

その貌は、由利ではなく、母のものであった。

総身が、氷の中に浸けられたように冷たくなった。

困惑と嫌悪で、「若影」は、母の裸身から離れようとした。

しかし、母は、おそろしい強さで、「若影」にからみついて、はなさなかった。

「は、はなせっ！」

「若影」は、絶叫して、もがいた。

……悪夢は、そこで破れて、「若影」は、われに還った。

茫乎として、猶しばし、「若影」は、宙へ、目を据えていた。

「若影」に、はっと正常の意識をとり戻させたのは、その肩にとまった小鳥の啼き声であった。

「おおっ！」

すでに、夜は、しらじらと明けはなたれていた。

「しまった！」

「若影」は、風のように、祠前へ、とび出した。

小鳥が翔ける——その方角へむかって、「若影」は、疾駆した。

十字架

一

——うう……ああっ！

声こそ出さなかったが、顔中が口になったかと思われるくらいの大あくびであった。

瓢箪池畔の樟の巨樹の頂きで、赤猿佐助は、待ちくたびれたのである。

——いったい、どうしたぞい、救い手は？　到底救い出せぬとあきらめて、退散したかや？

さりとは、卑怯な忍者よ。

尤も、自分にやれと命じられても、容易に思案の泛ばぬ難事である。

赤猿は、兵食の用意をして来なかったのを悔いた。このぶんでは、二日や三日は、この神木上で忍耐することを覚悟しなければならなかった。五十の坂を越えてから、とみに、腹が空くようになった。忍者として、甚だ困った仕儀と云わねばならぬ。

——やれやれ、樟の葉は食えんでのう。

かぶりをふったとたん、

「お！」

と、赤猿は、首をのばした。

彼方の天満宮を囲む林の中の小径から、人影が現れた。それは、白衣に緋袴をはいた神子であった。両手で、黒い鋺を捧げて、しずしずと、進んで来た。

まだ、十二三歳の美しい少女である。

まっすぐに、太鼓橋に近寄ると、欄干に腰を下している老兵法者に、しとやかに一礼して、

「禰宜殿の寸志にございます。一服召しませ」

そう云って、鋺をさし出した。

「忝けない」

鴨甚三郎は、微笑して、それを受けた。

「貴方様もいかがでございますか？」

少女は、半蔵に、問うた。

「不要」

半蔵は、別の方角へ向いたまま、かぶりをふった。少女は、立去った。

甚三郎は、鋺を、胸の前へ持ったまま、口へはこぼうとはしなかった。毒が投入されている危険をおぼえたからであろうか。

甚三郎の視線は、じっと鋺の中へ落された。

この時——赤猿は、見た。

木立の奥にのぞいた社殿の大屋根の上棟へ、ちらと、黒布で包んだ首が出現するのを——。

——来おったわい

赤猿は、にやっとした。

固唾をのむうちに、そこから、朝陽を撥ねる微かな光が、きらっきらっと、点滅しはじめた。なんの合図か？

赤猿は、それが、土中の「女影」へ送られるものだと思ったが、「女影」の双眼は、とじられていた。半蔵は、そちらへは背を向けて、イんでいる。

——ははあん！

赤猿は、合点した。

微光を点滅させる黒影と、鋺の中を瞶める鴨甚三郎と。

微光は、鋺に湛えた水に、反射しているのであった。

——ざんねん至極！

赤猿は、かぶりをふった。鞍馬古流の光文字を、忍者の方から送っていると知りつつ、その解読法は、赤猿の知識のうちになかったのである。

鴨甚三郎が、枯木のごとく黙然としていたので、流石の半蔵も、気がつかなかったことである。

甚三郎は、神子から、「一服召しませ」とすすめられ乍ら、受けとってみて、鋺の中に、ただの清水が湛えられているのを、一瞬、訝った。が、ただちに、これへ、光文字が、どこからか反射して来るものと、さとって、じっと、待っていたのである。

はたして、それは、水面へ映じて来た。

遠藤由利の肌につけた守護札は、卍に形どったキリシタンの十字架也。この秘密をかくした

くば、手出しあるべからず。

光文字は、こう伝えた。

甚三郎は、半蔵の振りかえる気配に、なにげないしぐさで、鋺の清水を、池の中へすてた。その前に、すでに、大屋根の黒影は、微光とともに、消えうせていた。

——由利は、若い忍者に犯されたか！

甚三郎は、胸のうちで、呟いた。

——あの異常に勝気な娘も、もしかすれば、これを契機として、女の慕情の哀しさを知るかも知れぬ。いずれ、大奥から、由利をさらって、江戸を立去ろうと、考えていた甚三郎であった。

由利は、実は、元真田家臣である宝山流・遠藤常右衛門の実子ではなく、鴨甚三郎の旧主の孫娘に当っていた。

甚三郎利元の旧主は、荒木村重であった。

二

荒木村重は、悲劇の人であった。

天正六年十月、織田信長は、股肱の驍将荒木摂津守村重謀反の報に接して、愕然となった。

荒木村重は、信長と足利義昭と衝突の際、細川藤孝らと信長に心を寄せて、必死の忠節をつくした一人であった。

信長は、村重が用うべき器才と知って、摂津に封じ、中国経略にも、羽柴秀吉の副将として参加せしめた。

村重謀反は、猜疑心の強い信長にとっても、寝耳に水で、全く信じ難かった。村重は、元来微族であった。それを、尋常一様以上の待遇で迎えてやったのである。謀反する理由など、毫も見出されなかった。

その筈であった。これは、羽柴秀吉の狡猾な謀略によるものであった。

秀吉は、副将として村重をともなっているうちに、その器才のなみなみならぬことを観て、ひそかに、おそれたのである。

村重は、松井友閑、明智光秀らが信長の命を奉じて、説諭にやって来て、はじめて、おのれの謀反の虚報を知らされたのであった。

村重は、勃然として、秀吉を憎んだ。

猜疑心の強い信長の性格を知る村重は、たとい一旦は潔白を証明して、赦免されたとしても、後難穏便たるべからず、とさとり、こうなるからには、毛利と提携して、秀吉を伐ってくれようと、決意した。

戦いの火ぶたは、きられた。

信長は、憤怒のあまり、自ら出馬した。

村重の勢力は、摂州より播州にわだかまっていた。その幕下に、高槻城主・高山右近と茨木城代・中川清秀がいた。

信長は、高山右近が、熱烈な耶蘇教徒であるのを知って、使者を送り、高槻城を開かぬに於ては、宣教師をことごとく屠戮し、耶蘇教を全滅せしむべし、と威嚇した。右近は、師父オルガンチノに書を寄せて、誨を乞い、ついに、城をすてた。

中川清秀は、当時の猛将としてきこえていたが、主君村重の謀反を賛成して居らず、行掛り上、茨木城に籠っていたので、信長の懐柔に会うと、かんたんに城を開けた。

十二月八日、信長は、村重のたて籠る伊丹城を、総攻撃した。城壁は、ビクともしなかった。村重の奇略は、さんざんに寄手をなやまし、夥しい損害を与えた。信長は、所々に附城を設けて、持久の策を講ずるよりほかはなかった。

伊丹城は、悠々一年間を、もちこたえた。

翌年九月二日の夜、村重は、何故か、数名の侍臣だけをつれて、城を忍び出て、尼崎へ落ちて行った。

この時、村重は、一書を、信長へ送っている。

それには、ただ一行、

「武辺の身が、つくづく厭に相成申候」

と、記されてあった。

武将として、城をすて、部下をすてたことは、前代未聞の卑劣といわなければならなかった。

信長は、その卑劣を懲らしめるために、伊丹城に対して、酷烈無慚な極刑を執行すると、申渡した。

まず、尼崎附近の松林で、城内に籠っていた婦女子のうち、百二十二人を、磔にした。

次いで、召使いの女三百八十八人と、歴々の女房に附いていた若党百二十四人を、四軒の家にとじこめておいて、周囲に乾草を積み、火を放って、焼き殺した。

さらに、伊丹城の人質であった重臣の妻子二十数名を、車に乗せて洛中をひきまわし、六条河

原で、斬首した。

甚三郎は、この時、村重の長女にあたる幼児をまもって、大和路へ遁れたのであった。

その女は、成育して、熱烈な切支丹信徒となり、禁廷に上って、幾年かすごしたが、某日、突然、甚三郎の許へ戻って来た。すでに、身ごもって八カ月であった。甚三郎は、対手を問うたが、頑なに返辞を拒まれた。

甚三郎は、問わぬことにして、女を京の南蛮寺へ預けた。伴天連の医術をもっても、容易ならぬ難産であったが、女は、能く堪えて、女児を生み、自らは果てた。

その子が、由利だったのである。南蛮寺で生れたので、肌まもりの札は、十字架であった。

由利自身が、切支丹信徒という次第ではなかった。

しかし、十字架を肌につけていることが露見すれば、たとえ、将軍家の寵愛を得て居ろうとも——いや、それだからこそ、かえって、由利は、極刑に処せられる。

旧主の孫娘であり、もしかすれば、やんごとない雲上人の落胤であるかも知れぬ由利を邪教徒として、処刑されるのは、老いたる兵法者として、堪え難かった。

三

——さて、愈々どうなるかや？

太鼓橋上に身じろぎもせぬ老いたる兵法者へ、またたきもせずに、視線を当てた赤猿は、もはやあくびをするどころではなかった。

赤猿の判断では、鴨甚三郎は、「影」の要求を容れたのである。

半蔵は、孤立した。

とはいえ、「女影」の死命は、半蔵が、その足下に制している。

救い手は、甚三郎をその場に封じておいて、愈々行動に移るであろうが、いったい、いかなる手段をとろうというのか？

地中に埋められた人質をとりかえすためには、半蔵に向って刹那の攻撃を加えなければならぬ。だが、はたして、半蔵に、その隙があるであろうか？

——まさに、興味津々じゃわい。

しかし、赤猿は、それから、およそ一刻以上も、津々たる興味を継続することを余儀なくさせられた。

陽が落ちて、さらに、半刻も過ぎると、流石の赤猿も、また、あくびをしたくなった。

——どうも、期待を急ぎすぎたようだわい。忍耐、忍耐。

と、自分をいましめた——瞬間。

赤猿の鋭敏な感覚が、目ざめたように、ひきしまった。

自分のつかまっているこの神木が、あきらかな震動を生んだのである。

赤猿は、眸子を、じいっと、足下へ落した。墨を流したように、闇が罩めている。その闇の底に、何かの気配が動いている。

——「影」のやつ、この神木をえらんで、のぼって来るのかな？

赤猿は伝って来る震動は、「影」がすでに途中までのぼって来たために生じたのだ、と思った。

——この頂きから、服部半蔵めがけて、飛ぶこんたんか。

しかし、これは、半蔵にとっては、当然考えられる攻撃方法である。それに対する防禦の用意はできていよう。聊か智慧がない、というものである。

——のぼって来居ったら、ひとつ、嗤うてやろうか。

赤猿は、眸子をこらして、待ちもうけた。もとより、闇に利く目をもっていた。

——はて？

のぼって来る気配は、さらに、なかった。ただ、地上から、樹幹を伝って来る怪しい微動だけが、ひきつづいているのであった。

——どういうのだ？

ふっと、赤猿は、不安におそわれた。

——この、神木の顫えは、なんであろうかや？

何かの予告と受けとれるものの、赤猿の思考は、そこから先へ進まなかった。

この時、赤猿は、べつの気配を、天満宮の方角に、察知した。

うごめく人数は、すくなくない。この瓢箪池へ向って、音もなく迫り寄って来る。

——ほ！　伊賀三十六人衆だぞ！

赤猿は、大きく目をひらいた。

この気配は、島の中の半蔵にも、当然、察知された。半蔵の老軀が、はじめて、わずかに、向きをかえた。

味方を迎えた半蔵に、不用意にも、一瞬の油断が生じた——そこを、闇にひそんだ「若影」はのがさなかった。

突如——。

耳をつんざく大音響と、目もくらむ閃光が、赤猿をのせた神木の根かたから、噴きあがった。

地軸を炸裂させて、神木は、まるで怒る巨竜のように躍りあがるや、樹冠をはばたかせて、池へ向って、ざざざっと傾いた。

赤猿の小軀は、羽毛のように、空中へはじきとばされてしまった。

ふわっ、と宙のものとなった刹那、赤猿は、にやっとした。

——根かたに、火薬をしかけて、爆発させようとは！

樟の巨木は、池の水面を、烈しく、枝葉で搏って、高い飛沫と波を立てつつ、横倒しになった。

そして、その頂きで、島の中に立つ一本松をひと薙ぎして、これをのけぞらした。

すなわち——。

一本松の根が、傾いて、ぐわっと、土を盛りあげるとともに、その根かたに埋められていた「母影」のからだも、土をはねかえし、地上へ躍り上る自由を得た。

「若影」は、連鎖反動を利用して、母を救ったのである。

反射的に、小島の一端へ、跳び躱した半蔵は、思わず、

「見事！」

と、口走った。

あまりにも、鮮やかな「若影」の攻撃ぶりであった。

半蔵は、おのれの敗北をみとめた。

——母を連れ去るがよい。

胸のうちで、そう言った。

次の瞬間、はっと、目を瞠った。

「母影」が、土まみれの全裸を、よろよろと立たせたところへ、水面上へ架けられた樟の橋を、風のように奔り渡って来た者が、ひょいと、抱きとって、ひっかついだ。

それは、「若影」ではなかった。

「おっ！　赤猿佐助！」

木立を焼く炎の中に、半蔵は、はっきりと、その正体を見てとって、咄嗟に、手裏剣を抜きとりざま、ひょっ、と投げた。

しかし、手裏剣は、疾駆する赤猿にとどくかとどかないかの空中で、ひと刎ねして、水中へ落下した。太鼓橋上から、鴨甚三郎が拋った鋺で、はばまれたのである。

「若影」は、肉薄する伊賀三十六人衆を、一身に引受けて闘うべく、身がまえていたが、思いがけなく、何者とも知れぬ黒衣の男が、母の裸身をひっかついで、遁走しはじめたので、

「おのれっ！」

と、目をいからせて、猛然と、追跡して行った。

疾駆にかけては、赤猿は、得意中の得意であった。

暗夜の往還を、通り魔の迅さで掠めて行くのは、幾年ぶりのことであろう。愉しかった。

――あるじ様は、時どき、こういう働きを命じて下さらんといけんわい。

風を切る猿面に、微笑を泛べたとたん、イヤという程、もんどり打たされた。

ひっかついでいた「母影」から、後頭へ、したたかな一撃をくらったのである。

くるっと宙を舞って、地上へ立った赤猿は、後頭を撫で乍ら、

「たすけてやって、この返礼は、どういうものであろう」

と、ぼやいた。

「母影」は、追いついた「若影」の腕の中へ、崩れた。

「お主、何者だ？」

きびしい語気で、咎める「若影」へ、赤猿は、

「べつに名のるほどの者ではない」

と、こたえた。

「何故に、拉致しようとした？」

「拉致？　いいや、ちょっと、手だすけしたまでだ。お手前様一人では、服部半蔵と伊賀衆をむこうにまわしては、手にあまろうか、と思われたのでな」

「まことか？」

「疑いぶかい御仁だわい。げんにこうして、お手前様たちは、身の安全を得たではないか」

そう言ってから、赤猿は、ひとつ、大きなくしゃみをした。

「やれ――あるじ様が、たわけ者め、よけいなまねをいたし居って、とお叱りじゃ」

「あるじ様！　あるじ様とは――？」

「ははは、世すて人でな、近頃は、とんと、愚痴ばかり申される。愚痴はいかんな、愚痴は――」

赤猿は、とぼけた。

「では、いずれ、また、縁あらば、お会いつかまつる。ごめん――」
一揖して、踵をまわした。
「待たれい！」
「若影」は、呼びとめたが、赤猿の足は、はやかった。
しかし――。
赤猿は、そのまま、立去る程、のんきではなかった。「若影」が、母を背負うて行くあとを、いつの間にか、尾けていたのである。

ところで――。
伊賀三十六人衆は、一人として、「若影」を追跡しようとしなかった。
そのかわりに、瓢箪池の周囲を、ぐるっととりまいてしまったのである。
小島に立つ半蔵は、
「……？」
不審の眼眸を、めぐらした。
ちょっと、思案していたが、ゆっくりと太鼓橋へ歩み寄った。
鴨甚三郎は、なお、そこにいた。
「御貴殿に裏切られようとは、思いもよらぬことでござった」
半蔵は、常とかわらぬ口調で云った。
「まことに、申訳ない仕儀と相成った。ゆるされい」

甚三郎は、詫びただけで、べつに、弁解しようとはしなかった。
「どうやら、今日は、それがしにとって、悪日でござる」
「伊賀衆もまた、お手前を裏切る模様らしいが……」
「左様――。服部半蔵の命数も、ここらあたりで尽き申すか」
半蔵は、わるびれずに、橋を渡った。
その前方へ、数名が、陣形をつくった。
半蔵は、曾ての配下たちを、眺めやって、
「このわしを捕えに参ったのか？」
と、訊ねた。
「上意でござる」
一人が、重い声音でこたえた。
「城内で、いかなる異変が起ったのか？」
「べつだん、異変は、起り申さぬ」
「あの爆煙は――？」
「酔い痴れた小者の悪戯でござった」
「お主たちを、城中へひきあげさせるための仕業であったか。……わしを捕えよ、と命じたのは、柳生但馬殿であろう？」
「……」
「そうであろう？」

「左様でござる」

——但馬守は、わしを疑った。その疑いは、わしが、またもや影母子をとりにがしたことによって、さらにふかまるであろう。

半蔵は、暗然となった。

——だが……、これは、但馬守が一人で抱いた疑いであろうか？

半蔵は、「母影」をさらって遁走した赤猿を思い泛べた。

——真田左衛門佐が、但馬守と会ったのではあるまいか？

——そうだ。たしかに、会った。幸村は、わしがたずねて行ったことを但馬守に告げた。……それだ！

半蔵は、老軀をふるって、曾ての配下たちと闘って、遁れる自信はなかった。

「やむを得ぬ。縛られようか」

半蔵は、淋しく、云った。

伊賀の水月

一

その日の朝、荒木又右衛門保和は、厠を出て、手水を使おうとして、身を跼めたとたん、夥しい鼻血を、したたらせた。

又右衛門は、みるみる朱に染まる鉢水を見下して、しばし、憮然として、動かずにいた。

江戸城吹上に於て、宮本武蔵の養子八五郎伊織と立合う御前試合は、二日前に行われているべきであった。それが、いかなる理由か明かされず、延期されて、今日を迎えたのである。

武道上達は鍛錬第一と心得る一流兵法者ならば、もとより一日たりとも、修業に懈怠することはないが、このたびのような生涯二度とない大試合ともなれば、その日その刻限を期して、異常なまでの身心整調の努力をはらうことになる。

ところが、その前日になって、突然、二日間の延期を申渡されたのである。いかなる達人も、いや身心整調に心を配る一流兵法者だからこそ、これは、甚だ苦痛であった。

特に、荒木又右衛門にとっては、二日間の延期が、せっかく整調した身心を大きく狂わせてしまうのを覚悟しなければならなかった。

はたして、おそれていたことは、こうして、容赦なく現実となってあらわれた。

又右衛門は、特異な体質であった。妻を、数日も抱かずにいると、必ず、夥しい鼻血を流すのであった。

試合にそなえて、又右衛門は、予定日前の三日間、妻と、褥を別にしていた。ところが、さらに二日間を延期されたのである。

鼻血は、避けがたかった。

ただ、鼻血を流しただけでおさまらずに、その後に、名状し難い程の烈しい欲情が体内に渦巻いて、他の一切のことに心気が働かなくなる——それが、又右衛門にとって、恐怖すべきことなのであった。

荒木又右衛門が、先月、大和国郡山藩を致仕し、二人の子を摂州丹生の山田へ預けて、妻のお市と義弟渡辺数馬をともなって、出府して来たのは、御前試合のためであるとともに、敵討という目的もあった。

宮本伊織と御前試合をするように、柳生宗矩から命じられたのは、今春であったが、これは、又右衛門にとって、当惑すべき一大事であった。

敵討をなすべき身であることは、宗矩の方で充分承知の上で命じて来た試合であった。兵法者としても、最大の栄誉である。又右衛門は、断るわけにいかなかった。

実は、宗矩が、又右衛門を御前試合の剣士の一人に加えたのは、理由があった。

宗矩の巧妙な策略であった。

又右衛門が、渡辺数馬を扶けて、敵討をしようとしているのは、すでに、個人の恨みをはらすというだけの事柄を越えて、備前藩主松平宮内少輔と旗本一統との、双方ひくにひかれぬ意気地の対立という問題となっていた。

その発端は、きわめて、些細な理由による喧嘩沙汰であった。

寛永七年七月二十一日の夜、岡山烏城の大手で、踊の興行があった。家士のうち、渡辺数馬の家では、当主は妻の父津田豊後の許に赴き、家内は踊見物に出かけ、数馬の弟源太夫が、風邪で発熱して一人、床に臥していた。そこへ、同藩中の河合又五郎が、酔って、入って来た。又五郎は、平常は、おとなしい人柄であったが、酒が入ると、別人のようになった。

源太夫は、池田家第一の美少年で、藩主宮内少輔忠雄のお気に入りであった。

又五郎は、その枕元にあぐらをかいて、美少年が病臥している風情を、からかいはじめた。はじめは、黙って、きいていた源太夫も、又五郎のあまりの執拗なからみかたに、ついに、忍耐心を失って、枕を摑んでたたきつけた。

又五郎は、せせら笑って、

「色子とののしられて口惜しければ、立合ってみせい」

と、挑んだ。

又五郎は、源太夫を袈裟がけに斬り仆し、その返り血で、酔いもさめ、われにかえった。

椿事を急報されて、はせ戻った数馬は、まだ繋切れぬ源太夫の口から、敵が又五郎と告げられるや、直ちに、河合家へ押懸けて行った。しかし、その時、すでに又五郎の父半左衛門は、又五郎を、江戸へ向けて、逃していた。

藩主忠雄は、これをきいて、憤って、半左衛門を召捕らせて、重臣荒尾志摩邸へ、拘禁した。

又五郎は、江戸へ趨ると、旗本の安藤治右衛門家にかくまわれた。

池田家江戸屋敷より、又五郎を引渡してもらいたい、と交渉受けるや、安藤治右衛門は、半左衛門を当方へ連れて来てもらえるなら、又五郎を返そう、と返辞した。このことを重臣から告げられた忠雄は、最初は承知しなかったが、旗本久世三四郎と阿部四郎五郎の両人から、違約せぬという起請文が届いたので、ようやく納得して、半左衛門を江戸へ下した。

ところが、旗本衆が寄合った席で、この件が語られているうちに、安藤治右衛門が、ひとたびは又五郎をかくまい乍ら、その父半左衛門と引替えに渡すというのは、天下の旗本の名折れになろう、という評議になった。

そこで、安藤治右衛門を呼んで、又五郎引渡しを取消す旨、一書を、池田家へ送らせた。

忠雄が、火のごとく憤激したのは、当然であった。一門一族、申合せ、武器をかかげ、具足を鳴らして、安藤の屋敷へ押寄せ、鯨波をあげて攻め入って、又五郎を奪いとってみせるぞ、と息巻いた。

公儀もすてておけず、三家はじめ大々名たちを仲に入れて、事を纏めようと努めたが、双方孰れも、一歩もあとへ退かなかった。

そのうち、忠雄は、疱瘡を病み、九年四月三日に、逝った。忠雄は、息を引取る枕辺に、実弟松平石見守輝澄、同右近太夫輝興をはじめ、重臣一同を聚めて、

「このたびの出入の埒が明かぬままに、瞑目するのは、断じて叶わぬ。必ず、又五郎の首を、刎ねて、わしを招魂させい」

と、遺言した。

池田家では、葬儀がおわると、家中連判で、公儀へ、訴え出た。

公儀は、旗本一統へ、その旨を下達したが、肯き入れさせることは不可能の模様であった。公儀では、やむなく、半左衛門だけでも、渡すように命じて、徳島城主蜂須賀蓬庵（忠政）に、その処置をまかせた。

蓬庵は、池田忠雄の舅に当る人物であった。

強引に、半左衛門を奪いとった蓬庵は、その身柄を、阿波国へ移すと見せかけて、大坂からの船中で、刺し殺してしまった。世間へは、途中病死と披露したが、このことが、さらに、旗本たちの態度を、硬化させた。

まかりまちがえば、池田藩士と旗本の血気の面々とが、府内の何処かで、凄惨な決闘を起す気配さえ起って来た。

柳生宗矩は、ここにいたって、将軍家上意として、河合又五郎を江戸より遠くはなれた他国へ出させることにした。その途中を、荒木又右衛門と渡辺数馬に襲わせて、討ちとらせる、という計略であった。

江戸を遠くはなれた他国で仇討をさせておいて、池田藩およびこれに同情する各藩の気を鎮めさせ、大名の面目をたてさせるとともに、旗本たちの処置をも寛大に行おうとする思慮であった。

出府して来た又右衛門は、宗矩から、河合又五郎が何処へ落ちて行くか、隠密によって、さぐらせておく、と約束されたのであった。したがって、又右衛門は、又五郎の動静に心を配る必要はなかった。

宗矩の指令によって、その場所へ趨ればよかった。

ただ、又右衛門は、その宗矩の配慮にむくいるために、宮本伊織と立合って、是非にも勝たなければならなかった。伊織に勝って、柳生流が、円明流をしのいでいることを明らかにしておいて、さらに又五郎を討ちとって、天下に、その名をとどろかせる。これこそ、柳生流の価値を末代まで不動のものとすることであった。

なぜならば、荒木又右衛門という存在は、この時まで、殆ど無名にひとしかったからである。

又右衛門の強さを知っているのは、柳生の人々だけに限られていたのである。又右衛門は、これまで、ただの一度も、他流試合をしていなかった。

二

又右衛門は、懐紙で鼻血をぬぐうと、跣足で、庭へ降りて、義弟数馬を呼んだ。

これは、毎朝の行事であった。

数馬は、三尺五寸の黒樫の木太刀を持って、無手の又右衛門に対した。

木太刀は、常人では振れぬ重量があった。華奢の骨組みの数馬の力にあまった。

しかし、稽古は、武芸修業のものではなかった。敵討という明白な目的をもっていた。数馬に、勝ちぐせをつけてやろうとする又右衛門のはからいであった。

「参れ！」

眼光凄じく、睨みつけて、又右衛門が、叫ぶ。

「おーっ！」

数馬は、おめきあげて、打ち込む。

又右衛門は、躱さずに、平然として、打たれるにまかせる。

打ち込めば、必ず対手を斬れる——その自信を、未熟者の数馬に、つけてやる稽古であった。

真剣勝負の場合、腕におぼえがないと、どうしても、受け身となる。その受け身を、数馬に、すてさせなければならなかった。

十合、二十合と、数馬は、義兄の面ていへ打ち込む。

疲労とともに、木太刀の重さに、逆にふりまわされて、又右衛門の頭や肩の上で、紙一重に停めることは叶わなくなる。

又右衛門は、頭蓋や肩の骨が砕かれる危険にさらされ乍らも、なお、平然として、避けないでいる。

三十合をかぞえると、数馬の胸は、ふいごのように荒く喘ぎ出す。

「それまで——」

休息をゆるしておいて、又右衛門は、井戸端へ寄って、裸になると、水をあびた。汗が滲むと、又右衛門の肌は、いちだんと烈しい体臭を放つのであった。

次に——。

又右衛門は、愛刀伊賀守藤原金道を、腰に佩び、神気を得て、居合抜きに抜き放って、青眼不動の構えをとった。

数馬は、砂上に正座して、又右衛門の姿を凝視している。

「ええいっ！」

早朝の清澄の空気をつんざいて、二尺七寸の白刃が、宙に白い弧線を描く。ただの一太刀のみであった。

ぴたっと鞘へ納めた又右衛門は、数馬へ一顧もくれずに、縁側へ上って、自室へ向って歩き出した。

その時、またもや、又右衛門は、夥しい鼻血を、どっと流した。

又右衛門の剣法「水月」の極意とは、正真の「先の太刀」という。

これは、文字によって表現しようのない秘技であった。

又右衛門は、伊賀荒木村に生れた。慶長四年——即ち関ケ原役の前年である。初名丑之助といったが、これは、九歳の時、狂った牡牛が奔駆して来るや、その行手に立ちはだかって、睨み返したのが評判となって、通称にされたのである。その時、すでに、十五六歳の体軀をそなえていた。

柳生石舟斎が、荒木村を通り過ぎる際、長い篠竹を振って、蜻蛉を打ち落している少年を見かけた。その篠竹のさばきかたの軽妙さと、狙った蜻蛉を必ず落す見事さに、石舟斎は、将来見込みありと思って、柳生庄へつれて来た。丑之助が十二歳の時であった。

まさしく、天稟とか、天賦とかいう言葉は、この怪童に冠せられるためにつくられたかとみえた。

柳生道場に入門を乞う者は、まず最初に、道場に於て、奉書紙をまるめた得物を持たされて、石舟斎が寵愛の猿と立合わされる。おそるべき敏捷さをそなえた猿に、一撃をくれることのでき

た者は、殆どなかった。逆に、とびつかれて、顔面をかきむしられる者の方が多かった。

丑之助は、猿を、はったと睨みつけて、居竦ませておいて、悠々と、奉書紙で、その首を包んでしまい、ぽんと、石舟斎の膝へ投げた、という。大兵にして怪力、放胆にして細心、しかも、すばらしい身軽さ——兵法者として完璧の天性といえた。

その翌年、石舟斎は、雪ふかい柳生谷の晨、七十八歳の生涯を、しずかに閉じたが、その枕辺には、丑之助ただ一人が坐っていた。

「よいか、丑之助、おのれの腕前は、つとめてかくして置けい。一挙して天下に名を知られるには、その時と場所をえらぶがよい」

その遺言を、丑之助は、まもったのである。

「水月」の極意をさとったのは、二十三歳の時であった。

たまたま、八歳下の十兵衛三厳が、江戸からやって来て、一日、野山を逍遥したことがあった。

十兵衛は、又右衛門が、どれだけの腕前の持主か、試す下心を抱いていた。石舟斎の墓守りとして、柳生谷から一歩も外へ出ていない又右衛門の腕前については、誰人も知らなかったのである。

十兵衛は、逍遥のあいだに、又右衛門を、不意に撃ち据えようと、隙をうかがったが、ついに、はたせなかった。

黄昏が来て、とある川のほとりに出た時、十兵衛は、岸から二間もはなれた水中にのぞいている岩を指さした。

「又右衛門、あの岩へ跳び移って、また跳び戻って参れ」

「べつに難事ではありませぬが……」
「いや、お主が跳び戻って来るところを、わしが撃つ。わしを撃ち返すか、それとも、躱すか——それを見せろ」
川中の小岩から、二間の空中を躍って、岸へ跳び戻って来ることは、それだけで、常人のよくなし得る業ではない。その刹那を、襲撃されて、反撃するにせよ、躱すにせよ、これは、神速の秘術を発揮しなければならぬ。十兵衛は、十五歳とはいえ、江戸の道場にあって、父宗矩と立合って、三本に一本は打ち込む麒麟児である。
又右衛門は、しかし、別に表情も変えず、承知した。
身構えもせずに、無造作に、岸辺の草を蹴って、水面上を翔けた。
と同時に、十兵衛もまた、そのあとにつづいて、身を躍らせていた。これは、十兵衛の策謀であった。あたまの円い岩に、あらかじめ油を塗っておいたのである。
それと知らずに、跳び移った又右衛門は、足をふみ滑らせて、水中に落ちる。こちらは、要心して、跳び移るから、落ちない。
落ちた又右衛門めがけて、十兵衛は、一刀を見舞うこんたんであった。
はたして、又右衛門は、高い飛沫をあげた。
十兵衛は、岩へ足をつけるやいなや、抜き打ちに、
「やっ！」
と、飛沫の下へ、白刃をあびせた。
次の刹那撃った十兵衛の方が、おそろしい戦慄を、全身に走らせていた。

胸までつかった又右衛門は、両の掌で、切尖から二寸あまりのところを、ぴたっと押えていたのである。
十兵衛が、突けども、押せども、白刃は、ビクとも動かなかった。又右衛門は、にやりとして、手をはなした。とたん、十兵衛は、水中へ、ころげ落ちていた。
後刻、十兵衛は、「あれは、なんという極意か」と問うた。
又右衛門は、ちょっと考えていたが、
「それがし、落ち込む瞬間に、水面に映った新月を眺めましたが……かりに、水月と名づけて置きましょう」
と、こたえた。
水に映った三日月を眺めただけで、どうして、あんな凄じい迅業が会得できたのか、十兵衛には、わからなかった。
又右衛門にも、説明のしようがなかった。
およそ、悟りとは、こうしたものであろう。釈尊の解悟も、暁の明星を視た一瞬であった、という。機縁熟した、というよりほかはない。
又右衛門がさとったのは、「先の太刀」であった。
立合う対手の、どこに隙が生じても、その隙が出た刹那、又右衛門の太刀は、そこを打込んでいるのであった。月が雲から出た、と同時に、水に映っている——それであった。
隙ありと見てとって、そこを撃つのではなかった。見てとるのと、撃つのが、全く同時なのであった。

もとより、一流兵法者ならば、容易に隙などを生ずるものではない。それまでには、全身全霊を傾注した幾刻かの経過がある。又右衛門には、その間を、みじんもゆるがぬ体力と気魄があったのである。

三

又右衛門の不幸は、また、その異常に強い精気であった、といえる。

まず、強烈な体臭のために、日に五度も沐浴しなければならず、二度も下着をとり替えなければならなかった。そうしてなお、対する人に、臭気をかがれるのであった。又右衛門が、人と交ることを好まず、三十歳まで柳生谷から一歩も、出なかったのは、そのためであった。

縁あって、渡辺家の女を妻に迎えることになった時、又右衛門は、どれだけ、おのれの体臭をのろったろう。生涯無妻の誓いをたてていた又右衛門であった。それを破ったのは、みなぎる精気に、狂いそうになるのに耐え難くなったからである。

妻のお市は、よくできた女であった。良人の体臭に、ただの一度もいやな顔をみせなかった。

又右衛門は、そのやさしさに感謝して、寝室を別にした。

営みを終えて、わが寝所へしりぞいたお市は、そっと音しのばせて、盥湯で、からだを拭く様子であった。それが、又右衛門には、たまらなかった。さりとて、三夜も、お市の肌にふれずにいると、覿面に、鼻血を流すのであった。

又右衛門は、部屋に入ると、床の間に向って、正座した。

床の間には、宮本武蔵が自筆の自画像が、かけてあった。

蓬髪を肩に散らし、袖なし羽織をまとい、二刀を両わきに携げて、炯々たる眼光を宙にはなっている図を、じっと、凝視し乍ら、又右衛門は、心気を鎮めようとした。

又右衛門は、画幅の中から、武蔵が、生きて、抜け出して来るのを、願った。

叶えられぬ願いであった。

むしろ、画像は、遠のき、薄れた。

又右衛門は、膝の拳を、砕けんばかりに握りしめて、画像を睨みつけた。

と——。

背後に、妻の入って来る気配があった。

又右衛門は、振りかえらずに、堪えぬこうとした。

しかし、その必死の努力も、

「お茶を——」

とすすめる優しい声音で、破れた。

「お市！」

「はい——」

「床を延べい」

「……」

「は、はやく、いたせ！」

又右衛門は、叱咤した。

「……もう、ほどなく、御登城なさるのではございませぬか？」
「ま、まだ、半刻ある！」
「でも――」
「たわけ！」
叫んだ又右衛門は、振りかえりざま、猿臂をのばして、お市のほっそりとしたからだを、ぐっと引寄せた。
「旦那様！」
お市は、おどろいて、わずかな反抗をしめした。
その身もだえが、又右衛門の荒れ狂う欲情を、さらに烈しく燃えたたせた。
又右衛門は、お市を畳の上へ押し倒すや、荒々しく、その裳裾を剝いだ。
……思うさまに、精気を放射し了えた又右衛門は、死んだような妻の上から、ふと、顔を擡げた。
画幅の中の武蔵が、急に、すっと抜け出して来るように、感じられたのである。
画像を凝視する又右衛門の双眸は、氷の冷たさを湛えていた。
画像の携げた二刀が、びくっ、と動いたように、見てとれた――一瞬、又右衛門は、けもののように躍り上って、差料を把るやおそしと、無声の気合を発して、ひと跳びにその画像を、両断した。

円明二刀流

一

同じ日の朝――。
宮本伊織は、藩邸（豊前小倉藩・細川家）の北隅にある表遣い寺尾求馬之助の長屋の一室から、起き出ると、庭さきの懸樋の水を、椀に受けて、その水面に映ったおのが貌を、じっと瞶めていた。
小倉藩中随一の美容を称われている貌であった。澄んだ切長な眸子、細く高く通った鼻梁、女子に欲しい丹唇、美しくそろった皓歯、そしてそれらをつつむ輪郭は、繊細で巧緻な仏像のそれを連想させる。
にも拘らず、こうした美貌が、当然たたえていなければならぬ優雅な気色は、みじんもなかった。その肌理は、光沢がなく、蒼く沈んでいたし、黒い瞳には、無気味なまでに冷たい光が宿っていたからである。
稀に見る美貌は、かえって、人を戦慄させる無情な虚無のおそろしさを、斯程までに露骨に現すための天為かとさえ受けとれる。
慈悲の祈念を罩めた人為の仏像に似て、この凄じいまでの冷たい面目は、あまりにも皮肉とい

えた。

稚児趣味の汪溢する西国武士のうち、一人として、伊織を口説いた者はなかったのである。

椀の水面に映ずるおのが貌を瞶めて、伊織は、魂のないごとく、無表情であった。

この二十三歳の若者は、養父宮本武蔵によって、完全なる無感動の兵法者にしたてあげられたのである。

ある時、藩主が、武蔵に問うた。

「厳の身とは、如何？」

武蔵は、こたえて、

「事に臨まずしては、顕し難し。養子八五郎貞次（伊織）をお召し頂ければ、直ちに御覧に入れまする」

この時、伊織は、十八歳で、小姓をつとめていた。

奥から呼ばれて、御前に平伏した伊織に向って、武蔵は、何気ない口調で、申附けた。

「八五郎、思召しの筋あり、ただ今、そちは切腹仰附けられた。左様心得、直ちに支度いたせ」

伊織は、つつしんでお請けして、起って行ったが、その表情、挙措は、自若として常のごとくであった。

「厳の身ということ、兵法を得道して忽ち磐石のごとくに成りて、万事あたらざるところ、うごかざるところ」と、武蔵は、〝五輪の書〟に記しているが、伊織に対する教導は、そのように完璧だったのである。

しかし、今日まで、伊織の腕前は、小倉藩内にあっても、いかほどのものか、知られてはいな

かった。武蔵が、ただの一度も、他流試合はもとより、家中の士との立合さえも許さなかったのである。

今春、柳生宗矩より、武蔵に宛てて、御前試合に出場の儀を懇請して来るや、はじめて、おのれに代るに養子伊織をもってしたい、と返辞をしたのであった。

幾年か前、武蔵の兵法が、将軍家の上聞に達し、召し出さるべき旨、沙汰があった時も、

「柳生但馬殿御尊敬の上は、わが兵法上覧に備うるも無益なり」

と、応ぜず、代りに、原野に日の昇るところをいっぱいに描いた屏風を献上している。

理由は不明乍ら、武蔵は、この日まで、江戸に雲集している各流の名家を対手として、ただの一度も、技倆を試みていなかった。江戸へ出て、夢想権之助を伏さしめ、大瀬戸隼人、辻風なにがしを斬殺したのは、若き日のことで、その後、絶えて出府していないのであった。

およそ道の修業に諸州を徘徊する者が、その土地第一と聞える人を訪れぬのは、業理の上に於ておのれを知るという計量を失っているものであり、宮本武蔵の円明流は、名人達人の純精なる太刀風を故意に避けた田舎兵法に過ぎぬ、という軽侮が、府内にはあった。

円明流は、嘱望される一流とはされていなかったのである。所詮は、西国あたりでうそぶいている郷愚にすぎぬ、という評価であった。

いま、はじめて円明流は、御前試合において、その真価を示すことになったのである。

武蔵は、その秘術を、伊織によって、天下に示さんとするものであった。伊織は、すでに、武蔵にまさっていたからである。

水鏡に映ったおのれの貌を、じっと瞶めている伊織の心懐を、正しく説明することはむつかしい。覇気、希望、精気――およそ、そういったものはみじんもなく、無明の煩悩も知らず、といって、剣の心が到達する諸仏不動智の無心という次第でもなく、あえていえば、むしろ、痴愚の凡夫の茫然自失に近いのであった。

武蔵の無慚なまでに執拗な教導が、伊織を、こうした不可解な喪神者に仕立てあげたといえる。

十三歳で、武蔵の養嗣子となった時には、天下一流の兵法者たらんとする気概に胸をふくらませていたものだった。そして、天稟の才は明らかであり、沈着な気質も、大いに認められるところであった。

ところが、武蔵は、自身で、木太刀を把って、伊織を仕込むことはせず、まずはじめに命じたのは、身を翻して、庭の泉水に跳び込むことであった。これは、暑中からはじめられたが、冬を迎えても、日課として、つづけさせられた。いったい、なんのために、池中にもんどり打たねばならぬのか、その理由を問うことは、許されず、伊織は、ただ、黙々として、実行して来た。

一年過ぎると、武蔵は、さらに、池中に落下する瞬間、水面に映ったおのれの貌を視よ、と命じた。

もとより、影像を一刹那にとらえ視るのは、容易の業ではなかった。しかし、やがて、伊織は、宙を回転して、落下しつつ、おのれの貌を、はっきりと眺めるゆとりを得た。

六尺の高さの空中から見下す瞬間、おのが貌は、水鏡の中でさらに六尺の奥にあり、実体の落下とともに、水面上へ飛びあがって来るそれを、凝視しつつ、充分の時間をかぞえることができるようになった。

いわば、落下するのは一刹那であっても、おのが貌を認めることのたしかさにおいては、長い時間をかけると同じになったのである。

瞬間の動きを視てとるに、これ以上の修業はなかった。

おかげで伊織は、道場で、他人の立合を見学させられていても、双方の木太刀の動きが、緩慢に思えるくらい、明瞭に見えて来た。

さらに、一年を経て、伊織が命じられたのは、水鏡のおのが貌を、空中から、抜きつけに、両断する迅業であった。

この修業には、二年を費した。伊織は、羽毛のごとく、かるがると、宙に五体を浮かせておいて、水面上三尺のところまで落下しざま、白刃を、飛び上って来るおのが貌へあびせるばかりか、飛沫をあげた時には、すでに鞘に納めているまでになった。のみならず、はじめは、刃風の勢いで、貌を波紋で砕き散らしていたのを、やがては、ただ、紙を截るように、すうっとま二つに断つことに成功した。それを見とどけておいて、伊織は、水中に落ちた。

一日、伊織は、道場における修業を欲して、養父の前に坐り、

「もはや、軽捷の業を心得ました。この上は、お父上の兵法の太刀筋を修得仕りとう存じます」

と、願った。

武蔵は、じろりと見かえって、

「お前が、水中のおのれを斬る時、水中のおのれは、いかがいたすか？」

と、問うた。

伊織は、愕然となった。

自分が、水中の自分を斬るや、同時に、水中の自分もまた、空中の自分を斬っているではないか。

「よいか、伊織。わしの兵法の太刀筋を取ろうとしてはならぬ。お前は、お前自身の兵法を生むがよい」

そう云いきかせて、武蔵は、伊織をつれて、人里はなれた林の中に行って、はじめて、二刀を構えさせた。そして、伊織の自由な構えに応じて、自身もまた、それと全く同じ構えをとってみせた。

伊織は、無我夢中で、養父に撃ちかかった。それに対して、武蔵は、養子と寸分ちがわぬ動きを示した。すなわち、伊織は、鏡に写ったおのれの姿と闘うのと同様の状態に置かれたのである。対手は、武蔵ではなく、おのれ自身であった。

おのれが、撃ち込みをあやまれば、対手も撃ち込みをあやまった。おのれが、見事に撃ち込めば、対手も、同時に、同じところを撃っていた。

武蔵には、間合を見切る神技があったので、悠々として、伊織の動きを、おのが五体に写し得たのである。

「円も明も、これは鏡の意だ。円明流とは、鏡に向う剣法と心得るがよい。鏡の影よりも迅く、鏡の影を撃て」

それが、武蔵の教えであった。

鏡の影よりも迅く、鏡の影を撃つことは、不可能事であった。

不可能事と知りつつ、それを可能にしようと刻苦するところに、兵法の残酷な宿命があった。

伊織は、武蔵を撃とうと、物の怪に憑かれたように、日を重ねた。しかし、武蔵は、常に、正確に、伊織の鏡であった。

幾月かを経て、伊織がさとったのは、兵法とは、勝負のないもの、ということであった。

武蔵は、伊織がさとったと読みとるや、ある日、突如として、凄じい攻撃に出た。

すると、伊織は、反射的に、対手と全く同じ動きをもって、闘った。

「できた！」

武蔵は、一言そう洩らすと、もはや、伊織と立合おうとはしなかった。

斯くて——。

伊織の日常は、行住坐臥、いついかなる場所にあっても、一瞬たりとも、おのれの前におのれが在る意識をすてなかったのである。牀に就いている時も、闇の宙に、夜具をかぶったおのれが、じっと自分を見おろしているのを、きびしい現実とした。

「その独りを慎しむ」

それを、十年間にわたって実行して来た伊織が、喜怒哀楽の表情を貌から喪ってしまったのは、当然であろう。

いま、水鏡のおのれの貌を瞶め乍ら、伊織の胸底にたゆとうものがあるとすれば、それは、微かな自己嫌悪に相違なかった。

二

伊織は、椀の水を飲みほすと、ゆっくりとした足どりで、庭を横切った。

東の端の植込みの中で、秋深むにつれてその色を冴えさせる山茶花の花が、小春日和にうららかに、静かに咲いて、伊織を誘い寄せたのである。

葉がくれに咲き残りたる花のみぞ、昔の人に会う心地する

古歌一首を、脳裡に掠めさせた伊織は、はじめて、その美しい貌を、人間らしいおだやかな気色にした。

手をふれれば、白い花は、かそけき音を心にのこして、はらはらと散りそうな——その清雅なすがたを眺める伊織は、いつの間にか、古歌の中の〝昔の人〟になりきったようである。自己喪失の若い兵法者が、せめても、おのれをなぐさめる唯一のすべては、故郷の山河を自由に歩きまわった幼い頃の思い出にひたることであった。

山茶花は、生家の庭さきに、毎秋、美しく咲いたのである。

なつかしげに、微笑を泛べて、そこへ近づいた伊織は、朝のそよ風に、花がゆれて、ひと雫の露が、ほろりと落ちるのを見た。

とたん——伊織は、ぱっと身を飜しざま、腰の利刀を、抜き放っていた。

二間の距離を置いて、朝陽を背にした黒装束の人物が、うっそりと立っていた。その双手には、同じ長さの白刃が携げられていた。

その立姿は、まさしく、円明流——二天一流の自然体であった。

すなわち、伊織の眸子には、父武蔵が、黒衣に身をつつんだ姿と映った。

「……」

「……」

十をかぞえる程の短い時間が、無言不動の対峙のうちに、流れた。

突如——。

黒影は、地を蹴って、跳躍した。

握られていた二刀は、同時に、双手をはなれて、伊織の胸もとめがけて、矢のごとく飛んだ。

体をひらくいとまはなかった。

とみた刹那に、伊織の手もとからも、太刀は、黒影めがけて、投じられていた。打てばひびくごとき、間髪を入れぬ迅業であった。

黒影は、伊織の頭上を翔けすぎて、背後の地上に降り立つや、そのまま、しげみの枝葉にそよぎも与えず、消え失せてしまった。

伊織は、もとの姿勢に——白い花に対して、立っていた。

夢裡のできごとのように、一瞬にして過ぎ去って、世界は、何事もなく、明るく、静かであった。

ただ、前とちがっているのは、伊織の利刀が失われ、その代りに、敵が投げた二振の太刀が、その両手に握られていることであった。

そして、伊織の足もとには、白い花の一枝が、落ちていた。伊織が、敵の二刀を摑むやいなや、飜転して、一颯をくれたなごりであった。

——何者であったのか？

その疑惑さえも、伊織の脳裡には、泛ばなかった。

父武蔵にひとしい影が、幻のごとく現れ、そして、音もなく消え失せただけのことであった。

伊織は、庭上に置きすてられた鞘をひろいあげて、二振の太刀を納めた。それから、自分が剪り落した一枝をひろいあげると、部屋へ戻った。

花を活けて、その前に坐った伊織は、ふっと、冷たくわらった。

――一振を失って、二振を得た。

伊織は、あらためて、二刀を抜きはなってみた。

寸尺も、つくりも、そっくり同じの秋水であった。

粛然として、心を正さしめる鮮烈な光芒をはなっている。焔は雪のごとく、刃のさかいは薄氷に似て、匂いはふかく、鎚子は峻険の峰のように返り浅かった。刃文は、桜花の散ったような丁字みだれであった。

――よし！

伊織は、頷いた。

――この二振ともに、荒木又右衛門の生血を吸うだろう。

三

「母影」は、蔀から、そそぎ込む朝陽の縞に染められて、死んだように仰臥していた。

その枕元には、一振の太刀が置かれてあった。

微かな気配とともに、「若影」が戻って来るや、「母影」は、口をひらいた。

「何処へ、行っていやった？」

「荒木又右衛門と宮本伊織を試して来た」

そうこたえてから、「若影」は、ひくい笑い声を洩らした。

「又右衛門は、精気を抑えきれずに、女房を犯し居った。わしが、床の間の武蔵の自画像をゆさぶってやると、躍り上って、斬りつけて参ったが、水月の冴えは流石乍ら、わしの在ることに気づかなんだとは、不覚者。それにくらべると、伊織は、花から雫が落ちるのを見て、背後に立つわしを察知し居った。あれでは、伊織の勝利は、あきらかじゃ」

「若！」

鋭く呼んで、

「無用のいたずらは、止めにせぬか！」

「……」

むすっとした表情になった「若影」は、母のかたわらに仰臥した。

「求める太刀は、すでに、手に入ったのじゃ。あとの試合に、孰れが勝とうと、われらにかかわりはない」

「……」

「焼刃に、謎語が、読めた」

「……」

「車中侯――この意味を解くのが、そなたの次の仕事じゃ」

「どうして、解く？」

「京へ趨って、粟田口の陰陽師・阿部明麿を訪れて、問うのじゃ」

「その陰陽師が、必ず解いてくれるものなら、急ぐ必要もあるまい」

「いいや――。服部半蔵は、この太刀を、真田左衛門佐に見せた。……幸村は、謎語を読んだに相違ない。急がねばならぬ」

「母者、幸村ならば、味方として語らえぬのか？」

「何を云うぞ！　われら母子に、味方はない！」

「母影」は、切りすてるように云った。

「若影」は、天井を、じっと見あげていたが、むっくりと起き上ると、

「わしは、やはり、残り試合の勝者から、太刀を奪うぞ！」

と、叫ぶように云った。

「若！」

「止めるな、母者！　わしは、六つの試合の勝者どもを、ことごとく飜弄してくれた。もはや、あとへ退けぬ。のこり四つの試合の勝者どもに対しても、わしは、勝負を挑むのだ！　わしの術を試さなくては叶わぬ！　十試合の勝者に勝つことこそ、忍者たるわしの生甲斐なのだ。わしは、やってくれる！」

そう云いはなつ「若影」へ、「母影」は、冷たい一瞥をくれた。

あるいは、こうなろうか、と懸念していたのである。

目的の太刀を手にしただけでは、到底、「若影」の血気はおさまらぬであろう、と思っていたが、はたして、修羅にとり憑かれていたのである。

「母影」は、とどめることの無駄を、さとった。

「若影」は、立ち上った。

「母者、城内へ忍び入って、荒木と宮本の試合を見て来る」

そう告げられた「母影」は、ひくく、咽喉奥で、痰をきった。

「忍び入るなら、去来の法を用いるがよい」

巳の上刻、宮本伊織は、小倉藩士六名に見送られて、三之丸北門の平川門から入って行った。

藩士たちは、藩邸へ引きあげて行った。

伊織が二之丸に入る梅林門に行き着いたであろう頃あい、平川門へ、あわただしく、藩士が馳せ戻って来て、大切の品を伊織に手渡すのを失念していたと云って、手にした白絹の包みを、番士にさし出した。

「おあらため願いたい」

番士が、ひらいてみると、六寸ほどの観世音像であった。

「試合の前の半刻を、この御像の前で心気を整えるのが、宮本伊織のならわしでござる。しかと、お渡しねがいたい」

番士は、承知して、受けとった。

藩士は、また駈足で、去って行った。

文字で記せば、これだけのことであったが、後になって、番士たちは、取調べを受けた時、馳せ戻って来た藩士が、一人であったとこたえる者と、二人であったとこたえる者に、わかれた。

奇妙な話であったが、藩士が一人であったか、二人であったか、特に注意していたわけではなく、白昼であるために、かえって、気がゆるんでいた、といえる。

二人馳せ戻って来て、番士が、包みをあらためている隙に、一人が、影のごとく、前をすり抜けて、門内へ入ってしまったのである。番士たちは、藩士が一人で、立去るのを、すこしも疑わなかった。

恰度、この時刻、ほかに幾名かの士が、出入りしていたし、巧みに番士たちの目をくらました。これは去来の法であった。

実は、藩士に化けたのは、「若影」と赤猿佐助だったのである。

「若影」が、城内へ忍び込むべく、聖天の宮の祠を出た時、赤猿が待ちかまえていて、

「去来の法を用いるなら、ひとつ、片棒をかつごうかな」

と、笑いかけたのであった。

「若影」は、「母影」ほど排他的ではなかった。

赤猿は、「若影」が、城内へ掠め入るのを見送っておいて、何食わぬ様子で、ひきかえして行ったのである。

常山の蛇

一

午報を合図に——。

東方の幔幕を割って、大股に出た荒木又右衛門は、

——お！

と、大きく目をひらいた。

すでに、西方の幔幕の前には、宮本伊織が現れていたのである。

——これは、

又右衛門に、意外の思いをさせたのは、自分よりさきに、伊織が現れていたことと、もうひとつ、その養父武蔵は大事の試合には一度も用いたときかぬ二刀を、伊織が、双手に携げていることであった。

たしかに、武蔵は、二刀流をもって、巷間に名を売っている。自画像にも、二刀を持たせているし、「五輪の書」にも、二刀の利についてくわしく述べている。

「この一流二刀と名付ける事——二刀と云い出すわけは、武士は将卒共に、直に二刀を腰につける役である。むかしは、太刀刀といい、今は刀脇差という。武士たる者がこの両腰を持つ事、こ

まかに書きあらわすには及ぶまい。わが朝に於て、知るも知らぬも、腰に帯ぶ事が武士の道である。この二つの利を知らしめんために二刀一流というのである。一流の道、初心の者に於ては、太刀刀を両手に持って道を仕習う事が、実のところである。一命をすてる時は、道具を残らず用に立てたいものである。道具を役にたてず、腰に納めて死する事、本意に有るべからず。しかし乍ら、両手に物を持つ事、左右共に自由には叶いがたい。したがって、両手を使うことは、太刀を片手ずつで取扱うように習わせるためである。槍や長刀のような大道具は、片手で使うわけにいかないが、刀や脇差は、いずれも片手で持つ武器である。……まず、片手で太刀を振習うために二刀として、太刀を振りおぼえるのである。はじめて二刀を扱う時は、太刀が重くて振り廻しにくいが、何事もはじめはそうであり、振りなれれば、道の力を得て、能くなる。太刀は広いところで振り、脇差は狭いところで振う事、まず道の本意である。この一流に於ては、長いのでも勝ち、短いのでも勝つ。時と場合に応じて、太刀でも脇差でも長短随意に用いて、どれでも勝つことができるようになるのがこの一流の道である」

すなわち、武蔵の兵法にあっては、二刀の術を工夫し乍ら、必ずしも、二刀を用いたわけではなかった。一刀を自由自在に使うために、二刀を振る修練が必要だとしているのであった。

武蔵は、稽古にあたっては、常に二刀を用い乍ら、大事の試合にあたっては——吉岡一門を鏖殺しにした時も、佐々木巌流を討ち仆した時も、常に一刀片手遣いである。

しかるに、養子伊織は、二刀を——しかも、左右全く同じ長さの剣を携げて、出場して来たのである。武蔵は、いよいよ、柳生流を対手に、二刀一流の真価を、示す存念であろう、と見てとれた。

また——。

武蔵は、これまでの必死の果し合いに於ては、きまって、約束の刻限を甚だしくおくらせて、兵法者にあるまじき卑怯な謀略をつかったと、世評でなじられている。

ところが、伊織は、予想を裏切って、対手より先に、試合場に姿を現したのである。

なんの作為もなく、なるがままにまかせるように、二刀を携げて現れた伊織の姿は、そうするように武蔵から命じられたと受けとられ、これは、かえって、円明流のおそるべき自信を示すものと思えた。

又右衛門も、両審判役も、白面の剣士の背後に、世界を万理一空に容れ、我もなく敵もなく天地を撃る見地を自負する新免武蔵の巨影を視る思いがした。

距離が五間にせばまるや、又右衛門は、立ちどまって、太刀を青眼にとった。

伊織の方は、足の運びを止めたと見せただけで、なお、二刀を両脇に垂らした自然本体をそのままに、変えようとしなかった。

この日の伊織のいでたちは、白羽二重の下着に、若紫の小袖、同じ色の袴のももだちをとり、濃い茶褐色のたすきを十字にあやどっていた。鉢巻は用いていなかった。

又右衛門の方は、柳生道場の者と一瞥で判る草色の稽古着に、黒い革胴を着用し、白い鉢巻に、小柄を二本はさんでいた。

五間の距離で、互いに、対手の様子を見戍るかに思われたが、事実は、伊織の眸子は、同じ光を湛えて、この地点で汐合をきわめようとする心はなかった。

それが証拠に、立ち停ったかと見えた、次の瞬間には、なんのためらいもなく、そろりと、千鳥の歩行をとりはじめていた。

それは、動くともない、身の運びであった。

双足の爪足が、白砂を滑り出るのは、そこをよく凝視していなければならないくらいしのびやかで、ゆっくりしていた。伊織が歩むのではなく、大地が動いて、伊織のからだを前へ進めているとさえ見えた。

いつの間にか、伊織のうしろの白砂上には、千鳥の足跡のような模様が、まっすぐに捺されていた。それは、いかにも美貌の青年がつくるにふさわしい、美しい模様であった。

このゆるやかな前進は、面を曝した二刀遣いの自然体に、隙をつくらぬためであった。

いかにものろく、時間を費しているかに見えて、伊織の歩みは、秒刻もとどこおることのない、ふしぎな動きであった。

一方、又右衛門は、同じ位置に、青眼に構えたまま、磐石のように、不動を守って、待っていた。誘われて、おのれも前進することの不利を知っていたからである。

……間合は、刻々とちぢめられた。

太陽は、両者の影法師を五寸も延びさせないくらい、まうえにあった。

二

——容易ならぬ！

又右衛門は、迫って来る伊織を、じっと正視し乍ら、この若い強敵に対しては、水月の迅業も

役立たないか、と思った。

又右衛門が使う極意「水月」は、活人剣であった。おのれから、進んで、撃ち込む殺人刀ではなかった。

少年の頃、恩師石舟斎から、教えられた訓しが、又右衛門に、これを生ましめたのである。

初冬の一日、石舟斎は、丑之助といった又右衛門をつれて、裏山へのぼり、とある松の根かたに、憩うた。風もない小春日和であったが、松の梢から松毬が、ふたつみつ、落ちて来た。

石舟斎は、わずかに体をうしろに傾けて、これを避けたが、丑之助は、持った扇子で、発止と払いのけた。

石舟斎は、

「丑之助、そちは、不都合な処置をするの」

と、云った。

丑之助が、納得できぬ面持でいると、石舟斎は、笑って、

「いま、背後に、そちの生命を狙う敵が、ひそんでいたとすれば、どうであろうな。松毬を、そちは、見事に払いのけたが、その刹那に、背後の敵は、立ちどころに、そちを一刀両断いたしたであろう。……物事には、すべて軽重がある。わずかに体を避ければすむことを、大仰に扇子を揮って、不要なところへ大事の力と気とを用うならば、そこに油断があり、隙が生ずる。敵に乗じられるのは、その刹那じゃ。体力と心気は、用うべきところに用うれば活人剣となって、武道の本意に叶う。いたずらに、得意を示せば、殺人刀となって、逆に、わが身を傷つける」

爾来、又右衛門は、おのれを戒しめるに、この上もなくきびしかった。

対手に隙があれば、同時にそこを撃つが、隙がない限り、又右衛門は、わが身を守ることに完璧であるばかりであった。

みじんの隙もない伊織に、迫られて、又右衛門は、どう闘えばよいのか。

今朝、床の間にかけた武蔵の自画像が、画幅から抜け出て来たと見た刹那、又右衛門は、抜きうちに、脳天から股下まで、一直線を引くがごとく、両断している。

画像なるが故に、これはなし得た。

生きて、動いて、迫って来る伊織の自然体に対して、又右衛門が、えらぶ一撃は、やはり、それであろう。

画像と同じく、伊織の自然体にも、頭から股間にかけて、撃つべき目に見えぬひとすじの線があった。

又右衛門を、当惑させたのは、伊織のからだには、全く剣気がないことであった。

剣気をみなぎらせた自然体ならば、これを撃つ力が、こちらにも湧き立つであろう。

どう眺めても、二刀をダラリと携げた伊織の姿は、白痴の者がそうしたのと、どこも異ってはいないのであった。

そのまま、こちらがふみ込んで、ひとふりにふり下せば、なすところもなく、血煙りあげて仆れそうにさえ思われる。

――常山の蛇か！

又右衛門は、胸中で、呟いた。

孫子の兵法に、言う。

『善く兵を用うる者は、譬えば、率然の如し。率然とは、常山の蛇なり。その首を撃てば、則ち尾いたり、その尾を撃てば、則ち首いたり、その中を撃てば、則ち、首尾ともにいたる。敢て問う。兵を率然の如くならしむる可きか。曰く、可なり。それ、呉人と越人とは、相悪む。その舟を同じくして、済りて、風に遇うに当りては、その相救うや、左右の手の如し』と。

自然体の伊織の、右剣を撃てば、左剣が来るであろう。左剣を撃てば、右剣が来るであろう。

そして――。

その中央の垂直線を斬り下せば、左右の剣が、ともに躍りかかって来るであろう。即ち、又右衛門が、襲うべき一線こそ、伊織にとっては、遺憾なく二刀をふるい得るために、示しているところと、いえた。

しかし、又右衛門は、伊織の右剣も左剣も撃つことは、叶わないと知っていた。なぜならば、伊織の片手遣いこそ、養父武蔵の得意とする秘技であり、あるいは養父にまさる迅業をそなえているに相違ないからであった。

又右衛門は、やはり、画像を両断したごとく、伊織を襲撃しなければならなかった。

すでに――。

伊織は、又右衛門の豪剣の間合まで、進んで来ていた。

当然、宗矩も、忠常も、家光も、伊織が、そこで、立ち停るものと、思っていた。

伊織は、立ち停らず、不敵にも、その間合を、滑るがごとく、越えた。

「とおーっ」

又右衛門の口から、凄じい気合がほとばしった。

見戍る目には、豪剣の煌きは映ったが、これに対する伊織の動きはとらえられなかった。のみならず、撃つと同時に、又右衛門は、一間を跳んで退っていたが、伊織はそこに、すらりと立っているだけであった。

将軍家光は、そのふしぎな闘いを見た刹那、なぜか心臓を何か鋭利なもので、ぐさと刺されたような衝撃を受けた。

審判席で身じろぎもせぬ宗矩と忠常はともに、かっと、双眸をひらいていた。

そのまま、しばし、不動の対峙を持つ両者の姿には、あきらかに、闘いの結果があらわれていた。

伊織の小袖は、その胸を竪へ一直線に截られていたし、又右衛門の稽古着は、両脇を断たれて口をあけていた。

つと——伊織は、またもや、見えるともない前進を開始して、背後の砂下に、千鳥の足跡をのこしはじめた。

審判役は、白扇を挙げることも、銅鑼を鳴らすことも、叶わなかった。

勝負は続行している。そうとしか思わせぬ、確乎たる前進を、伊織は、行っていた。

宗矩も忠常も、伊織が一直線に截られたのは小袖だけではなく、白羽二重の下着に、薄く血汐が滲むのを見てとっていた。

これは、又右衛門の勝を宣告してもいい証拠であった。しかし、凄絶の剣気は、庭上に満ちて、両審判の口を封じさせるに足りた。

伊織が、又右衛門の跳び退った一間の距離を、じりじりと、千鳥の足跡で詰めて行く姿は、あまりにも美しかった。将軍はもとより、審判役も、その美しさに、魅せられていたともいえる。

伊織の二刀が、はじめて、変化を起したのは、その一間の距離に於てであった。

徐々に……右剣を揚げ、左剣を伸しはじめていた。これは、天地の構えへの移行であった。

又右衛門は、この変化のあいだにも、隙を発見出来なかった。

だが、天地の構えが完全に成った時、又右衛門は、伊織の胸に横へひとすじに引かれた線を見た。又右衛門のみが見える横線があった。

ふたたび、おのが刃圏内へ、伊織が入って来るや、又右衛門もまた、ふたたび、凄じい気合とともに、撃った。そして、跳び退った。

伊織の胸は、横へ一直線に截られ、又右衛門の稽古着の両袖は破られていた。

それでも、なお、伊織は、前進を止めなかった。

横の線にも血を滲ませ、胸に真紅の十字を描きつつ、白面の兵法者は、聊かの動揺もしめさずに、ゆるやかに、冷たい、音のない肉薄をつづける——。

構えは一変して、二刀をならべて、さしのべ、下段につける陰のかたちであった。

動揺は、宗矩と忠常の方にあった。

すでに二合の闘いで又右衛門は、二度とも、切尖に、伊織の血を吸わせて、自らは無傷であった。宗矩は、白扇を高くかかげて、又右衛門の勝を宣告してもよかった。いや、又右衛門の勝を宣告しないまでも、試合をそれまでとして、引分けておいて、言外に、又右衛門の勝を、将軍家に知らせてもよかった。

宗矩は、又右衛門が、門弟であるだけに、それができなかった。また、第三撃において、又右衛門が、こんどこそ、伊織に血煙りをあげさせるのであるまいか、という期待もあった。

忠常の方は、冷酷な審判者として、孰れかが倒れるのを、見届けたかった。忠常が、より多くの興味をかけているのは、伊織の二刀の方であった。一方の剣で又右衛門の豪剣を受けて、片方の剣で斬る——その秘技を、第三撃において、見せてもらいたかった。

三度び、間合は詰められた。

「ええいっ！」

満身の剣気を爆発させて、又右衛門は、流星よりも迅く、伊織の咽喉めがけて、二尺七寸の白刃を、突き出した。躱すいとまもなく、はねかえす余裕もなかった。凝視するどの目も、のけぞって血飛沫を刎ねる伊織の無惨な敗北を見ようと、光った。

前進して来た伊織と、撃っては跳び退る又右衛門とでは、体力の消耗にかなりの差があることは、明らかであった。そうでなくてさえ、伊織は、又右衛門に、体力が劣っているのである。

伊織は、華奢なからだの力を、おしみなくすてつつ、あえて、前進しつづけて来たのであった。又右衛門は、巨軀にありあまる力を惜しみつつ、跳び退りつづけたのである。

その第三撃にぶち罩めた又右衛門の体力と気力は、巌をもつらぬく勢いであったのである。

伊織は、意識することなしに、二剣をぱっと交叉させて、飛び来った白刃を受けた。体力の消耗から来た反射的なものが、自身の生命を守る防禦のみを行わしめた、といえる。

防禦の交叉剣をつかった伊織の五体に、次にあらわれるのは、必敗の破綻であろう。又右衛門が、その破綻を見逃す筈はない。

ところが——。

又右衛門は、奇怪にも、突いた構えを、それなり、画中にでも入ったように、固着させてしまったのである。

伊織の二刀に、ぴたっと吸いつけられて、引くことも、突くこともならなかったのである。

この瞬間をはずさず、

「勝負、それまで！」

宗矩の声が、発しられた。

と——同時に、伊織が、顔をしずかに仰向けた。その口から、どっと、鮮血が噴いた。

又右衛門の切尖で、咽喉を突かれたためではなかった。病んでいた肺が、破れたのである。

一方——。

又右衛門は、審判の制止とともに、ぱっと跳び退ったが、そのまま、双眼をかたく閉ざして、俯向いてしまった。

宗矩も忠常も見てとっていた。

伊織が、交叉剣で、又右衛門の突きを受けとめた瞬間、その二刀の柄がしらから、さっと、霧がほとばしり出て、又右衛門の双眼を搏ったのである。霧は、ただの霧ではなく、おそろしい痛みを、眼球に呉れた。又右衛門は、しばし、盲目たらざるを得なかった。

もし、これが、伊織自身の作為であったならば、一流兵法者の直感力で、又右衛門は、観破したかも知れなかった。

これは伊織の全く関知しない二刀の仕掛けであった。刀刃が強い衝撃を受けるや、その柄がし

らから、目つぶしの毒霧がほとばしる卑劣な仕掛けであった。
その二刀は、伊織が、小倉から持参して来たものではなく、藩邸の庭で、不意に襲撃して来た黒衣の曲者が、投げのこしたものであることは、前に述べた。

三

伊織は、控の間に敷かれた褥に横たわって、目蓋を閉じていた。時刻は、宵を迎えていた。その貌は、奉書紙のように、白く、透っていた。
——敗れた！
長い間の、放心から、ふっと、われにかえった時、伊織は、自分に、そう呟いてみた。なんの感慨もなかった。
荒木又右衛門という柳生一門中の、無名の兵法者に敗れた——その事実だけが、他人事のように、はっきり判っているだけであった。
——おれは、敗れたのだ。
もう一度、呟いてみた。心は動かなかった。
次いで——。
いくばくかすぎて、伊織は、
——おれの生命は、あまり長くはない。
と、思った。
その時、はじめて、伊織は、自分という人間の宿命らしいものに、心が動くのをおぼえた。

と——。
音もなく、一個の黒影が、控の間に忍び入って来た。伊織は、それを察知しつつ、死んだように動かなかった。
ツツツ……と、黒影は、滑るように、床の間に近づいた。
そこには、試合に用いた二振の太刀が置かれてあった。
黒影が、それを小脇にかかえあげ、かわりに、持参した一振を、そこへ残した時、伊織は、目蓋をとじたまま、呼んだ。
「おぬし——」
すると、黒影もまた、伊織に察知されていたのは承知しているおちついた態度で、ふりかえり、
「何か——？」
と、訊ねた。
「わたしに、何故に、その二刀を持たせた？」
「お手前の二刀遣いを試したかったまでのことだ」
「それだけか」
「それだけだ」
「太刀は、荒木の方が拝領したぞ」
「不運であったな。お手前の技倆が、荒木に劣っていたわけではない」
「ふふふふ……」

伊織は、微かにわらった。
「おさらば――」
黒影は、出て行こうとした。
「待て」
伊織は、とどめた。
「影と名のる忍者は、おぬしであろう」
「左様――」
「いつの日か機会があらば、おぬしと闘いたいものだが……」
「それは、こちらものぞむところ。では――」
再び、音もなく、「若影」は、控の間から消え去った。
伊織は、もう一度、
――おれの命は、もう長くはあるまい。
と、呟いた。

牢鼠

一

古人は、誌している。
草原、遠く長空に接して、涯際を見ず。月は、草より出でて草に入り、虹は、原より起りて原に跨がる。帰雲空しく野に迷う。倦鳥何処に翼を休む。……一望蒼茫の間、林樹茂れる小丘、彼処此処に散って、まさしく陸上の孤島。林外鯨鐘の鳴るは、古寺の在るところ。梢上、華表の聳ゆるは荒廟の坐ますところ、夜陰冥色を破って、燈火の風にまたたくさま、自ら漁火の幽趣を帯ぶ。
まことに、武蔵野は、草の海であった。
しかも、いまは蕭々たる晩秋の彩りである。
家康の姪にあたる豊後岡城主・中川久盛の夫人は、この秋の武蔵野を、次のように写している。
武蔵野の千種の花も見まほしう覚えて、秋の半ばの頃おい、いまだ有明の月も残れるに、露とともに起出て行きけり。秋のはてなしときしもことわりしるく、はるばると野を分け行けば、桔梗、かるかや、女郎花、りうたん、はな薄、名もしらぬ草までも、花ならぬはなかりけり。

さて、その武蔵野の草の海をひとすじ、まっすぐに延びた街道を、長短二個の影が、進んでいた。

長身の方は、長髪を肩に散らし、口髭を錨形にはねあげた五十年配の、一瞥して軍学者と判る。羽織の紋は、大きく、菊水であった。短軀の方は、二十歳あまり、異常に大きな双眸が特徴で、わずかに跛をひいていた。

黙々として、街道を過ぎ——緩い傾斜の、いつの間にか、丘陵を辿って、楓の疎林の前に出た時、長身は、立ち停って、前方を指さした。

「あれじゃ」

短軀は、のびあがって、ひっそりとした屋敷を望んだ。

「先生。……まちがいはありますまいな？　真田左衛門佐の虚名を偸んだ騙り者ではありませぬな？」

その声音は、若さに似ぬ毒気を含んだ暗いひびきをもっていた。

「ははは、正雪よ、この楠不伝が、楠氏の末裔と称する怪しさに比べれば、これから会う人物は、たとえ騙り者であっても、真田幸村と信ずるに足りる人物じゃ」

一巻の楠氏系図と一旒の菊水の旗を作って、唐櫃に納め、これを駿府浅間山の松根に埋めて置き、後年、江戸牛込に出て、軍学の塾を開いてから、一夜の夢想に托して、これを発掘し、その霊奇をもって、世人を驚かし、にわかに門弟の数をふやした——楠不伝という人物が、この長身であった。

つき添う若者は、もとは、春日局の御用達であった菓子舗・鶴屋弥次右衛門の養子であったが、

商業をきらって、不伝の門に入って、由比正雪と名のっている才子であった。

楠不伝は、どうやって、この武蔵野の一隅に隠栖する老人を、生き残った真田幸村と、知ったものか、秘蔵弟子の正雪にだけ、ひそかに耳うちして、正体を見とどけるべく、やって来たのである。

「見い、あの門構えを——。風雅な、つつましい、竹造りじゃが、まさしく、五万石の格式をあらわして居るわ。二重の櫓門の雛形と申せる。門を入れば、必ず、三百品の植木があろう」

不伝が告げた通り、門を入ると、植込みに、同じ樹は、一本もなかった。柿葺きの入母屋の建物に向って進み乍ら、左右へ注意ぶかく、目を配れば、疑いもなく、規模を小さくしただけで、格式の面目を示すのに、聊かの遺漏もなかった。

不伝は、書院造風の玄関に立って、大声で案内を乞うた。

それから、半刻ばかりの後、楠不伝と由比正雪は、屋敷を辞し去った。

幸村は、送っても出ず、座敷に坐っていた。

あたたかみの薄い陽ざしが、淡く落ちた庭へ、穏かな眼眸を投じて、じっと動かずにいたが、やがて、ひくく、

「たわけども！」

と、呟きすてた。

——このわしが、天下顚覆の機を窺っていると、思うて居る。おろかな、そそっかしい野盗どもよ！

滑稽であった。軍学者面が笑止というものであった。

幸村が、のぞんでいるのは、平和であった。

鎗先の功名で、一国一城の主となる可能の時代は去ったのである。階級制度は確立し、高材逸足の士も、殆どその力を展ぶる余地はなくなった。

戦乱と改易によって、諸国にあふれた失業武士の群は、もはや、永久に、仕官の望みは断たれたといえる。

大坂役後、諸大名の改易されたものを、ちょっと、数えただけでも——。

元和二年七月、家康第六子松平忠輝・四十五万石。
元和五年六月、福島正則・四十九万八千二百十三石。
元和六年八月、田中忠政・三十二万五千石。
元和八年八月、最上義俊・五十七万石。
同年同月、本多上野介正純・十五万五千石。
元和九年三月、松平忠直・六十七万石。
寛永四年正月、蒲生忠郷・六十万石。
寛永九年六月、加藤忠広・五十二万石。
同年十月、駿河大納言忠長・五十五万石。

いずれも、あるいは罪科により、あるいは死亡によって、改易された。十万石以下の大名中にも、名家が多くほろぼされた。

これらの喪家から追われた幾十万の浪人たちを、救う方法は、すでになかった。

幸村は、大坂城の諸将中、ただ一人生き残って、この時勢の変遷を見戍りつつ、自身が打つべき手は、打って来た。

すなわち——。

家康が、親藩・譜代・外様の大名たちを全土に配するに当って、その封土区分に就いて、内密に意見を需めて来、また、武家諸法度の制定にあたっても、その草案を作ることを依頼して来た時、幸村は、その報酬として、五万石相当の年金を、要求したのであった。豊臣家のために、至純の忠誠をささげて来て、幸か不幸か、大坂役で生き残った士たちを養うためであった。

家康は、これを応諾し、以来二十年間、幸村は、千余の人々を扶けて来たのである。

二

「えへん——」

二室をへだてて、赤猿の咳ばらいがきこえた。

われにかえった幸村が、炉の上でたぎっている湯をくんで、点前をはじめた時、赤猿は、するすると入って来た。

「あまり、人品のかんばしからぬ牢人者と、狭間途ですれちがいましたが、殿の閑日月も、そろそろ終りを告げるのではございませぬかな？」

「君子は、三端（文士の筆端、武士の鋒端、弁士の舌端）を避くじゃ」

かるく云いすてて、幸村は、赤猿に、赤茶碗を与えた。

野人も、いつしか馴れて、作法を心得ていた。

「結構でございました」
茶碗をかえしてから、
「女影を、かついで参りましたぞい。ご引見の程を――」
と、告げた。
「……？」
怪訝そうに見かえす幸村に、赤猿は、にやっとしてみせた。
幸村は、立って奥へ入った。
そこに、牀がのべられ、白蠟宛然の冷たい寝顔が、枕の上に在った。
枕元に、正座した幸村は、しばらく、その寝顔を、瞶めていた。
多くの忍者をやしなって来た幸村であったが、女性の忍びには、はじめて接するのであった。
稀に見る程整った貌の持主であり乍ら、女性の美しさ優しさをみじんも湛えていないのに、幸村は、あわれを催した。当て落されて、暗黒の中有をさまよい乍らも、表情は、鋭利な刃物のように緊っているのであった。
やがて、意識をとりもどす微妙な変化を刷いた貌は、さらに妖しい冷たさを冴えさせた。
尤も、幸村だからこそ、意識をとりもどしたなと看破できたのであって、常人の目には、依然として、ねむりつづけているとしか映らないであろう寝顔であった。
「わしは、真田左衛門佐だ」
幸村は、まず、名のっておいて、
「そなた、もしかすれば、木曾谷の影の女ではあるまいかな？」

と、問うた。もとより、返辞はなかった。
「そなたが、このたびの吹上の御前試合の勝者が賜る無銘太刀のうち、一振、青江恆次の咒文剣が交っていることを、どうして知ったか、この幸村には、ほぼ推量がつく。そなたは、もう、それを手に入れたであろう。謎語は、車中侯、であったな」
「……」
「但し、謎語の意味を、そなたが、はたして、解き得るかどうか……。たぶん、そなたには、解けまい。解いてくれる者は、ほかに居るのであろう。が、その者の名をききたいとは思わぬ。その者の解くのと、この幸村が解くのと、どちらが早いか――これは、おもしろい競争となろう」
「……」
「わしが、そなたを、ここへ拉致したのは、秘剣の謎を、横奪りしたいためではない。……車中侯の三文字は、おそらく、平家が京の都に匿した財宝の在処を教えるものであろうが、かりに、解き得ても、わしは、そなたと争って、それを手中に収める存念はない。……わしが、懸念するのは、そなたに、財宝をさがし出せと命じた者の、身の程を知らぬ無謀の野心が、財宝をわがものにすることによって、まきおこすであろう騒擾だ。……天下は、すでに、徳川家の治世となり、公儀の磐石はゆるがぬ。全土三百藩は、孰れの藩も、その隣藩と聯合する能わざるように、配置されおわった。甲藩に対して、乙藩は監視者となり、乙藩に対しては、丙藩が監視者となり、さらに、丙藩に対しては、甲藩が監視者となり――孰れの藩も、到底その力を展べることは叶わぬ。譜代と親藩は、勢力をまとめて、外様に臨み、旗本八万騎と称する近衛は、譜代と親藩を牽制する。しかも、旗本は、禄するところ乏しく、個々の力は弱い。すべての者は、幕府の仁

恵の下に、首を垂れ尾を振って、その命に恭順するよう、すでに、法度の大綱大目は成った。……ここに、一人、野心家があって、流浪の浪人者たちを糾合せんと企てても、法度の網がすみずみまではりめぐらされた全土中、何処に、その叛旗を、かかげ得る余地があろう」

ここで、いったん、言葉を切った幸村は、遠い眼眸を宙に据えて、しばし、沈黙を置いた。

やがて、口をひらいた幸村は、意外な事実を、ふっと、洩らした。

「たしかに……秀頼公は、薩摩の領内に、生きておいであそばす」

これをきくや、はじめて、「母影」の寝顔が、あきらかに色を動かした。

「……あの日、炎上する大坂城の、蘆田曲輪の矢倉内から、秀頼公を、淀殿よりひきはなして、城外へお救い申したのは、この幸村のしわざであった。薩摩へお落し申上げるのは、なみなみの苦心ではなかった。……ははは、おろかなしわざであったよ。秀頼公に生きのびて頂くことが、いったい、何の意義があったか。今にして、おのれのおろかさが嗤われてならぬ。……秀頼公は、申すもはばかるが、天資英明には程遠く、あれから二十年を辺境に生きのびられて、いよいよ、卑屈な小人となりおおせられた。癈人同様の御身となられたと申しても、誇張にはなるまい。わしは、柳生十兵衛を隠密として、薩摩へ送って、秀頼公の御様子を見とどけさせた。蟷螂と化した秀頼公を、再び天下の頭領となさんとして、平家財宝の餌をもって浪人者たちを寄せようと企てる者があるとすれば、これは、寇に兵を藉し、盗に糧を齎す、というにもひとしく愚挙と申さねばならぬ。財宝は、武士たる望みをすてて、平和な職業に転じようとする浪人者たちに、平等に分配されてこそ、活きる」

幸村は、「母影」の寝顔へ、ふたたび、視線を落して、

「そなたの、忍者たるの使命をさまたげようとは云わぬ。ただ、財宝を発掘したあかつき、それを、依頼者に渡す前に、いまのわしの言葉をかみしめてもらいたい、とのぞんでおくのだ」

三

その時刻——。

老いたる忍者は、江戸城西之丸北部の紅葉山東端の地下につくられた石牢に、つながれていた。

伊賀三十六人衆に捕えられて、江戸城内へひきたてられたが、柳生宗矩の糺問はただの一度もなく、そのまま、この石牢へ入れたのであった。

すでに、二日間が、経過していた。

服部半蔵には、宗矩の心懐が、次第に、はっきりと判って来ていた。

ひとたびは捕えた「母影」を、またにがしたことは、宗矩の疑惑を決定的なものにしたに相違ない。半蔵が、故意にそうしたとしか、考えないであろう。

半蔵としては、しかし、おのれの身がこうして虜囚とされる苦痛の方が、「母影」を殺す苦痛よりも、堪えられることであった。

影母子を、捕えて、宗矩の前に引据えられなかったのは、忍者としての敗北を意味するが、いまは、代りにおのれが拘禁されたことに、何やら安堵に似たおちつきをおぼえている半蔵であった。

ただ、心にかかるのは——。

宗矩は、おそらく、真田幸村に会うて、ほぞをかためたに相違ないのだが、意外なことに、「母影」を横あいから奪い去ったのは、幸村の忠僕赤猿佐助だったのである。

——左衛門佐め、何か企図して居るのではあるまいか？

半蔵は、この懸念だけは、宗矩に、伝えておきたかった。

影母子に就いての弁明は、一切したくはなかった。

服部半蔵という老忍者が、この石牢で果てるのも、宿運にしたがいさぎよさに思われる。なぜならば、この石牢こそ、半蔵自身の設計に成るものだったからである。

その構造は、大小の石を組合せただけの、きわめてかんたんなものであったが、脱出を企てて、ひとつの石を取り外すと、その上から、他の石が落下して、たちまち、ふさいでしまう仕掛であった。これは、掘っても掘っても、そのあとを埋められてしまう砂地獄に似ていた。石のひとつひとつは、強く押せば、ぐらぐらとゆらいだし、取り外すことはさほど困難ではなかったが、その努力がいかに徒労であるか——それを、設計者である半蔵が一番よく知っているのは、当然であろう。

脱出不可能な場所から、のがれ出ようとあせることの愚をさとって、しずかに、石壁に凭りかかって、闇中に身じろぎもせずに二日間過した半蔵は、ほんの四半刻あまり、うとうとしているあいだに、夢を見た。

それは、三十五年前の思い出であった。

稀代の忍者「影」が、家康直属伊賀党によって生捕られ、三条河原で断首されるために、洛中を裸馬でひきまわされていた——あの光景であった。

高小手にしばりあげられ、左眼はつぶされ、右脚は両断された惨たる姿を、馬上にさらし乍ら、「影」は、なお生きるのぞみをすてずに、忍び笛をふいたのである。

まざまざと甦って来たその光景を、夢の中で眺めつつ、半蔵は、にわかに、老軀に生気の満ちるのをおぼえた。

——そうであった！「影」は、あの絶体絶命の瞬間まで、遁れてみせる不屈の意志を抱いていた！

闇の中で、大きく、双眸を瞠いた半蔵は、自分に云いきかせた。

——あの「影」に比べれば、わしの状態は、まだ絶体絶命とは云えぬ！

日に一度、出入口にあたる頭上の大石をくり抜いて、手一本が通せるくらいの孔があけてあり、そこから、握飯と一椀の水が、紐でつりさげられていたが、半蔵は、まだ口をつけていなかった。毒殺をおそれたからである。二日や三日、絶食しても、平然としていられるのが、忍者であった。

半蔵は、親知らずあとへはめた義歯を舌で抜くと、忍び笛の鼠の啼き声を出してみた。

「頼まれてくれるか」

誰かが、この声をききわけてくれるというのぞみは、万に一もなかった。入口を見張っている番士に、ききわけられる筈もない。

これは、わずかな、おのれをなぐさめる遊びでしかなかった。

しかし、この遊びは、必死であった。

遁れ得る唯一の法として、くりかえしているうちに、やがて、必ず、頼まれてくれる者が現れ

るという確信が、肚裡で不動となる。食を断ち、闇中に坐しつづける者が、生きるための遊びであった、といえる。

二刻あまりが過ぎた。

忍び笛に応えてくれる者は、さらになかった。

そのかわりに、半蔵の脳裡に、ふっと、ひとつの直感が閃いた。

窮すれば通ず、ということわざがあるが、万策つきて、全くの窮地に追い込まれた時、人間には、一瞬に精神が冴える場合がある。

それまで、かるく見過していたことが、ふっと気がついてみれば、非常に重大な意味を持っている——こうした直感の働きは、窮地に陥って、はじめて経験するもののようである。

半蔵が、閃かした直感というのは——。

ある兵法者の、日常に起った、ほんのささいな行動のひとつにすぎなかった。

だが、いま鋭く冴えた神経で、想いかえしてみると、これは、非常に重大な事柄のようであった。

その兵法者は、第九試合に出場する一人なのであった。

半蔵は、たまたま、其処において、その兵法者の何気なさそうな振舞いを、見かけたのであった。その時は、ただ、それだけのこととして、見過してしまっていたのだが……。

——あれは、ただの振舞いではなかった。

はっきりと、確信できた。

——但馬守に報らせなければならぬ。但馬守は、再び礼をもって、わしを遇さねばならぬ。

半蔵は、そう呟いた。

半蔵が、率然として察知したこの大事も、思えば、あの「影」が、京の如意山麓の三重塔の屋根に匿した白球と、同じであった。誰かが、但馬守に半蔵の意中を伝える役目を引受けてくれぬかぎり、むなしく、闇中に葬られてしまうのであった。

殺されるべく地上へ引出される時まで待って、但馬守に、それを伝えてはもうおそい。

荒木又右衛門と宮本伊織の第七試合は、二日後——即ち、今日行われるときいていた。ならば、第九試合は、明後日行われる。猶予はならぬのだ。

……半蔵は、忍び笛を吹きつづけた。

と、ふいに、小さな物音が、半蔵の耳につたわって来た。

目をあげて半蔵は、闇の中を透かして、

「ふむ！」

と、微笑した。

忍び笛は、思いもかけず、ひとつの反応を得たのである。

それは、食物をたぐりおろす孔から、いっぴきの鼠を、誘い入れたことであった。

鼠は、孔口で、ちょっと、停っていたが、するすると、石壁をつたって、地面へ降りて来た。

そして、要心しつつ、走っては停り、停っては走りつつ、近づいたのは、半蔵が手をつけずにすてておいた握り飯であった。

くわえた次の瞬間、非常な迅さで、石壁をかけのぼって、孔から、消え去った。

——成程、窮すれば通ずだ。

半蔵は、声なく笑った。

いっぴきの鼠があらわれたことは、半蔵にとって、番士が味方についてくれたも同様の有難さであった。

忍者には、禽獣爬虫いかなる生きものでも、味方として使う法があったのである。

巨人征服

一

巨人征服、というものは、いつの時代でも、人々の興味を呼ぶ話題である。

吹上における第八試合は、まさに、それであった。

それに登場する巨人とは、小西行長の家臣で、朝鮮役で豪勇無双の働きを称された赤松庄兵衛の一子又兵衛重成であった。巷間、重石の又兵衛、と呼ばれていた。

身長は六尺一寸あまり、当時の武辺者として、さまで珍しくはなかったが、体重が五十貫あった。そして、その愛用する大鎧が、体重と同じく、五十貫の重量があったのである。

漢の高祖は、その双腕をたらすと、指が膝頭にとどいたという異形の人物であった、と伝えられているが、重石の又兵衛もまた、直立し乍ら、おのれの膝頭をたたいて、人々を唖然とさせた。この異常な双腕の長さは、組討ちの場合、最も有利であることは、云うを俟たぬ。

外見は、宛然巨猿の姿であった。膂力三十人力、と自ら誇っていたが、人はこれをあやしまなかった。

保元の戦記によれば——。

源為朝は、この国が生じたる最も巨大な体軀の持主で、十八歳にして身長七尺、目かど二つに

切れ、尋常人の着け得べき鎧は、その身に合わなかった、という。保元の乱の白河殿の戦いにおいて、為朝ただ一人の守備した西河原門は、はじめ平清盛が矢合せして敗れ、嫡子重盛が十九歳の気鋭を以て自ら先陣となって突入せんとして果さず、清盛麾下の猛将山田伊行もまた、主将の退却を屑しとせず、驀地に馬を駆って襲いかかって射落され、ついで、鎌田正清が迫ったが力及ばずしてしりぞき、最後に敵方にまわった兄源義朝が立ち向ったが、為朝の大箭に敵すべくもなかった。雑兵たちは、為朝の巨姿を仰いだだけで四肢がすくんで動けなくなり、強弓をひきしぼるさまに、そのまま気絶した者も少くなかった。

その前、為朝は、白河上皇から合戦の策を問われて、夜討ちに如くはなし、とこたえ、

「されば唯今より高松殿（天皇方）に押寄せ、三方に火をかけ、一方より撃ち入れば、火を遁れんとすれば矢を免れず、矢を恐れる者は遁れず、兄義朝などが出て合わんとすれば忽ち之を射落すことを得べく、まして平清盛などの矢は何程の事があろう、鎧の袖にて打ち払うべし、他所へ行幸などの事あらば、供奉の者共を追い払って、この御所へ行幸をなし奉ることは、掌を返すが如くであろう。わが矢を二つ三つ放つばかりにて、天の明けぬ前に勝負を決すべきは、何の疑いもなし」

と、進言している。

藤原頼長は、これを荒儀として、用いなかったが、もしとりあげていれば、保元の乱は、白河殿の勝利となっていたかも知れない。

白河殿を守備したのは、南側大炊御門表の東門を平忠正父子・多田頼憲ら二百余騎、西門を源為義父子百騎、北の春日表の門を平家弘百五十騎、そして西河原表門を為朝ただ一騎、という配

りであった。いかに、為朝の豪勇ぶりが信頼されていたかが、これをみても、わかる。

まさに、赤松又兵衛重成は、為朝の再来かと思わしめる巨人であった。もし、一時代前に生れていたならば、その武勇は当然、一国の主たるにあたいしたが、時世おさまり、主家は亡びて、又兵衛は、浪々の身であった。

この又兵衛と試合する対手方は、竹内流小具足の法を伝える竹内久長及び久明の兄弟であった。竹内兄弟は、毛利輝元の幕下に属していた竹内中務丞久盛という竹内流腰廻りと称する組討ちの達人の孫にあたり、備前邑久郡国府で道場を持ち、門弟一千余を擁していた。体重は、兄が二十三貫、弟が二十二貫あり、ともに堂々たる偉丈夫であったが、両者合せても、なお、重石の又兵衛より、五貫目もすくなかった。

将軍家光が、戦国時代の実戦そのままの試合を所望するからには、どうしても、鎧試合を加えねばならず、えらぶとなれば、赤松又兵衛と竹内兄弟のほかにはいなかった。

というのも——。

これは、ただの試合ではなく、朝鮮役に因縁を遡らせて、異常な興味をかけることができるからであった。

当時——文禄の役において、小西行長の侍大将たる赤松庄兵衛と、加藤清正の家臣であった竹内兄弟の父竹内甚十郎とのあいだに競われた兜首の数は、太閤秀吉の耳にまで達した有名な逸話であった。

そもそも、小西行長と加藤清正が、宿命的ライバルであった。両者は、肥後国五十四万石を分けて、北半を清正が、緑川以南の南半を行長が封じて、目に見えた対抗を形成していたのであ

る。秀吉が、両者を、辺境相隣して分封せしめたのも、ふかいこんたんあってのことであった。大明討入の際、ともに先鋒として、必死に功名を競わせるためであった。

主君たちの功名争いを、その家臣たちが、おのれらの功名争いにしたのは、当然であろう。

小西・加藤の両軍が、道を分って北上し、同日同時刻に、京城へ入り、京城から臨津まで、並んで同一方向に進み、そこから前者は平安道を、後者は咸鏡道を行くことに決するまでの二十日あまり、赤松庄兵衛と竹内甚十郎は、常に、一番乗りで、敵将を仕止めつづけたのであった。

赤松庄兵衛は、大荒目胴丸で、敵の矢をことごとくはじきかえし乍ら、武蔵太郎安国三尺四寸の大太刀を麻幹のように振りまわして、敵首を刎ねとばした。八方を包囲された時など、片手で斬りまくりつつ、空いた素手で搏ち仆し、両脚を自在に躍らせて蹴殺した、という。

竹内甚十郎の方は、駿馬を八字駈けに駆って疾風のごとく一気に敵本陣を衝き、馬上から敵将に跳びかかり、あっという間に、その首級を挙げて、また矢のように馳せ戻って来ていた。

両者の挙げてゆく兜首の数が、五十を越えた頃から、両軍の間で、数争いが、賭けごとになっていた。両者は、戦闘の場を異にしていたので、はじめのうちは、べつに競争心を燃やしてはいなかったが、賭けごとになって来るや、のっぴきならぬ意気地をかためざるを得なかった。時には単騎で、朝駆け夜討ちという冒険も敢えて行わなければならなかった。

赤松庄兵衛が、その首級百を挙げるや、主君の小西行長は、帰国を命じた。これ以上、数争いさせることの愚をさとったからである。庄兵衛は、大いに不服をとなえたが、行長は、強く叱って、ともに進むことを許さなかった。行長は、すでに、平壌に遷った王室に呼びかけて、和平を講ずべく、その使者を趨らせていたのである。

清正の方は、行長に出し抜かれて、敵地に深入しすぎてしまった憤懣を、敵にむかってたたきつけようと、朝鮮皇帝の二王子を生捕らずば再び本土に還らず、と気負い立っていたので、竹内甚十郎にも、いよいよ、その奮戦をのぞんだ。そのために、甚十郎は、百一個目の兜首を挙げた時、自らも傷ついて隻腕隻脚となったのであった。

二

赤松庄兵衛の兵法は、力であった。竹内甚十郎の兵法は、術であった。

力か、術か——この論議は、あまりにも兜首争いが有名であっただけに、後のちまで、各所でたたかわされ、当然、両者の子たちは、対手方を意識せざるを得ず、いつの日にか、雌雄を決しなければなるまい、とひそかにほぞをきめていたのである。

そして、その宿運は、晴れの御前試合というまたとない絶好の機会にめぐまれたのである。

この日を孰れがより熱望していたかと比べれば、赤松又兵衛の方であった、といえる。

主君小西行長は、和平を講じようとして、明朝から派されて来た沈惟敬の策略にひっかかり、明軍四万余に突如として襲撃され、惨たる敗北を喫し、本土に帰るや、侮蔑の目をあびせられたのである。それにひきかえて、加藤清正は、朝鮮皇帝の二王子を生捕っていたし、再度の遠征では、蔚山城での華々しい武功を土産にしていた。

小西家も加藤家も、すでに亡び去ったとはいえ、旧家臣としての武士道の吟味を天下に示すには、その子が亡父の意志を荷負って、能く試合に勝つことのみである。

さいわいに、源為朝に比べられる巨軀を与えられた赤松庄兵衛は、将軍家の面前で、宿縁の競

争対手を、蛙のようにたたきつぶす闘志を燃えたたせた。対手が兄弟二人であることも、かえって、その闘志をあおるに役立ったばかりであった。

又兵衛は、御前試合出場をもとめる使者の来訪があるや、それから二日後には、すでに、五十貫の大鎧を納めた櫃を背負って、太宰府天満宮近くのわが家を立出ていた。

山陽道をまっすぐに上って、又兵衛がおとずれたのは、備前邑久郡国府の竹内道場であった。

この日、久長・久明兄弟は、池田家に祝賀の儀があって、招かれて、岡山城下に行き、父甚十郎一人が、道場にのこっていた。

甚十郎は隻腕隻脚になった上に、中風を患って、殆ど満足に口もきけない状態にあった。

又兵衛は、面接を断る門弟をはねのけて、鎧櫃を背負ったまま、甚十郎の寝所へ押入った。

「このたび、吹上の禁苑において、赤松流の力と竹内流の術を競う栄誉を与えられ申したのは、同慶の極みに存ずる。されば、鎧試合の掟にしたがい、鎧改めをして頂きとう存ずる。御兄弟がご他出なれば、御貴殿が代ってお見とどけあり度い」

そううそぶいて、又兵衛は、櫃の蓋をはらうと、五十貫の鎧を、ずるずるとひき出した。

このたびの試合は武装得物は各自勝手であり、試合場の幕を割って入るまで秘すことも許されるという通達があったのである。対手方に、武装改めなどしてもらう必要はなかった。

わざわざ、対手方の道場に乗込んで、それをやってのける又兵衛の傲慢な振舞いは、おのが鎧が、いかなる秀れた小具足の術をもってしてもビクともせぬ自信に拠っていたからであった。

悠々として着用しはじめた又兵衛を見守る甚十郎の眼眸が、しだいに、烈しく、光を加えた。

まさしく、誇示するに足りる尋常ならぬ大鎧であった。

釿、臑当、喉輪、袖などの厳重な作りもさること乍ら、その長大な胴をまもる腹巻鎧は、まずその下に逆おどしの下胴をつけるのである。

腹巻鎧というのは、着長鎧の馬手の脇楯を後のまん中に当るように作り、さらに、屈伸のため一枚鉄の脇楯を小札に作る。後閉の板は、早業に用いるようになっている。後閉板を締め、籠手をさし、乱髪になって、左右の手よりさし込み、かずき上へ着し、腰の緒をしめる。これは早着自由であり、直番腹巻といって、むかしは、番を勤める者は装束の下に着していた。即ち、着込みのように、朝夕用いていたのである。

又兵衛の腹巻鎧は、厚い鉄板造りであり、その鉄板と鉄板との間に、鎧通しの七首を刺そうとしても、下胴にさえぎられて、中まで突抜くことは不可能であった。兜もまた二重になり、それに、白髪が八字にはねた奇怪な形相の頬（鉄面）をかぶる。どの部分にも、刃物を加える隙間はないのであった。

甚十郎の不自由な五体が、微かにわなないたのは、中風のせいばかりではなかった。

武之具を着しおわった又兵衛は、さらに、大きく両脚をふみ開いてみせた。下散の下、脛当の上には、南蛮鎖の網を二重にして穿いていた。股間を突き刺されない要心であった。

又兵衛は、愉快そうに大声をあげて笑い乍ら、下散の下の鎖網を解いた。

網の下から、まがまがしく勃起した巨大な陽根を、突き出されて、甚十郎の萎えた五体は、ふたたび、顫えた。

このおり、末娘のつたが、茶菓子を運んで来たのは、不運であったというよりほかはなかった。

五十貫の巨人が、五十貫の武之具をつけて、臆面もなく、陽根を突き出した姿が、つたをあっ

と仰天させて、茶菓子を畳にとり落させた。

「わっはっはっは……」

屋内をゆるがす笑い声が、気遠くなるつたの耳にのこり、猿臂の中へかかえ込まれた時には、もう意識は喪われていた。

つたは、血にまみれ、腰が砕けた。

甚十郎は、ただひとつ自由な双眼を、かっと瞠いて、わが娘が凌辱される光景を、まばたきもせず見届けた。

急報によって、兄弟が、その夜のうちに、馬を駆って馳せ戻るや、甚十郎は、又兵衛を追跡することを厳しく禁じた。御前試合の前の私闘は許されなかったからである。

つたが出血多量のために息をひきとった翌朝、又兵衛の方は、四里はなれた虫明村の海辺へ出て、漁夫の舟をやとって、瀬戸内海へ出ていた。

第八試合は、こうして試合前に、その闘いを凄惨なものにする素地をつくったのである。

三

当日朝、西之丸に設けられた控の間に入った又兵衛は、茶坊主の接待を受けているうちに、ふと、二間床に飾った大鎧の蔭に、何者かがひそんでいるような気がした。

べつに気配を感じたわけではなかった。ただ、ふと、そんな気がしただけであった。

立って行って、たしかめるも大人気ないので、そのまま、ごろりと仰臥して、瞑目した。緊張した神経が、そんな錯覚を起したのだと思い、又兵衛は、おのれを嗤ったのである。

一方、別の控の間においても、竹内兄弟が、同じような経験をしていた。

具足武器をあらためて点検して、床の間へならべおわった時、弟の久明が、はっとした様子で、背後を振りかえった。

「どうした?」

兄の久長から、怪訝そうに問われて、

「いや、何者かが、そこにいるような気がして――」

と、久明は、こたえつつ、なお、ひきしまった面持だった。

「おちつけ! 気の迷いだ」

たしなめた久長もまた、それから、いくばくも経たないうちに、床の間を黒い影がさっと掠めすぎるような気がして、はっと、視線をまわしたものだった。

午報とともに、竹内兄弟が、兄は小桜縅を、弟は沢瀉縅をつけ、ともに三間柄の槍をたずさえて、西の幔幕から出た時、すでに、中央の白砂上には、黒一色の鉄がための巨人が、面頬の八字髭ばかりを、白く、陽光に浮きあげて、根生えたように佇立していた。その右手には、鉄挺を打った一間余の六角棒が摑まれていた。

この日、将軍家光も華々しい出陣のいでたちになり、真紅の母衣羽織をまとい、采幣を持ち、牀几に腰かけていた。

両審判役もまた、具足で身をかため、宗矩は軍扇を、忠常は軍団扇を、握っていた。

又兵衛は、竹内兄弟が四間の距離に進み寄るにまかせて、微動だにしなかったが、兄弟の足が

停るやいなや、白砂をにじるように、左足をどすと踏み出して、身がまえた。

六角棒は、鳥居の構えに、かかげられた。鳥居とは、右手は柄を持ち、右肘を曲げ、前額の辺に、水平に捧げて、左手で棒の尖端ちかくを支えて、左肘は右肘より伸した形である。

当然、胸から下は、すべて空く。

そこを突いて来た槍を、片手振りに振り払うことになるのだが、これは絶対に刺し通されない鎧をつけているからこその不敵な構えに、ほかならなかった。

「突いて来い！」

そう示威されては、突撃せざるを得ない。

左右へ二間にひらいた兄弟は、ぴたっと、穂先を又兵衛の胸もとへつけて、じりっじっと、間合を詰めた。

間合が詰められるにつれて、又兵衛は、徐々に、左手を挙げて、左半身を深いものにした。こうした場合、棒先を地摺りに下げる冠り人身が、守るにも攻めるにも適しているにも拘らず、又兵衛は、逆に、敵へ脾腹をさらす姿勢へ転じたのである。

「やあああっ！」

肚底から、火を噴かせるような凄じい気合もろとも、兄の久長が、目にもとまらぬ迅さで、三間柄をくり出した。

穂先に充分の手ごたえがあったが、それは腹巻鎧の鉄板をつらぬいただけで、その下の逆おどし胴を通すことはできなかった。

久長は、風車のように、おそろしい唸りをたてて旋回して来た六角棒に、柄を折られるのを辛

うじてまぬかれて、鉄板から穂先をひきぬきざま、一間を跳び退った。

弟の久明は、又兵衛が棒を引揚げるいとまを与えず、面頬下を狙って、

「ええいっ！」

と、猛撃した。

又兵衛は、これもまた、平然として喉輪の二重鎖の網へ噛ませておいて、ぱっと、棒をはねあげた。

久明の槍の柄は、二つに折れた。

同時に、久長の槍が、兜と面頬の蔭にのぞく眉間を狙って、ひょーッ、と飛び来った。

この瞬間には、又兵衛は、すでに、左半身になり、棒を、頸根から肩へ水平にのせて、左手を逆手にして持ち、尖端を敵の咽喉へつける笠研しの構えになっていた。

「おーっ！」

軀幹を軸にして、廻転する黒い速影は、とうてい五十貫の大鎧をつけたと思えない軽やかさであった。

その廻転は、棒端で槍をはじきとばす迅業を意味した。

のみならず――。

又兵衛は、槍をはじきとばしたひと振りを、さらに次の豪快な業に継続させた。すなわち、軀幹の廻転の勢みをもって、片手振りに、おのが首を中心にして、ぶーん、と円弧を描いて、久長の胴めがけて、打ち下したのである。

もし当っていれば、久長のからだは、二つにへし折れていたに相違ない。

久長が、翼があるように地を蹴って、数尺を飛び上ったのは、竹内流小具足の法の秘伝であったろう。

兄弟は、ともに、槍を失った。しかし、鎧試合にあっては、槍や太刀を失うのは、前業にすぎない。勝負あったことにはならぬのであった。

兄が、宙を斜横に翔けて、又兵衛の右側へ降り立った時、弟の方は、太刀を抜くかわりに、腰に巻いていた鎖を解いて、身構えていた。これは、鎖造りの竹内流の捕り縄であった。長さは七尺五寸が定寸であった。

鉄の巨人を破るには、突き、あるいは斬ることが叶わなければ、からめとって組伏せるよりほかはなかった。

もとより、捕り縄の襲って来ることは、又兵衛の方でも、予測していたところであり、その身構えに向って、棒をさしのべつつ、六分の神経は、油断なく兄の方へ配った。

鎖は、蛇のように空を躍って来るや、棒の中程へ、きりりっと巻きついた。

「うむっ！」

又兵衛が、踏み怺えたのは、ほんの一瞬間にすぎなかった。

鎖縄をひきしぼった久明は、次の刹那、案山子のように、ひと曳きで、又兵衛の手もとへ、引き寄せられていた。

又兵衛は、抜き討ちに、陣太刀を腰から鞘走らせて、久明の頸根へ送った。

久明の兜首は、その胴をはなれて、血飛沫の中を、明るい陽光の盈ちた宙を、翔けるように高く、飛んだ。

この隙をうかがって、兄の久長が、小太刀をかざして又兵衛の巨軀へ、躍りかかった。

渾身の念力を罩めた一撃も、その大鎧の胴をつらぬくことは叶わなかった。

「おのれっ！」

狂気のごとく、第二撃を加えようとする久長は、又兵衛の罠にかかったけものにひとしかった。

又兵衛は、面頬の蔭から、哄笑をほとばしらせつつ、久長の頸へ、むんずと猿臂をかけた。

両審判者は、もはや、これ以上、見戍るにしのびなかった。

「勝負、それまで！」

宗矩が、立ち上って、叫んだ。

その時であった。

息を止められつつも、久長が無我夢中で衝いた小太刀の切尖から、突如として、炎がほとばしり出た。

すると——。

その炎を待っていたごとく、腹巻鎧の下から、キナ臭い匂いとともに、黄烟が湧き出た。とみるうちに、それは、鉄板と鉄板の隙間から、下散や袖や喉輪の蔭から、濛っ、濛っと噴き出した。

「おっ……む、む、む、むっ、むっ！」

久長を突きはなして仁王立ち、舞いあがる黄烟の中に、くわっと眼球をひん剝いて、歯をくいしばった又兵衛の形相は、まさしく阿修羅であった。

いかなる部分にも刃物を通さぬように作られた大鎧は、その裏綿に火をつけられるや、こんど

は、逆に、着用者を火だるまにする絶大な効力を発揮した。

それにしても、裏綿が、このように一瞬に火焔と化すことは、あり得ぬ奇怪であった。

それには、焔硝がぬりつけてあったのである。

竹内兄弟の小太刀を炎太刀とすりかえたのも、鎧の裏綿に焔硝をぬりつけたのも、「若影」のしわざであったことは、云うを俟たぬであろう。

焼けこげる苦痛にのたうちまわっていた又兵衛は、不意に、飜転して茫然とつっ立っている久長にとびかかって、その胴を、双脚で締め上げて、血反吐を吐かせた。

将軍家光は、惨たる地獄の光景に堪え得ず、思わず嘔吐して、急いで、奥へ去った。

呪い鏡

一

十月——菊香晩節、梅は小春に応ず、と云い、また、斗杓北を指して日影南に回る。とも云う。

会式桜が、林間に美しく咲いた内桜田門内の登城道を、この日、しずかに歩み入る各大名たちは、茶会のための装いをしていた。当月朔日より、炉開き口切の催しがなされて、城中に於ては、この日が当てられていたのである。

風もなく、空は遠く澄んで、寂々たる茶室に坐るには、申分のない日であった。

吹上の御前試合が、本日は、取止めと決定したのは、巳刻（午前十時）になってからであった。

但し、将軍家光が、殺伐の気色を、茶室に持込んで、列座の大名たちに、ひそかに顰蹙されるのを慮ったためではなかった。

家光は、前日の第八試合の、あまりに悽愴をきわめた血みどろな光景に、嘔吐してから後、持病の喘息の発作に襲われて、まだ癒っていないのであった。

家光は、あくまで強気で、本日の第九試合も覧ようとしたのであるが、春日局が、つよく諫めたのである。但し、春日局が、決死の面持で、覧るのを止めたのは、家光の持病を心配しただけではなく、ほかに、重大な理由があったのである。

しかし、西之丸の剣士控の間には、その旨は、正午まで、通達されなかった。

第九試合は——。

水戸藩士・梅津紋太夫道行と、池上本門寺前で町道場をひらいている松前三四郎純久とのあいだに行われる槍試合であった。

春日局から、柳生宗矩と小野忠常に、将軍家御不例の報せがあったのは、勿論、取止め決定後すぐであったが、この時、なぜか宗矩一人だけが、大奥へ呼ばれたのであった。

やむなく、試合者たちに、通達する役目は、忠常にまわった。

生涯二度とない大試合に出場するとなれば、一流の兵法者たるもの、その日その刻限を期して、身心を整調することは、すでに、荒木又右衛門を語る条において、述べた。

翌日に延期する旨を通達するのは、まことにいやな役目であった。これは、老巧な宗矩こそふさわしかった。

若い忠常は、やむなく、両者を、桜の間へ呼び寄せて、高圧的に申渡すよりほかに、方法はない、と考えた。

忠常は、それまで、両者を視ていなかった。

桜の間に入って来た両者を眺めて、忠常は、孰れも尋常の士であるのに、安堵した。

水戸の梅津紋太夫は、三十四歳、長身白面の、どことなく飄々たる風格をもった、どちらかといえば、儒者などに多く見受けられる型の人物であった。筑波山中に育ったという自然児の大らかさが、御三家筆頭の物がたい家中に入ってからも、消えずにのこっているとみえた。

一方、永年町道場をひらいている松前三四郎は、三十六歳、小ぶとりの、眉目の丸い童顔の持

主で、一瞥しただけで、落着いた温厚な人柄と受けとれた。この試合に勝てば、旗本の列に加えられるという大事の場に臨んでいる気魄など、全く感じられなかった。巷の間でもまれて、苦労して、人間が練れたものと思われる。

互いに、初対面の挨拶も、おだやかであった。

忠常が、試合は明日に延期された旨を申渡しても、両者は、べつだん顔面を動かさなかった。ただ、松前三四郎の方から、せっかく城内へおまねきにあずかって、このまま退出するのはいかにも心残りゆえ、せめて本日は、御苑を拝観できぬものか、という願いがあった。忠常は、快く承知して、両者をともなって、建物を出た。

御苑拝観といっても、吹上郭だけでその面積は十万三千余坪で、広袤本城に伯仲している。西南は弁慶堀で、西方は千鳥ケ淵、この二濠を以て、麹町及び番町の高地を阻絶している。郭の南部に尾州、中部に水戸、北部に紀州の三親藩邸第が在った。

忠常は、わざと、試合場にあてられている平庭をさけて、西之丸南郭から、吹上門を抜けて、そこに置かれた振天府、懐遠府、建安府など、戦役の貴重な記念品を蔵したところへ、両者をみちびこうとした。

その折——。

あわただしげに、数名の士が苑路を走って来て、木立の中へふみ込み、しきりに梢を見まわしはじめた。その顔つきは、必死であった。大奥つきの添番たちであった。

すぐあとから、せかせかと歩いて来たのは、御広敷御用人とみえた。

「何をぐずぐずいたして居る！　はやく、とらえぬか！」

と添番たちを叱咤した。

忠常たちも、梢を仰いだ。

と――すぐに、梅津紋太夫が、

「かたがた、鷲は、あそこでござる」

と、指さした。

この目ざとさは、紋太夫の経歴を示していた。

紋太夫は、筑波の山中に育った鳥刺しだったのである。十七歳の冬、小鳥を生捕っているところを、水戸の槍術指南の梅津甚左衛門に目撃され、天稟ありと見込まれて、その養子になったのであった。養父が逝った後、一時、御鷹匠を勤めたこともある。むしろ、これが、紋太夫にとっては、本業であったといえる。

梢に、逃げた鷲を発見することぐらい、紋太夫にとっては、掌を指すようなものであった。

二

将軍家光には、美童を愛するほかに、小鳥を飼う趣味があった。鶯、鶉、駒鳥などを仕立て、その季節にいたると、林園に放って、その音色を愉しむことにしていた。

小鳥を飼う役目は、大奥の女中たちであった。

本日――茶会にあたって、特に、この小春日和に美しく啼くように仕立てられた、家光寵愛の名鳥〝春光〟が、その亭の檐さきへ置かれることになっていた。小鳥乍ら、将軍家の一字を与えられ、葵の紋散らしの籠に納れられた鷲は、女中たちから、「春光さま」と呼ばれる格式をそなえていた。

その名鳥を、女中の一人が、あやまって、逃がしてしまったのである。

この粗相が、短気な家光に知れたならば、幾人かの犠牲者が出ることは、必定であった。添番たちが、血相変えているのも、当然であった。

……名鳥は、吹上門上を飛びこえて、ひときわ高い杉の梢に、つばさをやすめていた。

添番たちは、大いそぎで、囮笛で、呼びおろそうとした。

しかし、一向にきき目はなかった。囮笛は、春から新緑にかけて用いるものであった。すでに、初冬を迎えた季節では、役立たなかった。

たとえ、小春日和に啼くように仕立てられた名鳥とはいえ、自由を得て、大空の下を飛んでみれば、たちまちに、本性をとりもどして、囮笛などにだまされないのであった。

「御用人――」

忠常が、声をかけた。

「それがしが、合気の術で、あの鷲を落して進ぜる。下で、受けとめられい。ただちに蘇生させるとお約束できる」

そう申出た。

たとえ五間の高処の樹上にとまっているとはいえ、小野一刀流の気合を放てば、落せない筈はなかった。

御広敷御用人は、

「忝けない。何分よろしくお願いつかまつる」

と、好意を感謝して、添番たちに網を張るように下知した。

この時、梅津紋太夫が、忠常に向って、

「失礼な申分乍ら――」

いんぎんに、云いかけた。

「合気の術でお落しあると、いかなる名鳥も、啼くのを忘れるかと存じます。そっと、竿を用いになって、裏羽根へ、鳥黐をかけるがよろしいかと心得ますが……」

忠常も、紋太夫の経歴はきかされていた。

その態度は、謙虚で、忠常の反感を買うものではなかった。

「そうであった。小鳥を生捕るは、お手前の仕事であったな」

忠常は、笑って、紋太夫に一任した。

紋太夫は、御広敷御用人にむかって、鳥刺しの継ぎ竿を、要求した。

それを、添番の一人が、取って来るまでに、小鳥が飛び去りはしないか、と一同は、気が気ではなかった。

一人、紋太夫だけが落着きはらっていた。籠に飼いならされた小鳥は、放たれると、はじめは、面白さのあまり飛びまわるが、一度羽根をやすめると、追わないかぎり、滅多に飛び去るものではないことを、知っていたからである。

紋太夫は、持参された継ぎ竿を受けとると、無造作な足どりで、その老杉の下へ進んで行った。

試合対手の松前三四郎にとっても、また忠常にとっても、これは、見のがせない光景であった。

三四郎と忠常の鋭い眼光を、背に刺され乍ら、紋太夫の様子は、しかし、きわめて平然として

いたのである。

とはいえ、その進みかたは、もし、見戍る者が、目蓋を閉じれば、樹間を微風が渡っているとしか感じさせないくらい巧妙な忍び歩きだったのである。

紋太夫は、老杉の下に立つと、手ばやく、継ぎ竿を継いだ。それは、三間の長さに延びた。

紋太夫は、それを、幹に添わせて直立させた。次の瞬間、なんの気合も発せずに、抛りあげた。竿は、枝と枝の隙間を縫って、矢のように、宙を飛び上った。そして、高い梢上の小鳥に、その尖端をふれさせたかとみるや、五寸あまりの穂先の一本を羽根に吸いつけておいて、残りの竿は、すうっと、落下して来た。

名鳥は、軽い竹竿の一本を羽根からぶら携げて、飛ぶや飛ばずのかたちで、その下へかけつけた添番たちの張る網の中へ、ふわっと入った。

だが――。

名人芸を示した当の紋太夫自身は、ふかく慙じ入る気色で、俯向いていた。

忠常は、その紋太夫を見戍るかわりに、木立の一隅へ、視線を送っていた。

自分たちの背後から、一個の黒い影が、通り魔のごとくそこへ消えて行ったのである。

紋太夫が、竿を、梢へ抛りあげた瞬間であった。全く同時に、忠常の横に立っていた松前三四郎が、脇差の小柄を抜きとりざま、さっと、後方へ、投じたのである。

怪しい者の気配が、そこにあった……。

すなわち。

紋太夫が、竿を抛りあげた瞬間、三四郎は、何者かが、背後にあって、梢上の小鳥に、忍び気

合をかけるのを察知し、間髪を容れず、小柄を撃ったのであった。

紋太夫は、それを知らなかった。

紋太夫が慙じたのは、鶯の裏羽根を刺さずに、表羽根へ鳥黐をつけてしまった不覚なのであった。

竿が飛び上って、小鳥を襲う刹那、小鳥も気づいて、ぱっと羽搏こうとする。尖端は、そこを狙ってあやまたず、ひろげた羽根の裏へ、鳥黐を吸いつかせる。表羽根をよごさぬための、これが至妙の芸であった。

ところが、名鳥は、竿が身に迫って来るや、逆に、かたく、羽根をすくめてしまったのである。曲者から忍び気合をかけられたからであった。

忠常は、曲者の消え失せた地点へ、視線を送り乍ら、

——彼奴！

と、胸中で呟いていた。

——「影」め、まだ、城中を跳梁いたして居るのか！

三

その時刻——。

柳生宗矩は、江戸城から遠く、武蔵野の曠野のまっただ中を、馬を疾駆させていた。

そのすぐうしろを、宛然、宗矩の騎馬影のようにより添って、馬蹄の音さえもたてぬ隠れ扈従をしている一騎があった。

雪の白さの蓬髪を風に巻かせつつ、古稀とも云える皺貌を鋭くひきしめた服部半蔵であった。

半蔵は、いっぴきの鼠を使って、地下の石牢から出ることに能く成功したのである。

半蔵は、おのが忍び笛に誘われたように、いっぴきの鼠が、天井の小孔から降りて来て、握り飯をくわえ去った時、ひとつの直感を脳裡にひらめかした。そして、その次に、たぐりおろされた握り飯を、把りあげて、鼻孔を寄せて、ひと嗅ぎするや、はたして、おのれの直感が正しかったのを、知ったのである。

その握り飯には、雌鼠の尿がしこまれてあった。これは、忍法の秘事のひとつ——鼠通しの法であった。すなわち、どこかへ、雄鼠を集めようと企てる場合、そこに運ばれる食物へ、雌鼠の尿をしこんでおくのである。忍者のみがほどこす法であった。

この地下の石牢に、鼠が現れたのは、握り飯欲しさの偶然ではなかった。

——そうか。「若影」が、鼠を送り込んで来たか。

城中に忍び入っている「若影」か、頼まれてくれるか、と吹きつづけた半蔵の忍び笛の音を、ききとって、鼠を送り込んでくれたのであった。

曾て、半蔵は、「影」のために、京の如意山麓の三重塔の屋根に匿した白球を取って来て、三条河原に投じてやった。ゆくりなくも、今度は、おのれが、その様に、救いをもとめるめぐりあわせとなったのである。

半蔵は、着物の襟の中に縫い込めてあった紙片をとり出して、指を噛んで、血汐で一文をしたためると、それを、捕えた雄鼠の尾へむすびつけて、放ったのであった。

祈りつつ、一夜を明かした半蔵は、柳生宗矩自ら、石牢へ降りて来るのを迎えて、胸に微かな

痛みさえおぼえたことだった。

——わが子なればこそ、骨肉と知らない乍らも、父を救うてくれた！

胸の痛みは、その感動のためであった。

宗矩は、黙って半蔵を目顔で促して、石牢からつれ出し、西之丸桜の間で対坐すると、

「本日の試合に、謀叛の企みがある由、お主が、囚徒の恥辱からまぬがれたいあまりの虚言をつくろったのでなければ、これは、由々しき大事であるが……」

と、云った。

「二十日あまり前のことでござった。江古田の野で、行きずりに、何気なく見とどけたある出来事が、牢中の浄座のうちに、ふと記憶に甦り、あれは将軍家のおん生命にかかる謀叛の企みではなかりしか、と感得つかまつった」

半蔵は、しずかに、そうこたえた。

宗矩は、昨夜、おのが屋敷に戻って、書屋に入ると、几上に、何者かの手で、半蔵の血書が置かれてあるのをみとめたのであった。

しかし、その時は、半蔵を、石牢からつれ出して、糺す気持は起らなかった。

ところが、今朝登城すると、将軍家御不例によって試合延期の旨の通達とともに、春日局から大奥へ呼ばれ、

「昨夜、大樹様（将軍のこと）に対し奉り、異心をひそめた者が、御前試合に出場する悪夢にうなされました。これは、おそらく、豊家の遺臣にあらず、亜相様（家光の弟・駿河大納言忠長のこと）の御不運をなげいて、遺恨を懐く者か、と思われまする」

と、告げられたのであった。

駿河大納言忠長は、前々年十一月に、幕府から、改易され、その封土を奪われ、家士を離散、流竄せしめられ、高崎へ幽閉されたのち、前年十二月六日夜、自害して果てていた。当年二十八歳であった。家光が、安藤重長に、忠長を自殺させるように命じ、阿部重次が、使者となって、高崎におもむいて、忠長につたえたのである。

家康が、幕府をひらいて以来、親藩・外様・譜代中、改易に処せられた者は、尠くはない。しかし、そのために、生命までも喪った者はないのである。福島正則も加藤忠広も、本多正純も徳川忠直も、孰れも天寿を全うして逝っている。

独り、将軍家の実弟たる忠長のみは、自殺しなければならなかった。

家光・忠長兄弟の確執が、あまりに深かったからである。すなわち、実弟であったからこそ、その身の禍は、免れ難かった、といえる。

当然——忠長の悲惨な最期を観て、その復讐を誓う者があらわれたとしても、ふしぎはなかった。

春日局の夢枕に立ったのは、忠長の乳母明石局であった。

おどろに髪をふりみだし、怨みの形相凄じく、必ず将軍家を槍先にかけて仆してみせる、と呪の言葉を吐いたのであった。

宗矩は、このことをきいて、流石に心中惘然となって、急いで、半蔵を石牢におとずれて、糺すことにしたのであった。

実は——。

春日局に、その悪夢を覧させたのは、「若影」のしわざであった。背文字の法、という。睡眠中の者のせなかに、指頭で文字を記すと、これが暗示となって、夢裡に現れるのである。しかも、本人は全く気づくことはないのであった。

斯くして——。

宗矩は、半蔵が目撃した場所へ、馬を走らせることになったのである。

四

秋風の立ちはじめた、ある晴れた午後のことであった。江古田の草庵をぶらりと出て、野歩きをしていた半蔵は、ふと、疎林の中に、鳥翳竿を携えた一人の武士の姿を見出した。梢の小鳥を狙って、これをあやまたず生捕る手練の鮮やかさに、感服した半蔵は、その紋を視て、水戸藩士・梅津紋太夫だな、と推察した。水戸藩の槍術指南役の前歴が、鳥刺しであることは、あまりにも有名であったし、このたびの御前試合にえらばれたという噂も耳にとどいていた。

御前試合出場のために出府して来て、身心の調整の目的もあって、山野をひとり歩きし乍ら、鳥を刺しているのだ、と見てとれた。

で——半蔵は、なんとなく、おのれの気配を消して、そのあとを尾けてみたのである。

やがて、人の背丈ほどにも延び繁った一面の旗すすきの中へ、わけ入った紋太夫は、とある亭亭たる樅の喬木に近づいて、ふり仰いだ。

およそ、十尺あまりの高処に、煌と光る物が、幹へ架けられてあった。

紋太夫は、しばらく、それを見上げていたが、そのまま、幹をまわって、後方に建つ一軒の茅屋に入って行った。

半蔵は、その茅屋を覗くほどの興味も持たなかったので、途を引返したものだったが……。

石牢内に、孤坐しているうちに、なんとはなしに、ふっと、その記憶が甦り、あの喬木の幹に架けてあったのは、たしか、絵馬のかたちをした鏡であった、とおのれに呟いた——とたんに、ひとつの直感が閃いたのである。

樅の喬木に絵馬のかたちをした鏡が架けてあるのは？

大樹は即ち将軍を意味し。

絵馬のかたちは即ち家と看做され。

鏡は即ち光り物である。

判読すれば、将軍家光となるのではないか。これは、呪詛のための仕掛けではあるまいか。あの茅屋の中では、将軍家調伏が行われていたのではなかろうか。

半蔵は、そう想像したのである。

宗矩と半蔵は、その茅屋の前で、駒から降りた。

まず、半蔵が、閉ざされた戸へ手をかけて、急に眉宇をひそめると、宗矩をふりかえった。

「屍臭がござる」

告げておいて、戸をこじ開けた。

はたして、半蔵の推測は、適中していた。

ただ一間しかない屋内には、護摩壇が設けられてあった。三角の鉤召金剛炉は、阿毘遮魯迦法によって、忿怒敭曼徳迦明王を祭る人命調伏の護摩壇であった。

壇上には、人髪、人骨、人血、蛇皮、肝、鼠の毛、猪の糞、牛頭、牛血、白檀、蘇合香、毒薬など……。

壇の前には、蹲踞座という坐りかたをした山伏が、左手に金剛杵を、右手に炉中の灰を握りしめて、俯伏していた。

半蔵は、抱き起してみて、その死顔から、昨夜のうちに事切れたものと、さとった。おのれの生命さえも、仏に捧げて、呪詛の修法を、二十一日間つづけたものであった。

「明日の試合は、中止せねばなるまい」

宗矩は、呟いた。

すると、半蔵は、かぶりをふった。

「調伏は終って居り申す。試合を中止いたさば、呪詛は、この修験者の魂魄から発しられて、じかに、上様に祟る懸念がござる。試合を行わしめて、上様を襲う凶刃を打ち落すことによって、呪詛を断つよりほかにすべはござらぬ」

十文字鎌

一

この日も、空は一朶の雲影もとどめず、遠く澄みわたっていた。暑からず寒からず、秋光の盈ちた江戸城の庭では、あちらこちらの台地上に、大奥の女中たちが佇んで、遠く、芝生の彼方を流れる水影を眺めていた。

水影は、波光をゆらめかせて、さらさらと流れて、ふしぎな美しさであった。これは、実在のものではなかった。筑紫の不知火のような、また越中その他の土地で見える蜃気楼のようなものであった。

武蔵野の逃水、という。人が若し進んで、そこへ到ると、ただ、青草があるばかり、水は去って、更に遠くにあるのだった。一種の陽炎といえた。

逃水を眺めるために、人々は、多摩郡府中あたりまで出かけて行くならわしであった。武蔵野のおもかげをとどめる城内にあっては、居乍らにして、逃水を見ることができるのであった。

ただ——。

吹上の白砂の平庭だけは、方二十間に張りめぐらした紅白の幔幕の蔭に、伊賀三十六人衆をひそませて、異常な緊張した静寂を保っていた。

第九試合は、ただの御前試合ではなかった。立合う者の一人は、将軍家光の生命を狙っているのであった。

柳生宗矩も小野忠常も、死の決意をしていた。

家光自身も、宗矩から告げられて、覚悟の上で出座していた。

宗矩は、春日局と相談して、家光の影武者をそこに坐らせようとしたのであったが、家光が肯かなかったのである。春日局がさし出した守り鏡を、肌着の下にかけることさえ不承不承であった。

「余の生命を狙う者が現れてこそ、このたびの試合を催した意義があろうと申すものではないか」

強気に、そう云いはなったものだった。

上座は、いつもより、ずうっと奥へさげられてあったが、家光は、わざと、反対に前へ出させた。

両審判席は、家光をかばうために、その間隔をせばめて、設けられてあった。

家光は、これもまた、

「よく覧えぬぞ。常のようにいたせ」

と、床几を左右へ戻させてしまった。

この日、梅津紋太夫と松前三四郎が登城を命じられた時刻は、これまでより一刻も早かったし、身を浄めるという名目で、風呂の用意がされていて、入浴しているあいだに、ひそかに衣服の検査が行われた。試合に用いる槍以外は、脇差を帯びることも禁じられた。

午報とともに、両者は、同時に、幔幕を割って、出た。

――こやつか、余の生命を狙う奴は！

家光は、東方から姿を現した梅津紋太夫を睨んだ。

紋太夫が、小脇にしているのは、三間柄の、細造りの長槍であった。

ゆっくりと距離を縮めて、間合がきまると、しごきもせずに、身構えたが、これは、奇妙な構えであった。左手は千段巻きを掴んで、穂先をやや上段に向けたのである、柄は、おのが身の後方へ長くのこされ、石突きは、ほとんど地にふれんばかりであった。すなわち、普通の持ち方と逆であった。鳥刺しから会得した、一気に三間の柄をくり出す刹法であった。

刹法とは、構えの如何に拘らず、直ちに敵に応じて勝身を行う極意である。刹とは刹那の意味で、相撃ち相突きの勝負に関しては、この秘術をこそ真髄とする。

いわば、敵から突かれた刹那において、穂先三寸をもって、身を転化して、石火の反撃に出るための、この鳥刺し法形は、刹法として完璧といえた。

これに対峙する松前三四郎の槍は、八尺柄、十文字鎌であった。宝蔵院流を学んだ三四郎は、印可を許されてのち工夫して、柄をしだいに縮めて、ついに、七尺柄にしたのである。のみならず十文字鎌槍は、始祖である南都興福寺宝蔵院住職・覚禅坊法印胤栄は、剣九寸横手七寸のものを用いて居り、普通の槍術者は、それにしたがっているのだが、三四郎は剣三寸横手六寸と、長さが逆のものを得物としているのであった。

槍の柄というものは、持つ人の一丈半を良しとする。六尺の人には、九尺の柄となる。これを高量というが、五尺五寸の三四郎が、七尺柄を使うのは、この変形の十文字鎌をもって、飛乱を

描くために最も便利であったからである。

飛乱は、始祖胤栄が目録の最初に説く極意であった。水鳥が、飛び立って行く瞬間を、「位」とした秘伝である。

三四郎は、飛乱を学ぶうちに、水鳥の飛ぶかたちを、十文字鎌に写す直感を得たのであった。頭から尾までの長さよりも、大きくひろげた双翼の長さの方が、倍するとすれば、飛乱を使うのに、剣よりも横手が長い方がいいということになる。

十文字鎌槍の得意は、敵の武器をからんで、刎ねあげることにある。三間柄の長槍によって構えられた鳥刺しの刹法に対するに、まことに、巧妙な短槍といえた。

ともあれ——

共に構えて、じりじりと迫って、穂先と穂先が触れんばかりの地点で静止するや、長槍と短槍は、逆に、前者がわずか一尺をのぞかせ、後者が一間をくり出すかたちになって居り、これは、たしかに、異とする眺めであった。

位置は、梅津紋太夫が、上座に背を向け、松前三四郎が正対していた。

梅津紋太夫が白光の閃くように三間の柄をくり出すのが迅いか、これをからんで、刎ねあげざま使う、松前三四郎の飛乱の術がまさるか——勝負は、一瞬にして決すると、思われた。

ただし、審判者たちは、その勝負に心を置いてはいなかった。どちらの眼眸も、鋭く、梅津紋太夫の長槍にのみ、そそがれていた。

鳥刺しの刹法は、また、投げ槍の秘技であることを、考慮しておかなければならなかった。紋太夫の立つところから、家光の座までは、五間の距離にすぎなかった。

……穂先と穂先が触れ合う間合で、両者は静止するかとみえて、目に映らぬゆるやかさで、位置を変えはじめたことも、宗矩と忠常をして、全神経をいやが上にも緊張させた。

互いに、相手の左の脇腹にねらいをつけているので、護身の上から、ともに右へ右へ、と移動せざるを得ないのであった。

すなわち、半円を描くならば、両者はその位置をとりかえて、紋太夫は、完全に、家光に向って正対する地点に立つことになる。この瞬間に、危機は来るであろう。

やがて——。

その位置が、将軍の座から視て、左右一線上へ移った——とみた刹那、紋太夫のからだが、ぱっと、一間を、滑って後退した。しかも長槍そのものは、同じ空間にぴたっと静止したままであった。

紋太夫は、三間柄の長槍を、空間に固着させたなり、おのが身を退かせたのである。

これは、対手の間合を見切る感覚を狂わせるためであった。

実は、紋太夫の秘術というのは、おのれは一間を跳び退りつつ、長柄を逆に、二間びゅっとくり出す刹法であった。

これをなさずに、わが身だけを退かせたのは、十文字鎌槍が、これを待っていて、からんで、刎ねるおそれがあったからである。その前に、まず、対手の間合を見切る感覚を狂わせておかなければならなかった。

この紋太夫の動きに対して、三四郎は、なんの変化も示さなかった。

なお、つづけて、白砂上にゆるやかな円弧を描きつつ、紋太夫は、三度ばかり、前後へ、素迅

い動きを、くりかえした。

そうして、ついに、両者の位置は、審判者たちが最もおそれている状態に、転移してしまった。紋太夫の槍先は、家光の胸へ向って、まっすぐに狙いつけられるかたちとなった。

二

だが、実は、将軍家の生命を奪わんと企てているのは、梅津紋太夫ではなく、松前三四郎の方であった。

徳川家康が、天正十八年八月、関東へ入国するや、駿・遠・参・甲・信五州に在った数万の家臣とともに、商人・百姓たちもまた続々と江戸へ移住して来たのであった。三四郎の祖父も、その商人の一人であった。江戸にかぞえきれぬくらいある「三河屋」のひとつであった。いわば、町人の譜代といえた。

酒・醤油をあきなう家業はさかえて、三四郎は、当然、それを継ぐべく育てられた。

ところが、夜盗に備える六尺棒の稽古から、三四郎の天稟は発揮され、父親もまた見込んで、道場へかようのをゆるし、ついに、店を弟にゆずって、遠く、奈良まで、宝蔵院流を学びに出かける運命となったのである。

江戸へ帰った時、三四郎は、二十一歳になっていたが、すでに、兵法者以外の何者でもなかった。父親は、息子のために、元津軽藩士から、松前姓を買いとって、待ちうけていた。

そして、町道場をひらいて、爾来、その名声は、上方まで鳴っていたのである。

この来歴は、どの角度から眺めても、徳川家に異心を抱く者とは、考えられなかった。

のみならず、このたび、試合に勝てば、旗本の列に取立てられることになっていたのである。もとより、三四郎自身も、千載一遇の好機をのがさじと、その日にそなえて精進していたのである。

突然、三四郎が、一通の封書を受けとったのは、今秋重陽の祝日であった。

披いてみると、それは、血書であった。内容は、三四郎をして、しばし茫然自失たらしめるものであった。

おのれは、三河屋作兵衛の実子にあらず、実は、関ケ原役に於て、石田三成とともに捕えられ、六条河原にて磔多の手で成敗された小西行長が、侍女於輝に生ませた双生児のかたわれなり。その双生児の一方たるこの大和金峯山の修験道・阿含が、証明するものなれば、夢疑うべからず。われら兄弟の母於輝は、後年、如何なる手蔓がありしや、大御所（二代将軍秀忠のこと）の二子国松君の乳人となり、明石局と称し、国松君が大納言に陞られるや、したがいて駿府に在りて、つぶさに、江戸幕府の奸策を覧たり。昨年十二月、大納言忠長卿が、高崎の配所にして御自害なされるにあたりては、おそばにて、つぶさに見とどけたり。明石局は、忠長卿の遺髪を抱いて、はるばる、大和金峯山に来り、将軍家の御一命を縮める修法を、この阿含に歎願したるのち、自ら咽喉を突いて果てたり。実母が最期を視ては、役小角の験術を伝える金峯山修法の限りを尽して、将軍家調伏をなさざるべからず、と決意せり。たまたま、弟たるおのれが、御前試合の一人にえらばれたるを知り、好機これにまさるなし、と思い立ちて、出府し来れり。おのれは、わが呪術の応身となりて、怨敵家光公を討ちとるべし。

そういう内容だったのである。

自分が、徳川に滅ぼされた小西行長の実子であるばかりか、将軍家光に殺されたその弟忠長の乳母明石局が母であった、という事実は、しかし、われにかえってみれば、現在の身に、なんの関りもないことであった。

三四郎は、その血書を、しずかに、火鉢の炭火にくべた。

すると、ゆらめき立つ烟の中に、怪異な貌が、現れ出て、三四郎は、思わず顔をそむけた。

一人の山伏が、道場をおとずれたのは、それから数日後であった。

三四郎は、かたく、山伏の申出を拒絶した。

三四郎が、妄執に憑かれた山伏の呪術になやまされはじめたのは、その夜のうちからであった。

三四郎は、ついに、その執念に屈服した。そして、ひとたび、応諾するや、人間の奇妙な心理というものは、栄誉を受けて立身するよりも、誰人も能く成さざる天下人弑逆の壮挙の方が、兵法者の面目に叶うように思われて来たのであった。名も生命もすてて、おのが槍先ひとつで、将軍家を殪すことの悲壮はたしかに、魅入られた者の異常な情熱をわきたたせるものであった。

いわば、

「壮士ひとたび去って、またかえらず」

の意気であった。

兄の阿含が、江古田の茅屋で将軍家調伏の護摩壇を設けて、呪詛の修法をつづけていることも、三四郎の悲壮感をいやが上にも昂らせた。

とはいえ、柳生宗矩、小野忠常という当代抜群の達人が守護する家光を討ちとることは、殆ど不可能にちかい至難のわざであった。精根を傾けて工夫してみたものの、なお、三四郎は、試合前夜になっても、これぞ、と膝を打つにいたらなかった。

深更、三四郎は、ひとり、道場の中央に黙坐をつづけて、苦悩していた。

と――。

それを投ずる者の気配もなしに、一本の小柄が、闇を縫って、飛んで来て、三四郎の膝の前に、突き立った。

われにかえった三四郎に向って、

「将軍家を討ちとる工夫、いまだ、成らずとお見受けする」

あざけるような声が、あびせられた。

三四郎はこの小柄が、昨日、吹上門近くの木立の中で、忍び寄った曲者に、自分が撃った品であることをみとめた。梅津紋太夫が生捕ろうとする名鳥へ忍び気合をかけておいて、何方かへ消え去った曲者は、投げられた三四郎の小柄をひろって、不敵にも、返しにやって来たのである。

三四郎は、闇の中にくろぐろと滲み出た黒影を凝視して、

「何故の推参か？」

と、問うた。

「将軍家を討ちとる秘技を編む上に、一助となり度く――」

曲者は、すでに、三四郎の企てを知っていたのである。

「何者か？」

「影」

こたえは、明快であった。

「拝領の太刀を、つぎつぎと奪う賊がある、ときいていたが、おのれか？」

「左様――」

「徳川家に遺恨を抱く者だな？」

「さあらず、天下の兵法者と、術を競う心驕った振舞いと心得られたい。……それがしの看るところ、尋常の立合いでは、お主の腕前は、梅津紋太夫に、一籌を輸す。将軍家を討ちとることはおろか、紋太夫の槍先に斃れるおそれなしとせず。されば、それがしが、かりに、紋太夫の鳥刺し利法を写し申す。お主は、おのが生命をすてて、これと闘いつつ、将軍家を討ちとる業を工夫されたい」

斯くて、深夜の道場において、三四郎は、「影」と称する若者を対手として必死の立合いをして、さとるところがあったのである。

ところで、服部半蔵が、謀叛人を梅津紋太夫と思いちがえたのは、紋太夫の姿を江古田の調伏の場所に見出したためであった。

紋太夫が、そこにいたのは、全くの偶然にすぎなかった。小鳥をもとめて、山野をひとり歩きしているうちに、いつとなく江古田へまで足をのばしていたのである。

武蔵野のうちでも、小鳥の多く棲むところは、おのずからきまって居り、鳥竿携えて、毎日倦まずに歩きまわる紋太夫が、江古田の野に現れるのは、一向にふしぎはなかったのである。

三

ここで、くりかえして、紋太夫と三四郎の対峙の位置を述べておかねばならぬ。

両者は、ともに白砂上に半円を描いてその位置をとりかえたのである。上座と五間の距離を置いて、家光に対して、三四郎は、背中を向け、紋太夫が、槍先をまっすぐに狙いつけるかたちとなっていた。

紋太夫を謀叛人と思い込んでいる宗矩と忠常は、その長槍の穂先のみを見戍って、短槍の十文字鎌の方へは、注意を怠っていた。

「……」

「……」

画裡に入ったような固着の時間が、息詰まる静寂のうちに、ゆっくりと流れすぎて、ついに、汐合が、きわまった。

「ええいっ！」

紋太夫が、一間を跳び退りつつ、長柄を二間、白光よりも迅く、びゅっと、くり出した。

同時に――。

宗矩も忠常も、床几から立ち上って、太刀の鯉口をきった。

次の瞬間の光景は、審判者たちのまなこを、はっと瞠らせずにおかなかった。

三四郎は、その穂先を、十文字鎌で刎ねのけるかわりに、両胸をたかだかと冠り入身に転じて、胸をひらいたのであった。

当然、槍の穂先は、三四郎の胸板を、ふかぶかと突き通した。
ばっと迸る血汐を見て、宗矩と忠常が咄嗟に、紋太夫の次の行動を警戒して、その備えを構えたのはむりでなかった。
ところが家光の生命を狙うのは、三四郎の方であった。
紋太夫に、わざと、おのが胸をつらぬかせつつ、三四郎は、仰のけざまに、その短槍を、一念こめて、背後へ振り投げた。
異形の十文字鎌は、怪しい生きもののように、宙を截って、上座を襲った。
紋太夫に備えた宗矩と忠常には、思いもかけぬこの奇襲をさえぎるいとまがなかった。
「ああっ！」
家光が、恐怖の悲鳴をあげて、半身をのけぞらした。
その胸を、十文字鎌の穂先は、がっと噛んだ。
白砂上へ倒れた三四郎は、さいごの気力をふりしぼって、半眼をひらき、狙いあやまたず、家光を仕止めたのを、見とどけ、何か云いたげに、唇を顫わせたが、急に烈しく四肢をして痙攣させると、ごぼっと、口から鮮血を噴かせて、目蓋を閉じた。

——南無三宝っ！
宗矩と忠常は、血相をかえて、上座に跳び上って左右から、家光を扶け起して、短槍をその胸から、抜きとった。
「上様っ！」

「お気をたしかに！」
はげまされて、家光は、ぶるっと、ひとつ、かぶりをふってから、喘ぎ声で、
「見事に、やり居った！……、し、したが宗矩、余を狙う奴は、ちごうたぞ！」
と、云った。
「上様！　お詫びの申上げようもございませぬ。宗矩、一生の不覚にございまする！」
宗矩の顔面は、血の気を失って、土色になっていた。
「よいわ！　生命は、ひろうた」
家光は、懐中をさぐると、春日局が無理やりにかけさせた守り鏡を、摑み出した。
「これのおかげじゃ」
宗矩と忠常は、鏡の中点に、短槍のつらぬいた孔をみとめた。しかし、それは裏面まであけてはいなかった。
後刻、宗矩は、その守り鏡を持って、大奥に入ると、春日局に会った。
能くこれが将軍家の生命を守護したことを告げ、局の配慮を感謝してから、
「ところで、これの裏面に——」
と、指さしてみせた。
春日局は、一瞥して、眉をひそめた。
鏡の裏面には、墨くろぐろと、
影
と、記してあったのである。

「いつの間にか、このような文字を――？」
「思いあたるふしは、ありませぬか？」
「ありませぬ」
――そうか！
宗矩は、合点した。
――局の夢枕に、明石局を立たせたのも、上様にこの鏡をお持たせするように暗示を与えたのも、すべて、「影」の仕業であった！
今更乍ら、宗矩は、「影」の神出鬼没の忍びぶりに、舌をまかざるを得なかった。
――謀叛人を、梅津紋太夫と看過った服部半蔵に、その責を負わせて、「影」と決闘させる！
これが、第十試合となろう。

剣仙談

一

筆者は、この物語のはじめにおいて、寛永御前試合は、一日に一試合――将軍家の出座のない日を加えて、十四日間に十試合が覧られた、と書いた。
しかし、その最終試合は、正しくは、表裏二試合であったと、ここに記し直しておかねばならない。
その表の第十試合は、巷談のごとく、備中の人・芳賀一心斎に対して遠州の産・難波不伝が立向って合打ち、と記録されている。だが、この試合は、吹上の庭上では、行われなかった。
まことの第十試合は、江戸城外において、「影」と服部半蔵とのあいだに行われた凄惨無比の忍法試合であった。しかし、これは、千余の人々の目の前で行われたため、あくまで将軍家御鷹狩りという名目で、処理されたのであった。裏試合であった、とする所以である。
表試合が、庭上で行われなかったのは、第九試合における将軍家光奇禍のためであった。春日局が、将軍家出座を、厳として、阻止したのである。正副の審判たる柳生宗矩と小野忠常の責任も軽からず、事は極秘にされたため、両者は、表向きの処分にはならなかったものの、自らを謹慎せざるを得なかった。

で——当日朝、登城した芳賀、難波の両剣客を迎えたのは、将軍家師範に代って、大久保彦左衛門であった。

一徹剛情の奇行をもって鳴るこの老人に、審判役を依頼したのは、宗矩であった。

一切の事情を打明けられた大久保老人は、万事心得て、高名な両剣客を、紅葉山中の、太田道灌を偲ぶために建てられた静勝軒という館へ、案内したのであった。そこの白書院にすでに古稀を過ぎて仙格化した両名人を対坐させ、酒肴をふるまって、剣談を交させ、御簾かげの将軍家にきかせる趣向をもって、第十試合に替えたのである。

上座の御簾かげに、たしかに、人影はあったが、はたして、それが家光かどうかは、取持つ大久保彦左衛門にも、判らなかった。

将軍家がきいていようがいまいが、大久保老人にとって、この役は、ひさしぶりに、おのが血を若やがせるに足りた。老人自身すでに、七十の坂を疾くに越えて、ようやく武骨褊狭の面魂もうすらいで、名聞をさほどのねうちと思わなくなった境地にいたっていた。

十年前、「三河物語」を記している頃の、満身に不平不満を盈たしていた人物とは、全くの別人のようになっていた。

……ところで。

大久保老人が迎えた二人の老剣客は、老人をして、思わず、「ほう——これは！」と嘆息させたくらい、すでに兵法者の烈しい気魄などみじんもとどめぬ飄々乎たる風姿であった。

古来、剣聖と称せられる人々の殆どは、その晩年を、山中に独居して、終えている。

芳賀一心斎も難波不伝も、いまは、仙人に近いくらしをしていたのである。

斯様な剣聖たちには、なまじ木太刀をとらせて、庭上に技を競わせるよりも、無礼講のかたちで、酒肴を呈し、対談させる方が、よりふさわしかった、といえる。

ところで、大久保彦左衛門は、この二人の老剣客を眺めて、山中独居が、こうも、風貌も挙措も言辞も、同一化するものか、と一驚したことだった。

白髪白髯、丈はあまり高からず、皮膚は木皮のように黝んで堅く、それでいて、皺は全く見当らず、双眸は澄んでいた。

両者とも、草色の木綿の筒袖にたっつけを穿き、白扇一本を腰に帯びているだけであった。座に就いた姿は、矍鑠たる田夫子以外の何者でもなく、常人が想像する剣聖とは、およそ縁遠かった。

かえって、寒山拾得をさらに土くさくしたような姿が、大久保老人には、親しみが感じられた。

「当節の若い奴らは——」と、ふた言めには、そうきり出すのを得意とする老人にとって、隔意なく話し合える対手たちであった。

「本日は、全くの無礼講にて……」

幾度も念を押して、両者に、胡坐をもとめた。

「お手前がたが庵の炉端と心得て頂きたい」

二人の老剣客は、遠慮しなかった。ともに、酒は好物であり、注がれるままに、大盃を幾杯も飲み重ねて、木皮顔をさらに上機嫌なものとした。

但し、両者とも、その肴だけは、山海の珍味を膝前に並べられ乍ら、ひと箸もつけようとはしなかった。

やがて、話は、若年の頃の兵法修業に花が咲き、彦左衛門得意の「当節の若い奴らは……」がしきりに出はじめて、「血気いまだ定まらず、これを慎しむは色にあり」というところへむすびついた。

だが、両剣客は、その話にいたると、一向に合槌を打っては来なかった。色道のことなど、疾うに忘れた、という顔つきであった。

彦左衛門は、さらに、一歩を進めて、伊藤一刀斎景久の逸話を持ち出した。

一刀斎が、京に在った頃、試合に負けて遺恨を抱く兵法者たちが党を結び、一刀斎の愛妾を籠絡して、まず大小を奪わせておき、夜半に忍び込み、蚊帳の四つ手を切って落して、襲いかかった。一刀斎は、ぱっと目覚めざま、枕元をさぐったが、両刀が無い。愛妾に裏切られたことは、一刹那にさとったが、もはやおそかった。……心しずかに、かしこにくぐり、ここにひそんで、ようやく蚊帳を抜け出ると、酒肴の器を手当り次第投げつけて、隙をうかがって、一人にとびついて、刀を奪いとるや、猛然と反撃に出て、悉く斬り伏せた。さいわいに、身に微傷だに負わなかったものの、女に心を許したことを深く慙じて、その夜のうちに、家をすてて、東国に赴いた、という。

「戦国無双と称せられる伊藤景久さえも、若年においては、畜生心さかんにして、女色に溺れ申した。畜生心を離れ、一切の所作をすて、八面玲瓏、物外独立の真妙を得るためには、お手前がたのように、七十年の月日を要するものでござろうかな。さても、ご苦労なことでござる」

彦左衛門が、聊か皮肉を含めて云うと、難波不伝が、盃を置いて、じっと瞶めかえした。

二

「おことば乍ら、色慾から蟬脱するためには、一度色慾に溺れてみなければ、悟り得申さぬ、と存ずる。さらには、色慾そのものは迷妄にあらず、天理本然の性なれば、受用の中に、勝理も備わると自得することこそ……。すなわち、伊藤一刀斎は、女色に迷うたのを慙じるかわりに、豁然と大悟いたしたのではござるまいかな」

「ほう、これは異説じゃ。おうかがい申そう」

彦左衛門は、首をつき出した。

「これは、われらが、勝手な解釈でござるが……」

難波不伝は、云った。

「その夜、一刀斎は、深酒を召された。そして。側女を抱いて、寝られた。だが、事は不首尾であったに相違ござるまい。いかな鍛えた躰とは申せ、あまりの深酒を食っては、おのが得手物が、思うにまかせぬことは、御貴殿もおぼえがおありかと存ずる。われらにもござる。これを、泥酔と申す。……一刀斎は、泥酔して、その宵は、側女の陰孔を用うるにいたらず、大いびきをかかれた。これぞ、色道上の不覚でござる。そこを、側女は、待ちうけて居ったのじゃ。これまでも、しばしば、斯様な不覚を、一刀斎はとられて居ったからでござろう。女と交われぬほど、男は泥酔した、と側女は見てとり、その刀を奪って、刺客を誘い入れ申した。この側女の判断こそ、兵法上の重大な問題でござるわい。

剣を修業中の者にとり、事いかなる場合においても、不覚をとったことに対してこれをおろそ

かに忘れすてることは出来申さぬ。兵法者には、女人を抱く時は、得手物こそ即ち剣でござる。一刀斎は、その剣に不覚をとり申した。されば、酔夢の裡にあり乍らも、その精神は、不覚をとったことを決して忘れては居り申さなんだ。躰は睡り乍らも、精神は目覚めて居り申した。

大いびきをかきつつ、側女が大小をぬすむにまかせたのは、おのが不覚の故、と心して、敢えて、剣をすて、敵を見ず、我を覚えず、所作をはなれ、身を自然に任せて、無為の位の活路を得んためでござったろう。はたして、刺客は襲うて参った。

目覚めて居った精神は、五体を間髪にはね起させ申した。まさに、一刀斎にとって、無刀の極意をさとるに、願うてもない好機でござったのじゃな。勃然と立って、敵の一刀を奪いとることぐらいは、兵法者の常の心得にすぎ申さぬ。……一旦、無刀の極意を悟り申したからには、もはや、世間の表にて、試合をいたすにもおよばず、一刀斎は、その夜以後、行方をくらましてしまったのでござろう」

彦左衛門は、これをきいて、

――勝手な理窟をほざき居る。

と、聊かいまいましかった。

「左様さな、思えば、兵法と申すものは、これは、もともと畜生心を以て工夫の種といたして居り申すな。獅子奮迅とか飛蝶とか虎乱とか猿飛とか雷電とか蜘蛛とか――種々の畜生の働きを学んで、何じゃやら、秘術めかして居るようでござるわい」

すると、芳賀一心斎が、微笑して、頷いた。

「お説ご尤もでござる」

反駁させて、畜生心をおさえる苦心などを語らせてやろうと思っていた彦左衛門は、あっさりと首肯されて、きょとんとなった。

一心斎は、語りはじめた。

「まことに、兵法などと申すものは、畜生に教えられるところが多々あり申す。それがしが、どうやら、兵法を悟り申したのは、六十を越えて、山中に籠り申して、三年も過ぎてからでござった。……春もたけなわとなったある宵のこと、山狗どもの遠吠えをきき乍ら、炉辺に孤坐して居り申すと、不意に、いっぴきの山狗めが、庵の中へとび込んで来申した。これは、雌狗で、雄狗どもに追われて、逃げ込んで参ったのでござった。

たちまち、庵の周囲は、雄狗の群でとりまかれ、狂おしい争闘の場と相成った。やがて、嚙み勝ったいっぴきめが、悠々と、庵の中へふみ込んで参ると、炉辺にうずくまる雌狗にしがみつき申したわ。

それがしは、終始、黙然として、交尾する畜生どもを、見戍って居り申した。……雄は東を、雌は西を向いて、交り乍ら、すこしも隙のない姿に、感服いたして居り申すと、そのうちに、雌のからだが波うちはじめ、その波動がたちまち雄につたわり、ともに、ひくい呻きをもらし申した。とみた瞬間、それがしは、脇差を、抜きつけに、一閃させて、雌雄の臀と臀が合ったところを、断ったのでござる。

ぎゃっ、と左右に跳び刎ねた山狗どもの迅さは、たとえようもござらなんだ。それよりも、臀部より血汐を噴かせつつ、宙高く躍った雄めが、床に落ちた時、その断末魔にあたって、耳まで口を裂いた貌に、限りない喜悦の情を浮べているのをみとめたおどろきでござった。炉火をかき

たてて、あらためて、眺めるに、その死貌は、笑みでもたたえているかと思われるほど静かなものでござった。

それにひきかえて、雌めの方は、雄の一物を、股間に残されたまま、それから、三日間も、身もだえしつつ、庵のまわりをうろつきまわって居り申したが、これは、正しく、煩悩の姿でござったな」

真顔で訥々として語られた色道話に、流石の彦左衛門も、もはや、皮肉な言葉が、口から出なかった。

さて——。

およそ一刻あまり、三升を越える大酒を飲んで、みじんの乱れも示さずに、老いたる両剣客が立去ったあと、茶坊主たちが、酒肴の器を片づけようとすると——。

芳賀一心斎が胡坐していた跡にも。

それから、難波不伝が就いていた席にも。

すでに初冬だというのに、畳の中まで浸み通る程、濡れていた、という。

両剣客は、酒を酌み、清談を交し乍らも、一瞬の油断もなく、互いの隙を窺う緊張をつづけたあまり、全身の汗を、胡坐の下へしたたらせていたのである。

三

同じ日の同じ時刻。

渋谷の古街道のほとりにある真田隠宅にあっては、左衛門佐幸村が、几上に、虫食いの古絵図をひろげて、熱心に調べつづけていた。

幸村は、拝領太刀の一振——青江の咒文剣に刻まれた謎語を、ついに、解いたのである。

車中侯。

この三文字の謎語を解くために、幸村は、五昼夜をついやした。そして、ついに、一冊の唐本の中から、発見したのである。

いま、幸村のかたわらに置いてある一冊がそれであった。

唐の李公佐が撰するところの小説「謝小娥伝」であった。

その梗概は——。

むかし、予章の估客（商人）の女に小娥という少女がいた。八歳で母を喪い、十四歳で、歴陽の人、段居貞に嫁した。小娥の父は、居貞と合資して、江湖を往来し乍ら、手びろく商売をして巨産をたくわえていた。小娥が、笄をあたまに飾る成年になった年、不幸にも、父と良人は、盗賊に遇い、兄弟甥僮僕数十人もろとも、江底に沈められてしまった。同行していた小娥もまた、胸を傷つけられ、足を折り、水中を漂流した。

ようやく、他船にたすけられて、後に流転して、乞食にまでなりさがった。上元県に至って、妙果寺という尼寺に身を寄せているうちに、一夜、夢をみた。

夢枕に立った父は、

「わしたちを殺した者は、車中猴——門東草である」

と、告げた。

目ざめて、小娥は、その意味を解こうとしたが、できなかった。

後年にいたって、小娥は、建業（南京のこと）という都の瓦官寺をおとずれて、名僧として名高い斉物に、その謎語を解いて欲しいとたのんだ。

斉物は、欄干に凭りかかり乍ら、指さきで、空中に、その六文字を書いてから、しばらく凝思黙慮していたが、やがて、合点した。

「そなたの父を殺したのは、申蘭という賊じゃ。車中猴の車の字は、上下おのおの一画を去れば、申の字になる。申は、猴。ゆえに、車中猴、という。また、門東草の意味は、草下に門があり、門の中に東がある故に、乃ち蘭の字になる。車中猴と門東草を合せて、これは、申蘭となる。この男をさがして、仇を討つがよかろう」

小娥は、慟哭再拝して、申蘭の二字を衣中に書して、去った。

爾後、小娥は、男装して、江湖の間に、傭保して（日傭取りとなって）敵をさがしもとめ、やがて、潯陽というところに至って、日傭取りを雇いたいという家があるときいて、出かけて行くと、主人が、申蘭と判った。

小娥は、天にものぼる心地がしたが、貌には出さず、申蘭の下僕となった。その働きぶりが、次第に信用を得て、ついに、金帛出入のことまでゆだねられるようになった。

小娥は、その家にある金宝錦繍衣物器具ことごとく、父と良人のものであったのを知った。

小娥は、申蘭が沈酔して内室に臥しているところをうかがって、忍び入ると、佩刀を奪って、その首を刎ねた。

父、良人の讐を復して故郷に帰った小娥は、あらそって聘ろうとする男たちをしりぞけて、髪を剪って、ついに、嫁さなかった。

この小娥伝によって、車中侯の謎語は、「申」と解けたのである。

――申とは？

幸村は、これは、当然、方角を指すものと考えた。

そして、沈思ののち、京の古絵図をひらいたのであった。

むかし、京の都がつくられた時、都の周辺に、十二神将を祭って、それを守護神としたのであったが、いくたびかの兵燹に遭うて、つぎつぎと廃れて、いまは、一宇すらも残っていなかった。

しかし、申の方角にあたる一社は（おそらく、その神将の面貌が赭く、鼻高のためであったろう）のちに、猿田彦を祭る社として再建され、里人の氏神となった。

「ここだ！」

幸村はひとり、大きく頷いて、古絵図の一点を、指さきでおさえた。

三方に断崖をもつ丘陵の頂上であった。わずかに、むかしの殿舎のなごりを、その土台の石にとどめているばかり。その土台石は、いずれも中央に孔を穿けてあり、これは、石臼の形であった。

「まさしく、これである！」

幸村は、にこりとした。

京から申の方角にあたる猿田彦の社――これが、車中侯の意味であり。

臼型の土台石――これは、哭文剣の銑子近くに必ず浮いている臼字をもって示している。

平家が隠匿した財宝は、この丘陵上の殿舎の跡に在る！

「はたして、財宝は、いまもなお、ここに埋められてあるかどうか――それが、問題であろうが

……」

古絵図をたたみ乍ら、そう呟いたとたん、幸村は、険しい表情になって、視線をまわした。次の間に、気配があるような気がしたのである。

「猿か？」

問うてみたが、返辞はなかった。

急に、幸村は、調べに熱中のあまり、忍び寄る気配の有無に、神経を配るのを怠っていたのを、不安に感じた。

奥には、「女影」が臥床しているのである。

その子の「若影」には、佐助から、母者はたしかにお預り申している、と伝えさせてある。

「若影」は、目下、江戸城内にひそんでいる筈であった。しかし、いつ、この館へ、忍び入って来るかも知れなかった。

影母子に、謎語の意味をさとられてはならなかった。

幸村は、立って、「母影」のやすむ部屋へ入った。依然として、白蠟のように血の気の失せた、鋭利な刃物のように緊った寝顔であった。

目蓋はとじられ、意識もないかのごとくであった。

幸村は、声をかけてみた。返辞はなかった。

鼻孔の上へ、てのひらを置いてみたが、息もかようて来なかった。

幸村は、やおら、掛具の下へ、片手をさし入れてみた。

「母影」のからだは、ここへかついで来られて以来、ずうっと、石のように冷たく、しかも、全

く匂いを発しなかったのである。

いま、幸村が触った肌も、死人同然であった。

「母影」は、全裸で横たえられていた。

幸村は、胸の隆起から腹部へ、そろそろと撫でおろして、ついに、恥毛にさわった。

そのとたん、「母影」は、目蓋を閉じたまま、口をひらいた。

「謎語をお解きなされたな！」

こんどは、幸村の方が無言であった。

ただ、五指だけは、恥毛をもてあそびつつ、じっと、寝顔を瞶めつづけた。

「母影」は、云った。

「お解きなされば、わたしの肌をさぐりに参られると思うていた」

「先日、わしが申しておいたことを、考えておいてくれたか？」

「……」

「徳川の天下に寇うてはならぬ」

「……」

「生きのびられた秀頼公は、痴愚の癈人にすぎぬ。……そなたに命を、下した者は、おそらく、秀頼公の左右に詰める誰人かであろうが、愚挙もきわまる。わしは、本日、謎語を解いた。しかし、財宝を、そなたら母子に渡すわけには参らぬ」

そこまで云った時、幸村は、はっとなって、五指の蠢きをとめた。

「母影」が、薄目をひらいて、幸村を見あげた。それは、まさしく、媚をふくめた流瞼であっ

た。

「お館どの。わたしを、妻になさる御所存はおありであろうか？」

「……うむ！」

一瞬、女体は、火を通されたように、熱くなった。

幸村が、手を引こうとするよりはやく、「母影」は、はね起きざま、両手をひろげて、老いたる武将の痩軀を、ひしとかかえ込んでいた。

幻影行列

一

その日は、雨雲がひくくたれこめて、いまにも、ポツリと落ちて来そうな、暗い日和であった。風は落ちていたが、空気は冷たかった。

渋谷丘陵の蔭にわだかまる真田館は、深い樹木の中で、昏れがたにひとしい灰色の靄に沈んでいた。

常と、なんのかわりもない静寂が、屋敷内にはあるように、思われた。事実、朝がた、鍬をかついだり、牛を曳いたりして、門前を横切った土民たちは、屋敷内に、どのような異常な変化が起っているか、その気配すらもきき咎めなかった。

正午——冠木門の扉は、もの静かに、左右に開かれた。

影絵宛然に、靄の中を、しずしずと歩み出て来たのは、意外にも、大名行列であった。

袴のもも立ちをとった先払い徒士、つづいて、黒漆の先箱（対の挟箱）鳥毛の鎗、小十人、目附、徒目附、小人目附、虎皮の鞍覆を用いた牽馬六騎、台弓、鉄砲嚢、十文字鎗、直鎗、そして、乗物三挺、小姓、小納戸、供馬、小人押え……等々。

これは、堂々たる五万石の格式を示す供揃いであった。鎗の鞘、箱には、六文銭の紋がうって

あった。

すでに二十年前、大坂夏の陣をもって亡んだ真田左衛門佐幸村が、忽然として、自らの存在を公示して、何処かへ帰国しようとするものであった。

何処かへ——左様、全土の如何なる辺境をさがしても、寸尺さえ地図に記されていない所領へ、幸村は、帰ろうとしているのであった。奇怪というほかはなかった。

その頭数は、およそ百五十余名。孰れの風貌態度を視ても、これは、俄かにかり集められた烏合の雑卒ではなく、ことごとく、戦国往来の気概をとどめて毅然たる気色鋭かな武者たちであった。

なお、一瞥して判るのは、そのほとんどが、すでに五十路を越えていることであった。

そしてまた、他の大名行列と明らかにちがうところは、同じ静粛を保ち乍らも、まさに所領なき幽霊道中にふさわしい、一種妖しい雰囲気をただよわせて、何も知らぬ里人たちの目に、何やら不気味な光景として映じた。

行列がえらんだ道は、江戸市街へ飲み水を送る井之頭池へむかって、武蔵野のまっただ中を通じている甲州裏街道であった。

丘陵の麓をまわって、ぼうぼうたる旗すすきの中を粛々として進んで行くさまは、滅び去った大名が、なお今世への未練絶ち難く、おのが所領をもとめてさまよう幻影かと、眺められた。

真田左衛門佐幸村が、江戸退転を決意したのは、昨夜であった。その間、数刻は、流石の智謀をもって鳴った器量人にも、苦悩はあった。

赤猿佐助が、ひょっこり戻って来たのは、幸村が、「女影」の寝所を出て、居室に入った時であった。

赤猿は、常とはどことなく様子のちがう主人を視て、

——はて、もう、わしが江戸城内でさぐって来た一大事を、さきに予知なされたか？

と思ったことだった。

幸村は、不覚にも「女影」を抱いてしまったことを、悔いていたのである。

火のように燃えた女体は、おそろしいまでに淫蕩であった。

褥の中で、一刻を過ごした幸村は、さすがに、おのれの老齢を思い知らされた。

赤猿は、疲労の翳の濃い主人を見据え乍ら、

「柳生但馬守殿には、将軍家におすすめして、井之頭池の駒場野において、お鷹狩りを催される由にございます」

「……」

「お鷹狩りは、名目にて、その実は、このたびの騒動に関り合うた者たちを、悉く討ちとるための催し、とみえましたぞい」

「……」

「あるじ様、猶予はなりませぬ。どうやら、但馬守殿は、この館に、あの女影を寝かせてあることも承知いたして居りまするて。お鷹勢は、井之頭より一挙に、ここを襲うて参るのではございますまいかな」

幸村は、しばらく、宙へ、冷たい眼眸を置いて、沈黙していた。

褥を出ようとする時、「女影」が、独語するようにささやいた言葉を、思い出していたのである。

「貴方様は、謎語を解いたとて、財宝を公儀にくれる存念はありますまい。豊家の遺臣たちを率いて、たてこもるところは、ただひとつ。木曾奥から北陸へつらなる山嶽の中に、いまだ斧鉞の加わらぬ原始の渓谷があります。黒部谷と申します。真田五万石の隠れ所領にふさわしいところ――」

――この女も、すでに、柳生但馬守が、わしを生かさぬであろう、と考えて居った。

いずれは、暗殺の手が、自分の頭へのびて来るであろう、と予測していた幸村であった。

「女影」の口から、遁竄をすすめられて、いまさら身の処置を思案するまでもなかったのだが……。

「子影の悪戯が、チト過ぎたようだの」

幸村は、何気ない口調で、佐助に云った。

「御意――」

「子影は、城内から、退散いたしたかな？」

「退散いたすにはいたしましたが、血気にまかせて、小面憎くも、女子をひとり、ひっかかえて行きましたぞい」

「遠藤由利と申す娘であろう」

「相違ございませぬ」

「猿、そちが、手扶けしたのではないか」

幸村は、笑って云った。

佐助は、にやっとして、節くれ立った手で、泥くさい髭面をひと撫でした。

二

宗矩の使者が、到着したのは、それから、小半刻も経たないうちであった。今日が、謎語を解く約束の日であった。催促されるまでもなく、こちらから、おもむかねばならなかったのである。

――但馬守と刺し違えて果てるべきか。

一瞬、幸村は、そう考えた。

しかし、すぐに、苦笑してから、幸村は、佐助に、

「風邪悪しく、いずれ、あらためて参上仕ると、断るがよい」

と伝えさせた。

迎えを断ることは、とりもなおさず、そちらの策略は読みとった、討ちとる手筈をさらに遺漏なきものにされるがよかろう、という口上を意味した。

幸村の肚は決まったのである。

その時、奥の寝所には、「若影」が、文字通り影のごとく気配もなく、忍び入っていた。

枕元に坐った、「若影」は、母親の寝顔を一瞥して、眉宇をひそめた。

その皮膚は、健康な処女のそれのように、肌理こまやかに活きづいて、桜桃色をおびていたのである。

しばらく、ふしぎな美しさを湛えた寝顔を凝視していてから、「若影」は、鋭く、口をきった。

「母者、根毒を嚥んだな！」

忍者の服薬には、三種類の場合がある。

幾日間かにわたって、不眠不休の働きをしなければならない場合。

危機を脱出するために、仮死の状態となる場合。

そして、最後は、すでに死神の迎えを受けているものの、なお幾刻か生命をのばそうとする場合。

最後の場合に用うるのが、根毒であった。

これらの薬は、忍び笛と同じく、奥歯の虚の中に、かくしてあった。

根毒なる劇薬が、いかなる原料によって精製されたか、筆者も詳かにしないが、忍者が、消えんとする生命の灯を、一瞬凄じい炎に燃えあがらせて、超人的な活躍をした記録を多く残している事実にてらして、いかにこれの効力が絶大であったか明白である。

「明日は、柳生但馬守が、武力を聚めて、襲うて来るであろう」

「母影」は、目蓋を閉じたままで、云った。

「どうして判る？」

「予感がする。……わたしは、そなたを、遁さねばならぬ」

目蓋をひらいて、じっと見上げて来る母の眸子が、名状しがたい強烈な光を放つのに、「若影」は、たじろいだ。

すっと、「母影」は、双腕をさしのべると、わが子の肩を摑んだ。

「若影」は、微かな嫌悪で、身を反らそうとしたが、「母影」は、ゆるさなかった。

いきなり……双腕を、蛇のように、頸へ巻きつけると、

「この母を忘れまいぞ！」

熱い息とともに、そう囁くや、狂おしく、唇を吸った。

……自然の所作で、胴を抱いた「若影」は、母のからだが、この上もなくしなやかで、柔軟であるのを知った。

「猿――」

長い沈思ののち、幸村は、云った。

「今夜のうちに、豊家の面々を集めてもらおうか」

「ほ！」

佐助は、醜面をかがやかせた。

「柳生但馬守殿と一戦を交えようと申されまするか、それは、それは――」

「江戸退転に当っては、五万石の格式をもって致そうと、かねて考えていたところであった」

「六文銭の旗じるしの行くところ、風を呼び、雲をまねき、虎も嘯き、竜も躍りましょうわい。されば、直ちに――」

佐助は、一瞬にして、館から消え去った。

立ち枯れた古木にひとしい痩軀の、蓬髪長髯の老人が、自然木の杖を携げて、門をくぐって来たのは、その直後であった。

玄関に立つと、きわめてもの静かな声音で案内を乞うたが、それは、はるかな奥の幸村の耳に、

隣室から呼びかけるように、ひびいた。

幸村はすててておいた。

すると、やがて、廊下に跫音がして、障子をたてきった居室のまえでとまった。

「旧知——鴨甚三郎利元でござる」

そう名のった。

「入られい」

幸村は、あらかじめ報らせを受けていたように、返辞をした。

入って来た老人を視て、幸村は、微笑した。二十余年前に、鞍馬山中に、訪れた時と、全く同じ姿であったからである。

「猿からきき申したが、お許は、湯島台の瓢箪池で、影母子を助けるために、一役買われたそうな……」

「若い忍者めに、脅かされ申して、やむを得ぬ仕儀でござった。仔細をおきかせ申そう」

甚三郎は、

遠藤由利が、おのが旧主荒木村重の孫娘にあたること——、

その肌に卍に形どったキリシタンの十字架をつけていること——、

将軍家光の愛妾になり乍らも、「若影」にも身をまかせたこと——、

さらに、昨夜のうちに、大奥から、「若影」によって身柄を拉致されたこと——

を語った。

甚三郎は、赤猿佐助が「母影」を、瓢箪池からさらって逃げたのを見とどけて居り、当然、こ

れは、幸村の指令によるものと判断したので、病める「母影」はこの館に寝かされていると考えて、「若影」の帰ったところを推測してあやまらなかったのである。

いずれは、大奥から由利をさらって行こうという肚でいた甚三郎は、「若影」のしゅつげんで、考えを変えたのであった。

異常に勝気な由利も、「若影」に身をまかせたのを契機として、慕情の哀しさを知って、優しい女になるかも知れぬと。

「せがれは、まだ、ここへは戻って居らぬようだが……」

幸村が、云うと、甚三郎は、かぶりをふって、

「いや、もうすでに、奥の、母親の許に忍び入って居り申す。……睡り薬をかがされた由利の方も、お屋敷内のどこかに寝かされて居るのではござるまいかな」

確信のある甚三郎の言葉であった。

幸村は、じっと、老いた兵法者の皺貌を見据えていたが、

「老人、失礼乍ら、お許に、死相を見る」

「……！」

「この幸村は、明日、江戸を退転いたすが、もとより公儀の軍勢と、一戦はさけられぬところ。その際、若い男女に、未来をつくってやる役目が、お許に与えられ申そう」

「死花を咲かせよ、と仰せられるか」

甚三郎は、破顔した。

「かしこまった。坐して朽ちるよりは、百倍の果報と申すもの」

三

その夜のうちに——。

隠れ五万石の扶持によって生きのびて来た豊臣の残党たちは、それぞれ貧しい農奴のいでたちをして、三人、四人と連立って、続々と到着した。

しかし、屋敷内は、百五十余名を容れても、猶その静寂は、すこしもかわらなかった。

とはいえ、この集合を、公儀では、夢にも気づかなかった、という次第ではなかった。

屋敷の周辺には、伊賀三十六人衆をはじめとして、公儀隠密たちが、木の葉一枚そよがせずに、伏していたのである。いつでも、襲撃し得る陣形がととのえられていたが、宗旨からその下知はなく、夜は明けたのである。

斯うして、正午を期して、門は開かれ、威風堂々と、五万石の格式をしめす行列が、くり出して来たのであった。

これは、公儀側として、全く意表を衝かれたことであった。

この屋敷内に、行列の道具が、万端整えられていたとは！

しかし、考えてみれば、智将真田幸村に、この用意があったことは、べつだん奇異ではなかった。

隠れ扶持とはいえ、五万石を貰っている以上、いついかなる場合に、その格式を公示しなければならなくなるかもわからなかった。

「流石は、左衛門幸村よ！」

と、舌をまかせる準備を怠らなかったのも、なお、徳川幕府に対して、みじんも怯じぬ気概であったろう。

行列が出つくしたあと、こんどこそ、館は、真の静寂にかえった。

屋敷内にふみ込んだ伊賀三十六人衆は、屋敷あけ渡しの作法通りに、塵ひとつとどめずに、すみずみまで潔められてあるのを、みとめた。

幸村の居室であった部屋の床の間に、青磁の香炉から、白いけむりがひとすじ、たちのぼっているのが、印象的であった。

これよりさき——。

将軍家の御鷹野行列が、江戸城を出たのは、夜明けであった。そして、井之頭池の駒場野に到着したのが、恰度正午であった。

井之頭池——これは徳川家康が開府のみぎり、市街の飲水に指定したところであった。

武蔵野は、沼はあっても、清浄な水の乏しいところであった。殊に、万民をうるおす水をたたえた池は、全く見当らなかった。

ただ、ここに、唯ひとつ、七箇処から冷水を湧かせて、七井の池と呼ばれているのがあり、某日、鷹狩りに出た家康が、この水で茶をたてたところ、美味であったので、直ちに、江戸へひき入れるように命じたのであった。

大久保忠行が奉行となって、ここから小石川まで、五里二十六町十五間を掘り割って、市街へ配水した。神田上水が、これである。

井之頭、という名称は、家光がつけたのである。江戸の井戸の頭という意味である。

到着するや、将軍家とおぼしい、胴服に霰対紋のくくり袴、黒ふくりんの背割羽織、白銀の端反り笠に、白の采配を持った人物が、紅の緒総つきの白斑の鷹を拳に据えた鷹匠頭と数名の中小姓をつれて、猟場の中央の、小高い丘陵上にのぼった。そこには、高い吹貫きが立てられてあった。

随従して来たお目附、書院番、新御番、御小納戸など、実は、いずれも、柳生・小野の両道場の兵法者たちと、旗本八万騎からえらばれた血気の若ざむらいたちであったが、――九百余名は、指令すみやかに、池を中心にして、四方へ散って、陣を敷いた。

猟場においては、供立ちの行列人数は、御座所を遠巻きにして、段々に留め置かれて、これを御場段切れ、と称す。

御行列段切れは、初段、二段、三段、四段に分たれるならわしであったが、これはとりもなおさず、戦場に於ける陣形を写したものであった。

したがって、この日の布陣も、御場段切れそのままであり、何も知らぬ数寄屋坊主や足軽や小姓たちは、なんの疑いも抱かなかった。

一方、武蔵野の原野を粛々としてひとすじに進む大名行列もまた、その六文銭の紋をふしぎとしなければ、まことに平和な眺めであった。

しかし、その左右を――一町余りの距離をとって、雑木の蔭を、旗すすきの下を、行列の歩みにあわせて、伊賀三十六人衆を主体とした忍びの面々が、ひそやかに進んでいたのである。

虫の鳴く音も絶やさず、旗すすきの穂もそよがせず、六無（無色・無形・無跡・無声・無息・無臭）の歩行をつづけつつ、互いに、一糸みだれぬきんみつな脈絡をとっていることを、もとより、真田側が、気がつかぬはずはないのであった。

それにしても、行列の、いかにものどかな、無防備そのものの行進ぶりは、かえって、これを監視して行く公儀側の目に、無気味なものに眺められた。

百五十余名、といっても、これを戦隊として見れば、まことに微々たる一群でしかなかった。弓も鉄砲も、形式通り、前後四名がたずさえているのみであったし、騎馬はわずかに六騎にすぎず、どこに、前途に待伏せる十倍の敵陣を突破する武装がなされているのか、まったくうかがい得なかった。

掟にしたがって、一里行く毎に、小休止があって、やがて、道は、駒場野に入ろうとした。その折り、異変が起った。

行列の中から、数十羽の白鳩が、一斉に放たれたのである。

群をなして、鉛色の空へ高く舞い上るや、大きく円弧を描いたのち、ふしぎな集散をはじめた。行列の上を、二列になって、後から前へ翔け過ぎるや、先払い徒士の頭上で、ぱっと八方へ散って、羽搏きの音を撒きつつ、高みへ、まっしぐらに昇ったとみるや、そこで、また一群になって、非常な迅さで舞い下って来て、再び、糸でつながったように、二列になって、行列の上を飛ぶのであった。

これは、忍法のひとつ「散気の法」とも思えた。

空中の、目の移りやすいところを、集散しつつ飛ぶ一群の鳥かげは、左右から監視して行く公儀側にとって、甚だ気になるものであり、神経がみだされやすいのであった。

また――。

行手に、味方の伏兵か、援軍がある場合は、本隊の行進位置を報らせる方法ともなる。

幸村が、この二十年間、扶けて来た大坂役生き残りの士は、千余をかぞえる筈であった。

とすれば、この行列人数のいくばいかの豊臣の残党が、行手の何処かに伏兵となってひそんでいると思えられなくはない。

監視して行く忍者たちは、ひとしく、慄然となった。

すでに、「散気の法」にかかった証拠であった。

猟場の中央の丘陵上に立っていた将軍家とおぼしい人物は、はるかに、この鳩の群の飛翔をみとめるや、かたわらの小姓へ、頤で合図した。

小姓は、いっさんに、斜面を駆け上って行った。

四半刻ののち、行列は、森の木立の中へ入り、井之頭池の畔へ出た。

鳩の群は、森の梢の上を飛んでいた。

将軍家とおぼしい人物は、さっと、白い采配をかかげた。

瞬間――鷹匠頭の拳から、猛禽が、羽搏きの風をそこにのこして、矢のように、鳩の群をめざして、翔けあがって行った。

これが、井之頭池の血戦のきっかけであった。

双頭記

一

将軍家御座所から、猛禽が、鳩の群に向って、翔けあがるのを合図に、森の彼処此処からもまた、数羽の鷹が、鷹匠の拳から放たれていた。

はるかな空の高みに、大きく円弧を描いていた鳩の群は、敵の襲来をさとるや、たちまち、一点へ集中した。

獲物を覘う気合の満ちた瞬間を放たれた鷹たちの凄じい勢いに対して、鳩の群が、算を乱すかわりに、一点へ集中したのは、よほどの訓練を受けたものに相違なく、これを仰いで、御場段切れの面々のうち、なんの防備もしていないかに思われる真田の行列が、おそるべき戦術をひそめているのをさとった者も尠くなかった。

数羽の鷹が、間近まで迫った刹那、鳩の群は、紙吹雪のごとく、ぱっと八方に、飛び散った。

鷹は、その中点の空隙を翔けぬけて、雲外へ逃れた。鋭い爪にかかって、落下した鳩は、わずかに二羽をかぞえるのみであった。

その二羽が、木立の中へ吸い込まれた時、地上にあっては、真田の行列が、突如として、八方へ、散開していた。それは、蜘蛛の子を散らす、という古い形容そのままの散開と見えた。

御場段切れの公儀勢の方が、かえって、あっけにとられた程の、意外な働きであった。

どう眺めても、烏合の衆が、われ勝に遁れんとして、あてもなく、思い思いの方角に走り出した光景でしかなかった。そのあとには、三挺の駕籠が、置きすててあった。

一同は、森の奥へ向って、奔った次第ではなかった。

その地域は、まだ、周囲はひろびろとして、丈なす雑草が生い茂っているばかりで、御場段切れの公儀勢からは、くまなく見通しがきいたのである。

真田の人々が、森の奥へ遁げ込むためには、なお、三町余を疾駆しなければならなかったのである。

公儀勢としては、行列が井之頭池の畔をまわって、ふかい木立の中へ入ったところを、襲って、一騎討ちの闘いによって、殲滅しようと、計っていたのである。

その血戦のまっただ中を、幸村が影母子や遠藤由利をひき連れて、突破する如何なる手段をかくしているか——それを、おそれて、警戒していたのであったが……。

一矢も放たぬうちに、算を乱して逃走しはじめた真田側の作戦を、どう受けとってよいのか、咄嗟に、総指揮の柳生宗矩も、戸惑った。

将軍家御座所に、家光と見せかけて、白の采配を携げて立っていたのが、宗矩であった。

瞬間の迷いが、宗矩を動かさなかった。

御場段切れの面々は、下知がないために、そのまま、八方へ走り出した真田側を、黙って、見戍るばかりであった。

立場を換えて、云うならば、真田側にとって、こちらが突如として、不可解な散開をしめせば、

当然、公儀勢が、それに応じて来るであろうという予測をたてていた。

御場段切れが、ひそとして動かぬのは、奔る方にも、不気味であった筈である。

宗矩は、命令を下すかわりに、かたわらの小姓から、遠目鏡を受けとって、片目にあてた。

宗矩は、視た。

遁れんとする百数十余の速影のうちでも、ひときわ、目立って迅い二個の黒影を——。

そして、その二個の黒影が、躍り込んで行く雑草の中から、たちまち、血飛沫とともに、つぎつぎと、生首が、高く飛び刎ねるのを——。

斬って行くのは、「母影」と鴨甚三郎であった。

斬られているのは、伊賀三十六人衆であった。

宗矩の目には、しかし、その闘いのさまは映らなかった。

丈なす雑草が、旋風でゆれなびくように、ざわめくのが見えるばかりで、一拍子の間に刎ねあがる生首が、孰れも、伊賀三十六人衆であるのをみとめなければならなかった。

やがて、真田の人々が、一人のこらず、雑草の中へ、姿をひそめた時、宗矩は、思わず、

「おっ！」

と呻きを発した。

幸村の策略が、ようやく、判ったのである。

……宗矩の判断は、あやまたず、次の瞬間、広い草原の八箇処から、濛っと、白煙が、噴きあがった。

それが風に流されたあとに、純白の狩衣をまとった人物が八名、孰れも折烏帽子を頭に頂き、

面を白絹で包んで、すっくと出現したのであった。

幸村が、幾人かの影武者を使うであろうことは、覚悟していた宗矩であったが、それは、奇怪な猿頬をもって面をかくした具足姿であろうという予想は、みごとに裏切られた。

四位の諸大夫が着す狩衣をもって、おのれを加えた八個の姿を出現させたのは、あきらかに、将軍家に対する皮肉であった。

狩衣は、公家にとっては、日常の公服であったが、武家にあっては、将軍家に限って、純白のものを着用するならわしが、できていたのである。

のみならず、その狩衣につけられた紋は、真田家の六文銭ではなく、徳川家の葵ではないか。葵の紋にむかって、弓を引くのは、叶わないことであったが、宗矩自身、いまは家光に扮している理由をもって、これを討つのを許すほぞをきめた。

宗矩は、采配を、斜め十字にうち振った。

それに応えて、段切れのうち、初段陣の中から、どっと鯨波があがった。

初段陣は鶴寄堤の蔭に待ちかまえていたが、鯨波の消えぬうちに、その堤を、武者十余騎が、猛然と、躍りこえた。

二

西脇十次郎氏広は、大身の槍を、馬の平首につけて、一番駆けに、馬脚をあおった。

宛然、急湍に乗ったような、颯爽たる突撃ぶりは、その祖父十郎左衛門氏正が、姉川の合戦において、朝倉勢三万余騎のまっただ中へ、単騎をもって斬込んで行ったさまを彷彿とせしめた。

草中に仆む「幸村」の一人は、これを迎えて、微動だにもしなかった。

十次郎は、その白装の孤影を、あわや馬蹄にかけるかと思われる間近まで駈け寄りざま、

「ええいっ！」

と、三間柄を、くり出した。

瞬間――「幸村」の躰が、草の蔭へ沈んだ、とみえて、もう次の刹那には、右へ跳びちがったその速影は、手中から白刃を煌き出して、大きく半弧を描いていた。

十次郎の左腕は、槍もろとも、宙へ飛んでいた。

つづく二番手は、酒井讃岐守忠勝の寵臣相馬右馬助であった。六尺三寸の巨躰をそなえ、膂力は、旗本随一を誇っていた。

十次郎より一馬身おくれて疾駆しつつ、はるか一番遠方に立つ「幸村」を真物と睨んで、旗すすきを、一直線に割って行った。

五間に迫った一瞬、右馬助の右手から手槍はひょうっとはなたれた。胸もと寸前で、その穂先を、抜きつけに両断した「幸村」が、かまえをたてなおすいとまもなく、右馬助は、まっ向から、三尺三寸の豪剣を、振り下した。

のけぞった「幸村」めがけて、駿馬は、容赦なく、前脚を躍らせて、その胸を蹄にかけた。

草の上へ倒れた「幸村」は、それなり、永久に動かなくなった。馬からとび降りて、面を包んだ白絹を、ひきむしった右馬助は、いまいましげに、舌打ちをした。

それは、まだ二十歳になるやならずの若者の貌であった。

その時、左方十間あまり離れた地点に立つ「幸村」は、蓦地に肉薄して来る御近習出頭人中の

俊髦神谷主殿頭の三男平三郎を、矢ごろに置いて、半弓をひきしぼっていた。

唸りをたてて飛んだ赤矢に、右眼を射ぬかれて、平三郎は、大きく、太刀をふりかぶったまま、地上へ顚落した。

柳生道場の高弟庄田喜左衛門は、鞍上に身を伏せて、二刀を、逆立つたてがみの上で、十文字に組み乍ら、突進して行き、飛んで来た矢を、二本とも左右へ切りすてておいて、「幸村」へ、

「いかにっ」

一喝もろとも、一閃をあびせた。

心得て、跳び退こうとするのへ、刹那も与えず、左手の小刀を、投げて、その咽喉を刺した。

そして、さっと馬首をかえすや、風のように、鴨寄堤へ駆け戻って来ていた。

弓矢を携えたのは、騎馬側にもいた。書院番頭青山因幡守宗俊の甥で、将軍家嫡子の傅たるべく任命されている杜屋藤七郎政名は、馬腹を両脚で締め乍ら、十五間の矢ごろから、「幸村」を狙い射ていた。

矢は、見事に、胸いたをつらぬいたが、「幸村」は、佇立の姿を、すんぶんも変えなかった。

馬を寄せてみれば、それは、藁人形であった。

三

「幸村」八名のうちに、仆れたのは、三名であった。ほかに、藁人形が二体。

のこり三名が、敵の馬を奪って、うちまたがるや、疾風を起して、西の方角をめざして、奔馳した。

これを遁さじと、御場段切れの全軍が一斉に起った。

もし、伊賀三十六人衆が、「母影」と鴨甚三郎に、その忍び陣をひっかきまわされていなければ、三騎の行手を、充分にはばむことは、可能であったろう。

三十六人衆は、すでに九名を喪い、十余名が手負うていた。

その殆どを斬ったのは、鴨甚三郎であった。

枯木にも似た老兵法者の痩軀の内に、蓄えられていた闘志と迅業は、後世までの語り草であった。

鴨甚三郎も「母影」も、絶対に気合を炸裂させず、丈なす雑草の中を、敏捷きわまるけもののように、前後左右に飜転して、忍者たちの首を刎ねて行ったのである。

忍者たちも、斬られても絶鳴を吐かず、斬り込むのもまた無言裡に為した。

草とともに、仲間の生命が、つぎつぎに薙ぎ払われて行き乍ら、すこしも、たけり狂わず、秩序をすてぬように努めたのは、まことに見事な働きぶりであったが、何分にも、老兵法者と「母影」の鬼神に等しい迅業を受けては、遁走する三騎へむかって、その幾名かを分ける余裕など生れなかった。

……雑草は、地震のように、ざわめきつづけていた。

ようやく——

二百を越える弓組が、左方から奔って、遁走する三騎へ向って、弓をひきしぼった時、雑草の下へ逃げ散っていた真田勢が、突如、躍り立って、その背後を衝いた。

しかも、その隊形は、三角鋭状であり、これは、真田百人隊独特の突撃方法であった。

その尖兵となった者たちは、一尺七八寸の剣を右手に、左手に牛皮三枚張りの鏈盾をささげていた。

鋭三角の先端を、鏈盾にまもり乍ら、短い剣をふるって敵中を突破する——これを「短兵急」という。

のみならず、この時——。

三挺の駕籠の扉が、さっとひき開けられるや、黒光りする大筒の口が、するすると突き出されたのであった。

御場段切れの陣形を、攻撃体勢に一転して、堤から、樹林から、往還から、凹地から、竹藪から、喊声をあげて、どっと殺到しようとした公儀隊に、一瞬、波のような狼狽が拡がった。

曾て、大坂落城の修羅場にあって、一時は、関東勢を、完全にその陣地に釘づけしたのが、この真田の黒筒だったのである。

黒い筒口を、公儀隊に向けて竝べた不気味な演出は、六文銭の旗じるしの下にあってこそ、その効果を発揮する。もの凄い威力の程は、敵方に充分に知れわたっていたのである。

——左衛門佐は、黒筒までも、用意していたのか！

丘陵上に立つ宗矩自身も、慄然となったことである。

幸村は、家康に誓って、兵器一切をすてていたのである。

その館には、鉄砲一挺さえも置いていなかった筈である。

「真田め！」

思わず、宗矩が、目をいからせて、罵った刹那、三箇の黒筒は、轟然と、天地をゆるがせる大音響とともに、白煙を噴いた。

弾丸は、発しなかった。そのかわりに白煙の中から、燦爛として、無数の流星が躍り出て、八方へ飛散した。

黒筒は、まことの大砲ではなかった。ただ、敵のどぎもを抜くために、幸村は、花火を用意して、これを大砲と見せかけた紙張りの太い筒から打ちあげたのである。

動揺する公儀勢に、「短兵急」の真田隊は、まさに、疾風迅雷という形容にふさわしい、急速な進撃ぶりを、展開した。

激突は、惨烈をきわめた。

孫子が謂う、

「勝つ者の戦うや、積水を千仞の谿に決するが如きものは、形なり」

とは、この勢いであった。

百余名の寡勢が、千を越える敵を、押しまくったのである。

四

「但馬殿！」

不意に、宗矩の背後で、声があった。

ふりかえった宗矩は、服部半蔵の緊張した貌を、そこに見出すや、

「影を討ちとれい！」

平素の沈着を忘れた性急な語気で叫んだ。

「約束は果し申す。……それよりも、戦いは敗北ときまり申した」
「なに？」
「見られい！」
半蔵の指さす北方へ視線を移した宗矩は、総身が粟立つ戦慄を受けた。
野を掠めて、こちらへ殺到して来る褐色の集団をみとめた。
それは、およそ百匹にもあまる山犬の群であった。
その先頭に立って、疾駆して来るのは、黒装束の人間であった。
「若影」にまぎれもなかった。
血に飢えた野獣に遭うて、これをふせぐ方法は、流石の宗矩も知らなかった。
その方法を問おうとして宗矩が、
「おいっ！」
と、呼んだ時、すでに、半蔵の姿は、そこから消えていた。

いつか——。
鴨甚三郎は、敵の血汐とおのれの血汐で、総身を蘇芳に染めて、草地を奔り抜け、丘陵の麓に立っていた。
御座所に立つのが、宗矩であることを看破して、一太刀あびせる闘魂をのこしているものの、流石に、もはや、四肢の自由がきかなくなっていた。
なおも、攻撃して来る敵があれば、これを、斬り伏せる迅業をしめす余力はあったが、三騎の

「幸村」を遁げのびさせる任務を果し了えたいま、これ以上、亡地で阿修羅となる愚も、思いかえされていた。
ふしぎに、周囲は、ひっそりと静かであった。凄愴の妖気をただよわせる刎れた痩身を、伊賀三十六人衆がおそれる筈もあるまいに、なぜか、一人も姿も現さず、迫る気配もなかった。
丘陵の向う側に於ては、人間と野獣との無慚な戦闘が、荊棘雑草を蹴散らしてくりひろげられていた。
呶号と悲鳴と咆哮が渦巻く修羅場は、しかし、この老兵法者にとって、無縁であった。
昨夜、甚三郎は、野獣の群をもって奇襲することは、つよく、幸村に反対したのであったが、容れられなかったのである。
甚三郎は、頂上へ向って、ゆっくりとした足どりで、のぼって行こうとした。
とたんに、左右のくさむらが、動いて、銃声がとどろいた。
一弾は肩へ、一弾は腹へ、撲るような衝撃をくれた。
にも拘らず、甚三郎は、仆れないばかりか、やおら、頭をまわして、一斉に、忍者の黒い影が、湧くがごとく、草蔭から立ち上るのを見わたした。
おりからの秋風を受けて、旗すすきとともに、ゆらりとゆれたのみで、白刃を杖にした立姿を、いささかも崩さなかった。
包囲の輪を、じりじりと縮めた忍者たちは、やがて、一間に肉薄して、その痩身から生命が去っているのを見とどけた。
双眸は、なおひらかれて、光を喪った視線を、雨曇りの鈍色の空へ送っていた。

一方、「母影」は、井之頭池畔を掠めて、森の外へ出ていた。
追跡者は、絶たれていた。立て針と足搦みと毒煙を撒きつつ、突破路をひらいたのである。
大きな葉冠を中天にひろげた松樹まで辿りついた「母影」は、その幹へ身を吸い込ませるように寄せてひと息入れた。
根毒の効目がきれる時刻が来たのを、「母影」は、知っていた。
死を自ら望んで、阿修羅となったこの女忍者は、綿のごとく疲労しつくした躰内に、氷のように冴えた気魄をとどめて、一種の充足感をあじわっていた。
遠く、人とけだものの争闘する騒擾の音をきき乍ら、「母影」は、ふっと、微笑した。
あとは、この身を、屍骸にすべく、絶対に人目のとどかぬ場所へ運ぶばかりである。
「母影」は、再び地を蹴って、奔り出そうとした。その足を、はっと、とどめさせたのは、
「女影！」
服部半蔵の一声であった。
反射的に、「母影」は、身を翻して、松樹の幹へとびついた。
猿の迅さで、二間あまりを駆けのぼったが、唸りを発して飛んで来た鏈鋼に片足くびを食いつかれた。
渾身の力をふりしぼって、これをふりはなそうとした刹那、烈しい眩暈が来た。
半蔵は、落下して来た「母影」に、猛然と躍りかかった。
尋常の目では、その動きをとらえることは叶わぬ凄じい急回転の組打ちが開始された。

そして、それが、松樹をひとめぐりした時、長槍を小脇にかい込んだ小野忠常が、風のように、駆け寄って来た。
……ついに、半蔵は、「母影」を、幹へ押さえつけた。
「もろともに！」
半蔵は、背後の忠常へ叫んだ。
忠常は、りゅうと、長柄をひとしごきするや、ひくく、
「南無！」
と、となえて、突き出した。
穂先は、半蔵と「母影」の胸を刺しつらぬいて、二体を、幹へ縫いつけた。
次の瞬間、忠常は、槍をすてるや、居合抜きに、一颯、刃音をほとばしらせた。
ふたつの首は、かたく密着し合ったまま、真紅の尾をひきつつ、空たかく舞いあがった。
忠常は、それが落ちたところへ、歩み寄ってみて、竦然となった。半蔵の口が、「母影」の舌を強く吸い込んで、死んでもなお、はなしていなかったのである。
その頃、遁れた三騎は、秩父の連山を近く眺める十里無人の荒野の中を、駆けていた。
面を包んでいた白絹は、とりはらわれていた。
先頭が左衛門佐幸村、次が、遠藤由利、そして殿を行くのは、赤猿佐助であった。
熟れの顔も、曇天の鈍色を映したように、沈んでいた。

その年も暮れて、寒気凛冽たる大晦日の夜、京の都の西郊にある猿田彦を祭る丘陵の頂上で、

およそ三十名あまりの黒影が、黙々として、鍬をふるうさまを、鉢植えの梅や南天や福寿草のあきないを終えて、家へ戻って行こうとする植木屋が、見つけた。

怕さに、ふるえあがって、一目散に逃げ出した植木屋は、後日、むかしの殿舎跡の土台石が、ことごとく掘りかえされている、という噂をきいた。

誰も、それがなんの目的をもって、何者によってなされた仕業か、ついに、わからなかった。

解説

伝奇小説は大衆文学の由緒正しい伝承である。大衆文学が大衆をよろこばすために書かれるエンタアテイメントだとすれば、おそらく伝奇小説にしくものはないだろう。西洋の大衆文学が騎士と美姫との冒険や恋愛をつづる中世の伝奇小説に発して、スコットや、ユゴオや、デュマを生んだとすれば、日本の大衆文学が中国の『水滸伝』のような大小の群盗の冒険に発して、滝沢馬琴のような大小説家を生んでいる。坪内逍遙は馬琴やスコットを愛好しながら、近代小説の開祖となるために、胸中のこの愛を押しつぶしてしまった。そのために日本の近代小説がきわめて構想力の弱い、限定されたものになるとともに、たちまち村上浪六などが登場して、馬琴流の伝奇小説を復活させて、大衆の嗜好に投じた。日本の大衆文学の歴史は、仮構にせよ、史実に依拠するところの多い歴史小説の大衆版として栄えてきたけれども、これは荒唐無稽に生命を吹きこむ馬琴のような大伝奇作家に乏しかったためである。しかし大正期には『富士に立つ影』を書いた白井喬二があり、今日、『赤い影法師』の柴田錬三郎があって、大衆の渇を医やしてくれていると思う。

伝奇小説は、大衆の尋常の空想力をはるかにひきはなした豊富で奇抜な空想を縦横にかけめぐらせるだけの想像力を前提とし、しかもそれが現実に可能であるかのように紙上に再現してみせるだけの芸をもっていなければならぬ。柴田はある感想のなかで「少年のころから、友達をつか

まえてたちまち一編の冒険小説を物語ってみせる空想力をそなえていたので、その空想力で飯が食えるようになったことは、大変幸福なのである」といった。つまり自他ともに許す天性の伝奇作家として生まれてきたといってもよい。「私は、少年のころから、『大衆作家』たる性情を持っていた」という言い分をこの意味で十分に肯定できる。しかも「文学を志してから、二十五年になる」という迂余曲折は大衆小説として『眠狂四郎無頼控』において、その途徹もない空想を紙上に現実化する才腕をもたらしたものだと、わたしは思う。

伝奇小説という点からいえば、『眠狂四郎無頼控』は剣豪小説のブウムにのって現れ、その設定からして、かならずしも作者の空想力を思う存分にふるったものとはいいがたいように思われる。むしろ五味康祐らによって創められた剣豪小説にたいして異をたてるに急なあまりに、大目付松平主水正の娘ところび伴天連ジュアン・ヘルナンドとの間の混血児、つまり「異相」の無頼のニヒリストを主人公にたてるという窮屈な思い付に出発した。その剣法は尾崎秀樹に「催眠剣法」と名づけられた、敵手を幻惑する円月殺法をあみだし、目あたらしい「殺しの美学」をもって超人的性格をあたえられはしたけれども、変化自在というわけにはいかなかった。老中水野越前守忠邦の側頭役武部仙十郎の殺し屋にやとわれ、忠邦の政敵と闘争する千変万化は残念ながら構想の妙をおりこむ融通性にとぼしかった。もちろん、主人公の武器である円月殺法は大衆の期待を満足させる極めつけとなったし、ドライな軽業にひとしいエロティズムの工夫は大衆の「願望夢」のひそかな娯しみになった。主人公の性格や状況の設定には現代の状況と通ずるところがあって、パロディとしての面白さをもっていた。しかし狂四郎の登場しない場面の索莫さは否定することができず、作者の筋立てが自縄自縛となったという趣はある。『無頼控』を読みすすめていく間に、なんとなく作者の息苦しい呼吸をきく思いがして、作者と同じく娯しめなくなるといってよかろう。眠狂四郎はまだよい。『主水血笑録』などのヴァリエイションになると、マナアリズムの危険さえ感じさせる。作者もおそらくこれに感づいていたにちがいない。

『赤い影法師』はこのマナアリズムを破るために、千思万考、構想をこらした快作で、起死回生ともなった力作である。ここには、第一に、伝奇小説として作者の空想力を自在に駈りうごかせる東洋の忍術小説という趣向がものをいっている。石田三成に雇われていた木曾谷の忍者「影三代——「母影」と「若影」とを主人公にするという複数をとっていることがよい。しかも名を与えられず、「影」という超人的忍者、すこし大げさにいうと、時空を超越できる秘術を体得した忍者を主人公に立てることで、作者の空想力はいわば時空をこえて駈けめぐることができるからである。もちろん、作者は「母影」「若影」の活動に石田方の忍者らしい豊臣家の再興（豊臣秀頼は薩摩に逃れて生きている！）、平家財宝の探索という伝奇小説の伝習的なサイクルをもちいている。しかしこの伝習のサイクルは物語の表面に姿をみせるのは後の方であり、サスペンスの役をする一種のルウズなサイクルとしてあるにすぎない。すなわち母子の「影」が秀頼所蔵の無名太刀十振の切尖三寸を切りとるという放れ業をやってのける名目を説明するための用意であって、「影」の忍術そのものを一方に限定するものではない。

読者は、母子の「影」の生誕をしるす「誕生篇」から意表を衝く絢爛豪華な絵巻物が縦横の奇巧をこらして展開するのに、有無をいわずに興がるにちがいない。徳川方の忍者服部半蔵が木曾谷を訪れる冒頭から、後の「母影」とともに「風盗」をその本拠地に襲って全滅させる冷酷無惨な戦闘は見事に読者を小説世界にひきこんでいる。ここに作者が全篇の構想をじっくりとたて、

しかも空想を思う存分にのばしても、それが構想を支えこそすれ、破綻とはならぬような巧妙さをそのうちに含める工夫ができている。これがまず伝奇小説らしい独自の興味をつくりだしている根拠だといえよう。

物語の展開としては寛永御前試合という講談種でおなじみの伝習のサイクルをもちいている。将軍家光の前で、柳生宗矩と小野忠常とを審判として、十四日間に行われた十試合である。この御前試合は物語の展開に一つの連続性をもたせて、自然な運びをつくっている。しかも十試合は二十名の剣客の組み合せで、十試合が十様の変化をみせるから、この決闘場面はそれぞれに作者の工夫によって読者をあかせることはない。十試合は物語の進行とともに当然眼前に展開されるものであり、読者の期待は次から次へ作者がどんな型破りの手をもちいるかと呼吸をつめさせるばかりに変化に富んでいる。ここにこそ『眠狂四郎無頼控』の場合とちがった各種各様の剣豪小説を一篇に集大成したような面白さをみせている。一つ一つの試合までの導入を異にしているばかりでなく、母子の影のからませ方をもちがえて、興味を倍加するのだ。読者はおそらく作者の手口にのるまいとしても思わずのせられてしまう心憎いまでの豊富な奇想に存分に堪能するにちがいあるまい。

そればかりではない。第三試合が終ると、新たに伊賀組の頭領であった老服部半蔵を再登場させ、忍者同志の決闘によって、新たな波瀾をつくりだす。「母影」と半蔵との忍術の決闘は忍術小説の奔放な「美学」を構築するからである。しかもこれを追討するかのように、今度は柔術の関口弥太郎と拳法の佐川蟠竜斎との第六試合そのものに思いもかけぬ離れ業をやってのける。つまり蟠竜斎は一滴の血も流さずに弥太郎の肋骨を一本抜きとって失神させる。ああら不思議やな

といった立川文庫の再現である。子影が蟠竜斎をたおし、その替え玉となって出場して、弥太郎の肋骨を抜くのである。

さらに、第四試合の後に顔を出す、ご存知真田幸村と、例の猿飛佐助の後身と思われる赤猿佐助とが第六試合の後から、母子の影の側に立った活動をみせはじめる。半蔵らの手に落ちた母影を、子影がいかなる奇策をもちいて救出するか、真田幸村と柳生宗矩との懸引をおりこみながら、瓢箪池の決闘、この不可能を可能にする、冒頭の風盗の決闘と呼応する大がかりな筆の魔術が行われる。作者はにやにやしながら、あの手この手とおもしろげに新手をくりだして、読者の魂を奪っていく心憎いやり方に、読者は思わず拍手を送りたくなるだろう。とくに幸村の幻影行列のアイディアや井之頭池の血戦は、瓢箪池の決闘と趣を加えて、大団円にふさわしい大殺陣をくりひろげ、存分にご馳走してくれる。半蔵と母影とが小野忠常の槍に幹へ縫いつけられるというアイディアは作者の独創ではないけれども、こんな一つ一つのシーンにも別の型を用意して、持札の全部をこの一篇に投げこんだかの豊富感がある。これで堪能しない読者はあるまい。

一言でいえば、伝習のサイクルに全体の構成をととのえながら、その中で、思う存分に空想をおどらせ、ハメをはずし、作者もたのしめば、読者もよろこばすといった伝奇小説のコツに徹した快作なのである。しかも華麗豪華な饗宴のなかには、作者の感傷らしいものが一つも混っていない。同じ十番勝負といっても、川口松太郎の葵新吾になると、人情噺ふうな叙述があり、それが結構読者をたのしませるのだが、古風な趣が出てくることは避けがたい。ところが、この忍者物語は忍者というところに冷酷非情に徹して、人情の気はチリほどもない。これは眠狂四郎をつらぬく近代ニヒリズムの変形だといえば、この忍者物語が一昔以前の立川文庫ふうな講談小説と

ちがった近代感覚を説明している。その上、作者独自のドライなエロティズムは、もはやあぶな絵といった不健康な覗き趣味とはちがった現代的感覚をもっている。アワヤ落花狼藉といったような古風なくすぐりとは無縁なところに成立している。

わたしがひそかに思うに、中国文学を学生時代に学んだ作者は伝奇小説にもっとも適した才にめぐまれているのではないか。現代の羅漢中とも馬琴ともなって、天地を駈けめぐる壮大雄偉の大伝奇小説を書いて読者とともに、わたしを娯しませてもらいたい。作者にとって『赤い影法師』はまだ小手調べだという位の怪気焔はあるにちがいないからである。『赤い影法師』以後では『柴錬・立川文庫』がなかなかおもしろいが、大伝奇小説というには結構に不足がある。やはり今までのところでは『赤い影法師』が第一等の収穫であるといいたい。

瀬沼茂樹

新潮文庫最新刊

星新一著　**かぼちゃの馬車**

めまぐるしく移り変る現代社会の裏の裏のからくりを、寓話の世界に仮託して、鋭い風刺と溢れるユーモアで描くショートショート。

定価280円

星新一著　**殿さまの日**（あられ）

時は江戸、世界に類なき封建制度の中で生きねばならなかった殿さまから庶民までの、命を賭けた生活の知恵を綴る十二編の異色作。

定価400円

水上勉著　**霰**

妾の子に生れ、肉親の縁薄い下駄作り職人・富吉と、夫への恨みを越えて富吉を我が子のように愛するりんの幸薄い生を細やかに描く。

定価280円

中村真一郎著　**夏**（谷崎賞受賞作）

激しい精神の障害と性の無能力からの回復期の奇妙な性のアヴァンチュール！　娼婦たちとの交わりと永遠の女性との愛の神話を描く。

定価600円

柴田錬三郎著　**徳川浪人伝**（全二冊）

織田信長の血を享けた孤独な剣士重四郎を中心に、徳川に一泡ふかせようとする豊臣家の残党など、権力に抵抗する浪人群像を描く。

定価440円 400円

佐野洋著　**空が揺れる日**

飛行機が落ちる！　奇妙な予言と旅客機の乗客の集団幻覚は偶然の一致か？　そして大学教授殺しの謎は……。異色長編ミステリー。

定価360円

新潮文庫最新刊

和久峻三著　**肌の女**（代言人　落合源太郎）

柔肌に蝶と薔薇の刺青を彫られた上に、旦那殺しの汚名を着せられた妾お咲。弁護に立った源太郎と官憲との闘いが始まった——。

定価320円

矢野健太郎著　**数学ふしぎ・ふしぎ**

簡単に解けそうで絶対に解けない問題や、いかにも難しそうなのに補助線一本であっけなく解ける問題など、ふしぎでためになる本。

定価240円

玉村豊男著　**ロンドン　旅の雑学ノート**

紳士の定義、本場のビールとローストビーフの楽しみ方、タクシーの乗り方…etc.　玉村式ロンドンの楽しみ方を紹介。写真・図版多数。

定価360円

真鍋博　星新一著　**真鍋博のプラネタリウム**（プラネタリウム）　星新一の挿絵たち

真鍋博の星の投影図（＝星新一のショートショートの挿絵たち）と星新一の文庫本初収録ショートショート6編とさわりの部分65編。

定価320円

森田拳次著　星新一選　**森田拳次のヒトコマ・ランド**

漫画の真髄はヒトコマにあり！　ヒトコマにとりつかれて以来十数年、ついに世界最高のヒトコマ賞を受賞した森田拳次の傑作集。

定価440円

岡崎宏司編　福野礼著　**世界の名車グラフィティ　ポルシェ**

カラー文庫で名車の世界へ！　ハイウェイに、サーキットに、エンスージアストを魅了する完璧のスポーツカー、ポルシェのすべて。

定価440円

赤い影法師

新潮文庫　草150＝17

昭和三十八年三月二十日　発行
昭和五十八年十月三十日　三十四刷

著者　柴田錬三郎
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六―五一一一
　　編集部（〇三）二六六―五四四〇
振替　東京四―八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊫　印刷・錦明印刷株式会社　製本・加藤製本株式会社
© Eiko Saitô 1963　Printed in Japan

ISBN4-10-115017-6 C0193